文部省 國語調査委員會編纂

口語法別記 全

大日本圖書株式會社

緒言

本書ハ、別冊口語法ノ附錄ニシテ、主査委員文學博士大槻文彦ノ擔任編纂セシモノナリ。

大正二年六月

國語調査委員會

緒言

例言

一口語法ノ稿案ハ、明治三十七年ヨリ起草シ、次第ニ改訂シテ、三十九年ニ至リテ成レルモノナリ。其ノ中ノ語法ノ骨子タル所ノミヲ擧ゲタルガ、別冊口語法ニシテ、其ノ各條ノ說明ニ渉ルガ如キモノヲ別ケテ記シタルガ、卽チ此ノ別記ナリ。尙、口語法ノ例言ヲ參見スベシ。

一書中ノ行頭、又ハ文中ノ括弧內ニ記シタル數字ハ、口語法中、各條ノ欄上ナル數字ト照合セシムベキ符號ナリ。但シ、助動詞ニアリテハ、口語法ニテハ、各助動詞ノ各活用ヲ別チテ處々ニ說キタレド、此ノ別記ニテハ、其ノ各活用ヲ其ノ各助動詞ノ下ニ集メテ說キタル差アリ。

一此ノ別記ニハ、口語ノ一々ニ就キテ現在各地方ノ差違、及ビ、八九百年來ノ語體ノ變遷ヲ附記シタリ。

一各地方ニ就キテ、關東、東國、又ハ、關西、西國ナド記シタルハ、我ガ全國ヲ、中央ニテ、大凡ニ東西ニ二分シタル稱ナリ。其ノ中央部ヲ、或ハ中部又ハ畿内邊ナド記シタルモアリ。又、山陰山陽兩道ヲ中國トモ記シタリ。

一口語ノ差違ニ、或ハ某縣ト記シ、或ハ某國ト記シタルハ、一縣ノ數國ニ亙リテ其ノ差違アルニ因レリ。

一右ノ如ク、口語ノ差違ヲ地名ニテ記シ分ケタレド、確タル境界アルニハアラズ、互ニ犬牙錯綜シタルアリ。唯、大凡ニ言ヘルモノト知ルベシ。其ノ委シキ事ハ、本會ニテ刊行シタル左ノ圖書ニアリ。

口語法調査報告書　明治三十九年十二月刊

音韻分布圖　明治三十八年三月刊

口語法分布圖　明治四十年二月刊

一口語ノ變遷ヲバ、平安朝時代、鎌倉時代、南北朝時代、室町時代、江戸時代(元祿年中ニ止ム)ト別テリ。平安朝時代トハ、山城國ニ京ヲ定メラレテヨリ鎌倉時代ノ初マデナリ。

織田豐臣ノ時代ハ、室町時代ノ末ニ入レタリ。

一今日、普通ノ文章ニ記ス言語ヲ文語トシ、談話ナルヲ口語トス。文語ト口語ト兩途ニ別レ始メタルハ、平安朝時代ノ中世ヨリナリ。其ノ差違ハ、發音ト用言ノ語尾活用トノ變轉ニ生ジタリ。古來ノ口語ノ變遷ヲ知ラムニハ、書籍ニ據ラズハアルベカラズ。然ルニ、世ニ存スル書籍ハ、

悉ク文語ニテ記シテアレバ、其ノ變遷ノ徑路ヲ知ルニ由無シ。但シ、兩語相別レテヨリ、文語ハ學ビテ始メテ記シ得ルモノトナリシガ故ニ、數百年來ノ文語文ハ、人々、己ガ日常ノ口語ニアラズシテ、スベテ學ビテ記ス擬古文ナレバ、コレヲ記スニ當リテ、思ハズ取外シテ、往々口語ヲ雜フルコトアリシナリ。此ノ事アルニ考ヘツキテ、乃チ、幾多群書中ニ就キテ、其ノ雜ヘタル口語ヲ探リ、遂ニ十卷二十卷中ヨリ一二語ヲ拾ヒ、五十卷百卷中ヨリ三五語ヲ索メ得テ、(全ク見出サバリシ書固ヨリ許多ナリキ)斯ノ如クシテ、辛ウジテ變遷ノ痕ヲ認メタリ。所謂めくらさがしシタルナレバ、多クノ歲月ヲ費セリ。

群書中ニテ、多ク口語ヲ雜ヘタルハ、古クハ、平安朝時代ノ

末ナル梁塵祕抄ナリ。是レ、今様歌ナドノ謡物アレバナリ。次ニハ、鎌倉時代ノ平家物語ナリ。是レ、琵琶法師ガ琵琶ニ合ハセテ語リテ、人ニ聞カセ耳ニ解セシメムガ爲ノ語物ナレバナリ。次ニハ、室町時代ノ義經記、曾我物語御伽草子類ノ小說ナリ。是レ、婦女子ニモ理解シ易カラシメムノ讀本ナレバナリ。次ニハ、幸若舞ノ語物、或ハ、史記抄、孟子抄等ノ講義ノ書取、其ノ外ハ、小唄、連歌、狂歌、俳諧ノ書、狂言記等ナリ。凡ソ、口語文ナルハ、先ヅハ是等ノ數書ニ過ギザルベシ。江戸時代ニ至リテ、口語文ノ書、頗ル多ク世ニ出デタリ。

一採收シタル出典ハ、書中ニ載セタルモノ、外ニ、尙多々アレド、重複スルモノナドハ捨テタリ。載セタルモノ、中

ニモ、削リテ可ナラムト思ハル、モ無キニアラネド、今ハ姑ク存セリ。　又、書中ニ引用シタル書名ハ、引用書目ニ擧ゲタル外ニ尚多ケレド、僅ニ一二語ヲ採リタルモノハ、其ノ引ケル所ニノミ記シテアリ。

一古來ノ書籍ハ十ノ八九ハ、京都人ノ作ナレバ、此ノ書ニ變遷ヲ記シタル口語ハ、京都ノ口語ナリ。　江戸時代以前ノ東國ノ口語ノ如キニ至リテハ、書無ケレバ更ニ知ルコト能ハズ。　尚、採リ漏シタル書モ多々アルベケレド、京都語ハ、自ラ日本國語ト云フベケレバ、日本口語ノ變遷ハ、此ノ書ニテ、先ヅ大略ハ知ラルベシ。

一口語ノ變遷、語原等ニ就キテ、江戸時代ヨリ、明治大正ノ今日ニ至ルマデ、學者ノ已ニ研究シタルアルカ知ラネド、編

者ハ、遍クコレヲ索メテ、遂ニ一書ヲモ手ニシ得ザリキ。蓋シ、着目セシ人ハ無カルベシ。畢竟、國語學者ハ、口語ヲバ一概ニ俗語ト擯斥シテ顧ミザルナリ。(敷田年治ノ假名遣沿革考アレド、假名遣ノ事ノミ、)サレバ、此ノ書ハ、全ク創作ノモノナレバ、隨テ精到ナルモノトハ固ヨリ言フベカラズ。然レドモ、完全ハ後ニ期シテ、先ヅハ此ノ如シ。

一文語ト口語ト異ナラザルモノハ、固ヨリ記サズ。名詞、副詞ナドニ就キテモ、多クハ言ハズ。唯、發音、用言ノ語尾活用、助詞等ノ變轉ナド、語法ノ相違ニ關スル事ヲ專一ニ說キタリ。

一原書ノ假名ニ、濁點ナキモノ、又ハ、行文ニ句讀點ナキモノニハ、今、一々加ヘタリ、讀ミ迷ハザラシメムガ爲ナリ。

一同一ノ書ニ、數種ノ古寫本、異樣ノ板本アルアリ、勉メテ善本ニハ據リタレド、尙、遍ク異本ヲ集メテ對照セバ、文字ノ違ヒアラムモ知ルベカラズ、後ノ訂正ヲ待ツ。

口語法別記

目次

口語法別記引用書目……一
口語法別記端書……一
口語法別記……一
名詞……一
代名詞……一
數詞……三
動詞……四
五段活用……四
上一段活用……三

下一段活用……三一
カ行變格活用……四一
サ行變格活用……四一
書いて、咲いた、凌いで、防いだ等……四六
指いて、出いた等……五三
打つて、勝つた等……五七
取つて、切つた等……六〇
言つて、買つた、言うて、買うた等……六四
死んで、往んだ等……七三
呼んで、飲んだ、呼うで、飲うだ、頼んで、讀んだ等……七五
行つて、行つた……八七
第二第三活用形の名詞となること……八九
連體形が終止形となつたこと……九〇
ワ行五段活用の第三活用形の發音……九六

第四活用形の意味……九七
五段活用の未來形推量形……九八
上一段活用の未來形推量形……一〇五
下一段活用の未來形推量形……一〇九
カ行變格活用の未來形推量形……一一五
サ行變格活用の未來形推量形……一一七
上一段、下一段、カ行サ行變格活用の未來形推量形の「よう」……一二一
未來形推量形の變遷……一二三
書かあず、受けえず等……一二四
書くべい、受けべい等……一二五
現在の語を過去にも未來にも用いること……一二九
命令形のこと……一三一
上一段下一段活用の命令形……一三二
カ行變格活用の命令形……一三四

サ行變格活用の命令形……一三七
命令形の末の「ろ」……一四〇
一種の命令形……一四三
敬意を含んで居る動詞……一四五
丁寧に云う意味の動詞……一五一
形容詞……一五八
形容詞の活用……一五八
形容詞の語根……一五九
よさそう　なさそう……一六一
種々の語を形容詞にすること……一六二
形容詞の「よい」「え〳〵」「い〳〵」……一六三
形容詞の第二活用形……一六五
かつた　かろう……一六五
からぬ……一六八

「く」を「う」と云うこと……一六八
第一種形容詞の終止形の「し」の「い」となつたもの……一七七
第二種形容詞の終止形の「し」の「しい」となつたもの……一八〇
第一種形容詞の終止形を文語のまゝ「し」と云うもの……一八二
第二種形容詞の終止形を文語のまゝ「し」と云うもの……一八三
第二種形容詞の終止形を「しし」とすること……一八三
形容詞の連體形の「き」「しき」の「い」「しい」となつたもの……一八五
形容詞の第二活用形の「よくば」いそがしくば」……一九二
静かな　立派な　綺麗な……一九三
とがつた　たいした　等……一九八
助動詞……一九八
受身の助動詞……一九九
れる　られる……一九九
せられる　しられる　さるゝ　される……二〇七

可能の助動詞……二一
書ける　讀める……二二
使役の助動詞……二七
希望の助動詞……二三一
推量の助動詞……二三七
打消の助動詞……二三九
ずぬね……二三九
なんだ……二四三
受けいで　見いで……二四五
ない……二四八
まい　まじい……二五四
過去の助動詞……二六一
敬譲の助動詞……二六九
れる　られる……二六九

なさる　あそばす……二七二
くださる……二七六
いたす　つかまつる　もうす……二七六
ます……二八〇
指定の助動詞……二八五
だ……二八五
じや……二八八
です……二九四
べき……二九九
副詞……三〇三
接續詞……三〇五
助詞……三〇七
第一類の助詞……三〇七
第一……三〇七

か……三〇七
が……三一〇
から……三一二
きり　ぎり……三一三
くらい　ぐらい……三一四
こそ……三一五
さ……三一六
さえ……三一七
しか……三一八
だけ……三一八
だけに……三一九
で……三二〇
でも……三二三
と……三二四

とても　とて……三三六
たつて　たつても……三三七
どころ　どこ……三三八
など……三三八
なら……三三〇
なり……三三四
なりとも　なりと……三三五
に……三三七
にして……三三七
の……三三七
ばかり……三三九
ほか……三四〇
ほど……三四一
まで……三四三

までも……三四四
も……三四四
や……三四七
やら……三四九
より……三五二
わ……三五三
第二……三五五
でも……三五五
ながら……三五七
第三……三五八
ややい……三五八
第二類の助詞……三五九
第一……三五九
が……三五九

から……三六一
けれども……三六二
し……三六三
せ……三六四
ぞ……三六四
そ……三六六
て……三六七
と……三六七
とも　と……三六八
とも……三六九
に……三七〇
の……三七〇
のに……三七一
ものか　もんか……三七二

もの……三七二
ものを……三七三
ことを……三七三
よう……三七三
わ　わい……三七三
第二……三七四
たつて　たつても……三七五
たら　だら……三七五
だつたら……三七五
たり　だり……三七七
だつたり……三八〇
つゝ……三八〇
て　で……三八〇
ても　でも……三八三

第三……二八三
ところが　ところで……二八三
第四……二八三
ば……二八三
第三類の助詞……二八六
え……二八六
が……二八九
して……二八九
だつて……二九〇
で……二九〇
でして……二九七
ので　のでして……二九七
でも……二九八
と……二九八

とも……三九九
に……三九九
の……四〇一
を……四〇四
第四類の助詞……四〇五
第一……四〇五
な　なあ……四〇五
ね　ねえ……四〇六
の　のう……四〇七
ま、……四〇八
よ……四〇八
第二……四一〇
え……四一〇
感動詞……四一一

泛く感動するに發する聲……四一一
驚いた時、氣の引き立つた時に發する聲……四一二
氣のつく時、又わ氣を付ける時に發する聲……四一五
物言いかけて強くたしかめるに發する聲……四一七
心に受け入れた意を云うに發する聲……四一八
承知する意に發する聲……四一九
承知せぬ意に發する聲……四二〇
疑い怪む意に發する聲……四二〇
押しのける意に發する聲……四二一
人を呼びかけるに發する聲……四二一
呼ぶに答える聲……四二三
戒めとめる聲……四二三
いま〳〵しく思つて舌打する聲……四二三
詞の組立……四二四

接頭辭……四二四
敬つて云い、丁寧に云い、又わ言葉をうつくしく云うに用い
るもの　御　御　御……四二四
「まことの」と云う意を云うもの　眞……四二六
「ちいさい」低い」弱い」など云う意のもの　小……四二七
「始めての」の意のもの　初……四二七
數を重ねる意、又わ不定の數を云うもの　幾……四二七
打消す意のもの　不……四二八
「好くない」わるい」の意のもの　不……四二八
「無い」と云う意のもの　無……四二八
接尾辭……四二九
敬つて云い、丁寧に云い、又わ言葉をうつくしく云うに用いる
もの　樣　殿　君　先生……四二九
人を罵り呼び、又自分を卑下して云うもの　奴……四三

人の複数なのを云うもの　方達衆……四三四
人又わ物事の複数なのを云うもの　共……四三五
互に仲間である意を云うもの　同士……四三六
人と云う意のもの　手……四三六
順番を云うもの　目……四三六
有様を云うもの　さ……四三七
其氣味を云うもの　氣……四三七
性質を云うもの　み……四三八
そのように思われると云う意のもの……四三八
其様子になる意を云うもの　め……四四一
殊更に其様子をする意を云うもの　めかす　ぶる……四四二
其様に思うと云う意味のもの　がる……四四二
出來難い意味を云うもの　かねる……四四四
推量する意を云うもの　らしい……四四四

そうと疑われる意味を云うもの　がましい……四四五
出來難い意味を云うもの　にくい……四四五

口語法別記引用書目

古事記　元明帝、和銅五年、太安萬侶作、

日本書紀　元正帝、養老四年、舍人親王、太安萬侶等作、

萬葉集　平城朝、大伴家持撰ト云、

佛足石歌　孝謙帝、天平勝寶年中、

平安朝時代

續日本紀　桓武帝、延曆十六年、菅野眞道等作、

日本國現報善惡靈異記　嵯峨帝、弘仁中、僧景戒作、

類聚名義抄　文德帝、清和帝ノ頃、菅原是善作ト云、

竹取物語　光孝帝、宇多帝ノ頃ノ書ト云、

宇津保物語　同上ノ頃ノ書ト云、

新撰字鏡　醍醐帝、昌泰年中、僧昌住作、

古今和歌集　同帝、延喜五年、紀貫之等撰、

和名類聚抄　朱雀帝、承平末年、源順作、

土佐日記　同帝、承平四年、紀貫之作、

大和物語　在原滋春作ト云、

後撰和歌集　村上帝、天暦五年、大中臣能宣等撰、

多武峯少將物語　同帝ノ頃ノ作ト云、

古今和歌六帖　紀貫之ノ女ノ作ト云、

落久保物語　冷泉帝ノ頃ノ書ト云、

蜻蛉日記　圓融帝、天延年中、藤原道綱母作、

神樂歌　催馬樂　一條帝ノ頃、源雅信譜ト云、

東遊歌　風俗歌

源氏物語　一條帝ノ頃紫式部作、

紫式部日記　同上、

枕草紙　同帝ノ頃、清少納言作、

拾遺和歌集　同帝ノ頃ノ撰、

狹衣　後一條帝ノ頃、藤原賢子作ト云、

和泉式部續集　同帝ノ頃ノ集（丹鶴叢書）

更科日記　後冷泉帝、康平年中、菅原孝標女作、
今昔物語　同帝ノ頃源隆國作、(丹鶴叢書)
新猿樂記　同帝ノ頃、藤原明衡作、
後拾遺和歌集　白河帝、應德三年、藤原通俊撰、
榮華物語　堀河帝ノ頃ノ書ト云、
關白內大臣家歌合　鳥羽帝、保安二年ノ集、
散木奇歌集　同帝ノ頃、源俊賴作、
藤原爲忠朝臣集　堀河帝、鳥羽帝ノ頃ノ集、
木工權頭爲忠朝臣家百首　同上、
大鏡　爲忠ノ子爲業作ト云、
悅目抄　同帝ノ頃、藤原基俊作ト云、
童蒙頌韻　鳥羽帝、天仁二年、三善爲康作、
金葉和歌集　崇德帝、大治二年、源俊賴撰、
極樂願往生歌　近衞帝、康治元年ノ書、
雅亮裝束抄　高倉帝ノ頃ノ作ト云、

和歌初學抄　同帝、嘉應元年、藤原清輔作、（東京帝國大學藏）

梁塵祕抄　後白河法皇御撰、治承ノ頃、

伊呂波字類抄　高倉帝、治承年中、橘忠兼作、

寶物集　同帝ノ頃、平康頼作ト云、

月詣和歌集　安德帝、壽永元年、賀茂重保作、

鎌倉時代

山家集　後鳥羽帝ノ頃、僧西行作、

萬代和歌集　同帝ノ頃ノ集（丹鶴叢書）

千五百番歌合　土御門帝、建仁元年ノ集、

建仁三年仙洞五十首　（續群書類從）

新古今和歌集　土御門帝、元久二年、源通具、藤原定家、藤原家隆等撰、

藤原隆信朝臣集　同帝ノ頃ノ集

發心集　順德帝ノ頃、鴨長明作、

無名抄　同上、

螢玉集　同上、（和歌古語深祕抄七ノ卷中）

金槐和歌集　土御門帝、順德帝ノ頃、源實朝作、
承久軍物語　冀室時長作ト云、
平治物語　後堀河帝ノ頃、藤原行長作ト云、(正保三年、板本)
平家物語
源平盛衰記　同帝ノ頃、冀室時長作ト云、
明月記　同帝ノ頃、藤原定家作、
定家假名遣　河內前司親行、僧行阿、合作、
遊仙窟　四條帝ノ頃、藤原伊時訓點、
教訓抄　同帝ノ頃、狛近眞作(內閣文庫藏)
字鏡集　後嵯峨帝、寛元三年、菅原爲長作、(帝國圖書館藏)
宇治拾遺物語
古今著聞集　後深草帝、建長六年、橘成季作、(元祿三年、板本)
吾妻鏡　龜山帝、文永三年了、
金玉歌合　伏見帝御撰、(續群書類從)
宴曲抄　後伏見帝ノ頃、僧明空撰、

砂石集　後二條帝、德治三年、僧無住作、

玉葉和歌集　花園帝、正和二年、藤原爲兼撰。

假名論語　後醍醐帝、元弘三年、康連校、

南北朝時代

徒然草　後村上帝ノ頃、僧兼好作、

新千載和歌集　後村上帝、正平十四年、藤原爲定撰、

太平記　後村上帝後龜山帝ノ頃ノ作、

平他字類抄　後龜山帝、元中年間ノ書、

室町時代

曾我物語　（貞享四年ノ板本）

義經記　（寛文頃ノ板本）

平家物語劍の卷

幸若　足利義滿、義持ノ頃桃井幸若丸作ト云、

謠曲　應永以後ノ作、

公事根源　應永二十七年、一條兼良作、

下學集　文安元年、東麓破衲作、
中書王物語　一條兼良作、
撮壤集　享德三年、飯尾永祥作、
史記抄　文明九年、相國寺桃源瑞仙作、(寬永三年、活字板、內閣文庫藏)
孟子抄　(寬永活字板、東京帝國大學藏)
廻國雜記　文明十九年、聖護院道興作、
眞宗御文章　文明、明應年中ノ作、
犬筑波集　永正年中、山崎宗鑑作、
閑吟集　大永六年ノ集、(續群書類從)
守武千句　天文九年荒木田守武作、
詠三百首狂歌　(續群書類從)
田村の草紙
辨慶物語
太秦廣隆寺牛祭祭文　(都名所圖會)
人國記

梅津長者物語

倭玉篇（甲）

運歩色葉集（甲）天文十七年ノ書、（帝國圖書館藏）

運歩色葉集（乙）（東京帝國大學藏）

節用集（甲）（饅頭屋板、横本）

節用集（乙）（饅頭屋本、）

元龜字叢　元龜二年、宗珠藏主作、（帝國圖書館藏）

理慶尼の記　天正十年ノ談、甲州武田氏一族、

狂言記　續狂言記　拾遺　天正年中、

詠歌之大概　永既序、聽塵ノ作、（帝國圖書館藏）

節用集（丙）天正十八年、（泉州堺板、東京帝國大學藏）

天正日記　小田原征伐ノ記、

伊曾保物語　文祿二年ノ作、

節用集（丁）慶長二年板（易林本）

江戸時代

おあん物語　慶長五年ノ談、
昨日は今日の物語　天正、文祿カラ、寛永マデノ話、
徒然草抄　慶長六年、僧安立作、
千代茂登草　藤原肅作、
太田和泉守覺書　慶長十五年ノ書、(改定史籍集覽)
節用集（戊）　慶長十六年(京都板)
倭玉篇（乙）(慶長板本)
おきく物語　元和元年ノ談、
清正高麗陣覺書　加藤清正ノ臣下川兵太夫ノ記、(續々群書類從)
太閤記　元和三年、小瀬甫庵作、
あづまぢの記　元和四年烏丸光廣作(扶桑拾葉集、二十八)
大久保彦左衛門物語　元和八年ノ記、
醒睡笑　元和九年、安樂庵策傳作、(萬治元年板)
戲言養氣集　元和活字、(雪中庵雀志藏)
諸士軍談　大坂冬夏陣ノ記(改定史籍集覽)

中村座猿若狂言　寛永元年、(燕石十種)
中村座新發知太鼓　同上、
そゞろ物語　寛永ノ頃、三浦浄心作、
犬子集(狗猵集)　寛永十年、松江重頼作、
可笑記　寛永十三年、淺井了意作ト云、
油糟　寛永二十年、松永貞徳作、
新増犬筑波集　(一名、淀川)　同上作、
正章千句　慶安元年、安原貞室作、
吾吟我集　慶安年中、石原未得作、
かたこと　慶安三年、安原貞室作、
倭玉篇　(丙)　(慶安五年板)
むさしあぶみ　明暦三年大火ノ記、淺井了意作、(温知叢書)
をぐりの判官　明暦、萬治ノ頃ノ作、(浄瑠璃本)
東海道名所記　萬治元年、淺井了意作、
四天王武者修行　萬治二年板、(金平本)

天狗羽打　萬治三年板、(金平本)
糸竹初心集　寛文四年板、中村宗三作、
山鹿語錄　寛文五年、山鹿素行作、
古今夷曲集　寛文五年、生白堂行風作、
後撰夷曲集　寛文年中、同上作、
卜養狂歌集　寛文九年、半井卜養作、
諸國盆踊唱歌　寛文年中ノ集、(我自刊我叢書)
西翁十百韻　延寶元年、西山宗因作、
淋敷座之慰　寛永カラ延寶四年マデノ流行小唄ノ集、(新群書類從)
西鶴五百韻　延寶七年、井原西鶴作、
吉原小歌總まくり　天和二年板、(續百家說林)
西鶴一代男　天和二年、井原西鶴作、
鹿の巻筆　貞享二年、鹿野武左衛門作、(元祿五年板)
好色五人男　貞享三年、井原西鶴作、
近代艷隱者　同上作、

武道傳來記　同上作、

懷硯　貞享四年、同上作、

日本永代藏　貞享五年、同上作、

狂歌鳩杖集　天和貞享ノ頃、寶藏坊信海作、

雜兵物語　同上ノ頃、高崎城主松平信興作、

西鶴置土產　元祿六年、井原西鶴作、

合類節用集　元祿十一年、槇島昭武作、

松の葉　元祿十六年、秀松軒作、

類聚名義抄、悦目抄、寶物集、定家假名遣、其外、年代作者に論のある書もあるけれども、姑く、通例傳えて居る所に隨つて置いた。　慥に時代の分らぬ書は、押しあてに列ねた。　ここに擧げたものゝ外に、唯、一二箇所引いたものゝみ、直ぐに其書名の所に、年代作者を記しておいた。

平安朝時代の極樂願往生歌わ、近年、京都の建仁寺中で掘出したもので、其寫眞から採つた。　梁塵秘抄も、近年、和田英松氏が發見して、大正元年八月、佐々木信綱氏の出板したもの。　鎌倉時代の平家物語にわ、異本が極めて多い、姑

く正保三年の板本に據つた。(後の寛文板の義經記、貞享板の曾我物語も、同樣である)。假名論語わ、古寫本卷物で、(三卷、缺本)大槻文彦の所藏である、康連わ三善氏の人であろう、卷頭の貼紙に、大學頭菅原在茂とあつて、高山寺の朱印がある、在茂は、文治前後の人である、在茂の寫したのを、康連が校したとすれば、此書は、鎌倉時代の初のものとも見られる。室町時代の平家物語劍の卷わ、中に曾我物語の事があるから、姑く其次に置いた。孟子抄わ、作者年代が知れないが、史記抄と同時のものと思われる。運歩色葉集の乙わ、以から加までで、異本である。狂言記の事に就てわ、狂言わ、謠曲より古いもの(脇師を「あど」と云うなど)のようだけれども、一旦、中絶して、豐臣氏の頃、再興したものらしいから、用語わ、天正頃のものであろう、因て其頃のものとした、大藏流と鷺流のものから採つた。詠歌之大概わ、定家のものに注釋したもので、中に宗祇などの名がある。伊曾保物語わ、文祿二年に、葡萄牙人が和譯して、横文字で書いたものを、新村出氏が、假名交り文に直して、明治四十四年六月に刊行したもの。江戸時代の醒睡笑わ、寛永十九年の寫本で、大槻文彦の所藏のものからも採つた、但し、萬治元年の板本わ、一卷と二卷を入れちがえてある。

口語法別記端書

世の開けた初に、人に、言葉があつて、その後に、文字が出來て、言葉を書き取ることゝなつた。その時わ、書取つた言葉わ、卽ち、文章で、言葉と文章とわ、同じである。そうして、言葉というものわ、年を歷るに隨つて變わるもので、言葉が變われば、文章も變わつた、今、奈良朝以前の文と、平安朝の文とを見くらべれば、其姿の違つて居るので知られる。然るに平安朝の盛んな頃わ、文學も、盛んであつて、文を書き、歌をよむのが、自然と、一つの藝のようになつて、師匠が出來て、學ぶと云うようなことゝなり、言葉の方わ、年が立つて、變わつて行くけれども、文章わ、平安朝の盛んな頃の言葉で書くことゝ固まつて、終に、口に云う言葉と、文に書く言葉とが、二道となつて來て、鎌倉時代になつてわ、話し言葉と、文章言葉、卽ち、口語と、文語とが、甚しく分れた、それから、又、數百年の間、口語わ、變わりに變わつて來ても、文章わ、やはり、多く、平安朝時代の言葉で書くことゝなつて、口語のまゝに文を書くと云うことわ、まず、なかつたが、江戸時代になつて、口語で書いた書物も、民間に段々と出て來た。

端書　一

鎌倉時代以後、七百年の間、大名と云うものが、全國にあつて、銘々に、其領分に境を立てゝ居て、江戸時代にわ、其地方の方言を國手形など、云つて、其領分の人だと云うを證する爲に、改めさせなかつたようなこともあり、其上交通も、不便であつて自然と行きかいも少ないような譯であつたから、地方〳〵の口語が、まち〳〵に變わつて居て、十里二十里も隔たれば、違つて、甚しいのわ、出羽奥州の人と、九州の人とわ、同じ日本人でありながら、話をしても、互に分らぬようになつた。それであるから、我が國言葉にわ、文語にわ、一つに定まつたものがあるが、口語わ、全國どこも方言であつて、東京の言葉わ、東京の方言で、京都の言葉わ、京都の方言で、其外、國々、皆方言をつかう。そこで、全國同じに通ずる口語を立て、規則を定めねばならぬ。扨、口語の目當とするものを、何と定めようか、邊鄙の方言わ、採ることわ出來ぬから、東京方言か京都方言かにせねばならぬ。東京わ、今わ、皇居もあり、政府もある所で、全國中の者が、追々、東京言葉を眞似てつかうようになつて來て居るから、東京言葉を、日本國中の口語の目當とするがあたりまえのことゝ思う。しかしながら、東京言葉と云つても、賤しい者にわ、訛が多いから、それは採られぬ。そこで、

東京の教育ある人の言葉を目當と立て、そうして、其外でも、全國中に廣く行われて居るものをも酌み取つて、規則をきめた。　かようにして出來たのが本書の口語法である。　臺灣朝鮮が、御國の内に入つて、其土人を御國の人に化するようにするにわ、御國の口語を教え込むのが第一である。　それに就いても、口語に、一定の規則が立つて居らねばならぬ。　口語法わ、實に、今の世に、必用なものである。

○奈良朝以前にわ、言葉に、伸び縮みわあつて、「まもり(守)が麻毛良比」、(古事記、神武の段)「かくす(隱)が可苦佐布」、(萬葉集、一)、「ゆく(行)が由可久」、(同十四、)など、伸びたり、又「いかにいふ(如何云)が以柯倪輔」、(繼體紀)「うゑて(飢而)が惠而」、(推古紀)「ひきいれ(引入)が比岐例」、(皇極紀)、「あまおり(天降)が安母理」、(萬葉集、二)「おもふな(勿思)が母布奈」、(同、六)「きえのこり(消殘)が氣能己里」、(同二十)など縮んだりしたものわなか〳〵多く見えるけれども、まだ音便と云うものわ、殆んど無かつたようにおもわれる。

古事記の神武の段に、「かみかぜ(神風)を、加牟加是」とし、萬葉集、十五に、「まをす(申)を、母に麻于之て」、佛足石歌に、「捧げ麻宇佐牟、萬葉集、十八に、「まけ(設)を、麻宇

氣」とあるなどわ、音便であろうか。

音便の盛に起つたのわ、平安朝以後の事で、嵯峨帝の弘仁中の靈異記の序の釋に、「償、ツクノウ‖」、「傷、ソコナウ‖」、近江の石山寺に藏する文德帝の天安二年の大智度論の中に、「次第」の字に、「ツイ‖デ」「下二段活用の「次（ツギ）て」「次（ツギ）つ」の音便、萬葉集、二十喩族歌に、「都藝（ツギ）豆氏（テ）」と振假名がしてあり、文德帝清和帝の頃の類聚名義抄に、「媚、ウツクシウス‖」、「啄、ツイバム‖」、「班、ツイヅ‖」、などゝあつて、山城の京の初の頃から、音便が見えて居る、是れが、言語の變遷の初である、どうして、音便と云うものが起つたかというに、石原正明の年々隨筆に、

萬葉集、續日本紀などに、かなのたがへる所はなし、かくて、奈良の京に、まがふ所なかりしを、今の京となりて、言便といふ事、いできたり、（いつの比よりといふ事、考なし、）やうの事、いつよりと、きはやかに知るべきにあらず、もしは、眞觀の比より、漸有しにや、言便といふは、いひ易きやうに、まげていふ事にて、よろづの訛言（ヨコナマリ）、みな、これよりいでくるなり、さるは、其頃の人、物をいふに、容止をおもひて、口を大にひらき、唇のしば〳〵動くを、威儀なしとして、人がらをつくろひ、さて、いひ易きやうに、物いふほどに、いねえるおをも、まがひて、わかりがたく、ひふほも、いうおときこゆる樣になれりしな

り、延喜天暦のころよりは、ひたすら、其定なりしかば、かなのたがひ行く源は、此時より觴を濫へたり。

西洋の言語學説にも、このようなことが云つてある、それもそうであろうが何にせよ、世の中が開け進むに隨つて、人のからだも、考えも、いそがしくなり、舌、唇などを多くつかわないで、早く物を云おうとして、成るべく、發しやすい音をつかうようになつたから、音便が多くなつたのであろう。

天治本新撰字鏡、娓、小兒、知比佐伊(小き)人、

古今集、典侍、あまねい(洽き)子、

後撰集、内侍、だひらけい(平けき)子、

宇津保物語、貴宮巻、粉、しろい(白き)もの、

催馬樂、淺綠、淺綠や、己以(濃き)花田、

類聚名義抄、永、ナガウ(ク)ス、固、カタウ(ク)ス。

竹取物語、うつくしう(く)おはする。

神樂歌、早歌、最將(いさはた)奈加宇(長く)て、

催馬樂、紀伊國、風しも不伊(吹き)たれば、

同、高砂、今朝左伊(咲き)たる初花に
神樂歌、早歌、巾子於止以(落し)つ。
宇津保物語、菊の宴、おぼしめい(召し)て、のたまはするにこそはあめれ。
同、俊蔭、加茂に詣でたまう(給ひ)たりしかば。
催馬樂、酒飲、酒をたうべて、たべ惠宇(醉ひ)て、
同、蟋蟀、木の根を掘り波牟(食み)で、
土佐日記、つん(摘み)だる菜、
又、語をつゞめて云うことも出て來た。
竹取物語、え知らで(すて)斯くいふ。
同、迎へに、人々參で來んず。(來むとす)、
しかし、朱雀帝以前の書物にわ、音便わあるが、假名遣わ、一定して居ると云われて居る。然るに、村上帝の天曆の頃から、假名遣も追々變わつて來た、天慶の平將門、藤原純友の亂などが、響いたのであろう。動詞の活用の變わり(音便で變わつたのもある)も、此前後から、少しずつ見える。
類聚名義抄、渝、カヘル、蹟、クエル、(下二段活用の「蹴うる」の變)、

落久保物語、二、只今の太政大臣の尻はける（蹴ゐる）の約）とも、此殿、の牛飼に、手觸れてむや。

蜻蛉日記、中、夢をも佛をも、もちいるべしや、もちゐるまじや。

紫式部日記、上、をり〳〵の有さまにしたがひて、もちひんこととのいとかたかるべし。

源氏物語、竹川、はぢらひて、おはさうずる（おはさむとする）いとをかしげなり。（「おはす」に、四段活用があると認めてである）、

和泉式部續集、上、おとせう（爲む）といひたる人の、おとせねば、

此頃の源氏物語、枕草子、其外、物語、日記、草子などに、音便のあるのわ、擧げ盡しがたい。是から後の書物も、皆そうである。

後三條帝、白河帝の頃から、音便わ、勿論、假名遣も、甚しく變わつて來て、動詞の活用の變わりも、ます〳〵見える、六衞府や、檢非違使に、諸國の武士を召使われ、前九年、後三年の戰から凱旋した東國の武士の、京に入込んだのも多かろうし、後三條帝の時から、藤原氏の權力が衰え、白河帝が、院の北面の侍に、諸國の武士を召されなどして、源平等の武士の勢が盛んになつたなどから、京

都の言葉に、變化が起つたのであろう。それから保元平治の亂となつて、ます〳〵變わつて來たに違いない。此頃から、動詞の活用の連體形を、終止形にすることも多くなつて來た。

藤原爲忠朝臣集、時鳥、待ちつくしてぞ、朝いねる（いぬる）聞けといさめて、軒に鳴くなり。

木工權頭爲忠朝臣家百首、いかにせむ、かくれる（かくるゝ）鷹の、見えがたく、つれなき戀に、さはく心を。同、猫の緒に、かゝりし簾の、はさまより、ほの見し人を、ねう（寐む）とこそ思へ。

康治元年、極樂願往生歌、憂シヤ憂シ、厭ヘヤ、厭ヘ、假初ノ、カリノヤドリヲ、イツカ別レウ（別れむ）

今昔物語廿六下、何ト心モ不レ得思ユル（思ユ）見返テ、恐々見レバ、同、三十、簾ノ内ニ立テ聞ムトスル（トス）夜ナレバ、人モ无シ。

源平の興亡から、鎌倉となつて、言語に變動の起つた事わ、めざましいものである。そうして、此頃から、文の掛り結びの法則が崩れ始めた。

ひらいて（開きて）　さはいで（騷ぎて）　ながいて（流して）

うつて(打ちて)　つくつて(作りて)　むかうて(向ひて)
むかつて(向ひて)　しんで(死にて)　しのうで(忍びて)
さけんで(叫びて)　ようで(讀みて)　かこんで(圍みて)
さかえる(榮ゆる)　からめる(搦むる)　やぶれる(破るゝ)
あづからう(預らむ)　かくさう(隱さむ)　おきう(起きむ)
かたぶけう(傾けむ)　みてう(滿てむ)　まゐらせう(參らせむ)

舟に、籌をなともいそ(燈しそ)　三日に過ぎ(過ぐ)まじ。

物を負うたり、だいたりして、六十六ヶ國に別れた(たる)なり。

最後の御供で(にて)候へば、　牛の角文字、すぐな(なる)文字、

說法をさせ(せさせ)まゐらすべし。

此舟にうちのせてのぼりたう(たく)は候へども、

牝鹿をば、射いで(射で)ぞおとしける。

寶物集、發心集、金槐集、平家物語、古今著聞集、砂石集、(くわしい事わ、後に云う)、南北朝時代となり、太平記、二十一、天下時勢粧に「公家の人々、いつしか、言ひも習はぬ坂東聲をつかひ、云々」とあり。「かたこと」に「みづからのことを、をれと

いふは、尊氏公の、世の中を心のまゝにしたまひつる比より、別してはやり出で侍り」などゝあり。（「おれ」わ「おのれ」の略、幸若、史記抄に見える、後の代名詞の所を見よ、）室町時代に、戦争が續き、應仁の亂に、全國の兵が、京都に入り亂れた。此頃から、言葉が一段と變わつた。文の掛り結びなどの、全く崩れたのも、室町時代からである。

すてい（捨てよ）　こい（來よ）　せい（爲よ）　みう（見む）
きう（着む）　こう（來む）　いなう（往なむ）　しなう（死なむ）

今日は、何方へぞ、出やう（出でむ）と存ずる。

甘いをすく衆へは、甘いで進じやう（進ぜむ）ず。

歌、一首、詠うで見やう（見む）か。　囃事で、尋ねやう（尋ねむ）ず。

外ノ事ハ、ワルイ（悪し）ト心得、　後難が口惜しい（口惜し）

臆せいで（臆せで）取つて呑うであれ。　暇乞ヲ申サイデ（申サデ）罷歸ラレ、

終ニ、殺シハセラレナンダ。　最前から、氣がつかなんだ。

何事があると問うた（たり）　左へ折つた（たる）烏帽子なり。

韻が、三句ニ、フメ（履まれ）た（たり）　爰から讀め（讀まれ）候。

天下は、我が物ぢや、(である)　　冠ノ緒チヤゾ。

我が姫や(である)と號し、いつきかしづき、

遠國に隱れもない大名です、(でおはす)

義經記、曾我物語、幸若、史記抄、閑吟集、守武千句、狂言記、(くわしい事わ、次に云う)、

それから、織田氏、豊臣氏の世を歷て、江戸時代と、遷りかわつて來たが、鎌倉室町時代に變わつた言葉を、そのまゝ傳えて、甚しい變わりわない。唯、其時代に、「忍うで」「賴うで」などゝも云つたのが亡びて、今でわ、多くわ、「忍んで」「賴んで」となり、「流いて」「隱いて」などゝ云つたのが亡びて、多くわ、元の「流して」「隱して」となつた。

東國の方言わ、古いところでわ、萬葉集の東歌、防人歌や、東遊歌、風俗歌などに、少しわ、見えて居るが、其後わ、書いた書物がないから分らぬ。江戸時代になつて、書物に書かれるようになつて、變わり目の、著しく現われたものわ、

飽きる(飽く)　　足りる(足る)　　借りる(借る)

案じる(案する)　　判じる(判する)　　復さない(復せぬ)　　解さない(解せぬ)

起きよう（起きむ）　受けよう（受けむ）　こよう（來む）　しよう（爲む）
起きろ（起きよ）　建てろ（建てよ）　こう（來よ）　しろ（爲よ）
書かない（書かぬ）　落ちない（落ちぬ）　遂げない（遂げぬ）　こない（來ぬ）
行くべい（行くべし）　やめべい（止むべし）　こべい（來べし）　しべい（爲べし）
書いてる（て居る）　讀んでる（で居る）　それだ（である）　これだ（である）
いらつしやい（入らせられよ）　なさいまし（なされませ）
これなら（ならば）よかろう。　昨日行つたら（たれば）居なかつた。

などである。　しかし、是も、古くから行われて居たのか、何とも分らぬ。

○東國の言葉わ、昔わ、京都の人からわ賤しめられて居つた、源氏物語の宿木、東屋などに、東國の言葉を、「あづま聲」と云い、平家物語に、齋藤實盛の言葉を、「坂東聲」と云つてある、拾遺集に、「あづまにて、養はれたる人の子は、舌だみてこそ、物は言ひけれ」とあるのでも分る。　然るに、東國武士の勢が盛になり、鎌倉室町の世に、東國言葉が、京都言葉を襲つて、江戸の世となつて、又、新に、江戸言葉が、出來て、今でわ、江戸言葉が、日本の口語の目當となるようになつた。

江戸わ、もと、空漠とした地に、新に、町を開いたものであるから、土地の者も居

たろうが、畿内、東海道筋の町人が、多く集つて來たものであつて、江戸の言葉わ、その初わ、甚だ混沌としたものであつた。然るに、一方に、武士といふ者があり、戰國時代の餘習で、旗本奴の大小の神祇組、又わ、男達、町奴の六方組、白柄組、などいうものが、盛に出て來て、是等が、關東の荒くれた氣風を、言葉の上にも及ぼして、上方言葉のなまぬるいものを變じて、強く急なものとして、芝居の荒事狂言の上にも用いられ、それが廣がつて、遂に、一つの江戸言葉というものが、成立つたものと思う、是が、元祿頃に至つて、一定したので、つまり、關西と關東との言葉が、雜つて出來たものである。

京都の言葉わ、東西南北に廣がつて、遠くなるに隨つて、段々に變わるが、その變り目わ、色のぼかしのようで、はつきりと境目が分らぬが、江戸言葉は、四里四方の内に限つて、其境を出ると、四方は、元の武藏の言葉であるから、海中の島のようである。これが俄に出來た都であるからである。

しかし、江戸時代にわ、同じ江戸言葉の中で、町人言葉でも、山の手言葉、下町言葉、神田の職人言葉、吉原言葉、佃島言葉など、それ〳〵違つて居た。武家の言葉の方でも、幕府の旗本言葉、御家人言葉、又わ、諸國から勤番する者わ別とし

て、諸大名の江戸定府の家來の言葉などが、又異なつて居た。明治の世となつて、それが、大分混合して、諸國の侍などが、集つて常住するようになつても、皆、江戸言葉に化せられるようになり、そうして漢學書生が、多く、政府の官員となり、學校の教員となつたから、漢語を遣う事が大に行われ、漢文の訓點書き下しの文語などが、口語にまじるようになり、遂に、今の東京言葉となつたのである。

○信濃越後と、美濃飛驒越中との間に、南北に亙る御嶽系の大山脈で、言葉も、大凡、東西に分れて居る。萬葉集の東歌と云うのも、遠江信濃から東である。今の口語も、此山脈で分れて居ること、次のようである。

東	たかう	やしなう	起きよう	受けよう
西	たゝこう	やしのう	起きう	受きよう
東	言つて	買つた	起きろ	受けろ
西	言うて	買うた	起きい	受けえ
東	高く	嬉しく	いゝ	
西	高う	嬉しう	えゝ	

東　書かない　書かないで　書かなかつた
西　書かん　書かいで　書かなんだ
東　月だ　花だ
西　月じや　花じや　月や　花や

尙、細かいことわ、まだあるが、大體わ、右のようである。　但し、「起きよう」「受けよう」などわ、西わ、畿内中國まで及んで居るし、「たゝかう」「たゝこう」「いゝ」「えゝ」などは、全國まざつて居る。

○東國の口語の「言つて」「買つた」「月だ」「花だ」が、鳥取縣、島根縣に行われ、「起きろ」「受けろ」が、筑後、肥前、肥後に行われ、「書かない」「見ない」が、備後、出雲、日向にも行われて居る。　これわ、鎌倉室町時代に東國の武家が、西國の守護地頭となつて、移つて住んだものもあり、江戸時代にわ、大名の國替と云う事があつて、家來を殘らず引連れて、諸方え移つて、それらからして、口語を移したこともある。

これらの事わ、よく研究したらば、面白い事であろう。

○名詞、代名詞、數詞、副詞などわ、昔も、今も、東國も、西國も、語わ變わつても、文法の上の變遷わ殆ど認めるものがない。

口語法別記

名詞

【二三】「月々、拂う、」「時々、來る、」「さま〴〵、ある、」などゝ、變わつて副詞に用いられるのである。

【二六】名詞にゝ、「仰せ」「思召」「お出まし」「お目見」「御意」「拜謁」などゝ、もと〳〵、敬う意味を含んで居るものがある。

代名詞

【三九】【四〇】同輩以上、以下、としたのも、唯、およその區別である。

「この」「その」「あの」「どの」の意味ゝ、次の指示代名詞の(四五……五〇)(五六)に云う。

對稱、他稱の複數を云うに、同輩以上、同輩に、「皆さま」「皆々さま」「皆さまがた」「皆さん」「皆さんがた」同輩同輩以下に、「皆」「みんな」と云うがある。

不定稱が、「も」に伴つて、「どなたもいらつしやいませぬ」「だれも來ない」と云えば、

「皆」の意となる。

他稱の「このひと」を「このひと〳〵」と、重ねて複數に用いることがある「そのひと」「あのひと」、不定稱の「どのひと」も、同じように用いられる。

自稱に、尚、「手前」「拙者」「自分」「わし」「おれ」「おいら」「おら」などがあり、對稱に、「御前」「貴公」「貴樣」「てまえ」「其方」などがあり、他稱に、「こいつ」「そいつ」「あいつ」「きやつ」、不定稱に、「どいつ」などもあるが採らぬ。

○口語の代名詞の、本書に採つたもの、採らぬもの、共に、古書に見當つたものを、次に擧げて置く。

○室町時代

義經記、忠信吉野山合戰の事、鎌倉殿の弟判官殿のわたらせ給候よし承て、よしのゝ奥ゆきやうこそ、まかりむかひ候へ、わたくしらは、何のゐん候はねば、一まづ、をちさせ給ふべく候。

狂言記、二人袴、私が、呼ふで參りませう。同、宗論、私は、あの者の連でござる、私にも、何卒、宿をかして下されい。

江戸時代

醒睡笑七、わたくしは、高野ひじりに、あらねども、おいにおいたる、ゆゑにめさずや。

○室町時代

幸若、鞍馬出、聲ばかりに威さんと、おれ(對稱か)は〳〵、とぞ威しける。

史記抄、六、一二　イカサマ、ヲレハ、サワ不聽ザッタゾ。

閑吟集、ぬしあるをれを、何としようか。

運歩色葉集、(甲)己、ヲレ、

江戸時代

醒睡笑、八、今度のをどりが、うらは、一向、氣にあはなんだ。

雜兵物語、上、挾箱持、五貫目斗の玉だつけが、おれが鼻先へ當て、云々、同おらが家中では、云々、喧嘩口論は、かたく御禁制だ。

後撰夷曲集、七、百首歌の中、取りなりを、見るとわしらが、癖として、つかみつく程、君ぞ戀しき。

雜兵物語、上、沓持、わつちめは、沓籠御許され申て、沓袋をせおひ申した。

○室町時代

謡曲、田村、いかに、是なる人に、尋ね申すべき事の候、こなた(自稱)の事にて候か、何事にて候ぞ。

閑吟集、新茶のちやつぼよ、なふ、いれてののちは、こちや(我濃茶)をとらぬをとらぬ。

狂言記、二人大名、其方がいそがば、こちもいそぐ。同、鹿狩、なう〳〵、御坊、云々、こなた(自稱)の事でござるか。

○室町時代

史記抄、十、四一　ソチガ云ワズトモ、我モサ思タゾ。

孟子抄、十一、三　ソチガ云ヤウニ、水ハ東西ヲバワケヌガ、上下ノヘダテハ有ゾ。

狂言記、鍋八撥、先へ來た某(自稱)をのけうより、そちのけ。同、宗論、聊爾な申事ながら、こなた(對稱)は、どれからどれへござるぞ。同、吃、とかく、そなたにあきはてた。同、武悪、おまへ(主人を指す)の御太刀を貸さつしやれませう。同、鹿狩、さあ〳〵、ござれ〳〵、先づ、おまへ、先へござりませう。身共をば、旦那に取らしやれて下され、何がさて、おまへ様さ

へもつてならしやれて下さるならば、私が爲には、一の旦那でござる。

江戸時代

昨日は今日の物語、そなたを見れば、むねがわるい。

醒睡笑、一、そなたは、それではなきか、聖、いや、そちをば夢にも知らぬ。同、四、こなた(對稱)さまのそくさいにあるこそ、道理にて候へ。

古今夷曲集、九、勝尾寺に、義空とて、狂歌の上手あり、彼には及ばじと、人のいへりければ、我歌に、などてあなたが、かちを寺、のどぎくぎくう、させてみせます。

諸國盆踊唱歌、讃岐、八島山には、大谷小たに、なぜにこなた(對稱)に、ながないぞ。

淋敷座之慰、吉原、しよくりしよぶし、そちと、こちとで、二世迄そをふ。

雜兵物語、下、夫丸、お侍衆をはじめ、こなた(對稱)なども、具足を着なされ。

同、下、又、そなたや、おれらが樣な馬取づれでさへ、同、上、馬印持旗差、にし(對稱、主(ぬし)の詞)は、其通りか、おれも、袋に二つ入たを、一つをば竿につぱめて、一つは脊中に引付た。

○平安朝時代、

宇津保物語、藤原君、　おほかたは、女の、などかくは申す、くやつ、又しばりかけよ。

鎌倉時代

宇治拾遺物語、行綱ふぐりをあぶる段、　かたすみにかくれて、きやつに、かなしうはかられぬるこそとて、

室町時代

義經記、一、鬼一法眼の事、　きやつは、ふしぎの物いひかな。

幸若、烏帽子折、　きやつばらは、椽の下へ隱れうぞ。

史記抄、六、二七　キヤツモ、ナントシタヤラウ。

狂言記、鹿狩、　あいつ、呼びよせ、なぶらうと存ずる。同、靱猿、　申し〳〵きやつが申しまするは、

江戸時代

醒睡笑、五、　にくいやつかな、あいつに、今度から、せうやうがある。

鹿の巻筆、一、ばんどう屋才介、　あいつらが、一二を爭ふて、四かねるやつで

ない。

雜兵物語、上、挾箱持、あいつめは、他の人數を相手にして、おめ〳〵としたつらで、堪忍したといつても、

○室町時代

狂言記、黑塗、案内とは、どなたでござる　同、吟聟、ありや、どなたぢや。

【五〇】指示代名詞の不定稱が「も」に伴つて「どれもよい」「どこもふさがつて居る」など云えば「皆」の意となる。

不定稱で、丁寧に「いずれでもよろしうございます」（物事に）「いずれに住みましても」、（場所に）「いずれえも向きます」（方角に）など云う「いずれ」と云う語もあるけれども「どちら」と云う語が、どれにも通う。

近稱に「こいら」「こゝいら」中稱に「そいら」「そこいら」遠稱に「あいら」「あすこいら」、不定稱に「どこいら」と云うのもあるが用いぬがよい。

○室町時代

史記抄、十、七　司馬遷ガ、アツチ、コチ、アルイタ時ノ事ゾ。

孟子抄、一、三　軍兵ヲ用テ、アチヘハ國ヲトリ、コチヘハ國ヲトリスル程ニ、

江戸時代

雑兵物語下、玉箱持、長ひ棒の両方に玉箱をひつかけた所で、あつちへあたり、こつちへつかへて、一足もあよばれない。

○平安朝時代

梁塵秘抄、二、佛歌、ほとけは、どこよりか、いでたまふ。同、二四句神歌、神分、熊野へまいるには、きち(紀路)といせぢ(伊勢路)の、どれぢ(か)し、どれとを(し)。同、二、佛歌、釋迦の住所は、どこ〳〵ぞ。

室町時代

義經記、判官北國落の事、どこ山伏と、とはんずる時は、どこ山伏とか、いはんずる。

史記抄、十、三五　ドレモ、眞實ノ處ヘハイカヌゾ。同、六、一五　ドコカラハ、イカホド、アンコカラハ、イクラ出セ、ト云コトゾ。同、六、二八　ドチヘイカレタトモ、マダ不見ホドニ、

孟子抄、七、八　ドレデマレ、不仁デ、天下ヲ取タト云事ハ、アルマイゾ。同、七、一五　我ハ、王者ニ成ウト思ハズトモ、道ヲダニ行ハヾ、民ガ、ドチヘガナ、

行ト思フ時分ヂャ程ニ、擧テ歸服セウゾ。

狂言記、二人袴、必ず、どちへもござるな。同、靱猿、どれへぞ、野遊山に出うと存ずる。同宗論、いかさま、どこやらで聞いたやうな。

江戸時代

昨日は今日の物語、どこらがいとうござる、ととひければ、おびしより下がいたいといふ。

醒睡笑、五、いかがして、呑みたるやらん、つらもどこも、赤漆にてぬりたる風情なるが、同、七、情（とやう）のこはきは、どちもまけまい。

正章千句、十、雪、馬つきは、どこからどこと、さだまりて、

東海道名所記、田子の浦、浦浪いと白く立て、どこもかも、一面に白く、

雜兵物語、下、並中間、どこの人數だかしらない。

【五四】【五五】「いつ」「なに」が「も」に伴つて、「いつも居る」「なにもない」「なにも知らない」などゝ云えば、「すべての時」「すべての物事」の意となる。

「いつ」を「いつ〳〵」と重ねて、複數を示すことがある。

「なに」（何）を「なん」と云うわ、平安朝時代の悦目抄に、「いま一字を、かなたらずして、

なん〳〵としてや、してよ、など、せんなき假名を具する也」。童蒙頌韻に、「那、ナン ノ、」鎌倉時代の假名論語、述而篇に、「じんをもとめて、じんをえたり、又、なんのうらみかあらんや。（求仁而得仁、又何怨）」室町時代の史記抄十、五九「ナン十代ト云テ、元朝マデ封ゼラルヽゾ」。狂言記、宗論「そなたに、意見がしたうおぢやるわいの、なんでおぢやるぞ」。そなたは、なんとして來たぞ」。江戸時代の醒睡笑、三「あれほどおそろしき所に、なんとして、ひとりはすまれん」。同、四「そちは、えならぬ時宜をいふ、なんのいはれぞ」。など、見える。

「何」「どこ」と云う不定の指示代名詞に並べて、「か」と云う語を用いて、「何もかも、なくなつた」「何だのかだのと云う」「何やかやで、いそがしい」「何とかかとかしよう」「何のかのと云う」「どこもかも、一面に花だ」など用いられる。この「か」わ、古い他稱代名詞の「何がしくれがし」の轉か、又わ「彼（かれ）」であるか、又わ疑う助詞の「か」であるか、分らぬ。室町時代、史記抄、十四、八「逗撓トハ、ナンヂヤ、カヂヤト云テ、戰モセイデ、ヌケアルイタナリゾ」。同、十四九「部伍トハ、軍ニ、部ガイクツ其部ゴトニ、校尉イクタリ、ナニイクタリ、カイクタリ、ナンドヽテ、定テヲクモノゾ」。狂言記、吟聟「たゞ、何事もか事も、許したまへや」。江戸時代、東海道名所記、田

子の浦、「浦浪いと白く立て、どこもかも、一面に白く、」

【五五】 室町時代、史記抄、四、六四 八州ト云ハ、ドレ〳〵デアラウゾ、六國ニ、ドレヲソヘウゾ。

【五六】 此「こ」「そ」「あ」「ど」わ、一音で、指示代名詞である。

こゝに箱がある、この中に、何があるか。

生徒が卒業した、その兄も卒業した。

西南の役は、明治十年である、あの時に、西郷隆盛が死んだ。

英國からも、米國からも、大使が來た、どの國の大使も、人物だ。

しかし、助詞の「の」に伴つてばかり用いられる、そうして、「の」が附いて一語となつて、下の名詞を指す意味に用いられる事が多い、又「の」の附いて一語となつたものわ、代名詞でわないが、姑く、かように說いて置く。室町時代、義經記、三の口の關をとをり給ふ事、「どの山を、どのはさまにかゝりて、ゆかんずるぞ。」○「このような」「そのような」「あのような」「どのような」と云ふと同じ意味で「こんな物」「そんな事」「あんな所」「どんな人」など云ふ事があり、その名詞を略して「子供の育ちが、こんな(育ち)になつた。」「騒ぎは、そんな(騒ぎ)でもあるまい。」などゝも用

いる、此事わ、後の形容詞の處(一六七)でも說く。

數詞

【五九】「ふたつ」を「ふたッつ」とも云う。

物事を、一つ〳〵に數えて呼ぶのに、次のように云う事もある。

ひい　ふう　みい　よう　いつ　むう　なゝ　やあ　こゝの　とう
ひと　ふた

【六二】此外に、戸籍、會計などに、「壹」(一)、「貳」(二)、「參」(三)、「拾」(十)などと書くことがある、入れ筆を防ぐ爲である。又「萬」を「万」と書くことがあり、「零」「〇」もあり、「百」を、「一束」と云うこともある。

數を呼ぶに、次のように云ふことがある、聞きちがわせぬ爲である。

二百四十番　四百七十九圓

【六四】「なのか」を「なぬか」とも云う。

【七一】又「三分一」「四分一」などゝも云い、三分の一を「みつひとつ」又わ「三が一」とも云い、四分の一を「よつひとつ」「よつ割りひとつ」又わ「四か一」と云い、三分の二を「みつ割りふたつ」とも云う。

【七三】「割」わ、或る數の十分の一を云い、「分」「朱」わ「割」の十分の一を云う。

【七四】「倍」と云い、「一倍」と云うわ、「二倍」と云うと同じである。「二八、十六」「四九、三十六」など云うわ、八を二倍し、九を四倍するを云う。

【七五】「一の組」「三の鳥居」「三の橋」「四の側」「五の巻」「巻の六」「日本一」「大正二年四月十五日」など云い、又「初等」「中等」「高等」「甲」「乙」「丙」「丁」などもある。

【七七】(六四)を見よ。「いちにち」を「いちじつ」、又わ「ついたち」(朔日)とも云い、一箇月の終の日を「つごもり」(晦日)又わ「みそか」(三十日)と云うことがある。

【七八】「なに」を「なん」と云うことに附いてわ(五四)に云つておいた。

【八一】紀元二千五百七十一年を「二五七一年」と云い、二百八番地を「二〇八番地」と云うこともある。又「七八番地」と云えば、七番地八番地のあたり、と云う意味ともなり、(「二三日」「四五度」など云うも、同じ意味である。)七番地と八番地とを合せて云う意味ともなり、(「明治三十七八年」など云うも同じ意味である。)七十八番地の意味ともなつて、紛れやすい。

又「二七の日」「四九の日」など云うわ、「二日と七日と、十二日と十七日と、二十二日と二十七日と、「四日と九日と、十四日と十九日と、二十四日と二十九日と」の事

である。

動詞

【八八】 動詞の活用わ、文語にわ、四段、上二段、上一段、下二段、下一段、カ行變格、サ行變格、ナ行變格、ラ行變格、の九種があるが、口語でわ、四段が、五段となり、上二段が、上一段と一つになり、下二段が、下一段と一つになり、ナ行變格、ラ行變格が、五段となつて居るから、九種が減つて、五種となつた。

【九〇】 口語の五段活用わ、文語の四段活用と、大きな變わりわない、唯、文語の未來の形の「書かむ」「指さむ」が、口語でわ、全國、殘らず「書こう」「指そう」すべて、動詞の未來の形の變わつた事わ、(一一八)の處で云うと云うようになつたから、これを活用として加えて、五段活用としたのである。

○文語のハ行四段活用の「は」「ひ」「ふ」「へ」を、口語でわ、全國、すべて「わ」「い」「う」「え」と云うそこで、未來の形の「思おう」「思はむ」「買おう」「買はむ」などを加えて「わ」「い」「う」「え」「お」をワ行として五段活用とした。

思	おもは	おもひ	おもふ	おもへ
	おもわ	おもい	おもう	おもえ

(おもはむ) 文語ハ行四段活用

おもおう 口語ワ行五段活用

「は」「ひ」「ふ」「へ」「ほ」わ、古くから、「わ」「ゐ」「う」「ゑ」「を」又わ、「い」「え」「お」と通わせて居たのわ、次のようである。(體言なのわ、擧げぬ)ハ行の音の子音わ、古くわ、唇音の「f」であつた、ワ行の音の子音の「w」も、唇音であるから、通わせたのである、それが「h」となり、又、「i」「e」「o」が、「い」「え」「お」となつたのわ、子音が失せて、母韻ばかりとなつたのである、ワ行の「wu」わ、ア行の「u」となつても、やはり、唇音であることを失わない。

○「は」の「わ」と通つて居るのわ、

古事記、景行の卷、やまとし字流波斯、靈異記、上、二三　姝、ウルハシ、同、中、三三　姝、于留和シ、新撰字鏡、賢、加美宇留和志、同、連字部、嬋娟、美麗之皃、宇留和志、

萬葉集、二十、からまる君を、波可禮か行かむ。同、十五、世の中は、常かくのみと、和可禮ぬる。

類聚名義抄、趙、禾ハシル、ハシル、古今集、俳諧、人にあはむ、つきのなきには、思ひおきて、胸はしり火に、心焼け居り。童蒙頌韻、趨、ワシル、

新撰字鏡、聒、左和久、類聚名義抄、聒、サハク、木工權頭爲忠朝臣家百首、つれなき戀に、さはぐ心を、悦目抄　つや〳〵、さはぎたるけしき

もなくて、

古事記、目弱王、日本書紀、眉輪王、新撰字鏡、朕面和也、於毛與和志、悦目抄、忠峯忠見、云々、よはけれど、やさし。

新撰字鏡、燥、可和久、類聚名義抄、涸、カハク、伊呂波字類抄、乾、カハク、

日本紀竟宴歌、(平安朝時代)替、可波留、悦目抄、くもりなきの歌、三句、さながらかわらず。童蒙頌韻、渝、カワリ。

新撰字鏡、連字部、惶急、阿和豆、類聚名義抄、惶、アハツ、周章、アハツ、定家假名遣、あはたゞし、周章、

新撰字鏡、剞、屈曲也、太和牟、定家假名遣、たはむ、撓、

源氏物語、夕顔、たゝかくながらくはふべき事侍らざめり　悦目抄、和歌は、我朝の風俗、云々、延喜のかぐらの歌にも、くわへられける。童蒙頌韻、加、クワヘタリ、伊呂波字類抄、加、クワフ、

吾妻鏡、文治五年四月二十一日、あやまち候はざらん。」くにをめされ候わんこと、」

「ひ」「い」「ゐ」の通つて居るのわ、

新撰字鏡、蘭、知比佐支井、悦目抄、ちいさきつちくれをゆづらず。

古今集、雑、上、思ふどち、圍居せる夜は、唐錦、たゝまく惜しき、ものにぞありける。一本神樂歌、榊、八十氏人ぞ、満登比せりける。（今井似閑ノ萬葉緯ニ納レシ本）

萬葉集、十五、我が胸痛し、古非（戀）の繁きに、後拾遺集、戀、一、我れが身は、とかへる鷹と、なりにけり、年はふれども、こひ（戀、木居）は忘れず。

類聚名義抄、用、モチヰル、蜻蜓日記、中、夢をも佛をも、もちいるべしや、もちゐるまじや。紫式部日記、上、をり〳〵の有さまにしたがひて、もちひんことの、いとかたかるべし。今昔物語、十二、二會ノ講師ヲ用ィル。源仲正家集、（賴政の父）千代までも、影をならべて、逢見むと、祝ふ鏡の、もちひ（餠、用）ざらめや。發心集、一、いと、もちいる事なし。定家假名遣、もちひて、用、もちいらるゝ、被用、もちゐる、用、

其外、「まひ」（舞）を、童蒙頌韻に、「娃、マイヒメ」、「あげつらひ」（論）を、同書に、「論、アゲツライ」、「まゐる」（參）を、悦目抄に、「貴所へまいらする歌」梁塵秘抄、二、授記品に「多

くの佛にまいりあひて」同書、藥王品に「くらゐ」を「菩薩のくらいえたりける」定家假名遣に「い」を「おひうと、老人」「おひぬれば、老」「はひずみ、掃墨」「くひて、悔」「おひて、於」「とひて、解」「いさぎよひ、潔」「むくひ、報」「ひ」を「おいて、負」「しゐて、強」「とりかい、鳥飼」「さいはい、幸」「もちい、もちゐ餅」「ゐ」を、定家假名遣に「いさる、膝行」字鏡集に「嘘、フルキイドコロ」

「ふ」を「う」としたのわ、

靈異記の序の訓注に「償、ツクノウ」「傷、ソコナウ」「嗤、ワラウコト」永久四年百首、秋の部に、物名の草香（和名類聚抄、草類、芸、和名、久佐乃香）の題で、源俊頼「いくさく。さ。のかう心や、つきぬらむ、今のはりみち、石ふますとて」。（往來に見て、新路の石を蹈ませる爲に、馬を野飼にする心がついたのであろうか、の意味である。）悦目抄に「歌に、善惡あり、云々、こしおれたるものは、はう〳〵（這々）もありぬべし」。源平盛衰記、三十五に「信濃なる、木曾の御料に、汁かけて、たゞ一口に、くらう（食、九郎）判官」。定家假名遣に「すまう、相撲」「ころもふるう、衣振」「まじなひたまう、呪給」「なやらう、追儺」、假名論語、季氏篇に「すくないことをうれへずして、ひとしからざるをうれう」（不患寡、而患不均）、

其外、童蒙頌韻に、「通、カヨウ」、「違タガウ」、「謡、ウタウ」、伊呂波字類抄に、「養、ヤシナウ」、「病、ヤマウ」、字鏡集に、「沒、タバヨウ」、平他字類抄に、「祝、イハウ」、「拂、ハラウ」、倭玉篇(甲)に、「惱、ワヅラウ」

「う」を「ふ」としたのわ、

類聚名義抄に、「樹、ウフ」、多武峯少將物語に、「くわくこう(郭公)を、山路しる、鳥を我身に、なしてしが、君かくこふ(戀)と、なきてつぐべき」。「まうけ(設)を、悦目抄に、「歌を、かならず、上の句をよまむとおもふべからず、云々、詞にてもまふけたらむ物を、あてゝみんに」、

「へ」、「え」、「ゑ」、を通わしたのわ、

靈異記、上に、「たえ(絕)を、「トミノヲガハノタヘバコソ」、「すゑ(居)を、悦目抄に、「歌は、人によりて、云々、此縁を、むね、こし、すそにすへたるを、よき歌とす」。「おぼえ(覺)を、同書に、「俊頼朝臣、云々、一首詠せまほしくおぼへしに」、「まへ(舞)を、梁塵秘抄、二、雜に、「まゑ〳〵、かたつぶり」、「たへ(妙)を、同書、二、極樂歌に、「たえなるのりをぞとなふなる」 定家假名遣に、「へ」を、「あしなえ、蹇」、「さえのかみ、さいのかみ、さゑのかみ、道祖神」、「支の神」、「こしらゑて、誘」、「え」を、「あまへて、甘」、「さかへゆ

く、榮行」「いへぐすり、愈藥」、「ゑ」を「う」へおく、植置」「すへて、居」「うへたり、飢」、

「ほ」を「を」「お」としたのわ、

類聚名義抄に「沃、ウルヲス」「懸、ハルカナリ、トヲシ」「檄、モトヲル」、悦目抄に「歌よまん時、云々、後に、よくなをし、よみとゝのふべきなり」「長歌とは、云々、終の七々にいたるまで、いひとをせる物なり」。定家假名遣に「きおふ、競」「くづをる、頽」「とおる、通」、

「を」を「お」「ほ」としたのわ、

類聚名義抄に「嬋娟、タオヤカナリ」、悦目抄に「又、縁の字、云々、此三のこしおれ(腰折)にまよひて、歌は、更にいでこぬ成べし。」「かなをいたはる、云々、句の末には、發句、後句のおはりのかなり。」「朝倉や、木の丸殿に、我おれば」「心操もおさまり、才幹もありて」定家假名遣に「花をおる、折」「いとおし、最惜」類聚名義抄、禾部に「穎、カホル」、

「お」を「を」としたのわ、

靈異記、中、十三に「陷、ヲチイル」、同、中、三十三に「晩、ヲソク」、悦目抄に「萬葉集に、云々、人のかたちすぐれたる中に、心をくれたる所みゆれども」定家假

名遣に「をそし、遅、」をす、推、」をとづれ、音信、」

鎌倉時代以後の書物にわ、其混雜が甚しい、今の口語でわ、ハ行活用の動詞の語尾わ、「は」を「わ」に、「ひ」「ふ」「へ」を、「い」「う」「え」に發音し、「言はむ」「買はむ」わ、「言わむ」「買わむ」となり、又「言わう」「買わう」となり、今わ、「言おう」「買おう」と發音する。

○文語のナ行變格活用の「死ぬ」「往ぬ」を、今わ、全國で、大抵、通例の四段活用に變えて、つかつて居る、そこえ、未來の形の「死のう」「往のう」を加えて、五段活用とした。

死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	（な、む）
	な	に	ぬ	ぬ	ね	の う

文語ナ行變格活用

口語ナ行五段活用

中國、四國、九州の處々にわ、「死ぬる人」「往ぬる時」など、、まだ、ナ行變格活用の姿を殘して、云つて居る所が、ないでわない、しかし、それも、多くわ、連體形の場合ばかりで、「死ぬれば」「往ぬれば」など、云うことわ少くて、大抵わ、「死ねば」「往ねば」と云うようである。

「往ぬ」と云う動詞わ、三重縣、愛知縣、岐阜縣、福井縣から東でわ、口語につかわない、九州でも、佐賀縣、熊本縣、鹿兒島縣、などでわ、用いぬようである。

文語にわ、此外に、命令形にばかり用いる「死ね」と云う活用があり、將然形が「死なば」、已然形が「死ぬれば」であるのに、口語にわ「死ね」を命令に用いて、又「死ねば」と、將然にも、已然にも用いることゝなつた、又、文語の四段、上一段、下一段活用、の外の動詞わ、口語では、終止形が亡びて、連體形が、終止形を兼ねるようになつたのに、(後の「一〇九」を見よ)此ナ行變格活用わ、却つて、連體形の「死ぬる」が亡びて終止形の「死ぬ」が連體形を兼ねるようになつた、是れわ、元から活用が、四段活用に似て居るから、四段活用の方え、引き込まれたのであらう、既に、室町時代の狂言記の吃に「それならば、往ぬやうに、云て遣らう」、同、鎌腹に「此鎌を下に置いて、飛びかゝつて死ぬに、死なれぬといふ事はあるまい」、鎌腹を切つて死ぬぞ」などと、終止形を、連體形に用いて居る。

○文語のラ行變格活用の「あり」「居り」の終止形を、口語でわ、全國、殘らず「ある」「居る」と云つて居る、そこで、未來の形の「あろう」「居ろう」を加へて、五段活用としたる

有	あら	あり	あり	ある	あれ	(あら、む)	文語ラ行變格活用
	あら	あり	ある	ある	あれ	あろう	口語ラ行五段活用

室町時代の幸若の入鹿に「諸卿殘らず參内ある、鎌足、憚り御不參なり。」史記

抄、十、五三に「車馬ヤ、女ヤ、ナンドガアルト云モ、此心ゾ。」閑吟集に「我おもひ、うちにある、色や外に見えつ覽。」運歩色葉集(甲)に「居、ヲル、」節用集(甲)に「居、ヲル、」狂言記、宗論に「其方に、ちと意見をしたい事がある。」江戸時代の東海道名所記、舞坂に「誠に、世の中に、鬼はないものぢやと、樂阿彌も、かんしんしておる、されば、云々」などゝある。

○文語の上二段活用の「恨む」も、口語にわ、全國、大抵、五段活用に變わつて居る。

恨						
うらみ	うらみ	うらむ	うらむる	うらむれ	(うらみ、む)	
うらま	うらみ	うらむ	うらむ	うらめ	うらもう	
				文語マ行上二段活用		
				口語マ行五段活用		

しかし、中國、九州邊に、まだ、口語に、少しわ、上二段活用につかつて居る所があり、又、上一段活用に云つて居る所もあり、又まぜてつかつて居る所もある。

【九一】 文語の上二段活用の「起く」「起くる」「起くれ」「落つ」「落つる」「落つれ」を、口語でわ、全國、大抵「起く」「落つ」の終止形をつかわないで「起きる」「起きれ」「落ちる」「落ちれ」と、上一段活用に云う、但し、九州の處々にわ、まだ「起くる」「起くれ」「落つる」「落つれ」

(終止形の「起く」「落つ」わ、亡びて居る、)と云う所がある、けれども、今わ、上一段活用と定めた。

起 { おき おき おく おくる おくれ (おき、む) 文語カ行上二段活用
　 { おき おき おきる おきる おきれ おきよう 口語カ行上一段活用

口語にも、稀に、「過ぐる三月三日、」など云ふことわある。

「おくる」「おくれ」「おつる」「おつれ」と云うわ、九州の宮崎縣に、最も多い、和歌山縣の日高郡でも、そう云う。

未來形の「おきよう」わ、次の下一段活用、カ行變格、サ行變格、の未來形と共に全國の處々に、異同がある、それわ、後の未來形の條(一一八)に云う。

山形縣の山形市、北村山郡、岩手縣などでわ、「落つる」「落つれ」「報ゆる」「報ゆれ」をませて云い、山形縣の最上郡、大坂府の東成郡でわ、「起きる」「起くれ」「落ちる」「落つれ」など云い、肥前の小城、多久、の二郡でわ、「起くる」「起きれ」「落つる」「落ちれ」と云う。

○文語の四段活用の「飽く」「足る」「借る」を、關西の口語にわ、おもに、五段活用につかい、關東では、「飽きる」「足りる」「借りる」と上一段につかつて居る、因つて、是等の語わ、兩方に活用するものとする。

關東でも「勘定合つて錢足らず」「月足らず」などとわ云う。

關西で「かつて(借)來る」(平家物語十、だいり女ばうの事)「人に、くるまかつて、つかはされにけり」「こうて(買)來る」と云うのが、關東で「かりて(借)來る」「かつて(買)來る」と云うのと、紛れておかしいと云うが、東西で、活用が違うのである。

室町時代の運歩色葉集(甲)に「借、カリル」、江戸時代の醒睡笑、四に「大名の前にて、座頭の、ひたものゝ、ねぶるを見給ひ、云々、昔より、春は、蛙が目をかりる」と申し傳へて候、云々、我等のやうなるあしき目をもかり候は、よく〳〵、蛙のよりあひに、目のはやる仔細御座候や、と申しける。」諸國盆踊唱歌、因幡に「ごせとちぎりて、いまゝたあきる、釘をうちたや、のちのつま。」などゝ、關西にも、上一段活用が見える。

○文語のハ行上二段活用の「強ひ」「強ふ」「強ふる」「強ふれ」の類、又、ヤ行上二段活用の「報い」「報ゆ」「報ゆる」「報ゆれ」の類、ワ行上一段活用の「用ゐ」「用ゐる」「用ゐれ」の類を、

口語でわ「強い」「強いる」「強いれ」「報い」「報いる」「報いれ」「用い」「用いる」「用いれ」など丶云うから、ア行上一段活用とする、但し、九州にわ「強い」「強ゆる」「強ゆれ」「報い」「報ゆる」「報ゆれ」など丶つかつて居る所もある。

○「報ゆ」は、ヤ行上二段活用であるが、早くから、ハ行四段活用にも用いられて居た、鎌倉時代の平家物語、二、小松教訓の事に「いく程もなくて、はや、身の上にむくはれにき、と思へば、云々」同、七、福原おちの事に「何ぞ、今、其はうをんをむくはざらんや、云々、あやしの鳥けだものも、をんをほうじ、とくをむくふ心は候也。」古今著聞集、二に「日食すこしきにして、うへしのびがたきは、餓鬼のかなしみをむくふなり。」同、二に「自業自得果の衆生の業をむくはんが爲に、みな、我所にきたる。」同、九に「今夜のうちに、此恨をばむくはんずるものを、と思ひねたりけり。」同、十二に「年來の罪をも報はんが爲に、頭をのべて參候。」室町時代の謠曲、葵の上に「我、人の爲、つらければ、必ず身にもむくふなり。」運歩色葉集(甲)に「報、ムクウ」節用集(乙)に「酬、ムクウ」江戸時代の倭玉篇(丙)に「訓、ムクフ」寛文五年の山鹿語錄、十七、父子道、二、事父母、報讎に「父の仇を報はん、と思ひ入る丶ときは、」合類節用集に「報、ムクフ」寶永三年の近松門左衛門の碁盤太平記、泉岳

寺の條に、「主人の仇を報はん爲、」など、見える、（罪が報つて來る」なども云い、且、自動、他動の變わりもあるようである、）しかし、今でも、まだ、全くわ變わり切つて居らぬように思われる。

○古事記、神代の巻に、「啼伊佐知伎」とあつて、それについで、「何由以汝不治所事依之國而哭伊佐知流」。とあり、（日本書紀にわ「哭泣恚恨」とあり、欽明の巻に、「大息涕泣」とある、倭玉篇（甲）に、「泣、イサツ、ナク」）此「伊佐知」と云う動詞わ、上二段活用のように思われるが、右の「伊佐知流」を、「いさちる」と讀めば、上一段活用となつて、本居宣長の古事記傳にも、いつてある通り疑問のものである。

○古事記の景行の巻に、「荒夫琉神」、常陸風土記に、「荒賊、俗曰阿良夫流爾斯母乃」、などとあるに、續日本紀、延暦八年九月戊午の詔に、「陸奥國、荒備流蝦夷」、とあつて、此「荒備流」を、「あらびる」と讀めば、上一段活用のようである、しかし、古事記に、「訓建、云多祁夫」、とあり、萬葉集の十に、「秋風に、山跡部越雁が音は」（同巻に「秋風に、山飛越、雁が音の」、ともある）、とあつて、舊訓に、「部」に、「ビ」としてある、「夫」に、「ブ」「ビ」の音があり、「部」に、「ブ」「ビ」の音があるのを見れば、「備」も、「ブ」の音に用いたのかも知れぬ。

同じ字を同時に、いろ〳〵の音に用いたのわ、中宮寺の所藏の天壽國曼陀羅の繡張文に、「加斯支移比彌乃彌己等」(炊屋姫命)の「彌」の字など、其例である、次に云う下二段活用の論の處(九二)の「於也波左久禮騰、和波左可禮賀倍」なども、同じである。(尚、其處で云う)、

○萬葉集十に、「君に戀ひ、裏觸居れば、敷の野の、秋萩凌ぎ、左牡鹿鳴くも」。とあるに、古今集、秋、上に、「秋萩に、うらびれをれば、足引の、山下とよみ、鹿の鳴くらん」。新葉集、戀四に、「色かはる、小萩がもとに、うらびれて、いつしかのねに、鳴くと知らせん」。とある、此「うらぶれ」「うらびれ」、共に、ラ行下二段活用の連用形と見れば、仔細わないが、「うらぶる」と云う語わ、「心侘ル」の約まつたものだと云う説があるを見ると、何か、其間に、變わり目があるようである、其外「老ゆらく」であるべきが、「老いらく」となつて居るのも、上二段の、上一段に變わつたものであろうか。

○上二段活用の、上一段に變わつたものゝ、元祿以前の書物に見えるわ、誠に少ない、上二段活用の動詞の、數の少ないからでもあろう、今、諸書から拾つたものを、次に示す。

平安朝時代

類聚名義抄、閔、トヂル、

伊呂波字類抄、媚、コビル、

鎌倉時代

山家集、いせ島や、月のひかりの、さびる浦は、明石には似ぬ、影ぞすみける。

春秋左氏傳集解(圖書寮藏、文治建久から弘安前後までの寫本)荀罃曰、城小而固、云々、隕(ヲチル)于深淵。

論語(山城高山寺藏、寛元元年寫)暴虎憑河、而無悔(クイル)者、吾不與也

字鏡集、墮、ヲチル、(此頃の書物に、陷を「ヲチル」と讀んであるのわ、「オチイル」の約まつたのである。)耄、ヲイル、

室町時代

倭玉篇(甲)懼、ヲヂル、

運歩色葉集(甲)恥、ハヂル、澁、サビル、(刀ニ)

節用集(乙)愧、ハヂル、

狂言記、つんぼ座頭、扨も〳〵、つんぼに物いへば、精も心も、つきることじ

や。

節用集、(丙)　強、シイル、

江戸時代

節用集、(戊)　強シヒル、

倭玉篇、(乙)　佩、ヲビル、　免、トヂル、　邁、スギル、　朽、ヲイル、　生、イキル、　凸、ヲキル、　育、イキル、

雑兵物語、下、夫丸、　胴腹の疵から、血がはしる、又、血が胴へ落ちるもんだぞ。

合類節用集、　絨、トヂル、　禿、チビル、　闌、アラビル、　浴、アビル、

○上一段活用の動詞の「射る」「鑄る」「着る」「似る」「見る」などわ、全國について、元の活用でつかつて居る所が多いが、又、稀に、五段活用に變えて居る所もある、けれども、又「射る」「鑄る」わ、變えて、「着る」「見る」などわ、元のまゝで居る、など、語に因つて、まち〳〵である、且、變えて居るのにも、連用形にわ、「射殺す」「鑄直す」「着飾る」「見放す」「射て」「着て」「見て」など云つて、元のまゝでつかつて居るのも多い、全く元のまゝに用いて居るのわ、東國である、(京都、大坂も、元のまゝ、今わ、元のまゝに、上一段活用と定めた。

【九二】 文語の下二段活用わ「受く」「受くる」「受くれ」「捨つ」「捨つる」「捨つれ」てあるが口語にわ、全國、大抵「受く」「捨つ」の終止形わなくなつて「受ける」「受けれ」「捨てる」「捨てれ」と、下一段活用になつて居る、但し、九州の處々にわ、今でも「受くる」「受くれ」、「捨つる」「捨つれ」と云う所がある、けれども、今わ、下一段活用ときめた。

受

うけ　うけ　うく　うくる　うくれ　（うけ、む）

文語カ行下二段活用

うけ　うけ　うける　うける　うけれ　うけよう

口語カ行下一段活用

口語にも、稀にわ「明くる朝」「明くる日」「明くる年」など云う事わある。

和歌山縣の日高郡でわ「受くる」「受くれ」「捨つる」「捨つれ」と云い、又、九州でも、福岡市、小倉市、肥前の唐津町、大分縣の一部、宮崎縣の延岡町、沖繩縣でわ「受ける」「受けれ」「捨てる」「捨てれ」と云う。

和泉の堺、攝津の東成郡でわ「受ける」「受くれ」「捨てる」「捨つれ」と云う。

○文語のハ行下二段活用の「教へ」「教ふ」「教ふる」「教ふれ」の類、又、ヤ行下二段活用の「覺え」「覺ゆ」「覺ゆる」「覺ゆれ」の類、ワ行下二段活用の「植ゑ」「植う」「植うる」「植うれ」の

類を、口語でわ「教え」「教える」「教えれ」「覺え」「覺える」「覺えれ」「植え」「植える」「植えれ」と云うから、共に、ア行下一段活用とする、但し、九州にわ「教え」「教ゆる」「教ゆれ」「覺え」「覺ゆる」「覺ゆれ」「植え」「植ゆる」「植ゆれ」とつかつて居る所もある。

○古事記、允恭の巻の歌に「那加佐陀賣流淤母比豆摩阿波禮」とあるわ、解しにくい語としてあるが「汝が定める念妻柯怜」と解いた説に從えば、此「定める」わ、下一段活用に變わつたものゝようであるが、容易にきめることわ出來ぬ、橘守部の稜威言別にわ「佐陀賣多流」と、多の字を加えて、其左に、丸星が附けてある、何か、そう云う異本でもあつたものか、又わ、自分に加えたものであろうか、此言葉わ、まず、不審として置く。

○新撰字鏡に「鯵、魚乃曾己禰太々禮留」（損ね爛る、但し、天治寫本の十二巻本にわ無い）とあるを「たゝれる」と讀めば、下一段活用のようであるが、萬葉集、十に「爲暮零禮見」とあり、同書、十四に「於也波佐久禮騰、和波左可禮賀倍」、（「親は放くれど、我は放かるかへ」で、舊訓に「可禮」に「カル」とある）とあつて、同巻に「我波佐可流我倍」ともあれば「禮」を「ル」の音にもつかつたものと見えるから「太々禮留」も、「たゝるゝ」と、讀むべきであろうと思われる。

○新古今集、十八、雜下、菅公の海の歌に、「海ならず、たゝへる水の、底までも、清き心は、月ぞ照さむ」。の「たゝへる」わ、下一段活用になつたものかと見えるけれども、萬葉集の十三に、「望月の多田波しけむと、吾が思ふ」とあり、夫木集、二十四に、「きよみ川、いづる湊に、潮滿てば、せかれてたゝふ、浦の入海」。山家集、下に、「世の中に、すまぬもよしや、秋の月、濁れる水の、たゝふさかりに」。などゝあるから、此「湛ふ」わ、四段活用の自動詞で、それが「たゝへり」となるを、「たゝへる」と用いたのである、又、古今集十九の旋頭歌に、「君がさす、三笠の山の、もみぢ葉の色、神無月、しぐれの雨の、そめるなりけり」。とあるも、雨が葉を染める意味と解せば、下一段活用に用いたようであるけれども、雨が葉に染まつた意味とすれば、仔細わない。

○下二段活用の、下一段活用に變わつたものわ、

平安朝時代

類聚名義抄、淹、フナユカヘル、フネノユ、渝、カヘル、更、カヘル、

和名類聚抄、毛群部、獸體、鼾、宇世流、以鼻動物也、(豕などが鼻で地を掘り起す)

新猿樂記、稻荷山阿小町之愛法、「覆盤（ウヒテカハラ）破前（ヒラ）喜（フ）」（破前わ、陰莖、）

童蒙頌韻、覆、ウセリ（元龜字叢、覆、ウセル、倭玉篇、覆、ウセル、）

類聚名義抄、蹻、クエル（梁塵祕抄、二雜、「むまのこや、うしのこに、くゑさせてん。」）

落久保物語、二、只今の太政大臣の尻はけるとも、此殿の牛かひに、手ふれてんや。（「蹴（ク）うる」の「くゑる」となつて、又「ける」と約まつたものである。）

榮花物語、根合、花のさかりには、人々まゐりて、鞠などあそばせ給ひし所なり。

木工權頭爲忠朝臣家百首、神祭、山がつの、かきねにいはふ、やかつかみ、卯の花さける、をかにみえるかと。

雅亮裝束抄、一、だいきやう（大饗）のこと、ま（間）は、ひろくて、ぜんじやう（軟障）は、せばくば、ちがへることかなはじ、はな（鼻）つきにもすべし。

和歌初學抄、糸、へる（綜）

伊呂波字類抄、經、ヘル、渝、カヘル、蹴、クエル、總、フサヲル、

古今集顯昭注、十八、者ノ字ヲ不ニヨミタガヘルコトモアルベシ。

梁塵祕抄、二二句神哥、　このとのに、よきふでづかの、あるものを、てこゝのとみを、かきよせる、ふでのちくの、あるものを。

鎌倉時代

萬代和歌集、十五、　老がよの、ふけるは月に、ながめせし、人めもしらず、涙落ちけり。

建仁三年、仙洞五十首、　花といへば、なをみ山木の、梢まで、風をへだてる、心なりけり。

無名抄、　歌は、秀句を思ひえたれど、本末、いひかなへるが、よきなり。

瑩玉集、　その歌のすがたに隨て、こと葉つゞきも、おなじさまに、よみかなへるが、よきなり。

發心集、一、　朝ニサカヘル家、夕ニヲトロヒヌ。

金槐集、　ふりにける、あけの玉垣、神さびて、やぶれるみすに、秋風ぞ吹く。

（「やれたる」、とある本も、あると云う。）

教訓抄、七、舞譜名目、　跐足（クヘルアシ）、　左右アリ。

字鏡集、　渝、カヘル、　渥、ツユノタレル、

古今著聞集、十六、此御寺のほとりにて、すずろに、人からめる事、むかしよりなし。

南北朝時代

平他字類抄、經ヘル、

室町時代

義經記、八、なをえ津にて、おひさがされし事、そこともしらぬ、琵琶のこゑかすみのひまにまぎれる、と、うたひしも、今こそ思ひしられけれ。同、八、ひでひらが子共、判官にむほんの事、九良、ふしぎの者かな、おなじ兄弟といひながら、よりともを、度々おもひかへるこそ、ふしぎなれ。

曾我物語、九、きやうだい、屋かたをかへし事、ねずみ、ふかくあなをほりて、くんきんのがいをのがれ、とり、たかくとんで、さうめいのがいをとほざけるとは、かやうの事なり。同、九、十ばんぎりの事、大將にかはりてつかへるものは、かならず、其ぢんをやぶるとは、もんぜんのことばなるをや。

平家物語、劍の卷、泣々、尾張國へ歸り給ひけり、尊に仕へる人々、別を悲み

奉りて、云々。

撮壌集、寒熱、ホトケル、綜ヘル、

孟子抄、三、義ト道トヲ以助クレバ、五藏ニ充滿シテ有程ニ、物ヲ食シテ飢エル事ハ無ゾ。同、九、率土ハ、土地ノ有限リト云ハン用ソ、土ヲシタガエル限リノ心ゾ。

中書王物語、物さびしげなる中に、びわひくばちのをとぞきこえる。

詠三百首狂歌薄、招きよせて、ばかさんとてや、秋の野に、あれる狐の、尾花なるらん。

山城太秦の牛祭祭文、やさ馬に鈴をつけて、おどるもあり、はねるもあり。

倭玉篇(甲)耐、タヘル、

運歩色葉集(甲)經、ヘル、綜、ヘル、掠、カスメル、延、ハヘル、構、カマヘル、重、カサヌル、漬、ツケル、搦、カラメル、替、カヘル、染、ソメル、存、ナガラヘル、枉、マゲル、詰、ツメル、障、サヘル、飢、ウエル、餿、スエル、茹、ユデル、

運歩色葉集(乙)縒、ヘル、憔、カジケル、絡、カラメル、飢、カツエル、

節用集(甲)　換カエル、蹴ケル、

節用集(乙)　蹴ケル、刷ハダケル、吠ホヘル、經ヘル、悦トボケル、洮ソロヘル、

元龜字叢、植ウエル、淬ニラゲル、蹴ケル、

狂言記、こんくわい、此山のあなたに、獵師の候、我等の一門を、つりたいらげる事にて候。同、抜殻、酒云々、ま一度もどつて、たべるやうにいたそ。」門の番なりとも、さして下されませう、云々、抱へる事はならぬぞ。同、宗論、我宗體を譽めるではござらぬが、同、吟賀、其時に、御内の者がでるであらう。同、附子、某の眞直に申上げる、

節用集(丙)　歸カエル、

天正日記、天正十八年、六月十二日、新右衞門、十兵衞、まめのもち、くれる、十四日、はれる。

節用集(丁)　經ヘル、

江戸時代

節用集(戊)　經ヘル、蹴ケル、

倭玉篇(乙)　塡、ウメル、任、タヘル、促、セメル、肝、メミハダケル、和ソヘル、擬、セタゲル、掬、カラメル、擲、ナゲル、撙、サヽエル、驚、アシナヘル、蹋、ケル、跨、コエル、効、カンガヘル、勅、ツゲル、寤、サメル、忍コラエル、調、ソロエル、誘、コシラヘル、章、アワテル、餧、ウエル、隨、マカセル、逼、セメル、痩、ヤセル、茹、ユデル、縝、ウヘル、糠、クダケル、鎔、トケル、渝、カヘル、消、キエル、列、サエル、明、アケル、礙、サエル、罅、サケル、負、マケル、耐、タエル、受、ウケル、晝、ワケル、丸、マルメル、醒睡笑、一、唯、もていて捨よと、のべる、をかしや。

犬子集、十四、草臥てねる、土佐の山陰。

可笑記、三、女房をむかへるか、又嫁をとるに、分別あるべし。

油糟、雜、誂へる、あたひたかばる、石ぼとけ。同、雜、勝手の床に、かける字治川。

吾吟我集、七、強きかたに、助言いひぬる、將棊こそ、かける馬にも、むちとしらるれ。

正章千句、七、祝言の座に、出るやはぢかる。

倭玉篇(丙)　祇、マチル、膽、ツタエル、逼、セメル　湎、ツケル、亭、アレル、四天王武者修行、六段目、いざ、うつたて、もの共とて、みな、一どうにぞ、おつかける。

諸國盆踊唱歌、河内、おやがかたおや、御ざらぬゆゑに、人もめなづり、身もやせる。同、陸奥、秋風が、吹けば〳〵、まめのはもかれる。同、越中、よろづ世をへる、音なしの、たきのながれは、よもつきじ。同、紀伊、山がやけるが、たゝぬかきじよ、これがたゝりよか、子をおいて。同、紀伊、いく千代久し、松がえの、きみはさかへる、わかみどり。同、肥前、させばおさへる、おさへばのめず、のめば其身の、あだとなる。

合類節用集、涸陰、キテル、顙、イセル(縫衣所謂)　馳、ハセル、注、ハゲル(屬弓弩於弦)　騈、ハネル、若弱、ニヤケル、綜、ヘル、經、ヘル、取換、トリカエル、嫋、トロケル、壓扁、ヲシヒラメル、歸着、カヅケル、閭、カブセル、點、タテル(茶)　立、タテル、投、ナゲル、搏、マロメル、拌、マゼル、很、フテル、潑、コチル、遽、アハテル、充、アテル、擊、メゲル、ヒシゲル、含羞、シラケル、白、シラゲル、拗強、スチル、挿、スゲル(矢)　助、スケル

○上二段活用、下二段活用の、上一段、下一段と變わつたは、右の通りである、しかしながら、江戸時代から前の書物にわ、やはり、多くわ、「落つる」「盡くる」「受くる」「立つる」であつて、右わ、多くの書物の中に、稀に見えたのを拾つたのである、江戸時代になつてもまだつて居る、全く、上一段、下一段となつたのわ、元祿頃の事かと思われる。

○カ行下一段活用の「蹴る」と云う動詞わ、今、全國で、元のまゝにつかつて居る所が多いが、又、ラ行五段活用に變えてつかつて居る所も少くない、(京都、大坂も、五段活用である、)因つて、此動詞わ、カ行下一段と、ラ行五段との二つの活用のあるものと立てゝ置く。

【九三】 文語のカ行變格活用の「こ」「き」「く」「くる」「くれ」を、今、全國で、殘らず「く」の終止形を用いないで「こ」「き」「くる」「くれ」と云つて居る。

來	こ	き	く　くる　くれ　(こ、む)	文語カ行變格活用
	こ	き	くる　くる　くれ　こよう	口語カ行變格活用

【九四】【九五】 文語のサ行變格活用の「せ」「し」「す」「する」「すれ」を、口語でわ、終止形の「す」をつかわず、「せ」「し」「する」「すれ」と云うこと、全國、皆、同じである。

爲　せ　し　す　する　すれ　（せ、む）　文語サ行變格活用
　　せ　し　する　する　すれ　しよう　口語サ行變格活用

室町時代の狂言記、相合袴に「盃、云々、まづまゐらいで、左兵衛殿へ進せる。」「やい、冠者、いづれもへ、つらりと進せたか。」「なか〳〵、進せました。」などとも、用いてある。

【九六】　漢語を、サ行變格に活用させるに付ても、規則を立てかねるものが多い、一字の漢語も、すべて、サ行變格に活用させるのを、通則とするが、また、本書に擧げたように、いろ〳〵に活用させる事もある、それを、總體に分けて見れば、次のようになる。

○第一類　サ行變格に活用させるもの、

せ（ぬ）　しろ
られる　する　すれ　しよう　せよ
し（ない）
られる
させる

「せられる」「しられる」が「される」ともなり、「しさせる」が「させる」ともなる。（委

しくわ、助動詞の(一八六)(一八八)で云う。)

「拜見」「勉強」「心配」「介抱」などの熟語の漢語わ、すべて、此活用になる。

一字の漢語の「製」「聘」「稱」「勞」「存」「壓」「決」「屬」「激」「敵」など、あらゆるものも、皆、此活用に這入る、但し「詠」「命」「講」「報」「參」「關」「散」「禁」「信」「變」「論」「發」「察」「達」などわ、「される」「させる」にわ續かず、(重んずる、輕んずる、なども、)又「坐」「記」などわ、「しられる」「しさせる」「しない」「しろ」「しよう」に續かず「秘」「具」などわ「しない」「しろ」に續かぬようであるから、氣を付けねばならぬ。右のように活用させる事わ、全國の口語、皆、同じであるが、その未來形、命令形に、處々で、異同のあることわ、後の未來形(一一八)命令形(一二七)の處で說く、次の第二類の未來形、命令形、第四類の未來形、もそうである。

○第二類　サ行上一段に活用させるもの、

じ(ぬ)
じ(ない)　じる　じれ　じよう　じろ
じ(られる)
じ(させる)　　　　　じよ

一語の漢語の「高」「焙」「通」「封」「案」「感」「談」「判」「煎」「損」などわ、このようにも活用させる。

右のように活用させるのわ、東國であつて、中部、西部でわ、このようにつか

つて居る所もあるが、又すべて、サ行變格につかつて居る所もあり、又「案しる」「煎じる」など、二三の語に限つて、上一段につかつて居ると云う所もあり、又「じる」「しれ」わ、つかうけれども、其外、上下の活用わ、サ行變格につかうと云う所もある、けれども、今わ、東國、畿内邊で、遍く此活用につかわれると思われる「高」「焙」「案」「煎」などの數語を、上一段にも活用させるものとした、室町時代の義經記、義經、平家の討手に上り給ふ事に、「數通の起請文を、かきしんじられけれども、尚、御承引なかりければ、守武千句に、「ころもがへして、藥せんじよ」、春過て、夏めにけさや、なりぬらん。」江戸時代、鹿の卷筆、四、表具屋の掛物に、「さりとては、じよさい〳〵、よく判じられた。」など、ある。

右の外に、「映」「詠」「命」「應」「慢」「禁」「吟」「信」「陳」「任」「減」「轉」「變」「辨」「混」「論」なども、此活用につかわれるかと思うけれども、(重んじる、輕んじる、なども、)第一類のものとする方が、よいように思われる。

○第三類　サ行五段に活用させるもの、

さ(せれる)	(ぬない)	し	す	せ	そう	せ

一語の漢語の「賀」「謝」「議」「辭」「解」「愛」「害」「廢」「託(駁)」「譯」「略」「祝」「熟」「復(服)」などわ、このように活用させてもつかう。

右のように活用させるのわ、全國、大抵同じである、(中國、四國、九州、にわ、そうでないと云う所も、ある、)けれども、民間にわ、通用が少ないようである、畢竟わ、學者や、書生の間で、間違えて文語に入れまぜてつかつた口調のものを、口語にもつかうのであろう、今わ、遍くつかわれると思われる「賀」「謝」「議」「辭」「解」などの十數語を、五段活用にもつかうものとした、室町時代の史記抄の、七、一四に「理之宜然コトナレバ、書スマデモナイゾ」。(「シルス」の意かもしれぬ、)同、十、四二に「一度、冤ヲ復サウト思テ、復シタゾ」。(「カヘサウ」かも知れぬ、)江戸時代の懷硯、三、水浴せば涙川の條に「常々秘す事を口走る」。寶暦頃の川柳の句に「永日の時を期さぬは、呑む禮者」。文化の川柳に「御開運五常を表す御扇子」(家康の馬印、五本骨)文政の川柳に「山鳩と、化すも冥がな、桑の虫」(山鳩色の御袍)など、隨分、古くから、五段活用につかつて居る。(使役の助動詞の「させ」「させむ」「させよ」の所を見合せよ)、

右の外に「嫁」「坐」「和」「化」「期」「記」「治」「祕」「附」「具」「書」「處」「怨」「會」「對」「敬」「制」「號」「勞」「窮」「住」「供」「稱」

「諾」「約」「宿」「刻」「食」「敵」なども、このように活用させるか、とも思われるが、まだ、全く熟して居らぬようであるから、やはり、サ行變格に活用させるがよかろう。

○第四類　サ行下一段に活用させて、可能の意味とするもの、

せ（ぬ）
（ない）　せ　せる　せれ　せよ（命令わない）

第三類の五段に活用する「議」「解」「譯」「託」などわ、此活用に轉じて、「解」することが出來る」譯することが出來る」の意味（可能）につかうことがある、常のサ行五段活用の動詞の「押さ」「指さ」に、可能の助動詞の「れる」が附いた「押される」「指される」が約まつて、「押せる」「指せる」となると、同じ道理である、（一八六）を見よ、尚、此事わ、次の可能の助動詞の所で云わう、この活用わ、全國、大抵行われて居るが、中國、九州にわ、つかわぬと云う所もある。

【九七】　口語でわ、動詞の終止形と連體形が、同じであるから、表の中の第三活用形に、一つにした、後の形容詞、助動詞も、その通りである。

【一〇三】　文語でわ、カ行四段活用の動詞の第二活用に、「たり」を附けて、「書きたり」「稼ぎたり」など云うを、口語でわ、全國すべて、「書いた」「稼いだ」と云う、助詞の「た

ら」だら」(四七一)「たり」だり」(四七七)「て」で」(四八三)に續く時も、同じである、「き」ぎ」の「い」となるわ、子音が默つて、母韻はかりになつたので、「た」の濁るのわ、上の「ぎ」の濁りの移つたのである。

稀に、「書あた」「稼えだ」など云う所があり、武藏の南足立郡、入間郡でわ、「急いた」「稼いた」と、清音に云い、山形縣の東置賜郡でわ、「咲いだ」「挫いだ」と、濁音に云い宮崎縣にわ、「挫いた」「稼いだ」鹿兒島縣にわ「咲た」(咲いた)「稼だ」など云う所がある。

○「き」の「い」となつたもの、(「ひ」とあるも、「い」である、)

平安朝時代

類聚名義抄、仍、ツイテ、艷、ナマメイタリ、

催馬樂、紀伊國、風しも、不伊(吹き)たれば、同高砂、今朝左伊(咲き)たる、初花に、

紫式部日記、めづらしく、心にく、なまめいてみゆ、しさまも、いと、からめいたり。

法華義疏、(石山寺藏、一條帝長保四年)吐、

史記、(狩野亨吉藏、後三條帝、延久五年、)卽、(ツイテ)

大毘盧遮那成佛經、(西大寺藏、白河帝、承曆二年、)在、(オイテ)闕、(カイツ)

將門記、(名古屋眞福寺藏、堀河帝、承德三年、)搔、(カイテ)

童蒙頌韻、之、ユイテ、欵、ナゲイテ、乖、ソムイテ、螢、ミガイテ、

香藥鈔、(田中光顯藏、二條帝、永萬元年、)卷、(マイテ)

梁塵祕抄、雜法文歌、つゐとついて、同、經歌、經には、是名持戒行づださ

(頭陀者)と、とい(說き)たれば、ほとけのみちには、さわりなし。

伊呂波字類抄、歌、ナマメイタリ、疎、スイタリ、(齒)

寶物集、下、さいのしやうげをのぞいて、阿彌陀如來をみたてまつり、

鎌倉時代

平家物語、一、妓王の事、かづいたるきぬをうちのけたるを見れば、あまになりてぞ出來たる。同、七、實盛さいごの事、林を燒いてかる時は、おほくのけだものを得るといへども、

定家假名遣、をいて、於、すいたる人、逸人、をしひらいて、排、たちをはいて、帶劍、なひて、泣、すいて、漉、

遊仙窟、闕、ツイテ、風、カゼフイテ、歔欷、ナゲイテ、抱、イダイテ、

字鏡集、闢、ヒライテ、

古今著聞集、二、一五　肝たんをくだひて、全く、身命を惜まず。

砂石集、二、三二　妻ニ手ヲヒカレ、子イダイテ、

假名論語、ふうし、きぜんとして、なげいてのたふまく、(夫子、喟然歎曰)

南北朝時代

平他字類抄、於、ヲイテ、

室町時代

義經記、二、伊勢三郎、義經の臣下に始めてなる事、太刀佩いて、大の手鋒を杖につき、同、三、義經、辨慶、君臣のけいやくの事、二人は、やがて舞臺へひいて、をりあふて、たゝかひけるひいつすゝんづ、打合ひける間、曾我物語、五、吳越のたゝかひの事、しりぞひてはらはんとすれば、鋒先まがれり。

幸若、夜討曾我、妻戸がなつで、きり〳〵とひらいた。同、烏帽子折、草刈笛、云々、一手、吹いて、おもひでにきかせばや。

史記抄、六、一〇　雷電ガハタメイテ、マックラニナッタ。同、十、二一　管仲、云々。

鮑叔ヲダシヌイテ、タライタゾ。

孟子抄、一、二五　牛馬庶畜ヲ切タヽイテモ、用ナシ。

廻國雜記、まりこ川、俳諧、鈴かけの、結を上て、まりこ川、おひ綱かいつけふは暮さん。

眞宗御文章、二、三三　コノウヘニヲイテ、ナヲ、身ノフルマヒニツイテ、コノ子ヲ、ヨクコヽロウベキミチアリ。

閑吟集、たゞおいて、霜にうたせよ、夜ふけて來たが、にくい程に。

太秦、牛祭祭文、牛に鞍を置き、大鬧をすりむいて、かなしむもあり。

運歩色葉集、(甲)逸人、スイタルヒト、窈窕、ナマメイタル、

節用集、(甲)就、ツイテ、於、ヲイテ、

狂言記、萩大名、打開いた景のよい庭でござる。同、釣狐、彼者が、犬などを飼ふて置いたらば、

江戸時代

徒然草抄、下、禹ニ命ジテ討ゼシム、禹ユイテ、兵ヲカヘシ、云々、

醒睡笑、一、きやつを、馬の丞とつけたれば、いさみて、はや、いな、いたよ。

同、八、鐘をば、てんき〳〵やとた、いて、笛を、ひよりやひよりとふいたもの、

太閤記、二、四四　大氣者におひては、天下無雙の男なるべし。

犬子集、十、冬、右も左もきいたうでさき。

油糟、雜、口あひた、人を繪にかく、渡し船。

正章千句、一、鶯、うつぶいて、どうぞめされよ、船遊。

吾吟我集、二、ゆり、つぼめるや、帽子きせたる、鹿子ゆり、ひらいた花は、いふにをよばず。

小栗の判官、二、鬼鹿毛、云々、只、ゐな、いて、八方八つのくさりを、しつと、のし、

後撰夷曲集、九、老人、雀ほど、ちひさく老の、身はなれど、ういたる人は、をどり忘れぬ。

○「ぎ」の「い」となつたもの、（「ひとある」も「い」である。）

平安朝時代

大智度論(近江石山寺藏、文德帝天安二年)　次第、
類聚名義抄、接、ツイデ、班、ツイヅ、
童蒙頌韻、疼、ヒイライデ、磨、トイデ、
伊呂波字類抄、諧、ヤハライデ、
梁塵祕抄、二雜、うかゐ(鵜飼)は、くやしかる、なにしにいそいで、あさりけむ。
寶物集、上、人々、の、しりさはひで、物のあはれも、さむるほどなり。

鎌倉時代

平家物語、二、座主流し、兜をぬひで、ほうしばらにもたせ、同、二、新大納言死去の事、はるばると、多くの波路をしのひで、行ところなり。
定家假名遣、しのいで、凌、
砂石集、四、一五　鼻ガウソヤイデ、オカシキゾ。
假名論語、鄕黨篇、みたび、かひでたつ。(三嗅而作)

室町時代

義經記、三、賴朝謀叛の事、櫓の杜に、馬をつないで、源氏をまちかけたり。
曾我物語、一、かはづの三郎うたれし事、つるのもとじろにてはいだる、し

らこしらへのしらや、

幸若、入鹿、一つの鋒をあたへよ、ふせいでみんとの宣旨なり。三年があひだ、塞いだる兩眼を、くわつとみひらき、

狂言記、宗論、愚僧もいそいだ。同、素襖落、ひらに、ちようと注いで下されい。

節用集(丁)仰而唾、アホヒデ、ツバキヲハク。

江戸時代

醒睡笑、七、代二百、つないで懐中せし。

西翁十百韻、奥州へ遣はす、いそいでまゐれ、沖の魚舟。

雜兵物語、下、草履取、柿、一つ、ひんもひだれば、がひに面白いきざしがでた。

○サ行五段活用の動詞を「て」「た」につゞける時、「指して」「出して」「崩して」「濟して」などゝ、文語のまゝに云うわ、關東、奥羽、山梨縣、長野縣、新潟縣であつて、それから西、畿内、四國にわ、稀に「指いて」「崩いて」「濟いて」などをまぜて云う、「し」の子音が失せて、母韻ばかりになつたのである、助詞の「たら」(四七一)「たり」(四七七)につゞける時も、同じである、(京都、大阪にわ、「指いて」の一語あるばかりで、其外わ皆「して」

と云う、）中國、九州の處々にわ、「いて」又わ、「えて」と云う所が多いけれども、サ行五段活用の動詞が殘らず、そうでわない、語に因つてわ、「して」と云うのもある、つまり、一つに定まつてわ居らぬ、それに、「指した」「咲きた」共に、「さいた」となり、「出した」「抱きた」共に、「だいた」となつて、紛れやすいから、すべて、「して」ときめた、文語とも一つになる。

武藏、南足立郡に、「消いて」「押いて」、群馬縣、群馬郡に、「消いて」と云う所がある。滋賀縣にわ、「指いさ」「出いさ」と云う所があり、和歌山縣の新宮、安藝、山口縣邊にわ、「消ひて流ひた」など云い、佐賀縣、熊本縣にわ、「指あて出あた」「落えて殘えて」「離あて流あた」「暮あて殺えた」「潰いて延あて」など云い、大分縣にわ、「指えた」「出えた」など云い、宮崎縣にわ、「指ちて出た」「殘いた」など云い、鹿兒島縣にわ、「指て落て」「離て殺た」「濟て」など云う所がある。

○「し」を「い」と云つて居たもの、（「ひ」とあるも「い」である。）

平安朝時代

神樂歌、早歌、巾子、於止以津。（落しつ。）

宇津保物語、菊の宴、おぼしめいて、のたまはするにこそはあめれ。

落窪物語、一、物引きかづきて、ふい(臥し)たらむ。

源氏物語、浮舟、見あらはいたるを、同、手習、姫君の、おはしまいたる、

更科日記、冬になりて、ひぐらし雨ふりくらいたる、

阿吒薄倶元帥大將上佛陀羅尼經修行法儀軌(石山寺藏、堀河帝、嘉保二年)放(ユルイテ)、

大慈恩寺三藏法師傳(興福寺藏、鳥羽帝、永久四年)乾(ホイテ)、

高僧傳(石山寺藏、二條帝、長寬元年)播(ホドコイテ)、

香藥鈔(田中光顯藏、二條帝、永萬元年)果(ハタイテ)、

梁塵祕抄、二、二句神哥、須磨のうらに、ひきほい(乾し)たるあみの、

鎌倉時代

平家物語、一、鵜川合戰の事、寺僧ども、湯をわかひてあびける。同、一、內裏炎上の事、てんでに、まつ火をともひて、京中をやくとぞ、人々のゆめにみえけり。同、四、橋合戰の事、大長刀のさやをはづひて、はしのうへにぞ、すゝんだる。同、十一、弓流、美尾屋十郎は、小太刀、大長刀に叶はじとや思ひけん、かいふいて(掻伏)逃ければ、

南北朝時代

太平記、二十三、土岐頼遠、参二會御幸一狼藉、被レ処二死刑一事、（神田男爵藏本）　往來ノ貴賤、群リヲナイテ、タチ留マリテ、云々、

室町時代

義經記、六、忠信最後の事、　此刀をすてたならば、云々、ひざの下にをしかくいて、きず口を引あけ、

幸若、富樫、　寫しもうついたり、かきもかいたる繪かな。　同、百合若、　蒙古がまなこを、射つぶいたり。

史記抄、十、二二　管仲ガ、欺テタライタレドモ、鮑叔ハ、其ヲモ、ナニトモ思ワヌゾ。　同、十、二三　桃ヲ食テ、アマリ甘イトテ、食イサイ（殘し）テ、君ニマイラセタレバ、

孟子抄、一、一九　百姓ノ耕作スル物ヲ、カリダイテ、園圃ヲ作リナドシテ、

閑吟集、　鎌倉へくだる道に、竹へげの丸ばしをわたいた。　戀の中川、うつかとわたるとて、袖をぬらひた。

狂言記、墨塗、　一段と、でかいた。　いや、思ひだいた。　同、吃、　あ、ゆるいて

くれい。往ないて下されい。同、釣狐、此間、狐を釣る程に〳〵、某の類を、悉く釣り絶やいて御ざる。

伊曾保物語、又、叱らるゝに、肝をつぶいたれば、同、わが腹中をひるがへいて、御目にかけう。

江戸時代

醒睡笑、二、われは、日本一の事をたくみだいたは、といふ。同、七、なに、狸の王ぢや、王ならば、射ころいてくれうず。

昨日は今日の物語、何より、めいわくいたいた。

犬子集、十四、雑、上、ほそ谷川で、すそをぬらいた。

油糟雑、はなれし牛を、誰もどいたぞ。

正章千句、二、花、ひめをく閨に、さかりすごいた。

天狗羽打、二段、馬に白あわはませ、馬の貳しやう引まはいて、三べんのり、古今夷曲集、五、正直の、神のちかひの、かの字にし、濁をさいた、身をいのるなり、

○文語のタ行四段活用の動詞を「て」たり」につゞける時、文語でわ「打ちて」勝ち」

たり」など云うを、口語でわ、全國、皆、「打つて」「打つた」勝つて」勝つた」と云う、助詞の「たら」(四七一)「たり」(四七七)につゞける時も同じである。

富山縣の下新川郡に、「打てた」と云う所があり、宮崎縣に「勝つた」又わ「勝た」と云う所もある。

○「ち」の「つ」となつたもの、

平安朝時代

源氏物語、帚木に、「盃もて出で」同、若紫に、「僧都、きんを、みづからもてまゐりて、」など、「ち」を省いて云つたのもある。

今昔物語、廿五、源宛平良文合戰語、各ノ弓ヲ取テ、箭ヲ放ッテ馳セ違フ。

寶物集、上、百千の劒をもつて、さきわるがごとし。

鎌倉時代

平家物語、七、實盛さいごの事、光もりこそ、きいのくせ者と、くむで、うつて、參つて候へ。同、九、小宰相の事、戒をたもつて、主の後世をぞとぶらひける。

古今著聞集、十、久清、丈尺にてうつて見れば、梓、例よりも、一丈あまり、遠く

立たりけり。

假名論語、子路篇、ざんにかつて、さつをすつべし。（可以勝殘去殺矣）同、泰伯篇、天かを三ぶんし、そのふたつをたもつて、もつて、ぶんにふくじす。（三分天下有其二以服事殷）

室町時代

義經記、二、鬼一法眼の事、ことばをはなつて、仰有ければ、同、四、義經都落の事、ふねのへさきに、つゝたつて、人にむかつて、物をいふやうに、曾我物語、六、和田よしもり酒もりの事、まかりたつて、かさねて參るべし。同、七、矢たてすぎの事、合戰するに、なんなくうちかつて、歸りのぼりぬ。幸若、百合若、雲の上に、光をはなつてつくるべし。同、入鹿、親子わりなき中ならば、れう王をうつてたべ。

史記抄、十、四八　我ヲアザムクカト思テ、ハラダツタリ。

孟子抄、一、一四　國ヲモツタ者ハ、人ノ國ヲ取タガリ、

狂言記、宗論、愚僧は、其樣に待つてはならぬ。同、酢薑、何方なりと、云勝つた者が賣物の司を持たう。

伊曾保物語、熟柿を持つて來て、主人に捧ぐれば、

江戸時代

醒睡笑、二、うつけもの、これを見つけ、手をうつてかんずる。

雜兵物語、下、矢箱持、棒におとつた弓をもつて、捨てべいかと思つたれば、

○文語のラ行四段活用の動詞を、「て」たり」につゞける時、文語でわ、「取りて」切りたり」など云うを、口語でわ、全國、すべて、「取つて」取つた」切つて」切つた」と云う、助詞の「たら」たり」につゞける時も同じである。

富山縣の下新川郡にわ、「取つた」と云う所があり、宮崎縣にわ、「取つた」又わ、「取つた」と云う所がある。

○「り」の、「つ」となつたもの、

平安朝時代

將門記、(名古屋眞福寺藏、堀河帝承德三年、)瓸、

童蒙頌韻、彌、ワタツテ、群、ムラガツテ、蹲、ウヅクマツテ、飄、ヒルカヘツテ、遮、サヘキツテ、

鎌倉時代

平家物語、一、禿童の事、十四五のわらべを、三百人すぐつて、かみをかぶろにきりまはし、同、一、願立の事、しゆと、おほく、きずをかうぶつて、まいりてうつたへ申。同、二、あしずりの事、僧都、舟にのつてはおり、おりてはのつつ。同、十、だいり女ばうの事、人に、くるまかつて、つかはされにけり。

遊仙窟、隔、ヘダヽツテ、

字鏡集、澗、ニゴツテナガレズ、

古今著聞集、二、あみだ和讃をつくつて、自他をしてとなへしめける。

砂石集、序、時ニアタツテハ、光陰ヲオシマズ、

前に擧げた將門記に「舐、テブテ」(ねぶりて)平家物語に「何になて」(成りて)船にのて」(乘りて)遊仙窟に「奉、ウケタマハテ」、横、ヨコタハテ」、透、ホドバシテ」、吾妻鏡、元暦二年正月六日、頼朝の狀に「佐々木三郎、筑紫へは下さがりたるによて、下して備前兒島をば責落たるなり」。沙石集、一、に「マコトニハ、事スギテ空シキノミニアラズ、時ニアタテ(當りて)モ、自性ナキ故ニ空也、故ニ、生ニアタテ不生ナリ」。同、三、に「世ニアテ(在りて)ハ、人ニモシラ

【一〇三】動詞　取つて　切つた等

レズ、名利モナキ人、遁世門ニ入テハ、云々、」同、四、に「眼アテ(ありて)明ノ中ニアルガ如シ」孟子抄、一、二七に「田横ハ五百人デ一島ヲコシラヘテコモテイテ(籠りて居て)など「り」を略して言つたのもある。

假名論語、先進篇、せんせうのくに、たいこくのあひだにはさまつて、くわふるに、しりよをもつてして、(千乘之國、攝乎大國之間、加之以師旅)同、子路篇、せう人は、おごつてゆたかならず。(小人、驕而不泰)

室町時代

義經記、一、吉次おうしう物語の事、わたのきよひらと申候ひし、兩國を手ににぎつて候し。同、四、義經都落の事、たゞ、帆の中をやぶつて、風をとをせとて、同、五、忠信、都へしのび上る事、欲にふけつて、合戰に忠をいたしたるとても、云々、

曾我物語、五、吳越のたゝかひの事、三冬にうづくまつて、一陽來復の天を待つ。同、八、仁田がしゝにのる事、猪のしゝ、云々、大きにたけつて、はせまはる。

幸若、和田酒盛、おうぢ伊藤の入道よりつたはつたるさかおもだかのは

らまき、同、敦盛、異國の樊噲が、わたつて乘つたりとも、あれほどの小舟に、何程のことのあるべき。

謠曲、高砂、梅花を折つて、かうべにさせば、同、田村、北にあたつて、入相の鐘の聞え候は、

史記抄、六、二四　上ヘカエツテ讓ム例ガ、イクラモアルゾ。同、六、二九　ホリヲホツテ、河水ヲ引テ、要害ヲ守ルゾ、

孟子抄、一、三　周ノ幽王ノ時、犬戎ノエビスニ破レテ、東周ニナツテ、洛邑ヘウツツテカラ、周ガ衰ヘタゾ。同、一、四　壅底ハ、ウチフサガツタ體ゾ。

辨慶物語、上、にやく一わうじへ參り、いのられければ、云々、御むさうにあづかつて、

倭玉篇(甲)　仍、ヨツテ、

狂言記、ひめ糊、紺屋へ遣つたる肩衣は、張つて參つたか。同、伯母酒、毎年、酒を作つて、商賣致さるれ共、殊の外、吝い人でござつて、何時參つても、酒、一つ飲めと云はれた事がござらぬ。

伊曾保物語、柿を預かつた者共、思ふ樣は、食しをはつて後、大きな荷

があつたを、エソボ、それを持たうといへば、

江戸時代

徒然草抄、下、語ガアヤマツテ、想夫憐ト云タ事ヂヤ。

醒睡笑、一、寺院を、他人に、誤つても不譲を法とするまゝ、同、六、海老をいつて、(炒りて)河へはないたやら、お知りあつたかと、

太閤記、或問、よき人も、尋やうによつてあらんか。

犬子集、春、上、子日、松根に、腰をさすつて、ねのび哉。

小栗の判官、二、只今の玉づさを、ものをしつて、やぶらせ給ふか、又は、しらいで、御やぶりあつてましますか。山中の大瀧がたぎつて、さつ〳〵と落るがごとくなり。

雑兵物語、上、持槍擔、馬、云々、芭蕉毛のところを、かばと突いたれば、先へ五間斗つんぬいて、すべつてころんだが、仕合と、鎗を持つてねまつた、云々乗人(のり)も、まつさか様に落て、ふんぞつた。

○文語のハ行四段活用の動詞の「言ひ」「買ひ」を、口語でわ、「言い」「買い」と云い、それに、「て」「た」が附けば、「言つた(て)」「買つた(て)」となるわ、静岡縣、山梨縣、長野縣から東が、大抵

そうであつて、愛知縣、岐阜縣、新潟縣でわ、「言うて」買うて」をまぜて云い、それから西わ、九州まで、大抵「言うて」買うて」と云う、助詞の「たら」たり」にも同じように續く、初わ、兩立させようと、案を立てたが、決議の末に、「言つた」買つた」とすることになつた。(「言うた」買うた」わ、語根まで變わる事となる。)但し、「請い」問い」給い」わ、「請うた」問うた」給うた」とする。

武藏、群馬縣、青森縣に、「笑うた」言うた」など云う所があり、伊勢、攝津、丹後、鳥取縣、島根縣、佐賀縣、宮崎縣にも、「笑つた」戰つた」など云う所もあるが、誠に少い。京都、大坂、和歌山縣の新宮でわ、「拂つた」拾つた」など云い、宮崎縣に、「言ちた」拂ちた」拾ちた」など云い、鹿兒島縣に、「拂つた」拾つた」など云う所がある。

○「ひ」の「う」となつたもの、(「ふ」と書いてあるのも「う」である)

平安朝時代

宇津保物語、俊蔭、加茂に詣でたまうたりしかば、

催馬樂、酒飲、酒をたうべて、たべ惠宇天(醉ひて)

法華義疏、(石山寺藏、一條帝、長保四年、)喚、

狹衣、一、うちすてたまうつ、

今昔物語、二十二、高藤内大臣語、御狩衣指貫ナト、炮干サムト云ウテ、取テ入ヌ。

將門記、(名古屋眞福寺藏、堀河帝、承徳三年、)繕(フクロテ)、

大慈恩寺三藏法師傳、(興福寺藏、鳥羽帝、永久四年、)候(ウカゞウテ)、逐(オウフ)、

童蒙頌韻、裨ヲギヌウテ、伺ウカゞウテ、詢トブラウテ、

高僧傳、(石山寺藏、二條帝、長寛元年、)倩(ヤトウテ)、

寶物集、下、いそきかへりて、長者にむかふていひけるは、

鎌倉時代

平治物語、一、信頼信西不快の事、伏見源中納言師仲卿をかたらうて、彼在所に籠り居り、

平家物語、一、妓王事、今様一つぞうたうたる。同、二、有王が島くだりの事、片手には魚をもろうて、もちあゆむ。同、七、實盛さいごの事、わか殿原にあらそふて、さきをかけんも、おとなげなし。

遊仙窟、通、カヨフタル、(「向、ムカテ、」とばかりもある、)

古今著聞集、六、めしにしたがふて參候。同、八、水干の袖に、むばらこき

に、雀の居たるをば、ぬふたりけり。

砂石集、二、井ノ底ヨリ、此ノヲサナキ者オブテ、出給ト見テ、同、三、只、名バカリ、受戒トイフテ、云々、大小ノ戒相モシラズ。

室町時代

義經記、四、土佐房、義經の討手に上る事、おのれは、手を負ふたるか。同、五、判官、よし野山に入給ふ事、しらびやうしも、一番まふてぞ入にける。曾我物語、五、吳越のたゝかひの事、馬のいきの、きるゝほどぞ、おふ(追ひ)たりける。同、八、すけつねが屋かたへゆきし事、さかづき取りあげて、云々、そのかはらけ、すけつねこうて(請ひて)かたゞゝは、何と思ひ給ふらん、云々、

幸若、和田酒盛、あさいながめてのわきに、さいたる刀、ひんばうて(奪ひて)ねだのこゝろもとに、さしたて、」よしもりがぞんじには、ばつくんちがふて存ずる。同、夜討曾我、妻戸がなつて、きり〳〵とひらいた、兄弟の人々さうのわきにひつそうて(添ひて)すまひて、ものを見給へば、

史記抄、五一五、諸侯ガ、モシ、シソコナウタラバ、同、十二、五、蒲伏ハ、ハラバ

イニハウタゾ。

孟子抄、九、二五　羊ノ皮五枚ニ、身ヲ賣テ、ソレカラ、牛ヲカウテ、秦ノ穆公ニ取入タト云。

田村の草子、上、いそぎ、としむねにむかふて、したがへよとのせんじ下りければ、同、下、只今、なんぢが、うつてむかふたるものを、いかなるものとか、おもふらん。

辨慶物語下、此程は御ざうしに、矢ちがへの法はならふつ。

狂言記、宗論、世間に、事足らうた御方もあり。同、扨殻、さあ飲め、はあ、いかう醉うたかな。

狂言記、苞山伏に、「鳶がくたか、鳶がくたら、蓋がせずにあらうに、誰がくたぞ、」など、「食うた」が「くた」ともある。

梅津長者物語、夜もすがら、うたふつ、まひつ、しゆゑんなり。

詠歌之大概、先達の詞にて、みえたるも、隨分の人の、取あつかふたるが好也。

伊曾保物語、其熟材をば、何と思うて、取つてくらうたぞ。

江戸時代

昨日は今日の物語、心得申たると、うけごうて、さて、方々、げんぶつしてかへり、

醒睡笑、一、けしからず、饂飩をすく者あり、さすが、買うてはくひともなし、

太閤記、二、取々に、爭ひ合ふて、氣を取失ひし者もあり。

犬子集、六、冬、雪、雪のよは、竹もかこうて、ねざゝ哉。

犬子集、一、春、上、春草に、「たんぽゝの、あへ物くてや、舌つゝみ。」同書、四、秋、上、葛に、「くてほめぬ、人はうらみよ、葛だんご。」などゝ、「食うて」を「くて」とも用いてある。

油精、冬、さむさにや、千はやふるふて、たてるらん。同、雜、慰に、たゝ土佐駒を、かふてやれ。

小栗の判官、一、うつくしうしたゝめたる文、一つう、ひろうて有。

諸國盆踊唱歌、駿河、しつてをれども、人にまたとふて、母のさしづで、むかひとれ。

諸國盆踊唱歌、長門、「こいとゆたとて、ゆかれるみちか。」などゝ「云うた」を「ゆ

た」とつかつてある。

西翁十百韻、一、朝手水、つかうてはきく、ほとゝぎす。

○「ひ」の「つ」となつたもの、

平安朝時代

童蒙頌韻、遵、シタガッテ、歌、ウタッテ、償、ツクノッテ、

寶物集、上、夜ことに、五つづゝ、子をうみ、うむにしたがつて、みな、みづからくふなり。

鎌倉時代

平家物語、一、清水炎上の事、高きも、いやしきも、肝魂をうしなつて、四方へ、みなたいさんす。同、二、座主流し、あざわらつて、申けるは、同、十二、女院御出家の事、秋の月、雲にともなつて、かくれやすし。月をゐいせし夕には、雲おほつて、光をかくす。

古今著聞集、七、田園を損亡する事、年をおつて、はなはだしきなり。

假名論語、先進篇、くわいは、それ、こいねがつて、しばゞゝむなし。(回也、其庶乎、屢空)同、憲問篇、あぢかをになつて、こうしのかどをすぐる物あり。

（有荷簀而過孔氏之門者）

神代紀下に「衢神問曰」假名論語顔淵篇に「あひこうゆうぢやくにとつていわく」（哀公問有若曰）同季子篇に「いつをとつて、さんをえつ」（問一得三）などゝ「問ひて」を「とつて」とあるわ、めずらしい、奥州本義經記（改定史籍集覽、安永八年の奥書がある）にも「今日のうつ手は、いかなる者ぞと、とつたれば、やすひらが家の子に、長崎太郎大夫といつたアげだ」などともある。

室町時代

義經記一、かゞみの宿にて、吉次宿に、がうどう入事、をつゝ、まくつゝ、さんざくにたゝかひ、同四、義經都落の事、人にむかつて、物をいふやうに、かきくどきて申やう、

曾我物語五、呉越のたゝかひの事、したがつては、臣下心ざしをほうぜざるこそ、むねんなれ。

幸若、文覺、法性隨妄の雲、あつくおほつて、十二因緣の峯にたなびき、同、百合若、敬つて申すと、書きとめて、

【一〇三】動詞　言つて　買つた等

醒睡笑、二、日本左衞門とつきたきよし申しけり、東堂、あざわらつて、さやうの大なる名は、めづらし過て、云々、

太閤記、三、小屋を、小路〳〵、もやつて、作りならべ、

雜兵物語、上、鐵砲足輕小頭、刀を抜て、敵の手足をねらつて、切りめされい。

同、下、矢箱持、馬に負はせた箭、かた〳〵の箱に、貳百筋せおつた。

雜兵物語に、「痛手を負んだ」、とあるわ、めずらしい。

○「ひて」ひたり」を、音便に、「うて」うたり」とも云い、「つて」つたりとも云うわ、動詞に因つて、何か區別があるかと見るに、寶物集、上に、「夜ごとに、五つづゝ、子をうみ、うむにしたがつて、みな、みづからくふなり、」とあるに、古今著聞集、六に、「めしにしたがふて參候」、とあり、寶物集、下に、「いそぎかへりて、長者にむかふていひけるは」、平家物語、一、清水炎上の事に、「武士、けんびいし、西坂本にゆきむかつて、ふせぎけれども」、平治物語、一、信頼信西不快の事に、「伏見源中納言師仲卿をかたらうて、彼在所に籠り居り、」平家物語、二、座主流しに、「居なをりあざわらつて申けるは」、五、咸陽宮の事に、「よき兵をかたらつてこそ、まいらせめ、」同、五、伊豆院宣

の事に兵衛のすけ殿、あざわらふて云々」砂石集、三に「只、名バカリ、受戒ト云フテ、云々、大小ノ戒相モシラズ」、假名論語、鄉黨篇に「きう、いまだたつせず、といつて、あへてなめず」、(曰丘未達、不敢嘗)同、憲問篇に「はくしのへいゆう三はくをうばつて」、(奪伯氏駢邑三百)幸若、和田酒盛に「あさいながめてのわきにさいたる刀、ひんばうて」、幸若、烏帽子折に「烏帽子をたまはれ、小結を結ふて參らせん」、同、高館に「直垂のくゝりを結つて、しめたりけり」、などと、同時、同一の書に、どちらも、つかつて居るから、二つながら、勝手に、まぜて用いて居たものと見える。しかし、今の口語にわ、西國わ「うて」うた」で、東國わ「つて」つた」と、大凡に別れて居る。

○ナ行變格活用の動詞の「死に」往に」の「て」た」に續く時わ「死んで」往んだ」などゝなること、全國の口語に、皆同じである、助詞の「たら」(四七一)「たり」(四七七)に續くにも「だら」だり」となる、但し「往ぬ」と云う語わ、東國でわ、つかわない、九州にも、つかわない所がある。

○「に」の「ん」となつたもの、

鎌倉時代

【一〇三】動詞　死んで　往んだ等

假名論語、鄉黨篇、ほうゆうしんで、よらんところなし。(朋友死、無所歸、)同、泰伯篇、しんでのちにやむ、又、とをからずや。(死而後已、不亦遠乎、)

室町時代

幸若、鞍馬出、牛若殿の御はかせひらめくとみえしかば、手のうらいまだかへさぬまに、六人死んで、三人は、痛手負うてぞひれふしける。

史記抄、六、二二　此劒ハ、飛デイン ダト云。

孟子抄、一、一四　宜曰モ、申ノ國へ走テイン ダソ。同、九、二六　ソレカラ、鰮テイン ダレハ、案ノ如ク、晉カラ虞ヲ取タゾ。

狂言記、抜殻、彼の清水へ行て、身を投げて、死んでのけう。同、聟貰、夜前女ちや者と言葉論を致したれば、ついと出てござるが、其邊を尋ねますれども居りませぬ、定めて親の所へ往んだ者でござろ。

江戸時代

昨日は今日の物語、あるもの、久々そひたる女ばうを、にはかにいやがり、そなたをみれば、むねがわるい、がてんづくにて、いんでたもれ、と云ふ。

油糟、雜、しんだかと、おもへば死なぬ、酒の醉。

懐硯、一、案内知つて、昔の寝所、一年近く、知れざれば、愈、死んだに疑なく、
云々、

○バ行四段活用、又わ、マ行四段活用の動詞の「呼び」遊び」又わ「飲み」頼み」讀み」などに、「て」「た」を續ける時に「呼んだ」遊んだ」飲んだ」讀んだ」と口語に云うわ、東國一圓から、西わ、中國、四國まで、大抵、同じである、しかし、富山縣、石川縣、美作、備中、出雲等にわ、稀に「飲うだ」頼うだ」など云う所があり、廣島縣、山口縣、石見、高知縣にも「飛うだ」遊うだ」飲うだ」頼うだ」讀うだ」など、云つて又「飲んだ」頼んだ」などまぜて云う所もある、九州でも、大抵、二つをまぜて用いて居て、「んだ」ばかりなのわ、福岡縣で、「うだ」ばかりなのわ、熊本縣である、今わ、用いるところの多いのに因て、「んだ」に定めた、そうして、是等が、助詞の「たら」(四七一)「たり」(四七七)に續くにも、「だら」だり」となる。

千葉縣の山武郡でわ、「飲んだて」と、清音に云う。

大分縣でわ、「飛うだ」遊うだ」飲うだ」讀うだ」なと云い、宮崎縣にわ、「飛だ」遊だ」飲だ」讀だ」と云う所がある。

○「び」の「ん」となつたもの、「む」とあるのも、「ん」である)

平安朝時代

阿吒薄俱元帥大將上佛陀羅尼經修行法儀軌（近江、石山寺藏、堀河帝、嘉保二年、）喚（ヨムデ）

童蒙頌韻　咱、ヨロコンデ、飛、トンデ、呼、ヨンデ、遨、アソンデ、覃、ヲヨンデ、

鎌倉時代

平家物語、一、二代后の事、世、げうきにおよんで、人、けうあくを先とするゆへ也。同、二、座主流し、おめきさけんで、咒詛しける。同、二、新大納言死去の事、あかの水をむすんで、父の後世を弔ひ、同、四、高倉宮園城寺入御の事、大衆、大にかしこまりよろこんで、法輪院に御所をしつらひ、

遊仙窟　雙、ナラムデ、哽咽、ムセンデ、

假名論語、述而篇、そのよきものをゑらんでしたがふ。（擇其善者而從之、）

同、泰伯篇、そうし、やまひあり、もんていいしをよんでいわく、（曾子有疾、召門弟子曰、）同、衞靈公篇、なむぢ、われをもつて、おほくまなんで、しれる人とするか。（女、以予、爲多學而識之者與、）

室町時代

義經記、三、辨慶、洛中にて人の太刀取し事、太刀をぬいて、とんでかゝる。

曾我物語、六、ふつしやうこくの雨の事、夏の蟲、とんで火に入。

幸若、文覺、岩泉むせんで、布をひき、嶺猿、さけんで、枝にあそぶ。同、百合若、吉日をえらんで、都出とぞ聞えける。

謠曲、大原御幸、左右の脇にはさみ、云々、海中に飛んで入る。

狂言記、吃、胸で、しやんと結んで、

江戸時代

醒睡笑、一、くんづ、ころんづ、觜次なかりつるが、同三、暮におよむで、座を立つ時、

懷硯、三、水浴せば涙川、誰が娘を呼んだといへば、

雜兵物語、上、持槍擔、先へ、五間斗つんぬいて、すべつてころんだ。

近年の口語文に、上一段活用の動詞にまで用いて、「色が黑みを帶んで居る」、「足利氏が亡んでから」、「着物がほころんだ」などゝ見えるわ、許されぬ。

○「び」を「う」と云つて居たもの「ふ」と書いてあるも「う」である）

平安朝時代

香藥鈔、(田中光顯藏、二條帝、永萬元年)　呼(ヨフ)、

鎌倉時代

平家物語、二、新大納言死去の事、　大納言の北の方は、都の北山雲林院のへんに、しのふ(忍び)でおはしけるが、御返事を書て、給う(給び)だりければ、

同、十一、さかろの事、　海上に出うかふ(浮び)だるとき、風こはければとて、とどまるべきか。

室町時代

幸若、和田酒盛、　虎、ないめによろこふで、十郎のかたへ、つかひをたつる。

同、鞍馬出、　山科の寺のかたはらに、ふかく忍うでいたりけり。

謠曲、海士、　御前にて、そと、學うで、御目にかけ候へ。

史記抄、三、五〇　春秋ノ魯トナラウ(並び)デ、魯ハ南ニアリ、齊ハ北ニアルゾ。

同、十、三二　魯君ノキヽヲヨウデ、疑テ吳起ニカウ云ワレタゾ。　同、十四、二一　食物ヲ、モチハコウデ、行戍スルモノニ、云々、

孟子抄、十、二　善惡ヲエラウ(擇び)デ、用ガナイゾ。

狂言記、墨塗、こちへよう(呼び)で、逢ふてもよけれど、こなたも、よろこふで下されい。同、萩大名、是は、聞き及うだよりは、打開いた景のよい庭ぢやなあ。同、二千石、御暇を申上たりとも、とても、下さるまいと存じ、忍うで、京内参りを致してござる」。疊の縁につまづいて、轉うでござれば、伊曾保物語、躍りつ、跳ねつ、喜うで道をあるいた」。主人、旅せらるゝに及うで、下人共に、荷物を負はせらる。

江戸時代

小栗の判官、二、あれ〳〵、御らん候へや、あれに、むねかどの、二けんならふ(並び)だるは、五人のきんだちの御家かし。

鹿の巻筆、二、にせ八島、兄の三郎兵衛はおはさぬか、とひそかに呼うで通りける。

○「み」の「ん」となつたもの、(「む」と書いてあるのも「ん」である)

平安朝時代

類聚名義抄、歔欷、ハナス爪リシカナシムデ、(「爪」わ、古體の「ス」の假名である。)

土佐日記、手をきる〳〵、つん(摘み)だる菜を、

神樂歌、蟋蟀、木の根を保利波牟天、（掘り食みて、）催馬樂、老鼠、西寺の老鼠、若鼠、於牟裳都无川、介左川牟川。（御裳噛みつ、袈裟噛みつ、）神樂歌、大宮、大宮の西の小路に、菖蒲己牟太利。（込みたり、）

史記、（狩野亨吉藏、後三條帝、延久五年、）盜

法苑珠林、（法隆寺藏、崇德帝、長承三年、）裏

今昔物語、二十二、大織冠始賜二藤原姓一語、大臣、此レヲ聞テ、驚キ泣キ悲ンデ、今ハ、世ニ有リトモ、何ニカセム、ト云テ、同、二十八、越前守爲守付二六衞府官人一語、心カラ、物ヲ惜ムデ、其達ニ、此ク被レ責申シテ、恥ヲ見トハ、何デカ可レ思ヤ。同、五十、白井君銀提入レ井被レ取語、白井ノ君、此レヲ悋ムデ、寄テ見ケレバ、云々、

童蒙頌韻、罷、ヤンデ、孜、ツヽシンデ、呑、ノンデ、蹂、フンデ、臨、ノゾンデ、斟、クンデ、

鎌倉時代

平家物語、一、二代后の事、深淵にのぞんで、薄氷をふむにおなじ。同、二、新大納言ながされの事、軍兵、前後左右をうちかこんで、同二、康頼のつ

との事、つゝしんで、もつて、うやまつてまふす。同三、有王がしまくだりの事、白雲、あとをうづんで、ゆき來の道も、さだかならず。同三、醫師もんだうの事、恩愛のわかれ、家のすいび、かなしむでも、なをあまりあり。同、五、朝てきそろへの事、鷺、云々、せんじぞ、とおほすれば、ひらん(平み)でとびさらず。同、十二、判官都落の事、すみよしの神官、是をあはれんで、乘物共をしたてゝ、みな、京へぞおくりける。同、十二、はせ六代の事、人のすんだる所とも見えず。

遊仙窟　徒倚タヽズンデ、歩アユンデ、唫々然ホヽエンデ、惻愴イタンデ、

假名論語、述而篇、かならず、事にのぞんでおそり、はかりごとをこのんで、なさん物也。(必也臨事而懼、好謀而成者也)ふばきをいつして、すゝんでいわく、(揖巫馬期而進之曰)同、泰伯篇、つゝしんで、れいなきときんば、すなはちしす。(愼而無禮則葸)同、先進篇、なんぞ、かならずしも、しよをよんで、しかうしてのちに、まなぶことをせん。(何必讀書、然後爲學)同、季氏篇、くるしんでまなぶるは、又、そのつぎなり。(困而學之、又其次也)

假名論語、憲問篇に「まづしうして、うらみなきことはかたく、とつて、おごることなきはやすし。」（貧而無怨難、富而無驕易、）の「富みて」を「とつて」としたわめずらしい。

室町時代

義經記、三、書寫山炎上の事、ゆん手のかいな、差しのべ、かうをつかんで、ゑいと引く。同、三、辨慶、洛中にて、人の太刀取し事、八尺の壁をふんで、天にあがりしを、同、三、義經、辨慶と、君臣のけいやくの事、ひいつ、すゝんづ、打合ひける間、同、三、賴朝謀叛の事、弓馬の名をうづむで、星霜をおくり給ふ。同、四、土佐房、義經の討手に上る事、土佐、つゝしんで申けるは

曾我物語、一、おなじく、すまふの事、足をとりてみよ、組んでは、かなふまじきぞ。同、九、すけなりうち死の事、幕をつかんで投げあげ、御侍所にはしり入。

幸若、夜討曾我、太刀、脇ばさんで、敵のやかたのけこを、靜に見て通る。同、和田酒盛、あらめづらしの御さかづきやと、もつて、三度ぞくんだりけ

る。きうちやうの藤が、松をからんで。同、劒讃歎、じゆず、さら〳〵とおしもむで、同、烏帽子折、鬢の毛はちゞむだり。

謡曲、大原御幸、二位殿、云々、ねり袴のそば高くはさんで、云々、船ばたに臨む。

孟子抄一、二〇　桀ヲ亡シタイト思フヤウニ惡ンデハ、何ガタマラレウゾ。

同、一、三六　車ニ薪ヲツンデ、車輪ノ折ルヽ程ツンダ。同、五、二九　是カラ以來、ツヽンデ、捨ツ、ウヅンヅ、ナンドスル事ガ始タゾ。

狂言記、柿山伏、柿を盜んで食らう山伏を、云々。同、伯母酒、酒、云々、とてもの事に、ちと休んでたべう。

伊曾保物語、二三人程、立ちかゝり、忽ち打擲せうとするに臨んで、主人の足元にひれふし、吃り〳〵、つつしんで申すは、上に產んだか、下に產んだか、存ぜぬ。

江戸時代

醒睡笑、一、頭をくはせ、くんづ、ころんづ、腸次なかりつるが、

正章千句、九、初冬、落葉、奇麗に炭を、くんで出せり。

小栗の判官、しみづの段、くんだるしみづを、かたにかけ、

諸國盆踊唱歌下總、どばし板なら、よかろもの、どんとふんでは、めをさます。

雜兵物語、上、鐵炮足輕小頭、どろのすんだ上水でも、すゝつて居なされ。

同下、荷宰料、其繩をひつきざんで、水に入れ、こねまはせば、其上水をのんだがよい。同下、若黨、手負振をたしなんで、弱みをみせまい。同下、草履取、鐵炮鞘の小尻へ入れ、その上へ、鐵炮をつゝこんだ所で、折ふし、すむばこがおこつて、細腹がいたんで、ねまつたれば、

雜兵物語、上、鐵炮足輕小頭の「半分づゝ」は、玉藥をこんだ」は、下二段活用のようであるが、やはり四段活用の他動である、近頃の文に「飛んでもない入閣を夢んで」などゝあるのを見たが、よろしくない。

○「み」を「う」と云つて居たもの、(「ふ」と書いてあるのも「う」である)

平安朝時代

梁塵祕抄、二、雜、聟の冠者の君、何色の何摺か、このうだう「好みたぶ」である、「たぶ」は「給ふ」と同じである)着まほしき。

鎌倉時代

平家物語、四、大衆そろへの事、風うへに、火をかけ、やきあげ、一もみもふ(揉み)で、せめんには、同、五、くはんじん帳、くはんじんちやうをひきひろげて、たからかにこそよふ(讀み)だりけれ。同、九、忠度さいごの事、六彌太をつかふ(握み)で、弓長ばかりぞなげのけらる。同、十一、なすの與一の事、馬の左のむなかひつくしを、はずのかくるゝ程にぞいこう(射込み)だる」。殘りの四騎は、馬をおしふ(惜み)でかけず、けんぶつしてぞゐたりける。

室町時代

義經記、二、鬼一法眼の事、頭巾、耳のきはまで引こふ(込み)で、大手鋒を杖につき、同、三、賴朝謀叛により、義經、奥州を出給ふ事、御ざうしのらうどうには云々、三百よき、云々、もみにもうではせ上る。同、五、忠信最後の事、烏帽子引たて、をしもうで、ぼんのくぼに引いれて、

幸若、小袖曾我、おほくの人をほろぼし、あけにそふ(染み)だるうち物を、弓手の肩になげかけ、同、烏帽子折、不動明王、云々、劍をのう(呑み)だるところ、同、馬ぞろゑ、廻文をまはし、たのふで見んとの御詞なり。

史記抄、二、一〇　隠括ハ、モノ、ユガウダヲタムル心ゾ。同、二、三八　カラカサノヤウナモノヲ、両方ニハサウ(挟ミ)ダラバ、同、三、二三　御トモヲ申サフトノゾウ(望ミ)デ従タゾ。同十一、七八　目攝トハ、ニラウ(瞰ミ)デ、アレヲシタゝメウト、シタホドニ、同、十三、二一　少カラ、醫藥ヲコノウ(好ミ)デ、シタレドモ、同、十四、八　鞠躬、云々、事ヲツゝシウ(愼ミ)ダル者ゾ。孟子抄、一、二三　豚、云々、時失トハ、ハラウ(孕ミ)ダヲ殺スヲ云フ。同、二、六　天ノ正路ヲタノウ(頼ミ)デ居ゾ。同、三、七　悪政ニクルシウ(苦ミ)ダ民ヲ、善政ヲ行ハゞ、

狂言記、墨塗、酒ばかり飲うで」小脇にきつと挟うで、同、萩大名、膸はぎの、延びてのかゞう(屈み)での、と仰らるゝ。」私の頼うだ者が、同、太刀奪、緩りとなぐさう(慰み)で歸らうぞ。同、花子、とろ〳〵とまどろうだれば、鳥がかあかあと、夜が明けた。同、すね薑、片手で、なせ拜ましやる、いや、兩手で拜うだも、片手も、心同じ事でござろ。

伊曾保物語、シャント、怪しうで言はるゝは、

江戸時代

醒睡笑四、これで、ざつとすう(濟み)だ。同、五、たゞよみたくば、歌よふ(詠み)で、同、五、いきしなに、つぼふ(蕾み)だ花が、きしなには、ゑじかつたりや、桶とぢの花。

小栗の判官、一、てるてふみの段、みづからよう(讀み)できかせんと、まづ文の紐をとき、

○「びて」を「んで」とも「うで」とも云うようになつたのわ、平安朝時代の末から見える「みて」を「んで」と云うは、平安朝時代の早い時から始まり「うで」と云うは、同じ時代の末から見えることは、右に擧げた例の通りである、此二つの言い方を見るに、動詞にも、時代の前後にも、何と認めるべき區別はないようで、假名論語に「ゑらんで」呼んで」及んで」喜んで」幸若に「えらんで」などとあるに、幸若に、又、「喜うで」とあり、史記抄に「及うで」孟子抄に「擇ウデ」狂言記に「呼うで」喜うで」及うだ」とあるから、同時に、打ちませてつかつて居たようである、そうして、江戸時代になつて「びて」も「みて」も、どちらも「んで」の方に一定して、今でわ、全國、大抵、そうなつて、「うで」は、西國の方に、處々、少しばかり殘つて居るのである。

○カ行四段活用の動詞の「行きて」行きたり」に限つて「いつて」いつた」「たら」たり」と

なつたわ、不思議である、是れは、室町時代からのようで、同時に「いて」「いた」とつゞめたものをませて、後には「いて」「いた」とばかりになつた、(今でも、畿内、西國では、そうであるが、東國では「つて」「つた」である、)是れは「因りて」を「よて」と云い、「以ちて」を「もて」と云うと同じであろう、けれども「いて」「いた」わ用いぬがよい、又「かようになりゆいたのわ、心がらである」など、云うこともある。

○「行きて」「行きたり」の「いつて」「いつた」となつたもの、

室町時代、

史記抄、四、七　ドコヘイツテモ、驕テ、人ヲアナドリテ、同、九、八　荊蠻ニ奔テイツタホドニ、同、十、三九　其屬ヲツレテイツタゾ。同、十、五九　他國ヘイツタナラバ、必アタヲナシテ、ワルカラウズ。同、十一、七七　イツツ、カヘリツ、シタゾ。

○「いつて」「いつた」の「いて」「いた」となつたもの、

史記抄、六、二九　秦軍ノニグルヲ追テイタゾ。同、六、三九　數千人デ、南陽ヘイタゾ。同、十六、一二　生ケドリテ、モツテ、イテ、ニガイテハ大事ゾ。孟子抄、一、二六　穆公ノ、アノヨヘツレテイテ、ツカワレウト云テ、

ニクンデシタゾ。山崎宗鑑辭世、(天文中、)宗鑑は、いづくへいたと、問ふならば、用が出來たで、あの世へといへ。狂言記、靱猿、あれへいて、御禮を申せ。同、墨塗、暇乞にいたものであらうか。同、伯母が酒、早う出ていて下されい。同、右近左近、身共も行く、左近もいた。江戸時代、醒睡笑、一、福は、よいから、よそへあたものを、諸國盆踊唱歌、大和、梅と、櫻と、よしのへいたら、梅はすいとて、もどされた。同、肥前、おばごのかたへ、かたびら一枚、かりにいた。

【一〇五】熟語で名詞となる事も多い、「讀み切り」「動め續き」などである、又一音の動詞わ、多くは、熟語で名詞となる、「心得」「往來」「晴着」「空似」「花見」などがそれである。○第二活用形を、「讀み物」「落ち葉」などつかうのは、名詞形と名詞とが、熟語になつたのである、又「泣き〳〵話す」「重ね〳〵難儀する」などと云うのわ、動作の繰返されるのを云うので、熟語となつて、變わつて、副詞となる、一音の時わ、「顔を見い〳〵」「挨拶する」などと、毋韻を引く、又「懲り〳〵する」「延び〳〵する」「晴れ〳〵する」(受身の助動詞に「追われ〳〵して」、使役の助動詞に「讀ませ〳〵する、」など云うのわ、意味を深く云うので、「する」と熟語となつて、動詞となる。

○又、第三活用形の、名詞となることがある、古今集、春、上に「やよひに、うるふ(閏)月のありけるとし、よみける」、「陽炎(かぎろひ)」「角力(すまひ)」人の名などに「薫(かをる)」「登(のぼる)渡(わたる)」

【一〇六】萬葉集、二「佐田の岡邊に侍宿(トノヰ)爲(シ)に行く」後撰集、春、上「君のみや、野邊に、小松を、引きにゆく、我もかたみに、つまむ若菜を」。「本を讀みわしたが、字を書きわせぬ」、飯を食いもしたり、茶を飲みもしたり、」

【一〇九】すべて、文語の動詞、形容詞、助動詞の連體形を、口語には、終止形に用いる、かようになつたのわ、いつ頃から始まつたか、平安朝時代の靈異記、上の訓釋ニ「負、マクル」類聚名義抄に「去、イヌル」晧、ヒノイヅル」熟、ニユル」新撰字鏡に「吠、犬乃保由留(ホユル)鰺、魚乃曾己禰太々禮留(ソコネダヽレル)」などゝ、連體形でも書いてあるが見える、

○連體形の、終止形となつたもの、

平安朝時代

今昔物語、廿六、下、觀硯上人在俗時値盜人語、今ハ可敎(コロス)ニ、此ク遙ニ將行ハ、何ト心モ不得思ユル、見返テ、恐々見レバ、云々、(何の掛りを、連體形で結んだのでもあろうか、)同、廿六、下、東小女與狗昨合互死語、此狗ノ爲ニ、被

咋(クヒコロヲ)敛ニナシトスル‖病无クシテ、人ノ見時、云々、同、廿八、上、祇園別當感秀被行二誦經一語、良久ク、否尋ヲ會ヒ不レ奉ズトテ、使、返リ來ヌル‖而ル間、云々、同、三十、夫死女人後不レ嫁二他夫一語、祖亦他ノ夫ヲ合セムト爲ルニ、云々、父ノ云ク、云々、尚合セムトスル‖娘父母ニ云ク、云々、

寶物集、上、心ある人は、この世をば、さらに、うつゝとはおもはざる‖となん。

同上、五百由旬のやまかゞちは、ちいさきむしのためにくはるゝ‖、蒼海の魚は、くらきをいとひて、出離をもとめ、云々、同上、されば、ちくしやうとは、生をたくはふるとかくなり。同、中、たとひ、人、われをころさむとする‖とも、われは、人にうらみをなすべからず、あたをば恩にて報ずる‖といふ事あり。同、中、よろづの物を見て、ほしき‖と思ふ、云々、心に物をあんじて、思ひ出し、ほし‖と思ふ。同、中、紫式部、そらごとをもつて、源氏物語をつくりしゆへに、地ごくにおちて、苦患をうくる‖はやく源氏をやきすて、云々、同、中、かやうの事をも、しりながらも、酒をこのむものもおほく侍る‖よく〳〵つゝしみ給ふべきなり。同、中、愚しやの作るつみ、すくなけれども、地ごくにおつる‖と弘法大師は仰ける也。同、中、只

今、鳥べ野へ、をくりまいらせぬるといふをきゝ云々、」

鎌倉時代

平治物語、三、頼朝被レ定二遠流一事、今日斬ルゝ、明日失ハルゝ、ナド聞ヘシカドモ、其日モ、延ケレバ、云々、(下に、語を略したものか、)

平家物語、一、妓王の事、たとひ、みやこを出さるゝとも、云々、岩木のはざまにてもすごさん。

古今著聞集、九、扨頼光は、其より歸りける。

吾妻鏡、元暦二年、四月十五日、其氣ニテヤラン、是ハ、イタチニヲヅル。

砂石集、二、馬ヲヒカヘテ、物語スル、弋瀬河ニテ死ベカリシ身ノ、云々、同、

三、アハレ、マケヌルトキコユル人モ、云陳ジ申習ナルニ、云々、

室町時代

曾我物語、一、かはづの三郎うたれし事、天のあたへをとらざるは、かへつて、とがをうるといふ。

幸若、入鹿、諸卿殘らず參内ある、鎌足、憚り御不參なり。同、百合若、御勢は三十萬騎と記さるゝ、その外、以下のつはものども、云々、申さんとすれ

ば、泪落つる、申さずば、知召さるまじい」。飯をまるめてそなふる、この鷹、嬉しげにて、飯をくはへ、云々、岩間に、鳥の羽少し見ゆる、大臣、怪しく思召し、「筑紫の博多に吹き着くる、ありがたしとも、なか〳〵に、申すばかりもなかりけり。

幸若、敦盛「船を招き寄せうず、ものと思召し」、同、和田酒盛「十郎がさゝうず、男ならば、取て呑まうず」、同、烏帽子折「太刀を取らせて行かうず、か」、史記抄、六、七〇「太后ノ喜マウズホドニ」、などは、却て、終止形を、連體形につかつたのである。

史記抄、十、五三　馬車ヤ、女ヤナンドガアル、ト云モ此心ゾ。同、十、七八　掠ハ、カスムルトヨムゾ。

孟子抄、七、一四　一人ノ心得ガ悪ケレバ、内輪が破ル、ソコデ、他カラミカケテ、伐テトルゾ。

閑吟集、かわ柳は、水にもまる、ふくら雀は、竹にもまる、都の牛は、くるまにもまる、野べの薄は、風にもまる、茶うすは、引本にもまる、げに、まこと忘れたりとよ」。新茶のちやつぼよ、なふ、いれてののちは、こちや

しらぬ〳〵」。我おもひうちにある色や外に見えつ覽。

狂言記、宗論、同道致さうと存ずる。其方に、ちと意見をしたい事がある。

同、ひめ糊、六七騎にて追かくる。同、酢薑、いかにも辛き物にて候、と申上ぐる。同、伯母が酒、七つ過ると、いかめな鬼が出まする。同、生捕鈴木、重家、こての繩を免し、云々御前にひきすゆる、又、其時、頼朝、云々、同地藏舞、あれに、火の光が見ゆる、さらば、あれへ行て、宿を取らう。同、墨塗、身共は知らぬ。

江戸時代

徒然草抄、上、莊子等ヲ以テ書タル、トミヘタリ。

おきく物語、夫ゆえ、茂介妻の恩をば忘れぬ、と高虎申され候由、

醒睡笑、一、有時、行脚の比丘來るに、件の旨を語りきかする、即、我ゐてみんといふ。彼聖、年月を經て後、頻に入定せんと披露する、各涙を流して、名殘ををしむ。人くらひ犬のある處へ、云々、虎といふ字を、手の内に書て見すれば、くらはぬ、とをしゆる、後犬を見、云云、同、四、歌の點を望みて參らせあぐる、兎角、よろしからねば、云々、同、七、酒宴なかば、舞舞の出

たりし、上座より、其方は、なにがかりぞと問ふに、同七。忍びて起出る、小人(すにん)聞つけ、後より、そと行く。

戯言養氣集、お天神ちやとて、うしろを、ほとほとと打たれば、八幡、なしそ、しやだんが破る〳〵と云た、

あづまの道の記、熱田の宮に、古井あり、弘法ほられたるとなり、猶、其奥に、清水あり、是は、本社の内より流れ出るとや。

東海道名所記、舞坂、誠に、世の中に、鬼はない物ぢやと、樂阿彌もかんじておる、されば、云々、

鎌倉時代以後わ、「落つ」「受く」「寢(ぬ)」「來(く)」「爲(す)」「被(る)」などの終止形わ、殆ど、亡びたといつてもよいくらいで、すべて、連體形を用いて居る、殊に、江戸時代以後わ、「落ちる」「受ける」「ねる」「れる」などとなつて、全く、連體形となつた、今でも、九州にわ、古い形で、「落つる」「受くる」などゝ云つて居る所もあるが、やはり、「落つ」「受く」わ、亡びて居る。

○文語の終止形わ、他動四段活用も「解く」、自動下二段活用も「解く」、自動四段活用も「立つ」、他動下二段活用も「立つ」であつたが、今の口語の終止形わ、他動に「解く」、自動に「解ける」、自動に「立つ」、他動に「立てる」となつて、區別わよくなつた、しか

し、終止も、連體も「解ける」「立てる」となつたので、紛れる事が起つて、一得一失である。

○今の口語で、ワ行五段活用の動詞の語尾の上に、アの段の音のあるものゝ、終止形、連體形を、元のアの段の音のまゝに、「たゝかう」(戰)「やしなう」(養)「わらう」(笑)「はう」(這)「まう」(舞)などと云うわ、關東、奥羽、靜岡縣であつて、愛知縣、山梨縣、長野縣、新潟縣、から西わ、九州までわ、アの段の音を、オの段の音に變へて、「たゝこう」「やしのう」「わろう」「ほう」「もう」と云うのをまぜてつかつて居り、其内に、「かう」なう」「らう」などとばかり云う所もあり、(京都、大阪わ、アの段の音である。)又「こう」のう」「ろう」などとばかり云う所もあり、又、稀には、終止形の時にわ、「かう」なう」「らう」と云い、連體形の時にわ、「こう」のう」「ろう」と云う所もある、今わ、全國に多い「かう」なう」「らう」などの方にきめた。

東國の方でも、武藏、群馬縣の處々、栃木縣の那須郡、足利郡の中部、幷に、北海道の松前などに、「こう」のう」「ろう」と云ふ所があり、茨城縣、福島縣の平、會津、宮城縣、岩手縣にわ、兩方まぜて云つて居る所もある。

又、千葉縣の海上、安房二郡、福島縣の白河、二本松、福島、相馬、島根縣の仁多郡

などに「かあ」なあ」「らあ」など丶云う所もある。

但し、第二活用形を「て」た」に續ける時わ、關西でわ、一般に「たゝこうて」やしのうた」「ろうて」ほうて」もうた」と云い、關東でわ「たゝかつて」やしなつた」わらつて」はつて」まつた」など丶云う。(此遷りかわりの事わ、前の五段活用の「て」た」につづく所(一〇三)で說いた)

【一一〇】連體形わ、重ねても用いられる「食のすゝむ力のつく藥」雨の降る路のぬかる日」

【一一四】前に、第何活用形わ、助動詞の何に續くと云つて、其助動詞の意味わ、助動詞の處で、說くことにしてあるから、こゝの第四活用形も、助詞の「ば」に續くとばかりで、其意味わ、助詞の「ば」の處で說く筈であるが、其意味わ、動詞と「ば」と續いた上で出來るのであるから、こゝわ、少し異例となる。

【一一五】【一一六】【一一七】既に定まつた意味に云ふにわ、「思えば〳〵悔しい」「見ればまだ年の若い」「年わいくつかと聞けば、十五と答えた」などゝも云う、又「一同でした事であれば、一人の功でわない」「先生であればこそ、敬うのである」などわ「故に」の意味ともなり「親があれば子がある」「一人がよいと云えば、

一人が悪いと云う」などわ、既に定まつた意味にも、「故に」の意味にも、事柄を並べる意味にも取られる。

文語でわ、動詞の各種活用の第一活用形に、「書かば」落ちば」受けば」來ば」せば」」助動詞の中にも、こうなるのがある、)と「ば」を附けて、將然の意味に云うが、口語にわ亡びて、(稀に「毒食はば皿まで」殺さば殺せ」言はゞ何々」申さばかよう〳〵」など丶云うわ、文語の姿の殘つて居るのである、)第四活用形に「ば」を附けた已然の形を、將然の意味にも已然の意味にも用いる、但し、形容詞、助動詞に稀に用いる「無くば」嬉しくば」行きたくば」來なくば」無ければ」嬉しければ」行きたければ」來なければ」に對する、)助詞の「たら」(ば)「なら」(ば)などわ、文語の將然の面影である。

「書けば」落ちれば」受ければ」來れば」すれば」などを「かきや あ」おちりや あ」うけりや あ」くりや あ」すりや あ」など丶も云うが、言葉が下品に聞えるから用いぬがよい。形容詞の「善ければ」嬉しければ」、助動詞の「讀まれゝば」書かせれば」見たければ」行かなければ」、接尾辭の「男らしければ」などを「けりや あ」れりや あ」せりや あ」などとも云うも同じである。

【一一八】未來形、推量形わ、それ〳〵の意味を云つて、終止形となる。

文語の四段活用で、未來推量の意味を云うにわ「書かむ」指さむ」立たむ」言はむ」など云うを、今の口語でわ「かこう」さそう」たとう」いおう」と云うこと、全國大抵、その通りである、(京都大阪邊でわ、未來に「書こう」指そう」推量に「書くやろう」指すやろう」と言分ける、)「む」の子音がなくなつて、母韻の「う」ばかりとなつたので、次の上一段、下一段活用、カ行變格、サ行變格活用、受身使役等の助動詞のも、同樣である。

稀にわ「あらむ限りの力を出して」、此世のあらむ限りわ云々」など云ふこともある。

武藏の處々、岡山縣の赤磐郡、宮崎縣の處々に「かかう」ささう」と云う所があり、三河、出雲の處々に「かかあ」ささあ」と云う所があり、山形縣の東田川郡、富山縣、福井縣、岐阜縣、滋賀縣、三重縣の南部、京都、大坂、丹波、兵庫縣、宮崎縣の處々に「かこさそ」とばかり云う所があり、島根縣の簸川郡に「かかさき」とばかり云う所がある、第二の音まで「かさ」と云うわ、文語の音の殘つて居るのである。

○「む」の「う」となつたもの、(「ふ」とあるのも「う」である)

平安朝時代

四段活用の未來、推量を、音便に云うようになつた起りわ、源氏物語の竹川に、「はちらひておはさうずる、いとをかしげなり」。同、槇柱は、「うちひそみて、なきおはさうず」。大鏡の序に、「いさ給へ、むかし物語して、此おはさう人々に、云々、きかせ奉らん」。などで、「おはさうずる」わ、「おはさむずる」、「おはす」と云う動詞に、四段活用のものがある、と見て云う。)の音便である、是れは、竹取物語に、「さる所へまからむずるも、いみじくも侍らず」。などから變わつたもので、「罷らむとす、」おはさむとす、」を約めて、音便に濁らせたのである。

鎌倉時代

平家物語、二、少將こひうけの事、しばらく、少將をあづからうと申に、云々、同、二、教訓の事、胸板の金物、すこしはづれて見えけるを、かくさうと、しきりに衣をひきちがへ、同、四、競の事、まつさきかけて、いのちを奉らうとこそ存ぜしかど、同、七、實盛最後の事、名乘れ聞かう」。寄れ組まう」わかやがうと思ふなり。

室町時代

曾我物語、おなじくさかもりの事、年よろふ人のさかづき、云々、たき口殿よりはじめよ。

幸若、百合若、助けて、さらば、戻らうずるか。同、烏帽子折、太刀を取らせて行かうずか。

史記抄、五、二〇　義理ヲ云ワウトスレバ、云々、同、五、二三　大ハヂヲカウゾ。同、六、二四　餘人ノ、沛ノ主ニナラウト云モノガナイゾ。

孟子抄、一、五　後代ニ、名ヲノコス事ヲシテヲカウト云心ゾ。同、一、一四　我家ヲ取ヲイテ、人ノ家ヲトラウトシ、

閑吟集、なることをかけて、花のとりおはう」。わごれうは、かへらうか。

狂言記、釣狐、いそいで參らう」。何しに偽り申さうぞ。同、宗論、身延參りをいたさうと存ずる」。夫れがようござらう。

伊曾保物語、宛がはうずと思定め、同、大きな荷があつたを、エソポ、これを持たうといへば、」そちを買はうと思ふが、何とあらうぞ。

江戸時代

昨日は今日の物語、よきむすめをもつ、よき所へきもをいらふといへば、

いかほどの身上ぞ。

徒然草抄、上、イカヤウニ、ソシリワルクイハウトモ、クルシカラヌ也。

醒睡笑、一、江州六角佐佐木四郎と、三好家と、とりあひ、云々、時に、世の中をしらふ〳〵（知、四郎）といひけれど、云々」、其代りに、われが仁王經をよまふぞよ。

犬子集、二、春、下、櫻　心ぼそや、ちらふとおもふ、いと櫻。

吾吟我集、九、こゝも又、それといわうが、島なれや、數のそとばを、波になが せば。

正章千句、二、花、雨と露、ばかりで花が、ひらかふか。

東海道名所記、水口、ひらにとまらせられい、鮪汁をいたさうか。

諸國盆踊唱歌、播磨、かみをしまだに、いはうよりおかた、心しまだに、もちなされ。

末の「う」なしで云つたものわ、狂言記、相合袴に、「案内をかを（請はう）物も、（物もうそう）お案内、これが一段でござろ」。同、烏帽子折に、「まづ、烏帽子を持つて、いそいでまゐろ」。同、釣り女に、「釣ろよ〳〵、おかつさま釣ろ

よ」。諸國盆踊唱歌、伊豆に「じつにそふなら、なまづめはなそ、おれは五つの、ゆびをきろ」。同、阿波に「雨がふろとて、おきからくもる、むすめさろとて、むこがこぬ」。淋敷座の慰、のほゝんぶしに「戀てしんきや、身はかげろうの、いつかめぐりて、君にあを」。などと見える、今も、滋賀縣、京都、大坂、兵庫縣あたりで「書こ」指そ」と云つて居ると云う事わ、前に云つておいた。

○文語のナ行變格活用の「死なむ」往なむ」を、口語に「死のう」往のう」と云うわ、全國、皆、同じである。

室町時代

史記抄、十、三　老子ノ、イナウトセラル、ゾ。同、十一、二九　民百姓ハ、上ヲハナレテイナウゾ。同、十一、五三　思キリテ死ナウトスルハ、勇ナリ。

同、十一、九八　死ナバ、我モ死ナウ、生キバ、我モ生キウズ。

孟子抄、八、一七　死ナウ處デハ、死ナヌ、死ヌルマイ處デ死ヌレバ、惡ゾ。同、九、二四　ソコデ、イナウトテ、隱レテ、微服ト云テ、キタナイ服デ、イナレタゾ。

狂言記、釣リ女、めん〳〵に、脊に負ふていなう。同、文山だち、書置をし

て、死なうではあるまいか。同、附子、附子を喰うて死なうと思うて、

江戸時代

醒睡笑、七、かつゑ死なうかと思ひ、ふびんさに、泣いたよ。同、七、まちと、こらへられたらば、殺さずとも、かたきが死なうものを。

西翁十百韻、岩城にて、花の陰、宿をかさずば、出ていなう。

松の葉、一、葉手、まつにござつた、いとしのきみや、のう、こんやござらざ、こがれしのう。

○ラ行變格活用の「あらむ」居らむ」を「あろう」おろう」と云うわ、全國の口語、すべて、同じである。

室町時代

幸若、信田、承る事も、ありあらうず。

史記抄、四、三九　上ニアラウズ勢ハ、下ニクダリ、同、六、四七　サアラウニハ、ナントセウゾ。

孟子抄、一、三　機ヲ截テステヽ、此如クニアラウゾ、男子ノ學問セヌハ、ト云タゾ。

狂言記、宗論、何と、聞いた事があらう。同、相合袴、あまが崎から、聟が來るやら、かさをさいて居らうぞ。

狂言記の二千石に、しざり居ろ」、夫へ出て聞き居ろ」などゝ、「う」を約めて云つたのも見える、但し、是れは、命令につかつたのである。

伊曾保物語、其咎めのあらうずる時は」、何の仔細があらうぞ。

江戸時代

醒睡笑、二、そち體さへ、知りたるゑびを、我が知らいでをらふか。同、五、あの松は、男松であらふか、妻松であらふか。

西鶴五百韻、あの松原に、寺があらふか。

好色五人女、五、金銀も持あまつて迷惑、是は、なんとしたものであらふ。

雜兵物語、下、玉箱持、夫を證據にするであらふ。

○文語でわ、上二段活用の未來、推量を、「起きむ」落ちむ」と云うを、口語でわ、東國、松前、一圓から、西わ、播磨、但馬、和歌山縣、香川縣、あたりまで、大抵、「起きよう」落ちよう」と云い、(京都、大阪も、そうである、)丹波、德島縣、愛媛縣でわ、「起きよう」落ちよう」に、「起きょう」落ちょう」をまぜ、高知縣では、「起きゅう」落ちゅう」をまぜ、岡山縣

鳥取縣から西は、山口縣まで「起きゆう」落ちゆう」で、尚「起きよう」落ちよう」起きよう」落ちよう」をまぜ、(島根縣)九州わ、大抵「起きゆう」落ちゆう」で、稀に「起きよう」落ちよう」、(佐賀縣處々、宮崎縣處々、)「起きよう」落ちよう」(福岡市、)をまぜて、つかつて居る、今は「起きよう」落ちよう」に定めた。

和泉に「強ゆう」試みゆう」など云う所がある。

尾張、岐阜縣、福井縣、丹波に「起きよ」落ちよ」など云う所がある。

富山縣に「起つきょう」落つちょう」と云う所があり、富山縣、三重縣の南部、京都、大坂、丹波に、「起きよ」落ちよ」(命令と同じであるが、アクセントがちがう、)など云い、宮崎縣に「起きゆ」落ちゆ」など云い、又、山形縣の庄內、越後、佐賀縣に「起きろう」落ちろう」と云い、美作に「強いろう」などと云う所がある。

鎌倉時代

延慶本平家物語、二、石橋合戰事、股野ハ、云々、下ニナル、云々、ヲキフ〳〵トシケレドモ、佐奈多、上ニ乘居タリケレバ、叶ワジトヤ思ケム、云々、

室町時代

幸若、烏帽子折、一期のうちを、らく〳〵と過ぎうずる事の嬉しさ

史記抄、三、二四　死デ、以前ノナサケニムクユウズルゾ。同、四、三九　上ニアラウズ勢ハ、下ニクダリ、黨與ガ、下ニデキウゾ。（「デコウ」ともある、次のカ行變格活用の未來、推量の處を見よ。）同、七、二　其人モ、骨モ、朽チウズルゾ。同、十、七二　齊ヘ深入ラント思ドモ、云々、韓魏ガ、ウシロヅメヲカセウズラウト思テ、ヲヂウ（怖）ゾ。同、十、七九　木ヘ上テ、ヲリウカ、上ラウカト、二端ノ心ノアルモノヂヤゾ。同、十一、九八　死ナバ、我モ死ナウ、生キバ、我モ生キウズ。

孟子抄、五、一八　ソレヲ一人シテセバ、只、天下ハ何トシテスギウゾ。

狂言記、抜殻に、「酒、云々、も一つ喫（た）んませう、過ぎすげうがな」と、「過ぎう」を「過ぎょう」と云つてあるわ、中國邊で、「落ちう」を「落ちょう」とも云うと同じである。

江戸時代

醒睡笑、六　物を、いかにも、ちとづゝくれらるゝ、おほくくふたらば、喉にろができうか、とおもうてやら、

○文語の上一段活用でわ、未來推量を云うに、「着む」「見む」など云うを、今の口語

でわ、東國、松前、一圓から、西わ、播磨、但馬、四國、一圓まで「着よう」見よう」と云い、(京都も、大坂も、そうである)岡山縣、鳥取縣から西わ、山口縣までわ、「きゅう」みゅう」で、稀に「着よう」見よう」「きょう」みょう」をまぜて云い、(島根縣、九州わ、大抵「きゅう」みゅう」で、稀に「着よう」見よう」(福岡市、小倉市、佐賀縣處々、宮崎縣處々)をまぜてつかつて居る、今わ「着よう」見よう」にきめた。

富山縣にも「射う」着う」又わ「きょう」みょう」と云う所がある。

三重縣の南部、和歌山縣の新宮、丹波に「着よ」見よ」(命令と同じである)と云う所があり、青森縣、山形縣の庄內、越後、筑前、佐賀縣、熊本縣、大分縣、宮崎縣に「着ろう」見ろう」と云う所があり、又宮崎縣、鹿兒島縣に「着ろ」見ろ」とばかり云う所もある。

室町時代

幸若、烏帽子折、この冠者が着うずる烏帽子は、同、和田酒盛、座には、云々、九十三騎、くるま座に、ばらりと居ながれ、すけなりがゐうずるざしきはなし。

史記抄、十、七三　東周ニ、ヒツコウデ、イウ(居む)ズホドニ、同、十二、一〇　思

案シテミウト云ゾ。

孟子抄、一、一〇　孟子ヲミフト志ス者多ケレ共、同、四、一七　似フズ事デモナイ。

閑吟集、ふて〳〵、一度いふて見う、いやならば、われもたゝ、それを限り、

狂言記、釣狐、そと見うと存ずる。

江戸時代

昨日は今日の物語、さらば、それを見う、とおほせければ、

醒睡笑、八、　鼬、眉目よし、ま一度、顔見う、と世話にいふ。

○文語の下二段活用の未來推量の「受けむ」捨てむ」を、口語でわ、東國、一圓から、西わ、畿内、和歌山縣、播磨、但馬あたりまで、大抵「受けよう」捨てよう」と云い、佐渡、富山縣石川縣、福井縣、岐阜縣、愛知縣、和歌山縣の一部、丹波、丹後、四國でわ、「受けよう」捨てよう」と「受きょう」捨ちょう」がまざつて居り、(京都わ「受けよう」で、大坂わ、二つまざる、)岡山縣、鳥取縣から西わ、專ら「受きょう」捨ちょう」で、稀に「受けよう」捨てよう」がまざる、(島根縣九州でわ「受きゅう」捨ちゅう」で、稀に「受けよう」捨てよう」(佐賀縣處々、宮崎縣處々、)「受きょう」捨ちょう」(福岡市、大分縣の一部、宮

崎縣の西臼杵郡)がまざる、今わ「受けよう」捨てよう」に一定した。

福井縣、丹波に「受きよ」など云う所があり、三重縣の南部、山城、丹波、和歌山の新宮に「受けよ」捨てよ」(命令と同じである)など云い、宮崎縣に「受きゆ」兼に「ゆ」など云い、山形縣の庄内、越後に「受けろう」捨てろう」など云う所がある。

平安朝時代

源氏物語の若菜、上に「ねう〳〵」と、いとらうたげになけば、云々」とある、「ねう〳〵」わ、猫の聲である、同じ若菜、下に「戀わぶる、人の形見と、手ならせば、なれよ何とて、なくねなるらむ」とある歌を、契沖阿闍梨が「人ノ形見トテ、手ナラセバ、吾心知リガホニ、汝ヨ、何トテ、寐ウ〳〵トハナクゾト、思フ人ノ、吾ト寐ントト云ヤウニ聞ナセル也、なくねなるらむ、トイフニ、意ヲツクベシ」。と解いた、此頃に、もう「寐む」を「ねう」とも變えて云つたのである、木工權頭爲忠朝臣家百首の中の源賴政の歌と見える纔見戀の「猫の緒に、かゝりし簾の、はさまより、ほのみし人を、ねう」とこそ思へ」と云う歌の「ねう」も「寐む」で、猫の聲に言ひかけたのである、數年前、京都の建仁寺中から堀出した、經筒か何かの中から出た極樂願往生歌四十七首わ、以呂波四十七字を歌毎に、首尾に置

いて詠んだもので、片假名書きで、末に「康治元年壬戌六月廿一日壬午日」(近衛天皇御宇)とある、其中に「ウシャウシ、イトヘヤイトヘ、カリソメノ、カリノヤドリヲ、イツカワカレウ」とある歌わ、首尾に「う」の字のある歌で、此末の「ワカレウ」わ、「別れむ」の變わつたものである。

鎌倉時代

平家物語、二、西光がきられの事、當家かたぶけふとするむほんのともがら、同、二、敎訓の事、これへまれ、御幸をなしまいらせうとは候へども、同、五、五節のさたの事、惡盜二人、にげこもりたりしを、よつてからめふと申もの、一人も候はざりしに、同、九、一二のかけの事、西の手へ寄て、一の谷の、まつさきかけうといひければ、同、十二、土佐房切られの事、津の國渡邊にて、逆櫓、立てふ立てまじの論をして云々、

平家物語、七、實盛最後の事に「寄れ、組まう、手塚、とて、はせならぶる所に、手塚がらうどう、主をうたせじ、と中にへたゝり、齋藤別當にをしならべて、むずとくむ、齋藤別當、あつはれ、己れは、日本一の剛の者と、くむでうずよなうれとて、我が乘りける鞍のまへわに、をし付て、ちつともはな

たらかさず」。とある中の「くむでうずよなうれ」わ、解しがたい語としてあるが、眞字本平家物語(木村正辭藏)七、にわ「己組(レハシアフス)日本一甲者(ニナフレラ)汝等、」「よな」わ、感動詞「うれ」わ「己(オレ)」ノ轉、人ヲ賤メテ呼ブ語、神武紀六、爾、此云飫例(オレ)と書いてある、「組みて」が「組んで」となり、「てむ」が「でう」となつたのである。

古今著聞集、十九、かいもちゐ、くれうといへば、云々、

室町時代

義經記、ころも川合戰の事、あづまのかたのやつばらに、手なみの程をみせてくれうず。

幸若、鞍馬出、その馬を捨てゝ、御通候へ、あつたら馬を捨てうより、やあ、下りて引け、との御詮なり。同、烏帽子折、烏帽子、云々、やがて、折つて參らせう」。御身が名をば、京藤太とつけうぞや」。汝が牛には、草を苅りてかけうぞ。盜人どもが、云々、夕去の八つの比に寄せうぞ」。きやつばらは、掾の下に隱れうぞ。

史記抄、三、三三　涯分、扶持ヲクワヨウナンド、云フ。同、四、五八　秦ノ地ヲ全シテ、アマエウゾ。同、四、六一　一ツニナツテ、秦ヲヨワメウトスル

ゾ。同、四、六四　六國ト云ハ、ドレ〳〵デアラウゾ、六國ニ、ドレヲソナヘウゾ。同、五、三一　楚ハ破レウトスルカ。同、六、一一　皆燒テ失セウゾ。同、六、一三　責メウトモセヌゾ。

孟子抄、一、三　何トシテ義理ヲツケウゾ。同、一、六　行迹ノ高キ事ハ、天ノ浮雲ニモタクラベウゾ。同、一、一〇　何トシテガナ、百姓ヲタスケウト思フ心ガ有タゾ。同、二、一六　其樣ナ無道ナ物トハ、中ヲタガウテ、ステウマデゾ。同、三、三八　善ヲ勸メウ爲デハアルマイ。

閑吟集、いとおしがられて、あとにねうよりにくまれ申て、おそくねう。

狂言記、靱猿、どれへぞ、野遊山に出うと存ずる。同、宗論、廿日、三十日、手間も取れうも知れぬ」。先へも行かぬ黒豆を數へうより、愚僧が弟子にならしめ。同、萩大名、御意なうても、申上げうと存ずる所に、一段でござりませう。」いかほども褒めうもの」、夫れならば、御目に掛けうほどに、かう御通りなされい。同、ひめ糊、此度、折檻の加へうずれども、かさねて折檻の加へうずる。

伊曾保物語、わが腹中をひるがへいて、御目にかけう」。あれこそ、其熟柿

をばたべたれと、はねかけうずるに」、買うてから後に、逃げうと思ふは、何と、

江戸時代

昨日は今日の物語。大なゆ(大地震)がゆりまして、御きもつぶれうと申」、なんばんかうやく、云々、其かうやく、申うけう。

飛驒組、(慶長三絃組唄)明日は出うずもの、舟が出うずもの、思たげもなく、お寝る殿御よ。

醒睡笑、二、此ぞうすいに、胡椒はいらぬか、それならば、ちとたべうと、同、六、くふて、ひだるさをわすれう 同、六、聲の高きに、目がさめうずらう。

正章千句、七夕、若後家も、是非たてふとや、おもふらん。

小栗の判官、せみやうの段、おぐり殿、云々、鬼かげが、のせふ(乘)けしきと、見えてけり。同、三、かつべきいくさに、まけふでなし。

諸國盆踊唱歌、越前、相生みよより、かいじやうみやれ、こびんなでふ(撫)より、櫃なでふ。

後撰夷曲集、七、題知らず、　子をすてふ我身は若き後家なれば、　同、九、曉鷄、

はた〳〵と、關の戸ならぬ、羽をたゝき、こゝあけうよと、鳴か庭鳥。

鹿の卷筆、一、筆屋のじゆりやう、　そなたの名は、つぎのぶとつけうとて、

松の葉、一、葉手、はでかたばち、　われらも、さまにやつれ、いのちすてうずもの。

松の葉、二、長歌、さんやをどり、　きみがねみだれがみを、いつかわすりよぞ。

○文語のカ行變格活用の「來む」を、關東、奥羽、靜岡縣、山梨縣、長野縣の口語にわ、大抵「こよう」と云い、尚、尾張、岐阜縣、京都府、奈良縣、大阪府の豊能郡、島根縣の簸川郡、佐賀縣、宮崎縣の處々にも、そう云う所があり、又、武藏、群馬縣、栃木縣、茨城縣、福島縣、山形縣、青森縣、松前、山梨縣、長野縣、遠江、尾張の津島、岐阜縣、京都府の綴喜郡、河内、香川縣、大分縣、宮崎縣の處々に、「きよう」と云う所があり、又、武藏の入間郡、群馬縣の新田郡、山形縣の庄内、西田川郡、飽海郡、新潟縣、それから、富山縣、石川縣、福井縣、滋賀縣、愛知縣から西わ、中國、四國の處々に、「こう」と云う所があり、（京都わ「こう」で、大坂わ「こう」きよう）九州でも、福岡縣、熊本縣、大分縣、宮崎縣に、そう云う所がある、しかし、命令にも、未來、推量にも、「こう」と云う所があつて

紛れやすくもあるし、上一段、下一段活用と、語路を一つにして、今わ、「こよう」に決めた。

未來、推量にも、命令にも、「こう」と云う所わ、越後の處々、富山縣、石川縣、福井縣、滋賀縣の蒲生郡、京都府の船井郡、和歌山市、攝津の東成郡、岡山縣の都窪郡、香川縣の高松市、香川郡、仲多度郡、高知縣にある。

佐賀縣、長崎縣、筑後、熊本縣、大分縣、宮崎縣にわ、未來推量に、「くう」と云う所があり、鹿兒島縣でわ、「きゅう」、又わ、「くう」である。

室町時代

幸若、烏帽子折、來うずる八月十五日に、宇佐八幡の御前にて、御放生會と申す事を執行はせ給ふべし。同、文覺、來うずるかた八十日、過にしかた八十日を占はせ給へば、云々、

史記抄、六、四九　イカニ、天子ハ尊ト云ヘドモ、父ガナウテハ、ドコカラデコウゾ。（「デキウ」ともある、前の上二段活用の未來推量の所を見よ）同、十、三一　ヤミノ夜ニ、馬陵ヘコウズト知タリ。

孟子抄、八、八　人ノ惡事ヲ、アナグリ求テ云ハ、後ニ、惡イ事ガデコウゾ。同、

八、一七師匠ノ罪ハ、何カ有ゾ、後ノ惡ノデコウハ、兼テハ知レテコソト思フゾ。

狂言記、花子、雨の降る夜に、誰が濡れて來うずらう。

江戸時代

古今夷曲集、九、いかにねて、起る朝のへんがへぞ、昨日はこふと、今日はこまひと。

西鶴五百韻、朝顏のはなのすけさま、貰てこう。

○文語のサ行變格活用の「爲む」を、口語で「しよう」と云うわ、靜岡縣、山梨縣、長野縣、越後から東一圓で、尙、愛知縣、岐阜縣、三重縣、滋賀縣、富山縣、山城、丹波、奈良縣、和歌山縣、河內、和泉、攝津の豐能郡、兵庫縣、島根縣、香川縣、佐賀縣、宮崎縣の處々にもある、又「しょう」と云うわ、愛知縣、岐阜縣、富山縣から西（京都も、大坂も「しょう」である、）中國、四國までゝ、尙九州の筑前、大分縣、宮崎縣にもある、其外の九州わ、大抵「しゅう」と云う、今わ「しよう」に定めた、上一段、下一段、カ行變格活用と、語路が一つにもなる。

東京でも「どうしょう、こうしょう」何としょう」しょうことなしに」などいわ

云う。

武藏群馬縣の處々、山形縣の飽海郡にも、「しょう」と云う所がある。

山形縣の庄内に、「そ」又わ「そう」と云い、愛知縣、岐阜縣に「せよう」と云う所があり、滋賀縣の愛知郡と、膳所に「しょ」と云い、鹿兒島縣に「しょ」と云う所があり、三河の西尾でわ「しろう」と云う。

平安朝時代

和泉式部續集、上の歌の題に「おとせうといひたる人のおとせねば」とあるわ、（丹鶴叢書）「おとせむ」の音便で、これらが古く、物に見えるものであろう、源俊頼の散木奇歌集の十、雜、下、隱題の中の拾遺抄（しふゐせう）の題の「しとねには、しういせうとぞ、思ひつる、したり顔にも、積る花かな」とある歌を、松屋筆記の七十一に解いて「小兒に、小便をせさするに、シイヲセヨと云ふ俗語あり、此歌は、下根を通はして、しとねといひ、それに尿音をよせ、しふゐせうに尿せんといふよしをよせ、したり顔に尿をしたりがほとよせたる也、尿をしふゐといへるは、その尿するおとの、ジユウといへば也、然てシイヲスルなどいふも、これ也、シトといふも尿をしと丶垂出す音よりいへる名也、

古くは、シトといひ、さて轉りては、シフキともきゝ、シイともきくは、その垂出す音によれる也、花木の下根に立よりて、尿をせんとおもひつるに、はやくもしたり顔に、花がちりつもりたるよしの歌也」とある、これも「せむ」を「せう」と云つたのである。

室町時代

義經記、忠信吉野山の合戰の事、中差參らせて、現世の名聞とぞんぜうずるに、云々、

幸若、烏帽子折、末世の衆生を罰せうずるにて候。同、富樫、勸進をせうずる聖が、勸進帳持では、如何候べき。

史記抄、五、三三　天下ヲバ、幷呑セウトハ思フ上ニ、同、六、三三　ナントシテ、權柄ヲ專ニセウゾ。同、六、二七　秦ノ地ヲコソ、略セウズレ。同、六、四四　士卒ノ心ヲ安ゼウタメニ、同、七、一四　王者ガ、利ヲ本ニセバ、大夫モ、又、家中ニ、何トカ利ヲセウトセウゾ。

孟子抄、七、七　何ヲ手本ニセウゾナレバ、堯舜ヲ手本ニセウゾ。同、十二、一八　王者ノ出ラレタラバ、必、魯國ハ、如昔成ウ程ニ、損ゼウゾト、下心ニ思テ、損

ゼウ歟、盆セウカト問ル、ゾ。

閑吟集　扇のかげで、目をとろめかす、ぬしあるをれを、何とかしようかしようか〳〵しよう。

狂言記、宗論、御齋咄をせうより、法文を說かしめ。同、相合袴、盃、云々、さらば、聲殿に進せう。同、鞍馬參、夜前、宿坊へ寄らなんだに因て、直に下向せう。

伊曾保物語、身が賞翫せうと思切つて居た其熟柿をば、

江戸時代

昨日は今日の物語、つえにせう、ばしらにせうと申され、

醒睡笑、五、にくいやつかな、あいつに、今度から、せうやうがある、とたくみ、

正章千句、七、自害をせうとすれども、えもせず。

後撰夷曲集、九、我心、鬼のこぬ間に、せんたくせう、欲垢ありて、隱れ期はうし。

西翁十百韻、獨吟、花ちらす、志賀の山風、何とせう。

諸國盆踊唱歌、和泉、かせがもの云や、ことづてしよもの、かせは諸國

を、吹きまはる。松の葉、一本手、うきよぐみ、とてもたつなに、ねてござれ、ねずともあすは、ねたとさんだんしよ。

○未來形、推量形を、名詞に續けるにわ、「成ろう事なら、こうもしたい、」あろう事か、あるまい事か、」なども云うが、用いることわすくない。

○上一段、下一段、カ行變格、サ行變格活用の未來推量の末を、畿內邊から東でわ、口語に、大抵「よう」と言うと云うことわ、前に云つて置いた、かような言い方も、室町時代からある。

室町時代

狂言記、柿山伏、人と烏と見違へやう物の樣に、同、萩大名、今日、何方へぞ、出やうと存ずる」。歌、云々、一首、詠うでも見やうか。同、烏帽子折、賴うだ人の國と名を申して、囃事で尋ねやうず。同、伯母酒、甘いをすく衆へは、甘いで進じやうず、辛いをすいて參る衆へは、辛いを進じやう。同、惡坊、傘をかたげて、頭陀に出やうよ。同、靱猿、私の方より申上げやうと存ずる。同、伊勢物語、其儀ならば、今一度寐やう程に。同、連歌毘沙門、梨、云々、此鋒で割らう、但し、錆びやうか。

續狂言記、入間川　向に、人が見ゆる、尋ねて見やう。

詠歌之大概、かたいとを、かなたこなたに、よりかけて、こなたも、かなたも、あはひで、何に、玉のをにして、かけてゐようぞ、との心也。

江戸時代

醒睡笑、三、　坊主、いつも、鮎の名をかみそりとつけ、云々、彼僧、河をわたるに、云々、小者、うしろより、云々、かみそりがありくに、足をきり給ふな、といひければ、坊主、今は、八月なり、かみそりが、いかほどあると、さびようほどに、足はきれまい、とぞいへり。同、五、　下臈一人、走り來り、さかばやしのもとにより、たゞ一重きたるもめん帶を解き、手に持ち、うへにきやうか、したにきやうか、下にきやうか、上にきやうかと、ひとりごといひしが、わざくれ、したにきよや、といふまゝ、内に入り、酒にかへ、よきかんにあつらへ、云々、

古今夷曲集、八、　年たけて、又きようとも、おもひきや、命なりけり、さやのお小袖。

後撰夷曲集、七、　ゆびきりや、地獄の釜へ、ほつたりと、おちようといふ、二世

の契約。

諸國盆踊唱歌、越前、相生みよより、かいじやうみやれ、こびん撫でふより、櫃なでふ。

○動詞の未來推量の形わ、次のように變わつたのである。

四段活用	書かむ	書かう(かこう)	書こう
上二段活用	落ちむ	落ちう (落ちょう)	落ちよう
上一段活用	見む	みう (みょう)	みよう
下二段活用	受けむ	受けう(うきょう) (受きゅう)	受けよう
カ行變格活用	來(こ)む	こう (くう)	こよう きよう
サ行變格活用	爲(*)む	せう(しょう) (しう)	しよう

受身の助動詞の「打たれむ」打たれう」打たれよう」可能の助動詞の「書かせむ」書かせう」書かせよう」過去の助動詞の「指したらむ」指したらう」指したろう」なども同じである。

「む」の「う」となつた初にわ、「書かう」受けう」せう」と發音して居たのが、後にいつか、「かこう」うきよう」しよう」となつたのであろう、「む」の子音のだまつて、母韻の「う」となるわ、通例であるから、「書かむ」の「書かう」となり、「落ちむ」見む」受けむ」來む」爲むの「落ちう」見う」受けう」來う」爲う」となるわ、道理である「受きゆう」來う」爲う」わ、「落ちう」見う」の口調から出來たものであろうし、「落ちよう」みよう」わ、「受きよう」しよう」の口調から出來たものであろう、殊に、下二段活用の動詞わ、數が多いので、「受きよう」失しよう」捨ちよう」兼によう」止みよう」隱りよう」加よう」添よう」數よう」代よう」覺よう」据よう」など、末が「よう」となる口調が移つて(四段活用も、末わ、オの段の音となる)終に「落ちよう」見よう」受けよう」しよう」となり、此口調で「來う」が「こよう」となり、「しよう」の口調で、又「きよう」となつたのであろう、それであるから、「落ちやう」受けやう」などと「やう」と書くわ、道理のない事である。

○動詞の未來推量の形に、一つ變わつて居るのがある、それわ、愛知縣の名

古屋市邊で「行かあず」「落ちいず」「見いず」「受けえず」「來うず」「爲えず」「打たれえず」助けられえず」と云い、三河、靜岡縣、山梨縣の一部、長野縣の西南部でわ、これを約めて「行かず」「落ちず」「見ず」「受けず」「こず」「せず」「打たれず」「助けられず」と云う、是れわ、平安朝時代の初の竹取物語に「彼のもとの國より、むかへに、人々、まうで來むず」土佐日記に「此歌ぬし、又、まからずといひて立ちぬ」「ら」の下の「む」の省かれたので、打消とまぎれる、)など丶見え、其外、諸書に「行かんず」「取らんずものを」「可からんずれ」「あらんずらん」など見えて、是れわ「來むとす」まからむとす」行かむとす」など云うべきを、約めて音便に濁らせたもので、それがまた「來うず」「行かうずる」「あらうずる」など丶なつて、名古屋邊で「行かあず」うけえず」こうず」など云うわ、それから、また變わつたものである、然るに、それを、又約めて「行かず」「うけず」など云うわ、打消と紛れて、未來、推量とわ、うらはらの、意味に解せられる。

○又未來推量を、關東の處々、(駿河の富士郡、伊豆、)福島縣、宮城縣、山形縣、岩手縣、青森縣でわ「書くべい」「押すべい」「起きべい」「落ちべい」「受けべい」「捨てべい」「見べい」「着べい」「こべい」「きべい」「すべい」「しべい」など丶云う。

或わそれを略轉して「書くべ」押すべ」書くぺ」押すぺ」起きべ」落ちべ」起きんべ」落ちんべ」着べ」見んべ」受けべ」捨てんべ」こべ」きべ」くるべ」くんべ」こんべ」すべ」しべ」すんべ」などゝも云う。

受身可能の助動詞の「打たれべい」助けられべい」使役の助動詞の「書かせべい」建てさせべい」なども、右の例と同じである。又「見たんべい」など過去の助動詞にも「是れだんべい」だんべ」だべ」などゝ、指定の助動詞にもつかわれる。

右の「べい」わ、助動詞の「べし」又わ「べき」の音便であるが(子音がなくなつて、母韻ばかりとなつたのである。)連體形の「べき」で「そうしべい」もんでもない」おれも行くべいか」などゝもつかわれるけれども、多くわ、終止形の「べし」の音便につかわれて居る。

平安朝時代

平安朝時代(室町時代)にも「べい」が見えるけれども、すべて、連體形の「べき」の音便で、指定の意味のものである。

源氏物語、朝顔、はしたなくもあ(ろ)べいかな。同、胡蝶、思へば、うらめし

か(ろ)べい‖事ぞかし。同、みをつくし、命こそ、かなひがたか(ろ)べい‖ものなめれ。

紫式部日記、おのが心を用ゐむことは、難か(ろ)べい‖わざを、

室町時代

史記抄、五、二〇　漢王ノ出ヅベイ‖方へ、サシムケテ置タゾ。同、十四、七二　我ガ職ノスベイ‖事ヲシテ、理ノアルベイ‖様ニ行ホドニ、治ハナニカアラウゾ。

孟子抄、四、二五　齊王、云々、王道ヲ行ヒッベイ‖人デ有ゾ、一タビ變ジタラバ、仁ヲスベイ‖人ヂヤ、ト思ハレタゾ。同、八、七　悦ベキニ當テ悦、怒ベイ‖ニ怒ルハ、和ゾ。

江戸時代

江戸時代の「べい‖」わ、終止形の「べし‖」の音便のもあるし、連體形の「べき‖」の音便のもあつて、指定、未來、推量の意味にもつかわれてある、いつ頃から用いて居たか、古い書物に見えぬから分らぬ、此終止形の「べい」わ、東國に限るようでもあるが、次に擧げる九州の豐後、肥後の盆踊唱歌にも、寶永の京都の唄

にも、延享の頃の京都の話にもある。

慶長十五年、名古屋城建築中の流行唄、(如蘭社話、二十四)　ゑいゑい、ゑいさう〳〵と、石を引、ゑいゑい〳〵といふて引間は、夢だんべいな。

醒睡笑、六、　東にて、都の若き商人と、其宿なる中居の女房に相馴れ、云々、ほどなう、かへる頃になりぬ、云々、一しゆの三味線をつかはし、立わかれんとするに、かたみとて、緒つけの板をば、さつくれて、けさいくべいか、あぢきなの身や」。

東海道名所記、西坂、(日坂、野州生れの女の詞)　旅の殿さ、お草臥であるべいに、」夢にて、夜をぶちあかし給ふべいよな。

後撰夷曲集、六、　手を出せろ、折てくれべい、ばか面め、(一三〇)の末の「ろ」の所を見よ。)

諸國盆踊唱歌、豊後、　くんくるべいと、まつよはなくて、またぬよはきて、ちよんきりちよんかいな。同、肥後、　つまよないけの、どんがめならば、くんくるべい、ヅボンボへ。

ト養狂歌集、上、　關東の、雁や越路に、かへるべい、さらば〳〵の、いとまごひ

して。

雑兵物語、上、鐵炮足輕小頭、若、火もきえたんべいならば、替の火繩が澤山なほどに、云々、」眞甲をぶてば、なまくらものは、なべつるのやうになるべい。

松の葉、一、葉手、そもじと、われとは、いちごちぎるべいぞ、よもさ、しらがにこえだのさくと、ちぎるべいぞ、よもさ、

京都の六孫王社の寶永の祭の唄に、寶永祭はみごとな事よ、誰も見にゆけ、ゆきなばいさ、ちと又此夜は、うさはらしの、上戸のおもひはこれなんべ。」一話一言の十一に、中村かしくといふ京都の舞臺役者の美少年があつた、招く客が大勢つかへて、まだ客があるといへば、跡から來た客は、それなら待つべい〳〵といふからして、自然と、松兵衛と名づけたとある。(延享の頃)

○尙、「べき、べし」の事わ、後の助動詞の末にも云う。

【一二二】本書の「一人わ、刀で切りかゝる云々、」の例わ、過去の事を、目の前に見るように云うのである。「一昨年わ、水が出る云々、」の例わ、「一昨年わ」昨年わ」と云

【一二三】動詞　現在の語を過去にも未來にも用いること

う過去の意味を持つて居る副詞句で、過去の事に聞えるのである、又「二三年、不仕合がつゞく」「昨日から風が吹く」「雨が昨日今日降つて居る」など云ふわ、作用の引續いて居る場合に云うのである。

○本書の「私わ花の咲く頃に行く」などの例わ、未來の意味の副詞句に伴うから「行く」が未來になるので「來る三日に演説會を開く」「次の日曜日にわ早く起きる」「あの人は明後日出立します」などもそれである、それのみならず、これわ、慥にきめて云う心もあるので、これを「行こう」「開こう」「來よう」「起きよう」「休もう」「出立しましょう」と云つてわ、不定の意味になるからでもある。

○駿河、山梨縣、長野縣、越後から東でわ「書いて居る」「讀んで居る」「受けて居る」などを約めて「書いてる」「讀んでる」「受けてる」(過去に「書いてた」「讀んでた」)と云て、進行現在に用いることがあつて、近畿邊でも、そう云う、それから西にわ「書いて居る」「讀んで居る」「受けて居る」などを約めて「書いとる」「讀んどる」「受けとる」と云う所があり、尚、近畿から西には、それを轉じて「書いちょる」「讀んぢょる」「受けちょる」などゝも云い、又「書き居る」「讀み居る」「受け居る」を轉じて「書きよる」「讀みよる」「受けよる」などゝも云う所があるが、どれも

用いぬがよかろう。

【一二五】命令わ、その意味を云つて、終止形となる。

【一二六】五段活用の動詞の命令の形わ、文語の四段活用のと、變わりはない。

【一二七】上一段、下一段活用の動詞の命令を、駿河、山梨縣、長野縣、越後の一部から東でわ、口語に、「起きろ‖落ちろ‖着ろ‖見ろ‖受けろ‖捨てろ」と云う、尙、富山縣、三河、三重縣にも、そう云う處があり、九州の筑後、肥前、熊本縣、宮崎縣にも、「ろ」をまぜて云う處がある、其外わ、遠江、愛知縣、岐阜縣、富山縣、佐渡から、京都府、大阪府、和歌山縣、香川縣までは、大抵、「起きよ‖起きい‖落ちよ‖落ちい‖着よ‖着い‖見よ‖見い‖受けよ‖受けい‖捨てよ‖捨てい‖」をまぜてつかい、(京都大阪わ、「起きい‖落ちい‖着い‖見い‖受けえ‖捨てえ‖」)それから西わ、九州まで、大抵わ、「い」である、しかし、上一段活用にわ、「い」の着かぬのもあるから、今わ、「ろ」よ」の二つに定めた。

「受けい」捨てい」を、「受けえ」捨てえ」と云う所が多い。

群馬縣の吾妻郡に、「着よ」見よ」と云う處があり、武藏の兒玉郡、群馬縣の多野郡、佐波郡に、「着い」見い」と云う處がある。

上一段活用の命令には、奈良縣、河内、丹波、宮崎縣に、「起き」落ち」とばかり云う

所があり、石川縣に「起きよ」と云い、遠江、三河に「起きょう」と云う所があり、富山縣に「起ッきょ」「起ッき」「起ッきゅ」「落ッちょ」「落ッち」「落ッちゅ」と云い、丹波、播磨に「起きゃあ」など云う所がある、又、奈良縣に「起きろう」など云い、京都、大阪、尾張、播磨、長崎に「起きんか」「落ちんか」なども云い、(「起きぬか」「落ちぬか」の反語から、遷つたのである。)秋田縣、山形縣の庄内、越後、佐賀縣、熊本縣、宮崎縣、鹿兒島縣に「起きれ」「落ちれ」など云う所がある。

河内に「着(き)似(に)」とばかり云う所があり、富山縣に「きょ(に)ょ」とばかり云う所があり、三河に「お着り」「お見り」と云う所があり、名古屋市、播磨、長崎に「着んか」「見んか」と云い、青森縣、秋田縣、山形縣の庄内、越後、筑前、佐賀縣、大分縣、宮崎縣、鹿兒島縣に「射れ」「着れ」「似れ」「見れ」と云う所がある。

下一段活用の命令にわ、遠江、三河に「受きょう」「譽みょう」と云う所があり、(未來推量を、命令に用いることがあるから、變わつたものであろう。)尾張、美濃、富山縣、石川縣に「受きょ」「捨ちょ」「譽みょ」と云う所があり、奈良縣、河内、丹波、熊本縣、鹿兒島縣に「受け」「任せ」「譽め」などゝばかり云う所があり、筑前、大分縣、宮崎縣に「受きい」「捨ちい」「任しい」「兼にい」と云い、宮崎縣に、又「受き」「捨ち」「任し」「兼に」

譽み」又「受きよ」兼によ」と云う所があり、奈良縣に「受けろう」と云い、秋田縣、山形縣の庄内、越後、佐賀縣に「受けれ」譽めれ」と云い、尾張、播磨、長崎縣に「受けんか」捨てんか」と云う所がある。

【一二八】「くれる」と云う動詞わ、下一段活用であるから、その命令わ「くれろ」くれよ」くれい」であるが、(醒睡笑、七「おのれが腰にあるめしを、われにおくれよ。」)又、五段活用の命令のように「茶をくれ菓子をくれ」とばかりも云う。

「くれよ」わ「與へよ」の意味でなくて「自分の爲にせよ」と求める意味にもつかつて「貸してくれ」(狂言記、萩大名「某をも、よい時分に引合はいてくれさしめ。」)など云う、是れわ「自分の爲めに貸せ」と云う心で「貸してください」など、丁寧に云うも此心である。

○「よ」の「い」え」となつたもの(「へ」とあるも「え」である)

室町時代

孟子抄、一、二七　穆公が、三良ニ、死ニ殉ヘイト遺言シタ。同、二、一六　妻子モ、何カ只ハ有フゾ、跡デ過イ(過シ)テクレヘト云心。同、二、一七　チト、氣ニチガヘバ、徒ラ物ヂャ、截テステイ、ナド云ル、ゾ。

狂言記、萩大名、太郎冠者、これへ出い。ゆるりと見物せう、床机をくれい。
同、相合袴、さあ〳〵こゝへ足を入れい。同、抜殻、御酌、云々、さあ〳〵、受けい〳〵。同、悪坊、一飯の、云付けい。早う掛へい。同、かくすい、かの内々云ふたる高札をあげい。同、法師物ぐるひ　くどい事をいふて行かぬか、出て失せい。同、素襖落、今一つ飲うで、風味を覺へい。

江戸時代

醒睡笑、八、御所、風呂に御入ありつるを、蜂屋伯耆守、御垢にまゐらんとて、ふかれけるやう、知行くれい〳〵〳〵と、云々、

【一二九】文語のカ行變格活用の命令の「來よ」を、口語に「こい」と云うわ、東國一圓から、西は中國、四國、それから、九州の大半にまで及んで居るしかし、又「こう」と云う所も、關東、奥羽の大半から、山梨縣、長野縣の一部、三河の豊橋、越後、富山縣、石川縣、福井縣、滋賀縣の蒲生郡、丹波、大阪府の一部、和歌山縣の和歌山市、新宮、岡山縣の都窪郡、廣島縣の御調郡、香川縣の一部、高知縣にある、そうして「こい」「こう」をまぜてつかつて居る所もあり、其一つをつかつて居る所もある、（京都わ「こい」で、大阪わ「こい」「こう」をまぜる、今わ「こい」の一つに定めた。

群馬縣の利根郡、長崎縣、沖繩縣に「こよ」と云う所があり、青森縣、山形縣の庄内、福井縣に「こ」とばかり云う所がある。

茨城縣に「きろ」と云う所があり、秋田縣の龜田でわ「ころ」と云い、山形縣の庄内、越後、富山縣、岡山縣の川上郡、山口縣の大島郡に「こえ」と云い、奈良縣に「きよ」と云い、高知縣、豐前に「きい」と云い、大分縣に「きい」「くい」と云い、長崎縣、筑後、熊本縣に「けえ」と云い、佐賀縣に「けえ」又わ「け」と云い、宮崎縣に「きよ」「きい」「くい」「けえ」「けよ」と云い、鹿兒島縣に「けい」「け」と云う所がある。

○萬葉集、七に、「白玉寄せ來、沖つ白浪」。同、七に、「雨ぞ降るてふ、歸り來吾が兄」。古今集、二十に「するさへ寄りこ、しのび〳〵に」。榮華物語、月の宴に「尋ねて訪ひこ、きなばかへさじ」。など、古くわ、命令に「こ」とばかり言つて居たが、中世から「よ」を添えて云うようになつたのである。

○「こよ」の「こい」となつたもの「ひ」とあるも「い」である。

室町時代

史記抄、十一、二八　コチヘコヒト云フ。同、十一、一〇五　與期旦日、日ノ出ト云ハ、明日、トツク、日ノ出ル時分ニコヒト云フ心ゾ。

孟子抄、十四、一三　哀レ、馮婦ガコイカシト思タレバ、折節、ソコへ來タ處デ迎テ取テ給ハレ、ト云ゾ。

狂言記、萩大名、追付て行かう、さあ〳〵、こい〳〵。同、相合袴、やい、冠者、行て呼びましてこいや。

江戸時代

おあん物語、親父、ひそかに天守へまいられて、此方へ來いとて、母人我等をも、つれられて、

諸國盆踊唱歌、長門、こいとゆたとて、ゆかれるみちか、みちは四十より、夜はいちや。

淋敷座之慰、のほゝんぶし、でつちもてこい、すり鉢笠を、こゝさかぶさろ、獄門へ。

狂歌鳩杖集、大阪へ、やがてこいとの、地黄煎、あまいことばに、ちよいとのる船。

西鶴置土産、五、都、もさびし朝腹の献立、前々の銀もつてこいと申ました物か、

【一三〇】文語のサ行變格活用の命令の「爲よ」を、口語に「しろ」と云うわ、靜岡縣、山梨縣、長野縣、越後から東、一圓で、尙、三河、三重縣、富山縣、佐賀縣、熊本縣、宮崎縣にも、そう云う所がある、又、富山縣、石川縣、福井縣、滋賀縣、三重縣から西わ、九州まで、大抵「せい」と云い、長野縣、遠江、愛知縣、岐阜縣にわ、「しよ」又わ「せよ」と云う所があり、そうして、此「せい」「しよ」「せよ」をまぜてつかつて居る所があり、其中の一つをつかつて居る所がある、(京都、大阪は「せえ」である)今は「しろ」「せよ」の二つに決めた。

東京で「何しろ、安心わ出來ない」など云うを「何せよ」と云うこともある、是れわ、それにまかせる意味である。

山形縣の飽海郡に「せい」と云う所がある。

「しろ」「せよ」をまぜてつかつて居る所が、武藏の入間郡にあり「しろ」「しい」をまぜるのが、群馬縣の多野郡にあり「しろ」「しよ」をまぜるのが、武藏の入間郡、群馬縣の邑樂郡、山形縣の東置賜郡にあり「しろ」「せい」をまぜるのが、武藏の浦和、川越、兒玉郡、神奈川縣、群馬縣の佐波郡、岩手縣、青森縣、越後にあり「しろ」「せよ」をまぜるのが、靜岡縣、長野縣にあり「せい」「せよ」「しよ」をまぜるのが、三

河、岐阜縣、富山縣、福井縣、奈良縣、德島縣、香川縣、高知縣、宮崎縣にあり、「せい」しよ」をまぜるのが、石川縣、和歌山市、大阪府の豐能郡、廣島縣の御調郡にあり、「せい」せよ」をまぜるのが、滋賀縣、攝津、和泉、和歌山縣、島根縣、愛媛縣の宇和島、宮崎縣にあり、「せよ」しよ」をまぜるのが、遠江、尾張にあり、「しよ」と云うわ、佐渡、筑前の北部、豐前の中部で、右の外わ、多く「せい」である。

右の「せい」を「せえ」と云う所も多い。

「せ」とばかり云う所が、青森縣、山形縣の庄內、富山縣の下新川郡、滋賀縣の膳所、熊本縣、鹿兒島縣にあり、「しえ」と云う所が、山形縣の庄內にあり、「しょ」と云う所が、靜岡縣、三河、岐阜縣、福井縣、石川縣、富山縣の下新川郡にあり、「しょう」(未來、推量、と同じである、)と云う所が、尾張の師崎、富山縣の下新川郡、廣島縣の御調郡にあり、「せえよ」と云う所が、丹波、大阪府の西成郡、山口縣にあり、「すろ」と云う所が、群馬縣の邑樂郡、山形縣の北村山郡、岩手縣にあり、「せろ」と云うが、長野縣の一部、三河の豐橋、筑後、熊本縣にあり、「しれ」と云うが、越後にあり、「せれ」と云うが、福岡市の近傍にあり、「せんか」と云うが、名古屋市にあり、「し」とばかり云うが、宮崎縣にあり、「しい」と云うが、滋賀縣の蒲生郡、高知縣、大分

縣、宮崎縣にある。

○萬葉集、十に、「しだり柳の、かつら爲(せ)よ吾妹(わぎも)」。同、十二に、「事はかり、よく爲(せ)よ吾が兄子(せこ)、あへる時だに。」古今集、七に、「とゞめおきては、思出にせよ。」などゝある。

○「せよ」の「せい」となつたもの、

室町時代

孟子抄、一、一九　速時ニ出來タゾ、ハヤクセイト云レヌゾ。同、一、二七　穆公ノ、死サマニ、三人ノ良人ニ、供セイト云タ事ハアルマイゾ。同、四、八　上ヨリ敎ヲ下シテ、トセイカウセイト云テ

狂言記、柿山伏、汝が宿へ連れて行て、看病をせい。同、相合袴、盃、云々、聟殿に進せい。同、吟聟、度々、聟入をせいとあつて、節々の使が立ちまする。

伊曾保物語、あれが取つて喰(くら)うたものぢや、それ打擲せい。

江戸時代

醒睡笑、八、御所、風呂、云々、蜂屋をとらへ、云々、ふかせ給ふや、奉公せい。

〳〵

○命令に、「起きよ」受けよ」來よ」爲よ」など、「よ」と云うわ、文語の形、そのまゝにつかつて居るので、「い」と云うわ、「よ」の音の變わつたものであろう、「ろ」と云うのわ、東國の一つの言葉づかいである、（九州の肥前、筑後、熊本縣でも、「ろ」と云うわ、東國の武家の移つてから、傳えたものであろう、）此「ろ」わ、今、廣く東國に行われて居るが、少し、下品に聞える言葉であつて、「歸る、來る、」と云う動作を敬つて云うに、「歸られる」來られる」と云う、其命令に、「歸られよ」來られい」などゝわ云われるが、「歸られろ」來られろ」とわ云われないのでも知られる。

東國の命令に、「ろ」をつかつて居るのわ、古いことで、萬葉集の東國の歌などに見える。

萬葉集、十四、

高麗錦、紐解きさけて、寢るが上に、何世呂（爲ろ）とかも、あやに愛しき。

同、十四、

白雲の、絕えにし妹を、何西呂（爲ろ）と、心にのりて、許多悲しけ。

同、二十、

草枕、旅のまる寝の、紐絶えば、我が手と都氣呂、(付けろ)これの波流母志。
(針持)

東遊歌、一歌、

はれな、手を止々乃部呂(調へろ)な、歌調へな。

風俗歌、駿河、之太之浦、

之多の浦に、朝漕ぐ小舟、佐志與勢呂、(差寄せろ)我さへ乗りてな、之太の浦見むや。

右、古くわ、「せ」「つけ」とゝのへ、「よせ」とばかりで、即ち、命令であつて、「ろ」わ、唯、附けたものである、「ろ」わ、古代の一種の助詞で、動詞に限らず、萬葉集、一に「乏吉呂」。同、三に「悲呂」同、十六に「不念呂」其外「夫ろ」「嶺ろ」「尾ろ」などゝ、形容詞、助動詞、名詞にも、多く附けて用いてある、それが、いつか、外の語にわ附けることがすたれて、東國の動詞の命令にばかりわ、必ず附けることゝなつたものであろう。

弘安の頃の塵袋と云う書の十、詞字にも、「坂東ノ人ノコトバノスエニ、ロノ字ヲツクル事アリ、ナニセロ、カセロト云フ、」とあり、(天文元年の塵添壒嚢抄、一、宿勿事にも、此條を引いてある、)石の萬葉集の歌のサ行變格活用の命令にわ、其

第一活用の「せ」に「ろ」を付けて「せろ」とある、是れわ「せよ」の例に見て、正當である、塵袋にも「せろ」とあるから、鎌倉時代までわ、そう云つて居たものである、今の世に「しろ」と云うようになつたのわ、いつ頃からの事か、何分、中昔の東國の言葉を書いた書物が無いから分らぬ。

室町時代

天正日記、天正十八年、六月廿六日、するがのもの、江戸へ御こし候はゞ、めしつれくれろと申て、七人參る。

江戸時代

恨之介、上、(慶長中) 夢の浮世をぬめろ、やれ、あそべや狂へ、皆人と、世にある貌はうらやまし。

ト養狂歌集、下、伊勢おどりのはやりければ、我君を、こゝで松崎、いせおどり、そこらでしめろ、まかせ腹帶。

後撰夷曲集、六、蕨の宿にて馬子どもの喧嘩するをみて、かれが心を、すなはち、奴子詞にてよみ侍りし、手を出せろ、折てくれべい、ばか面め、どこさ蕨の、しゆくの馬かた。同、十、修行門のこゝろを、當世詞にてよめる、宣應

（熊本）法の舟、ありか他力よ、身はすんと、南無阿彌陀佛に、任せておけろ‖。

今宮心中、（近松作）是れ奴、腸の出る程、こいつ踏め、任せておけろ‖と土足にかけ、

「置け」と云う四段活用の命令にも、「ろ」を附けてあるので、「ろ」の「よ」や」と同じものであることが知られる、しかし、今わ「置けろ‖」「讀めろ‖」などとわつかわぬ、又、後撰夷曲集、八、梅と牛とのかたかける繪に、「牛は是、二月の雪か、梅花をば、折て頭（かうべ）に、させい‖ひやうせい。」など、是れも「指せ」と云う四段活用の命令に、「い」を附けたのである。

雜兵物語、上、鎗擔小頭、腰骨をつよくして、おくれないやうに、覺悟をしろ‖。

同、上、數鎗擔、鑓のさやのちいさいをば、具足の胸板へいれろ‖。同、上、馬取、右の四緒（しを）手に、小鐵炮請筒ともに引付ろ‖、跡の四方手左右には、太豆袋をひつさげろ‖」。とくと氣を引しめろ‖」。とつくと氣をしづめろ‖。

○「お讀みな」お起きな」お受けな」お讀み」お起き」お受け」讀みな」起きな」受けな」など云う命令の言い方もあるが、それわ、後の敬譲の助動詞の命令の言い方の處（二九八）で云う。

○自分で、自分に言いつける言い方がある。

笑つてやれ　　え丶拾て丶置け

命令を、禁止につかうことがある。

馬鹿を云え　　嘘をつけ

過去のことばを、命令につかうことがある。

ちよつと待つた　　退いた〳〵

未來のことばを、命令にもつかう、但し、多くわ、叱り付ける時などである。

控えて居ろう　　出て失しよう

室町時代の狂言記、ひめ糊に「退り居らう、おのれがやうなる鈍な奴は、云々、」かさねて、折檻の加やうずる、そこ立つて失せう、」同、抜殻に「門の番なりとも、さして下されませう」同、鹿狩に「まづ御前へござりませう」同、墨塗に「あれへいて見う、」又、末の「う」を畧したのがある、狂言記の二千石に「夫へ出て聞き居ろ」同、末廣がりに「夫を求めて來るといふことがあるものか、あなたへうしよ」江戸時代の淋敷座の慰、のほ丶んぶしに「でつちもてこい、すり鉢笠を、こ丶さかぶさろ、獄門へ。」

【一三一】（一六七）（二〇三）（二〇五）（五五四）にも「な」がある。

【一三四】敬意を含んで居る動詞の中で「おめしあそばす」「おあがりなさる」などの外わ「お」を冠らせることわない、又「あがる」よりわ「めしあがる」「なさる」よりわ「あそばす」の方が、敬う心が深い。

○古事記、仲哀の巻、天皇、云々、押二退御琴一不レ控、云々、建内宿禰大臣曰、恐(カシコシ)、天皇猶阿二蘇婆勢(アソバセ)一其大御琴。

○平安朝時代

宇津保物語、國譲、日頃は、ひるは、御文あそばし、よるは、御手ならひ、あくまでせさせ給ふ。

源氏物語、明石、猶あそばさんやとて、秋風樂に掻合はせ、さうかし給へる、

南北朝時代

新千載集、雑、還幸の時、かの障子に、御製あそばしつけられて、

室町時代

幸若、烏帽子折、その笛、一手、あそばせ。」夜とゝもに、笛をあそばし、」一の的、ちやうと遊ばし、二の的、はたと遊ばす。

狂言記、吟聲、　聲殿に、一つ、音曲をあそばせと申せ。同、萩大名、いづれもの、御腰掛けられて、あの萩の名につけて、短冊を掛けさつしやる、殿様にも、遊ばしませい。

○鎌倉時代

宇治拾遺物語、七、　水飯を、やくとめすとも、此定にめさば、更に、御ふとり直るべきにあらず。

室町時代

狂言記、烏帽子折、　先づ下には、白小袖を召しませう。」熨斗目を召さつしやれたが、ようござりませう。同、吟聲、　こなたは、聲入をめさるれば、(なされば、)分別までが上つた。

江戸時代

正章千句、一、　うつぶいて、どうぞめされよ、(乘られよ)船遊。」(雜兵物語、上、鐵炮足輕小頭に、あだ玉をはじき捨てないやうに、はなしめされふ」。

などわ、助動詞のようである。)

○室町時代

狂言記、拔殻、いや、御酌、慮外にござりまする、これへ下されませう。同宗論、僧、云々、芋、云々、ずゐきを生ず、云々、芥子で、辛々とあへ、檀方がたで下さるゝ時は、尊うて、ありがたうて、涙がこぼるゝ。」事足らぬ御方へ參れば、燒鹽一菜で下さるゝ。

○室町時代

孟子抄、一、二五　カウ思召テコソヲシヤツツラウ、ト云レタ處デ、王ノ、マヅ、サウヂヤト云レタ。」是ガ、王者タルニカナフト、孟子ノヲシヤルハ、何トシタ事ゾ。

狂言記、吟聲、其時、おしやらうには、眞、內にゐらるゝか、聲が參りて候と、それ〳〵申せ、太郎冠者、ふやらの、ふやらの、ふん、とおしやつたがよい。同、拔殻、はて、ひよんな事をおしやれます。同、聲貰、さうおつしやるは、合點でござる。」こゝへは來ぬ、とおしやれい。」戻すまいとおしやる。

江戸時代

古今夷曲集、一、名所花、いつとても、よう來たとだに、おしやらぬは、をしほのはなで、人やあしらふ。同、十、題しらず、聖德の、後世を願へと、おしや

りしを、守屋はあべと、めをひろげたり。

後撰夷曲集、九、卑下慢が、餓鬼とおしやれど、力ありて、こゝろ言の葉、ようえびす歌。

鹿の巻筆、二、筆屋のじゆりやう、さて〳〵、旦那は、おろかな事をおつしやる。○敬意を含んで居る動詞に、「およる、」(寝る、夜をはたらかせた語)「おひんなる、」(眠覚めて起きる、「晝になる」の音便)「御寝なる、」(寝る)それを約めて「げしなる、」「ごろうじる、」(御覧ずる」の轉)「ごろんじやる、」「御覧ぜらる」の轉)「見える、」(來る)などゝ云うのもあるが、多く用いられない、鎌倉時代の著聞集五ノ十四に「月をも御覧せでおよるなれば、此御文まゐらするにおよばず」室町時代の閑吟集に、「をとせいで、およれ〳〵、からすは、月に鳴くぞ。」狂言記、靭猿に、「船の中には何とおよるぞ、苫を敷寐の梶まくら。」史記抄、十二、三七に、「透留モアルマイ、ヤガテミエウゾ。」狂言記、抜殻に、「是れ、ごろんじやれませい、鬼の抜殻でござる。」それ御らうぜられい。」江戸時代の醒睡笑、五に、「振舞過ぎて、碁始まれり、僧の俗にむかひて、いざ〳〵、よつて、ごろうじらう、と申さるゝ。」(命令に「ごろんじやい、」とも云う。)

○「おいでなさる」(來る、行く、居る、)「おやすみあそばす」(寢る、)「おかくれなさる」(死ぬ、)「おひろいあそばす」(歩く、)「おゝせられる」(言う、)「お」を冠らせぬ、)なども、敬意を含んで居る動詞であるが、かように、熟語として用いるばかりで、「いでる」と云う處わある、)「かくれる」ひろう」おゝせる」とわつかわれぬ「やすむ」わ「寢る」を丁寧に云う言葉となる、但し、「おいで」おやすみ」(此二語わ、命令にも用いる、)「おかくれ」おひろひ」おゝせ」と、名詞として用いることわある。

○「御召しになる」おあがりになる」おでになる」お讀みになる」御覽になる」御詮鑿になる」など、「になる」を附けて、敬意を含んだ意味に用いる言葉がある、但し、命令にわ用いぬ。

【一三六】「なさる」にわ、受身、可能、敬讓の助動詞の「れる」が、其第一活用形に附いて「なさられる」となるはずであるが、そうわつかわれないで「なされる」となつて、可能の意味にばかり用いられる、是れわ、可能の「勝たれる」讀まれる」が「勝てる」讀める」となるのと同じである。

「なさりかねる」くださりすぎる」など用いるわ、連用形である。

第二活用形に、過去の助動詞の「た」を附ける時「なさつた」くださつた」となるわ、

常のラ行五段活用の動詞と同じである、然るに、これを「なす」「なすつた」(なす)「くだす」「くだすつた」(くだす)とも云うことがあるが、用いぬがよい。

○「なさる」(くださる)わ、元と、「爲す」(下す)と云う四段活用の動詞の第一活用の「なさ」「くださ」に、敬譲の助動詞の「る、」が附いて、それが「れる」と變わつて「なされる」「くだされる」(下一段活用)となつたものが、轉じて五段活用となつたものである、それであるから、助動詞の「ます」が、第二活用形に附いて「なさります」「くださります」となるわ、四段活用の規則通りであるが、同じ第二活用形に附くはずである希望の助動詞の「たい」が「なさりたい」「くださりたい」(當人が望む心)とも、「なされたい」「くだされたい」(外から望む心)とも用いられるのわ、下二段の姿の、殘つて居るのである、敬譲の助動詞の「ます」も、元わ「なされます」「くだされます」と附き、過去の助動詞の「た」も「なされた」「くだされた」と附いたもので、其外「御酒がくだされる」など云うのわ、名詞となるので「ありがたいなされ方」數々のくだされ物」など云うわ、名詞となつたものと、名詞との熟語で、未來、推量に「さうなされう」これをくだされう」など、用いてあるのも、皆、下二段活用の姿である、(下二段に用いてあるわ、一三四の狂言記に見える、)

【一三七】「いらつしやる」の「來る」の意味のものわ、「入らせられる」の約まつたもの、(行く)の意味となるのわ、先方え入る意に用いるのであろう、「居る」の意味のものわ、「居らせられる」の約まつたもので、それが、五段活用に變わつたのである、一つの語に、「來る」行く」居る」の三つの意味のあるわ、紛れやすいが、前後の言葉で、解す外に、しかたがない、(「おいでなさる」おいでになる」にも、同じ三つの意味がある、幾内あたりでわ、「來やはる」行きやはる」居やはる」と云いわける)「おつしやる」も、「仰せられる」の約まつて、五段活用となつたものである。

右の二語の第一活用に、受身、可能の助動詞の「れる」を附けて、「いらつしやられる」おつしやられる」とも用いるが、多くわ、可能の意味で、「いらつしやれる」おつしやれる」と用いる、是れわ、可能の「勝たれる」が「勝てる」となり、「言われる」が「言える」となる、と同じである。

「いらつしやりかねる」おつしやりにくい」など云うわ、連用形である。

「いらつしやった」を「いらしつた」(いらしつて)などゝも云うが、用いぬがよい。

【一三八】【一三九】丁寧に云う意味の動詞に、又「おいたゞきもうします」おあげなさる」などゝ、「お」を冠らせることがあるが、「もうす」もうしあげる」いたす」つ

かまつる」うけたまわる」にわ「お」を冠らせることわない。

○「もうす」よりわ「もうしあげる」「いたす」よりわ「つかまつる」「あげる」よりわ「さしあげる」の方が、丁寧に云う意味が深い。

平安朝時代、續日本紀、三十「黒酒白酒の御酒、食倍るらぎ」催馬樂、酒飲「酒をたうべて、たべるうて」室町時代、狂言記、伯母酒「酒、云々、ちと休んでたべう。」同、烏帽子折「正月元日、出仕にあがらうと思ふ。」伊曾保物語「それをばエソポこそ、盗んでたべてござれ。」江戸時代、昨日は今日の物語「松だけなども、むざとたぶるは、いらざる事ぢや。」

鎌倉時代、吾妻鏡、元暦二年、四月二十一日「相搆可レ決二勝負由一、存二思之處一、士卒之所レ存、皆如二踏薄氷一。」室町時代、幸若、和田酒盛「よしもりがぞんじにはばつくんちがふて存ずる」。狂言記、烏帽子折「藤六、某、烏帽子紙の結ひやうを存じて居りまする。」同、ひめ糊「物の本の内にあるかと存ずる。」江戸時代、古今夷曲集、九「自らが、え持ちませねばたべたいと存ずるをりに、おきもいりかや。」（煎梹榔を贈られた返歌）

○敬意を含んで居る動詞の「くださる」（やる）を、丁寧に云う意味で、「食う飲む」に

用いることがある。

「寐る」を、丁寧に「ふせる」(五段活用)と云うことがある、鎌倉時代の砂石集、三に、「此子、云々、父トハ都テ寐候ハデ、母ドノミフセリ候。」室町時代の狂言記、鞍馬参に、「伏せりたさのまゝであらう、免す、いて休め。」

「参る」を音讀して「明日、こちらから參じます」など云うも、丁寧に云うのである。

【一四〇】「ござる」と云う動詞わ、「おます」に當てた文字の「御座」を音讀したのに、「ある」が附いて約つて「ござる」となつて、ラ行五段活用となつたものであるが、(今でも、畿内でわ「ござる」を、「おます」と言つて居る、)此語にわ「居る」「來る」「行く」「ある」の四つの意味があつて、いろ〳〵に用いられる。

先、打消の助動詞の「ぬ」を附けて「ござらぬ」と云うわ、四つの意味に通うけれども「ない」を附けて「ござらない」と云うと、「居る」「來る」の打消の意味にばかりなつて「行く」「ある」の打消にわ用いない、又、受身、可能、敬譲の助動詞の「れる」を附けて、「ござられる」と云う時も、「來る」「居る」の可能の意味ばかりで「行く」「有る」の意味とわならない、又、敬譲の助動詞の「ます」を附けて「ござります」と云う時わ「有る」の意味ばかりで「居る」「來る」「行く」の意味にわ用いられない、(「ござり」わ、中止形に用

いない、又「ます」を略して「さようでござい」(ある)などゝ、終止形に用いる事がある、又、過去の助動詞の「た」を附け、助詞の「ば」を附けて「ござつた」「ござれば」と云うわ、四つの意味に通い、又、命令に「ござれ」と云う時わ「居れ」「來い」「行け」の意味で「あれ」の意味にわ用いない、稀に「水でござれ、茶でござれ、飲む」などゝ云う時わ「あれ」の意味になるけれども、丁寧に云う意味わなくなる、又、未來、推量に「ござろう」と云う時は、四つの意味に通う、かように、活用形の意味が、分れ〳〵になつて、ひどく入り組んで居る上に、今わ「ござる」とばかりでわ、餘り用いもしないから、此語わ用いないことゝして「ます」を附けて「ござります」(又わ「ございます」)と熟語になつたものを「ある」の意味一つのものとして、敬語に用いることゝした。

室町時代

狂言記、宗論、こなたは、都はどこにござる(居る)ぞ」。同道いたさうと、御約束いたいてござる(ある)が、云々、こなたは、先へござれ。(行け)同、萩大名「御亭主ござる(居る)か。」冠者殿何としてござつた(來た)ぞ」。其事でござる。(ある)同、鹿狩、さあ〳〵ござれ〳〵、(來い〳〵)まづ、御前、先へござりませう、(行け)同、烏帽子折、若殿樣御出仕などゝござらう(あろう)時に御役

に立たうと存じ、」同、吟賞、さやうにござれば、(あれば、)太郎冠者を呼出し、申付けうと存ずる」。いつものやうに、見苦くしてござらず(居らず)とも、上臈衆も、身だしなみを、肝要でおじやる。

江戸時代

後撰夷曲集、一、元日、明けぬれば、ござる(來る)物とは、知りながら、猶めでたきは、けふの年德。」福の神、たづねてござれ(來い)我宿は、春早々に、松たてる門。同、一、よし野にて、ふむな〳〵、散りぬる花を、三吉野の、藏王の足も、あげてござれ(あれ)ば。同九、題しらず、何事も、見ざるきかざる、いはざると、よござる(ある)とさる、人の申しき。

○「ござります」が崩れて「ござんす」となることがあつて「ござんせぬ」ござんした」ござんす」ござんしょう」ござんせ」と活用し、「ござんすれば」がない、)專ら、「ある」の意味に用いられ、唯「ござんした」を「來た」の意味にも用い「ござります」にわ、命令の「ござりませ」を用いないが、これにわ、命令に「ござんせ」があつて、「來い」の意味にばかり用いられる、此語も、かように、活用形の意味が、まちまちである上に、今でわ、婦人に限る語のようになつた。

江戸時代

柳亭記、下、（百林說林、續下、二）　藥師通夜物語（寛永廿年印本）に、この頃は、又、よござりませうなう、といふ事、はやりければ、頓て、日出度よき事のあるべし、といふ事あり、又、百物語（正保年間作歌、大小二枚あり、）下の卷に、世の中の時勢（はやり）詞を、俳諧にしたるとて、百韻、人の見せける、其中に、をかしき句あり、とてかたるを聞けば、おしるには、よござんせう（あろう）「山椒」の、からみにて、あへ物によき、あのさまのうど。

松の葉、二、長歌、ふじまうで、　ひやうたんを腰につけて、みづあそびもござんす。（ある）　英一蝶の投節、　どふ思うて、けふはござんした（來た）そふいふことをきゝに、

「ござります」が「ござんす」となり、又、「ござんす」「ごんす」「ごす」「げす」など、いろ〳〵に崩れかわることがあつて、「で」と合つて、「でござんす」「でんす」「です」などゝもなる、そのくわしい事わ、後の指定の助動詞の處で云う。

【一四一】「御目にかゝる（會う）」「御目にかける」御覽に入れる（見せる）「御用立てる」（貸す）「まかりでる（出る）」「御許しを蒙る」御免をこうむる（許される）など、句で丁寧

に云う語もある、又「たてまつる」(やる)と云う語もあつて、助動詞のように、「待ちたてまつる」などゝも云うが、多くわ用いられない。

【一四三】【一四四】丁寧に云う意味の動詞わ、他人の動作にかけて、「はつきりとまうせ」さよういたせ」などゝ命令に用いるけれども、自分の動作についてわ、命令に用いることわない、「ござります」わ「ござりませ」と、命令にわつかわない、尚其外、命令の事、又、其用例わ、(一三四)以下の諸項に云つてある。

命令に、口語で「なされ」くださる」いらつしやれ」おつしやれ」と言わぬこともないが「なさい」ください」いらつしやい」おつしやい」の「い」は「れ」が「え」となつて、又「い」と變わつたのか、又わ「なさいまし」くださいまし」いらつしやいまし」おつしやいまし」の「まし」を略したものか、分らぬ。(敬譲の助動詞の「ます」の命令を見よ)

助詞の「な」「よ」を附けて、命令の形にする事もある、それも「い」に附く。

なさいな　くださいな　いらつしやいな　おつしやいな

なさいよ　くださいよ　いらつしやいよ　おつしやいよ

又「見て頂戴」(丁寧に)などゝ、敬語の命令につかう事がある、(多くわ、東京の婦人に用いられる)又「見て御覧」(敬つて)などゝも云う、是等わ「見ていたゞく」見て試

よ」と云うを、漢語の「頂戴」御覽に言い變えて、命令にしたまでのものである、又、「いたゞかせて頂戴」などゝ、願う意の敬語ともする。

形容詞

【一五一】形容詞の活用わ、次のように、文話と口語と變わつて居る。

第一種活用				
高く	高し	高き	高けれ	文語
高く	高い	高い	高けれ	口語
第二種活用				
嬉しく	嬉し	嬉しき	嬉しけれ	文語
嬉しく	嬉しい	嬉しい	嬉しけれ	口語

「高し」「高き」の「高い」となつたのわ、「し」「き」の子音が默つて、母韻ばかりとなつたので、「嬉しき」の「嬉しい」となつたのも、同じことである、又「嬉し」の「嬉しい」となつたのわ、連體形が、終止形を兼ねるのであろう、(或わ「し」の韻を引くのか、)口語が、かように變わつて居るのわ、日本全國すべて、同じである。

文語でわ、上に「こそ」の掛りがあれば「高けれ」嬉しけれ」と結ぶのを、通則とするのに、奈良朝から前にわ、日本書紀の仁徳紀に「衣こそ、二重も豫者」。（善き）同、天智紀に「鮎こそは、島邊も曳岐」。（善き）萬葉集、六に「宜しこそ、見る人毎に、語りつぎ、偲び家良思吉」。（「けらしき」わ「けるらしき」の約まつたので、助動詞であるが、同じことである。）同、十一に「己が妻こそ、常目頬次吉」。（常に愛らしき）同、十一に「最今こそ、戀は爲べ無寸」。同、十二に「玉釧、巻き寝し妹も、あらばこそ、夜の長けくも、歡有倍吉」。同、十七に「野を廣み、草こそ之既吉」。（繁き）などゝあるように、專ら「き」しき」で結んで「けれ」しけれ」の活用わ無かつた、但し、萬葉集、五に「己が身し、勞斯計禮婆、同書、八に、約めて「戀之家婆、形見にせむと」などゝも、稀に見える、是れわ「いたはしくあれば」の「しくあれ」が「しかれ」と約まつて、又「しけれ」と轉じたものらしく、是れが、平安朝になつて、廣く用いられて、遂に「けれ」しけれ」の活用となつたものと思われる。

○形容詞の語根わ、種々に用いられる。

終止形に用いられるのわ、

おゝ寒　　おゝ熱　　あゝ痛

名詞に用いられるのわ、

長の暇　　高が知れぬ

女子の名に、

高　近　久、

二つ重なるもの、

遠淺　薄赤　高低　久々の對面　近々の事

男子の名に、

清高　重遠　近長

他の語と熟語となるもの、下に用いるのわ、

待遠　面長　身重　事多　夜寒　叢濃

上に用いるのわ、

遠路　長袖　高笑い　長生き　早咲き

嬉し涙　新らし物　怪し火　久し振

形容詞の上に用いるのわ、

細長い　薄暗い　面白おかしく

動詞の上に用いるのわ、

長引く　遠退く　多すぎる　好すぎる　涼しすぎる

接尾辭を下に伴うものわ、

遠さ　痛さ　嬉しさ　いそがしさ

寒け　憎げ　卑しげ

高み　厚み　をかしみ

面白そうに　嬉しそうだ

「好無」に「そう」を添える時わ、間に「さ」を入れる。

よさそうに　なさそうだ

室町時代の孟子抄、一、三一　「大晩立ガシテ、サウアレバ、此間、カレ伏タ苗ガ、心ヨサウニナルゾ」。同、一、三九　「別ニ願フ事モナサウナガ、不審ニ候」。同、十四、三　「革車、云々、虎ノ様ナケナゲ者ガ、三百人有ゾ、三百人ト云ガ、ヨサウナゾ。」江戸時代、醒睡笑、四「あのひとのことであらうづれ、勿體なさうにと、」同、四「それやうに、あいだてなさうに、物はいはぬものぢや」。などゝ、古くわ「さ」を入れぬも見えるが、室町時代、狂言記、柿山伏「美事な柿、云々、どれに致さう

ず、いや、これがよささうな」。同、末廣がり「あれから、つゝとあれまで、中よさささうに、軒と軒と建並べた」。同、宗論「あれへ、よささうなる道連がゆかるる。」江戸時代、醒睡笑、六「さなくとも、常の事にてはなささうなり。」後撰夷曲集、八「それ〴〵に、心をよせて、釣針の、いとまささながら、なささうな歌」。などゝ「さ」を入れてもある、後の六一六の接尾辭の「そう」を見合わせよ。

又、稀に、動詞にも續けて「愛敬が無さ過ぎる」。などゝも用いる。

又、打消の助動詞の「ない」にわ、その語根の「な」から「出來なそうに」つまらなそうだ」勝てなそうで」などゝなるのを「出來なさそう」つまらなさそう」勝てなさそう」などゝ云うことがあるのわ、形容詞の「無さそう」の用法に釣込まれるのである、又「穢なそう」危なそう」の「な」わ「きたない」あぶない」の語根で「無い」の意味も、打消の意味もないのに「きたなさそう」あぶなさそう」などゝ云うわ、全くの誤であろう。

○種々の語を、形容詞にすること、

重々しい　　輕々しい　　痛々しい

「待遠い」を「待遠しい」とも用いるは、珍しい。

馴れ〳〵しい　晴れ〳〵しい

物々しい　事々しい　花々しい

麝陶しい　美々しい　福々しい　毒々しい　騒々しい

凛々しい　仰々しい　徐所々々しい　ばか〳〵しい

黄色い　四角い　面倒い

○「同じい」と云う形容詞わ「同じ物」「同じ年」「同じである」など丶、語根でばかり用いられ、又わ「ん」を加えて「おんなじ人」など丶も云い、「じ」を母韻ばかりにして「おない年」など丶も云う、又「兄も勉強する、弟も同じく勉強する。」など丶、其第一活用を、副詞に用いることもある。

狹衣、二、　只大將の御おなじかほにて、

【一五二】「好い」の終止形連體形を「えい」とも云うのわ、全國、殆ど混用である、（京都わ「よい」「えゝ」、大阪わ「えい」「えゝ」）「いゝ」は、東京府、埼玉縣、千葉縣、茨城縣、神奈川縣、靜岡縣、山梨縣、長野縣で云い、尚、越後、三河、福井縣、香川縣の大川郡、因幡、福岡縣、大分縣でも云い、宮崎縣に多く、沖繩縣もそうである、そうして、大抵「よい」「えい」を混用して居る、殊に、中國の西部、四國、九州の半わ「えい」である、又「えい」を「えゝ」

と云う所が多い。（天智紀、二十の「曳岐」、又わ「日吉」住吉（すみのえ）などの「え」も「よ」である。）

○「よい」の「えい」い〳〵と變わつて居るもの（「ゐ」とあるも「え」である。）

平安朝時代

類聚名義抄、言部、善、エ

室町時代

史記抄、三、三　今時ノ人、文章モ詩モ、エイト云テ、云々、同、三、二〇　ヘタノカク文章ガ、云々、此等ハエイ、トノ事ヲ、チヤツ〳〵ト取テカイタゾ。同、十五、二三　如此傳ヲ立ル中ニ、六經ヲエイト沙汰シテ、見セタゾ。

狂言記、聟貰、父様（ごさま）何爲（なし）に往にませうぞ、おうしたらゐいわ。同、宗論、先づ、念佛しゆ致したがゐい。

江戸時代

犬子集、春、上、梅はたゞ、いゝ木の花か、あはせ香。」連一、（畿内邊の人、）

淋敷座之慰、江戸まんざい、たかき屋に上りて見れば、いゝ煙、民のかまどは、にぎはひにける。

雜兵物語、上、沓持、馬、云々、夜も立ちづめて、ふらせないがゐひぞ。同、下、荷

宰料、煮てくらつたもゐいもんだ。

【一五五】「夜が長くある」「それわよくない」「物がなくなる」などゝ用いるのわ、連用形である、間に、助詞の「わ」も」を加えて、「夜が長くわある」「それわよくもない」などゝも用いる。

○「日が長くて退屈する」「嬉しくてたまらない」などゝ云うのわ、「長くあつて」「嬉しくあつて」と云うのを略して云うのであらう。

これを、「長くッて」「嬉しくッて」とも云うが、用いぬがよかろう、雑兵物語、下、矢箱持「昨日、いすてた箭も、つかんでみるに、根の込入がゆるくつて、矢と根と、二ッに成てこぼれた。」同、又、馬取、彦八「數を多く引付ければ、夫れもいひづらくつて、わるいもんだ。」

【一五六】「くあ」が「か」とつゞまるのである。

○鎌倉時代

平家物語、九、老馬の事、足立のよからう方へむかはう。

室町時代

史記抄、五、三八　威勢ガ、イカメシカッタゾ。同、六、一八　劉季ト書タラバ、

ヨカリサウナヲ、同六、二七　人々、自堅カラウト云タホドニ、同八、三一　穀米ノヨキコソ、靈芝ヨト云タ天子アリ、徽宗ノ時分ニ、ソヨク多カツタゾ。同十、二七　齊ノヨワカツタ事ゾ。同十一、二九　信陵君ガ、我ガ父ノ讎ヲ報テクレウハ、ヤスカラウズニ、報テクレヨカシト云テ、同十一、九八　陳涉バカリ、王ニナツタラバ、天下ノ人ガ、モノグサカラウ。孟子抄、一、九　句ノ如クニ心得タラバ、ワルカラウゾ。同、一、一二　諡ハ、古ハ、ナカツタ。同四、一三　孟子ノ、母ノ喪ノ事ニ、イソガシカツタ程ニ、ト云心ゾ。

閑吟集、見ずば、たゞよからう、見ざりやこそ、物を思へ、たゞ。

狂言記、柿山伏、そのづれな事を云ふならば、爲にわるからうぞよ。同ひめ糊、この樣な物ではなかつた。同、二千石、さう云う者に、何が惜しからうぞ。同、佛師、餘り高う作つて、此樣にして拜むも、腰が痛からう。

狂言記、烏帽子折、これは、映え合ふてよからう。

伊曾保物語、甘い物を喰うた上なれば、何かはよからう。

江戸時代

昨日は今日の物語、此まじない、ちとおそくば、あぶなかつたが、さりとては、天下一程ある。

醒睡笑、一、鼠が着た物をふまば、むさからふ。同、六、雷、酢をくうた人、云々、味は、あまいか、すいか、と問ふに、ちと、雲くさかつた。

東海道名所記、六、心の内に、うら山しからう、といへば、

古今夷曲集、五、三日月の、影ますやうに、明日よりは、猶よからうと、いはふ春かな。

後撰夷曲集、五、君が代は、ほにほがなりて、年々に、めでたからふよ、久しからふよ。

諸國盆踊唱歌、大和、「わかいせなごの、ぐわんかけるのは、神や佛も、おかしかろ」。同、和泉、「つきようたてや、やみならよかろ、またぬまにきて、かどにたつ」。同、攝津、「ことし世がようて、ほにほがさいて、とのも百姓も、うれしかろ」。

雜兵物語、上、草履取、乘た馬に、切先を切付て、手負馬がおほかつた。同、挾箱持、おれが脇差の柄は、お江戸を出る時、あたらしかつたが、毎日々々、

手袋の金物にあたつて、そのまゝ、柄糸が切れた。

「少からぬ手當」けしからぬ話」よろしからぬ事だ」惡しからず思召せ」遠からず參りましょう」など云うも、是れである、それからして、「よかれあしかれ」しかたがない、」遲かれ早かれ」出來るのだ」などゝ、命令の形で、「そのまゝでまゝよ」の意に用い、又「とかく世間に事なかれ」などゝ、眞の命令の意に云うこともあるが是等わ、文語の殘つて居るので、多くわない。

又「無理からぬ話だ」などゝ云う言葉をつかう人もあるが、大きな間違で、「無理ならぬ」と云わねばならぬ、「よかりそうに」なかりそうだ」と云ふ言い方もあるが、(前に記した史記抄の例に、一ッ見える、)東京でわ、「よさそうに」なさそうだ」と云う。

【一五七】「く」の、「う」となるわ、「く」の子音を言わないで、母韻の「う」ばかり言うのである、第一種活用にわ、「ようこそお出でになりました」お暑うございます」お寒うございましょう」お心安うねがいます、」第二種活用にわ、「よろしう召しあがれ」おいそがしういらつしやいましょう」うれしう思います」めづらしう拜見しました」など云う。

阿段の音を、於段に變えるのわ、「あぶのう(なく)ございます」ありがとう(たく)存じます」おはよう(やく)お歸りなさい」日がなごう(がく)ございます」などである。又、下の語を略して、「御機嫌よう」御機嫌よろしう」おめでとう」おはよう」ありがとう」などゝ、言切ることがある。

此「く」を「う」と云うわ、東京でわ、丁寧な物言いの時に限つて、「疾うに行つた」疾うから知つて居る」などわ、例外である、其外わ、すべて「く」と云う、丁寧に云う場合に限つて「う」を遣うのわ、丁寧な物言いにわ、古く上方言葉を遣つて居た名殘であろう。

○「よくなる」長くかゝる」嬉しく思う」新しく作る」よくて」嬉しくて」などゝ、文語のまゝに「く」と發音するは、關東、奥羽、松前、靜岡縣、山梨縣、長野縣と、越後の一部であつて、尚、佐賀縣の唐津、宮崎縣の延岡、其外、諸處でも云い、そうして、沖繩縣でも「く」と云う、其外、愛知縣、岐阜縣、富山縣、越後の一部から、西は九州まで、すべて「よう」なる」長うかゝる」嬉しう思う」新しう作る」ようて」嬉しうて」であるが、愛知縣、富山縣、出雲、高知縣に「く」をまぜて云う所がある、因て初わ、兩立させるように案を立てたが、決議の末に「く」とすることゝなつた。

武藏の川越で「ようなる」嬉しう思う」と云い、愛知縣、富山縣、京都、大阪、丹後、宮崎縣、鹿兒島縣に「く」も「う」も云わず「長なる」寒なる宜ない」などゝ云う所がある、又「ようして」嬉しうして」と云う所が、福岡縣、肥前、熊本縣、宮崎縣にある。

○「く」の「う」となつたもの、(「ふ」とあるも「う」である。)

平安朝時代

類聚名義抄、媚、ツックシウス、分、ヒトシウス、崇、タカウス、

竹取物語、うつくしうおはするにて知りぬ。

宇津保物語、樓の上、いとちいさくて、かしこうまふもの哉。同、初秋、ねたうも、まけ奉りぬる哉。

蜻蛉日記、下、びゃしうもてなし給ふとか、世にいふめる。

神樂歌、早歌、最將、奈加宇天、(長くて)

源氏物語、桐壺、いかめしう、その作法したるに、同、帚木、いみじう、みぞれ降る夜、同、夕顏、風あらゝしう吹きたるは、

枕草子、五、只夢のこゝちし、あさましうあやなし。

成唯識論、(石山寺藏、後一條帝、寛仁四年)命短

後拾遺集、戀、三、　かれ〳〵なるをとこの、おぼつかなういひたりけるに、

大慈恩寺三藏法師傳、（興福寺藏、鳥羽帝、永久四年、）　健（ソヨ〳〵シテ）

今昔物語、二十九、伯耆國府藏入盜人被レ敎（コロサ）語、　然ルハ、痛ウ云タル奴ナレバ可レ免（ユルス）放キニ、口惜キ態シタリ。　同二十九、九條堀河住女敎レ夫哭語、　早ウ此女ハ、密夫ト心ヲ合セテ、實ノ夫ヲ敎シテケル也ケリ。

童蒙頌韻、　蒙、クラウシテ、　聰、サトウシテ、　窮、マヅシウシテ、　嬉、ウルハシウシテ、　端、タヾシウシテ、

金葉集、雜、上、　いかに、心もとなうおぼすらむ。

梁塵祕抄、二、二句神哥、　こひしくば、とう〳〵　おはせ。

鎌倉時代

新古今集、十四、　はやう物申しける女に、かれたる葵を、みあれの日遣しける、

平家物語、一、禿童の事、　しゆくびやう、たちどころにいへて、天命をまつたうず。　同、一、妓王の事、　たうじ、めでたうさかへさせ給ふ平家太政の入道殿、　同、七、實盛最後の事、　心は猛（たけ）う進めども、」　やさしうも申したり、

定家假名遣、おだしう、穩、むくつけう、蠢、心うつくしう、心嚴、うれしう、嬉、あぢきなう、無常、すげなう、無人望、からうじて、辛、遊仙窟、遙、トヲフシテ、險峻、サカシフシテ、拙、ツタナフシテ、字鏡集、凄、サムウシテ、混、オナジウシテ、粗、アラウシテ、古今著聞集、三、屏風は、うるはしうひきのべつれば、同、六、誰人ならんと、人々、あやしう思ひあへるに、砂石集、二、汝、人間ニ生ジテ、思出モナフシテ、命ヲ失ン事モ不便ナレバ、假名論語、季氏篇、いま、それ、せんゆ、かたうして、ひにちかし。（今夫顓臾、固而近於費、）同、子路篇、かならず、な、たいしうせんか。（必也正名乎、）

南北朝時代

平他字類抄、周、アマネウ、

室町時代

義經記、土佐房、義經の討手に上る事、まづ、めづらしう候江田殿近うまいれと、めしけれども、同、義經都落、判官、いしうも申たる者かな。曾我物語、呉越の戰の事、智ふかうして、才たかき事、いよ〳〵、心をむつま

じうし給ひけり。」死をかろうしてたゝかふ。

幸若、百合若、蒼天廣う遠うして、月の出づべき山もなし。同、硫黄が島、

執行が事においては全う淨海は知るべからず。

史記抄、六、六六　呂后ノ性ガコワウテ、女ノ樣ニモナイゾ。同、八、四一　山ガ、ヒキウチイサウテ、同、十、一九　物ノヨイワルイ事ヲ、ヨウセウズカワルウセウズカヲ辨ズル事ノ難ト云ハ、

孟子抄、一、一九　毛色モ、ウツクシウウルハシウテ、禽獸モ遊ゾ。同、一、二九　省ハ、刑ヲウスウカロクスル事ゾ。

人國記、山城國、城州ハ、其水潔フシテ、萬色ヲ染ケルニ、

守武千句、あふぎに似たる、もちいなりけり、」あぢきなや、何故いたう、こがすらん。

運歩色葉集、(甲)　強、シウ子ウ、

元龜字叢、　浚、フカフスル、

狂言記、墨塗、　わらはを、うるさう思召して、同、宗論、　連れ欲しうて、こゝに休らふて居ました。」苦しうなくば、御供いたしませう。同、相合袴、

【一五七】　形容詞の第二活用形「くを、うと云うこと

めでたう、智殿の立姿、見たうござる。同、拔殼、此樣に、お氣をつけられますを、傍輩共も、いかう、けなりう(美ましく)思ひまする。

伊曾保物語、側近う使はるゝ二人の小姓、大きな荷、云々、これは、當時、重くとも、やがて、輕うなるものぢや。

江戸時代

昨日は今日の物語、どこらが、いとう御座る、ととひければ、おびしより下がいたい、といふ。

徒然草抄、上、イカヤウニ、ソシリワルウイハウトモ、クルシカラヌ也。

倭玉篇(乙)媚、ウツクシウス、嗹、ムツマジウス、快、タクマシウ、

醒睡笑、三、作意ある人のかふ犬あり、名を二十四とつけたり、云々、何としたる子細にやととふ、しろく候は、さて〳〵、げにも〳〵とかんじ、家に歸り、しろ犬をもとめ、二十四とよぶ、いかなる心持ぞとたづねられ、しろう候ぞ。同、五、東の奥より、都にのぼりたる人あり、さる古寺に立寄り、院主に參會し、云々、お茶を、もみぢにたてよ、とありしを、客、何たる仔細にやと問ふ、たゞ、こうように、といふ事なり、とあり、おもしろきことの葉や、と

おぼえつゝ、本國に歸り、云々、お茶をもみぢにたて申せ、とあり、人々、事の趣をうかゞひたれば、こくよくたて申せ、といふ言葉よ。

太閤記、二、何となふ物悲しうぞ覺えたる。同、三、年わかうして、勇がちなる人々は、

犬子集、七、春、有がたう、ひらけ初る、比叡山。同、十六、魚鳥、鷄や、さむうてやねに、のぼるらん。

正章千句、一、鶯、左義長を、夥しうも、はやしたて、同、六、七夕、まつ黒雲に、月ほそう見ゆ。同、七、秋螢、胡蝶は春の雪によう似た。

をぐりの判官、一、うつくしうしたゝめたる文、一つう、同、二、三郎殿の御出、しう着申て候と、安うりやうでうなされける。

諸國盆踊唱歌、三河、さまの心は、なせうすうなる、こゝはやつはし、かきつばた。同、肥後、よいにみそめた、しらはのむすめ、ようもなりそな、うりのつる。

諸國盆踊唱歌、和泉、ひとはわるない、わが身がわるい、やぶれぐるまで、わがわるい。同、志摩、思ひきらしやれ、もうなかしやんな、さまの

戀ぢは、うすござる。同、美作、近江の笠は、なりがようてきよて、しめをがながうて、きよござる。同、讃岐、みすじふろが谷、朝さむござる、こたつやりましよ、炭そへて。

合類節用集、緩、ユルフス、同、ヲナジウス、

○「無くて」「無くなる」などの「く」を「う」としたのわ、室町時代、狂言記、釣り女に、「妻ではなうて、何やら、竹の先に、繩がつけてある。」江戸時代、醒睡笑、六に、「伊勢の國をのぞきたる事もなうて、いくたびも、參宮したるよしをはなす者あり。」犬子集、一、春、上に、「聲なうて、人よぶ梅の、にほひ哉。」同、十五、雜、下に、「氏なうて、關白迄やあがるらん。」古今夷曲集、六に、「旅衣、たちぬる寺に、茶はなうて、のみてこそゆけ、さゆの中山。」後撰夷曲集、二に、「吉野なる、かやのおが屑、ふすぶれば、かもなうなりし、山かげの庵。」などゝ見える、しかし、これを、發音のまゝに書けば、「のうて」「のうなる」となつて、語根まで變わることゝなる。

【一五八】「遠くをながめる」わ、「遠くある所を、近くへ移る」わ、「近くある所へ、多くの寶」わ、「多くある所の、」「おそくまで、はたらく」わ、「遲くある時」を略したのであろう、「遠くの親類、近くの他人、疾くの昔、全くの誤」などゝも云う。

【一六〇】第一種形容詞の文語の終止形の「し」の「い」となつたものゝ(「ひ」とあるも「い」である。)

鎌倉時代

平家物語、五、本、(延慶本)宇治川合戦、嫉イ、サラバ、景季モ竊ムベカリケルヲトテ、云々、

定家假名遣　さがなひ無惡、いさぎよひ潔、

室町時代

幸若、笈さがし、宿に着きぬれば、腰が痛いなんどとて、

史記抄、二、六二　東夷ガ平デ、メデタイトテ、來賀スルゾ。同、五、三〇　イヤ〳〵、コワイト云テ、其ヨリ後ハ、見相モセラレヌゾ。同、六、五三　且ハ、ナサケナイトモ云ヘキゾ。同、十、三三　疽ヲ吮ワレタレバ、アリガタイト云テ、一命ヲ棄テ、同、十、七五　齊ノ君ヲ、ワルイト云ワウ用ゾ。

孟子抄、一、二　是ヲ以テ、非魯ニ云ガヨイ、ト云ヘ共、貌バカリデハ無イ、瑞相ガ有テ、聖人ノ心ガ有タゾ。同、一、三二　政ヲセウモノハ、人ヲ刑罰セイデハ、カナハネドモ、殺ストモ、カナシフテ、カワイイト思フモノガ、是ヲ

一ニセウゾ。

閑吟集、　醫の中へ、身をなげばやと思へど、底の邪蛇(蛇か)がこわい。

異本節用集、　屑、ツタナイ　麁、フトイ　聰、サトイ　厠、キタナイ、

狂言記、宗論、　其方の宗體を、世間で、情が強いといふ。」只、南無阿彌陀佛とさへ唱ふれば、決定往生、疑ひが無い。同、柿山伏、　柿、云々、先、たべて見やう、されば、こそ澁い。」先かうして置いたがよい。同、烏帽子折、　汝等、忘れたは憎けれども、囃事が面白い。同、薩摩守、　あゝあぶない、こなたは、終に船に乗た事がない、と見えた。

節用集、(丙)　麁、フトイ、

詠歌之大概、　秋の露、たもとにいたく、結ぶらん、いたくとは、事外と云心也、事外、身にいたいと云也。

江戸時代

昨日は今日の物語、　世には、あぶない事がおほい。」けさも、とつくりをふつて見て、酒がないとて、さけのみを參りて、今に、かほがあかい、と申た。」

さて〳〵、かたじけない、さやうにおぼしめし候へば、生々世々、忘れがた

い‖。

徒然草抄、上、平生、無嗜ナレバ、ヲルイ‖ト云心也。

醒睡笑、四、こしをひく人を見て、そなたの足は、つれに、片足みじかい‖と問ふてあれば、いや、かたあし、人のよりもながい‖といふた。同、六、あ、聲がたかい‖、ひきう〳〵といふ。同、七、能を見に行き、云々、津のくに高砂の浦をも、一見せばやと存じ候、といひければ、云々、今の人は、一間せばい‖、というたは、おもしろい‖。同、八、こなたのお仕合は、殘る所なし、何事もおめでたい‖。

かたこと、二、何のへんもなひ‖、といふことを、へんてつもなきといふは、くるしからぬ言葉にや。

諸國盆踊唱歌、山城、いとまくだされ、後日はまたぬ、あすはくろ日で、ひがわるい‖。同、和泉、もみぢふむしか、にくい‖といへど、こいのふみかく、ふでとなる。同、遠江、ゑんしうはままつ、ひろいようでせまい‖、よこにくるまが、二てうたゝぬ。同、薩摩、志賀からさきの、名はよけれ、一つまつとは、きくさへつらい‖。

淋敷座之慰、のほゝんぶし、小紫とは、誰名を付た、色にそみては、うへがない。

○第二種形容詞の終止形の「し」の「しい」となつたものゝ、

鎌倉時代

定家假名遣、ゆゝしい、世にすぐれたる心なり。

字鏡集、滂ウックシイ、

室町時代

嚢抄、二、指過たる事を、ギョウ〳〵シキト云は、何れの字を可用ぞ、業々とすべき歟。

孟子抄、一、二六　穆公モ、アサマシイ、カウ遺言シタゾ。

閑吟集、いとおしいといふたら、かなはふず事か、明日は又讃岐へ下る哉。

運歩色葉集(甲)寒、スサマジイ、

異本節用集、嶮、ケハシイ、岨、サガシイ、

狂言記、釣狐、おう嬉しい、是れもそなたの爲ぢやぞや。同、宗論、あゝ穢らはしい、何と致さう。」あゝ喧しい、何事ぢや。同、二千石、故もないに、

成敗したとあつては、後難が口惜しい。同、胸つき、二三日と云ふても、又、延々になれば悪しい、どうあつても、今日は、是非とも同道する。同、墨塗、太郎冠者か、よそ〳〵しい。同、靱猿、猿、きやあ〳〵、わゝしくば、わゝしいと、初からおしやつたがようおりやる。

江戸時代

倭玉篇(乙)　倚、タノモシイ、憙、ウレシイ、欲、ホシイ、

醒睡笑、五、思ひいだしたれば、をかしいと申した。同、六、餅をくひ過して、むねのやくるがくるしい。同、七、我は、たゞ生れつきたる兩眼の外に、目を、三つほしい。

後撰夷曲集、九、椋橋の里にて、世におもき虚勞の病をいやせるを見て、かく申遣し侍りける、うらめしい、どうともならぬ煩が、なほれば繋ぐ、馬のくらはし。

卜養狂歌集、下、たまはりし、木地三つぐみの、ぬりものは、うるしいと〳〵、かたぢうけない。

諸國盆踊唱歌、大和、はやるかんざし、かみかたちより、すぐな心が、うつく

しい。同、河内、いちやおつるは、よもやすけれど、身より大事の、名がおしい。

○第一種形容詞の終止形を、文語のまゝで用いることがある、それわ、「痛し痒し」「帯に短し、襷に長し」「丁度よし」「勉強するがよし」「それならよし」「此上なし」「構いなし」「現金懸直なし」「見ぬこと清し」「見るものわ、何もなしさ」「おゝよし〳〵」「赤子の泣くをなぐさめるに」「暗さわ暗し、挑燈わなし」「氣も輕し、心もよし」「旨くいけば面白し」「間違つてもおかしくてよし」「讀ませれば早し、書かせれば遅し」など云うので、これわ、續後撰集、十七に、第二種でわあるが「人も惜し人も怨めし、あぢきなく、世を思ふ故に、物思ふ身は」などゝある文語の姿の、まだ殘つて居るのであろう。

室町時代

狂言記、宗論、夜も長し、夜もすがら、宗論をして、云々、

江戸時代

醒睡笑、六、柿のじゆくしたる、四つ五つ、殘りあるを、われくはん、たれくはんと、くらひては多し、柿は少し、所詮、年老次第にくはんと云。

雑兵物語、上、鐵炮足輕小頭、　馬上の敵は、先、馬をはじいて、後に、人を打つがよし。　同、下、玉箱持、　力もなし、せおひものはおもし、から箱は役にたゝず、矢箱の役には、がいにおとつたことだ。

「氣も輕し、辯もよし、面白い人である、」などゝ云うときわ、「氣も輕くあるし、辯もよくあるし、」（助詞の「四、三八、」）の意味で、中止形のようにつかわれるのである、しかし、是れわ、多くは、「氣も輕いし、辯もよいし、」とつかわれる。

又、右の終止形を、名詞に用いることがある、「心なし、」「父なし」「お心よしの人」よしあしをきめる錢なしでわ、何も出來ぬ、」「何もごぞんじなしでいらつしやる」まだ案じなしだが、何とか考えてくれ、」又、人名に、「清篤高」などゝ用いる、又、「父なし子」「餡なし饅頭」などゝ、名詞と熟語にすることがある。

又、「なし」に、「に」を添えて、副詞句に用いることがある、「遠慮なしに云う」「何となしに面白い」「仕方なしにする」分けへだてなしに照らす。」

○第二種の形容詞の終止形も、文語のまゝに用いることがある、「おゝ苦し」それでよろし」やれ〳〵嬉しや、」又、人名に用いることもある、「正齋」「久」

○又、終止形を、「しゝ」とすることがある、それわ、「晝わいそがしゝ、夜わねむし、」「獨

でわ淋しゝ、連れわなし、河豚わ食いたし、命わ惜しゝ」など云うのである。

「品わ欲しゝ、持つて歸るもおかしゝ、どうしたものか、など云うのわ「欲しくもあるし、おかしくもあるし」（助詞の「四三八」）の意味で、中止形のようである。古くは、第二種形容詞の語尾に「しゝ」と云う活用わない、中世から出來たものである。

平安朝時代の初の新撰字鏡（十二卷本）の一の廿五に「僥、太々皮（波）志之」同、十二の廿五に「喜見、彌萬久保志自」など、あるわ研究ものである。

平安朝時代の末の頃の基俊集に「家苞に、さのみな折りそ、さくら花、山の思はむ、ことも恥しゝ。」「はづかし」とある本もあるそうだ）永長二年、東塔、東谷歌合に「秋深み、夜風烈しゝ、宜しこそ、四方の里人、衣打つなれ。」鎌倉時代の源平盛衰記、祇王祇女に「祇王にも劣らず、歌の音のよさよ、美しゝ〳〵、と嘆られたり」。同、南都合戰に「折節、風は烈しゝ、炎の本は、一つなりけれども、吹迷ふ風に、多くの伽藍に吹きかけたり」。同、逆艫に「友あらがひ、其詮なし、平家の漏れ聞かむも、をこがましゝ」。同、（長門本）三位入道入寺に「競は、渡邊黨の其一、王城第一の美男なり、右大將の裏築地の中より、朝夕、出入する、欲しゝ

欲しゝと思はれける、云々」。無住法師の雜談集、三、(伏見天皇の頃)は「何物も、常に見ゆるは、厭はしゝ、いつも飽かぬは、粥と大乘」。などゝ見える、室町時代かちわ、多く見えて、曾我物語、あさまのみかり「笠の内、あやしゝと見いれ立のけば」幸若、信田に「あら痛はしゝ〳〵」。謠曲、唐船に「それも戀しく、又、これもいとほしゝ」。閑吟集「泣くはわれ、なみだのぬしは、かなしゝぞ」。江戸時代、醒睡笑、二「今年より、をしゝほしくの、二心、うすくなりせば、國ぞをさまる」。同、二「四條の橋のもとまで、にげきたり、あまりくるしゝ、ちと、子をおろして、やすまんと思ひ、云々」。あづまぢの記「夜船にて、宮へ渡らんといへど、風あしゝとてゆかず」。などゝある、しかし、すべての第二種活用が、こうなると云うでわない、「同じゝ」甚じゝ」久しゝ」はなはだしゝ」などゝわ云わぬ。

○形容詞の活用な、口語でわ、第一種第二種と分けるに及ばぬようでもあるが、語尾の「しゝ」となることもあるわ、第二種活用に限るから、分けて置く必要もある。

【一六一】 形容詞第一種第二種活用の文語の連體形の「き」しき」の「い」しい」となつたもの

(「ひ」しひ」とあるも「い」しい」である。)

平安朝時代

類聚名義抄　任、ホシイマヽ、假哉、カタイカナ、善哉、ヨイカナ、

古今集、典侍、あまねい子、

後撰集、内侍、たひらけい子、典侍、あきらけい子、命婦、きよい子、

和名類聚抄、(下總本)調度部、容飾具、粉、之路以毛能、(白き物)同、職官部、大納言、於保伊毛乃萬宇須、豆加佐、少納言、須奈伊毛乃萬宇之、

孝德紀、三一、休祥(コイサカナリ)　齊明紀、二、紺(カイハナダ)　天智紀、二、寒極(サムイコトハマリテ)

蜻蜓日記、いとやうないことなり。

催馬樂、淺緑、淺緑や、己以波奈太、(濃き花田)同、無力蛙、ちから名伊かへる、はね名伊みゝず、(力無き蛙、骨無き蚯蚓)

神樂歌次第、(樂章類語抄)左の近(つぎ)い衛府(もりかさ)の將監(まさかんじやう)正(しやう)い六(ろく)の位、某、姓名、

源氏物語、乙女、うちとけず、苦しいことに覺えたり。

紫式部日記、青い白つるばみのかざみ　はかない詞のにほひも、見え侍るめり」。にくいことを引出でむぞ、あやしき。

枕草子、九、からぎぬに、しろいものうつりて、まだらにならんかし。同、十

二、からい目を見さぶらひつる。

更科日記、さすがに、若い人に引かれて、

史記(狩野亨吉藏、後三條帝、延久五年、)安、(ヤスイコト)

榮華物語、もとの雫、かほには、べにしろいものを、つけたらんやうなり。

鎌倉時代

藤原隆信朝臣集、戀四、おもひかけず、にくいけありし人を、うち見やりて、

平家物語、一、妓王の事、家内ふつきして、たのしひ事、なのめならず。同、四、競の事、あつぱれ馬や、馬は、まことに、よひ馬で有けり。同、ふじ川の事、源氏がせいは、いか程有ぞ、云々、おほいやらう、すくないやらう、凡七日八日が間は、はたとつゞひて、同、九、六箇度合戰の事、きやつ原は、こはひ御かたきで候。同、九、老馬の事、今や寄するとあひまちて、やすい心もせざりけり」。さて、なんぢには、子はなひか、候とて、熊王とて、生年十八さいになりける小冠者を奉る。同、九、濱軍の事、いのちは、おしひ物にて候けり。

定家假名遣、ねたいかな、嫉妬、しろいもの、粉、

遊仙窟、熱、アツイ事、

砂石集三、邪行ヲホシヒマヽニシ、自ラ損ジ他ヲ損ジ、

假名論語、季氏篇、すくないことをうれへずして、ひとしからざるをうれう。（不レ患レ寡而患レ不レ均、）同、述而篇、はなはだしひかな、わがをとろへたる事、久しいかな、わが、又ゆめに、しうこうを見ざる事、（甚矣、吾衰也、久矣、吾不二復夢一見二周公一、）同、泰伯篇、さいのかたいこと、それしからずや、（才難、不二其然一乎、）

室町時代

義經記、吉次おうしう物がたりの事、此おさなひ人を見奉りて、あら、うつくしの御ちごや。同、へいせんじ御見物の事、太刀を抜にくいやつばら、など申して、とんでおり、

幸若、百合若、何はにつけ、物憂き事の多いぞや。同、烏帽子折、御身がやうに、なまめいたる若い人を、」京藤太とやらんは、見目の美しい者、」面白い名や、」同、高館、物の臭い軍かな。

史記抄、六、一五　沛中ノタノシイモノドモガ、ヨリヤウテ、同、六、一七　驚テ門マデ出迎タハ、ヲカシイゾ。同、六、二七　ツヨク怨メシイゾ。同、六、

三六　此日、樊噲張良ガナクバ、沛公ハアブナイゾ。同、六、六六　ヲソロシイ人ゾ。同、六、七五　アマリ、イタハシイ事ゾ。

孟子抄、一、三　縦ハ、六國ノ南北ノセバイ處ヲタモツ、東西ノヒロイ秦カラ、手ワケヲシテ、秦カラ六國ヲ責ムルゾ、是ヲ横ト云。同、一、四　是等ノ色ハ、ウックシイゾ。同、一、一四　惣ジテ、手ゴハイ内ノ者ヲ持ツテハ、サテゾ。同、一、三三　サテハ、ヲカシイ事ヂヤヨ。同、一、三四　牛ハ大ニ、羊ハチイサイ程ニ、小ニカヘタハ、牛ヲ惜ト云タハ道理ゾ。同、二、五　禁制ノ法ガ、事ノ外ニキビシイゾ。同、九、二四　微服ト云テ、キダナイ服デイナレタゾ。同、十二、二一　餘リニ嬉イ程ニ、夜モネラレヌ程ニ、ウレシイゾ。

犬筑波集、雜、毛のあるないは、さぐりてぞ知る、弟子もたぬ、坊主は髪を、自剃して。

閑吟集、袖のおもさよ、戀はおもひ物哉」。たゞおいて、霜にうたせよ、夜ふけて來たが、にくひ程に」。みめよひか、かたちもよひか、人だにふらざ、なをよからう」。にくげに、めさるれども、いとおしひよなふ。

守武千句、おさないに、をはらこからや、のますらん。

【一六一】　形容詞の連體形の「き」しき」の「い」しい」となつたもの

運歩色葉集(甲)　白物、ヲシロイ、

元龜字叢、　廉、タカイ、エ、

狂言記、釣狐、　狐などゝいふものは、執心深い物で、」のうおそろしい事の、やすい事、御目にかけませう。」氣味のわるい物、」人間といふものは、かしこいものじや。　同、宗論、　甲斐の身延程、ありがたい處はござらぬ。」よい連れが欲しい事ぢや。」いや、これへ、似合はしい者がまゐる。」其法然とやらが生臭い珠數は、いやぢや。」あゝ、けがらはしい事かな。」その樣な情の強い珠數は、戴きたうもおりない。」夥しい事を投げ出いた。

同、萩大名、　今日は、何方へぞ、珍しい處へ行きたいものぢや。」亭主が所望するならば、恥かしい事ぢやが、一つ二つ、謠はうまでよ」。その樣なむづかしい所ならば、行くまいまでよ。」それは、にが〳〵しい事でござる。

同、聟貰、　這入りませいで、よそ〳〵しいありさまな。　同、伯母酒、　よい酒か、惡しい酒か、私が、きいて見ずばなりますまい。」酒、云々、甘いをすいてまゐる衆もござり、又、辛いをすく衆もござる。

伊曾保物語、　なまぬるい湯を、一杯、大茶碗に持つて來て、

節用集(丁)　不分、子タイカナ、　異、アヤシヒカナ、

江戸時代

昨日は今日の物語、世には、あぶない事がおほい。」さて〳〵、かたじけない事かな。

徒然草抄、上、ヲモヒツキ無イ也、

醒睡笑、五、それほどくるしいさけを、よいころにのみもせで、同、六、味は、あまいか、すいか、と問ふ。

犬子集、春、上、住吉の、まつたい物ぞ、わかみどり。」道風に、うごくやふるい、筆の花。同、五、秋、下、山の腰の、枝珊瑚樹か、こい紅葉。

吾吟我集、二、夏、蟬ころも、たゞ一重にて、なく聲や、布施ない經に、けさ落すらん。

新增犬筑波集、雜、あめの魚、いざ立寄て、みてゆかん、簗おもしろい、五月雨の中。

正章千句、八、なせに今夜の、月はおそいぞ。

東海道名所記、赤坂、宿毎に遊女あり、立並びて、旅人を留む、云々、なふ〳〵、

馬かたどの、こゝへおろしまさせられ、さきには、よい宿はないに。諸國盆踊唱歌武藏、わかいをなごの、とのごのないは、笠にしめ緒の、ないは如く。同美作、またとゆくまい湯原のゆへは、三坂三里が、ういほどに。後撰夷曲集五、君が世は、ながい菖蒲と、軒口に、さして變らぬ嘉例めでたし。同六、みても三穗の景にはあらぬ心をば、あとにおきつゝ、旅はういい物。

西翁十百韻、獨吟、立年の、かしらもかたい翁かな。同岩城にて、色に出る、盆かたびらの、こいあさぎ。

狂歌鳩杖集、大阪へ、やがてこいとの、地黃煎、あまいことばに、ちよいとのる船。

雜兵物語下、夫丸、暑いも、寒いも、ひだるい時も、ねむたい時も、からだの持樣は、おれ程は、中々、おしりなさるまい。

○福岡縣、熊本縣、肥前でわ、形容詞の終止形連體形を、「好か」長か」嬉しか」などゝ云う「好かり」長かる」等の略である。

【一六五】又形容詞の第二活用形に、「ば」を附けて、「それでよくばそれにしろ」い

そがしくば後に話そう」長くば切ろう」無くば仕方がない」直が高くば買わぬ」など、も云うことがあつて、「よければ」いそがしければ」など、云うと同じ意である、これわ、文語の格の殘つて居るのであるが、文語でわ、「よくば」いそがしくば」わ、將然の意味で、「よければ」いそがしければ」わ、已然の意味で、區別があるけれども、口語でわ、區別なく用いる、しかし、「くば」わ、今わ、多くわ用いない。

○又、「よければこそ取つたのである」新しければこそ買つたのだ」など云う時わ、「よいから」よいに因つて」新しいから」新しいに因て」の意味となる。

「無ければならぬ」を、「なければならぬ」など、云う人もあるが、形容詞に、打消の助動詞の「ず」ぬ」ね」わつゝかぬから、間違つて居る、又、「なければならぬ」(ならねばならぬ)など、云うわ、いよ〳〵誤である。

【一六七】 此末の「な」わ、文語の「なら」なり」なる」なれ」と活用する指定の助動詞の連體形の「なる」の「る」の無くなつたものである、其委しいことわ、助詞の(三八六)の「なら」の條に云う、

是等の「な」の附いたものを、一語と見る時わ、一々、辭書に擧げねばならぬ、「美

事」あわれ」立派」結構」綺麗」などを擧げて、又、更に、「美事な」あわれな」立派な」結構な」綺麗な」など、一々擧げる時わ、辭書の煩わしさ、限りがない、因て、舊案にわ、「な」を別に助詞に立て、形容詞の連體形のようなものを形作らせるものとしたけれども、特別委員會で、本書のように、「な」の附いたものを、一語として立てられたのである。

○動詞の終止形わ、古くわ、「花落つ」家を建つ」旅立をす」であるに、後にわ、「落つる」建つる」する」と、「る」が附くようになつたが、これと反對に、口語でわ、助動詞の終止形の「靜なり」急なり」聞きたり」見たり」の「り」が落ちて、「靜かな」急な」聞いた」見た」となり、連體形の「靜かなる」夜」急なる」事」聞きたる」聲」見たる」人」の「る」が落ちて、「靜な」夜」急な」事」聞いた」聲」見た」人」となつたのわ、考究すべき問題である、尙、過去の助動詞の「た」の條と、(三八六)の助動詞の「なら」の條とを見合わせよ。

○「なる」の「な」となつたもの、

鎌倉時代

藤原隆信朝臣集、廻文、　しなだまも、をかしなまひも、まてしばしてまもひまなし、かをもまたなし。

明月記、寛喜二年、五月二十日、爲家參着の時、突膝、いかなようのさまぞと申、又令咲給之由、

吾妻鏡、元暦二年、四月十五日、豊田兵衞尉、色ハ白ラカニシテ、顔ハ不覺氣ナモノ、只可候ニ、任官希有也。

南北朝時代

徒然草、六二　延政門院、（後嵯峨帝皇女）ふたつもじ、牛のつのもじ、すぐなもじ、ゆがみもじとぞ、君はおぼゆる。（「こいしく」の四字形）

太平記、十五、主上自山門還幸、二筋の、中の白みを、塗りかくし、にた〳〵（似た、新田）しげな笠符哉。（足利氏の敗兵が、足利氏の紋の、輪の内に二畫ある引兩の中を塗つて、新田氏の紋の、一畫の中黑としたのを云つたのである。）

室町時代

幸若、入鹿、氷のやうな劍を抜き、同敦盛、經盛とやらんも、花のやうな若君を渚に一人殘しおき、

史記抄、六、二二　胡亂ナ事ヲ云トテ、トラヨウトシタレバ、同七、三一　我

【一六七】　形容詞　靜かな　立派な　綺麗な

ガ不明ナニヨッテ、心得バシチガウタカ。同、八、三　異ナ事ヲ云テ、」奇特ナ事ナリ。同、十四、七二　此類ナ様ナ事ヲ、循吏トハ云ゾ。

孟子抄、一、三　秦ハ、ヨコナ國、六國ハ、タテナ國ゾ。同、一、四　陵遅ハ、ヲカノ、次第崩レニシテ、平地ニナリサウナヲ云ゾ。同、一、三〇　襄王ノ體ハ、何共、聊爾ナ人デ、人君トモ見ヘヌ人ヂヤソ。

守武千句、おくびやうさうな、峯のたいしやう。

元龜字叢、瞻、オフキナメ、

狂言記、靱猿、なう、そこな人、」そのやうな無體な事は言はぬものぢや。」さて〳〵利根な物ぢや。同、吃、さて〳〵、氣の毒な事ぢや。同、宗論、幸な事でござる。同、釣狐、眞黒なちさい形をして、同、素襖落、餘り急な事でござる。」あの様な結構な御方、

伊曾保物語、異形不思議な人體」、兵糧を入れた大きな荷があつたを、

江戸時代

徒然草抄、上、吾ト云事ヲ、ワト一字ニテ、ワガミト云ヤウナ事ゾ。同、下、繩床、坐禪工夫ノ床也、繩ヲ以テ作リタルソサウナ床也。

醒睡笑、一、そのやうな事を、高く言はぬ物ぞ。同、七、勿怪な事には、氣が短慮に。

犬子集、一、春上、正直な、梅の立えや、神ごゝろ。同、十四、雜、上、平治のみだれ、いやな世中。

油糟、雜、やはらかな、らつこの皮を、なでゝみて、玉硼の、繪にけつかうな、表紙して、あはれなは、淨飯王の、崩御にて、りこうな駒に、のりてもどれり。」いむぎんな、病者が人に、みまはれて、あらたなは、金のみたけの、罰利生。

正章千句、一、鶯、優な姫を、うへ人達や、戀の歌、同、二、馬かたは、みな五調な生れ性、」もつけな顏を、するが牧溪。」見事なは、山の月より、水の月。」

露滑かな、紙のうちやう。同、三、蝦、不審な雲の、たゝる野の末。同、五、黑坊は、うらゝゝな日より、悅びて、同、六、七夕、晴やかな、峠の景に、しくはなし。同、九、初冬、落葉、きくも殊勝な、初祖菩提心。

吾吟我集、九、竹、不孝なる、人に見せばや、若竹のすぐな心の、ふしのあひだを。

東海道名所記、江戸より大磯、生れつき、花車なもあり、いやしきもあり。

同、薩埵峠、ふたらくな、道になりけり、薩埵山、これ觀音の、御利生ぞかし。

同、四日市、つえつきの、乃の字のなりな、まんぢうを、座頭殿こそ、こしめされけれ。

後撰夷曲集二、吉野川、見所おほしと、いふ事は、大きな鮎を、料るゆゑかも。

西翁十百韻、大阪にて、灸の針のと、よはそうな顔。

以ての外な振舞、むやみな事、好きな道、嫌いな人、いやな品、おつな物、ろくな事わない、あいにくな天氣、さま〴〵な花、まち〳〵な評、さん〴〵な雨、いかな事、あんまりな仕向、おかしな話、滅多な事わ出來ぬ、ひよんな時機、何よりな下され物、かような場合、このくらいな品、よさそうな人、出來そうな事、不思議な說、感心な心掛

○(一三一×三〇 三×三〇 五×五五四)にも、「な」がある。

【一六八】尖つた山、たいした人、ばかげた話、さる人に賴まれて、

助動詞

本書にわ、助動詞を、種類で分け、活用で分け、其第一活用に、受身、可能、使役などの助動詞を並べると云うようにして、別々になり、入りまざつて居るから、此

別記にわ、其助動詞の事を、一つづゝ、ひとまとめにして書く。

受身の助動詞

受身の助動詞の文語と口語とわ、次のように變わつて居る。

れ	る	るゝ	るれ　文語
れ	れる	れる	れゝ　口語
られ	らる	らるゝ	らるれ　文語
られ	られる	られる	られゝ　口語

次に云う可能の助動詞の「れる」「られる」、敬譲の助動詞の「れる」「られる」の活用も、これと同じである。

○自動詞で「起きられる」來られる」など云うのわ、外からの動作を身に受けるのでわないけれども、「起きさせまい」來させまい」と思つて居るのに、遂に「起きられる」來られる」の意味で、自然と受身となるのである。但し、かような場合に「起きられろ」來られよ」などと命令にわ用いぬ。

○他動の動詞と受身の助動詞と結びついて、それが約まつて「抱かれる」が「だ

かる」となり、「教えられる」が「おそわる」、「授けられる」が「さづかる」、「仰付けられる」が「仰付かる」、「助けられる」が「たすかる」、(史記抄、十三七「父ノタスカルマイ事ヲ知タレドモ」、「云々」)「かぶせられる」かぶさる」、「言いつけられる」言いつかる」、「ゆでられる」ゆだる」、(可能の助動詞で「まけられる」まかる」、「やめられる」やまる」、「つとめられる」つとまる」、「しらべられる」しらばる」、)となると、變じて五段活用となり、他動詞が自動詞となる。「擊たれる」の「うてる」(壓)となり、「持たれる」の「もてる」(優遇)となるも、下一段活用の自動詞となる。(「譽れ」も、「譽められ」の約まつたのであろう。)

○「人笑われの事」お呼ばれになる」いはれを聞けばありがたい」など、名詞ともなる。平家物語に、「西光切られの事」許されなければ力およばず」

○口語に、受身の助動詞を、「れる」れ、「られる」られ、」と云うわ、東國一圓から、西は、中國四國まで、大抵同じてあつて、唯、九州に、「る、」るれ」らる、」らるれ」と云う處が多いが、尚、福岡、小倉、唐津、大分縣の一部、延岡、沖繩縣では、「れる」れ、」られる」られ、」と云う。因て、今は、下一段活用と決めた。

新潟縣の新潟、東蒲原郡、京都府の相樂郡、和歌山縣の和歌山市、粉河、西牟婁

郡、德島縣、廣島縣の賀茂郡南部で、「る丶」「るれ」「らる丶」「らるれ」と云う。（和歌山、粉河、德島でも「れる」「れ丶」「られる」「られ丶」をまぜる。）奈良縣の磯城郡、大阪府の堺、東成郡、南河內郡、岡山縣の邑久郡にも「れる」「るれ」「られる」「らるれ」と云う所がある。

山形縣の西田川郡でも、「擊たえる」擊たえれば」助けらえる」助けらえれば」と云う。萬葉集などに、「え」ゆ」と、下二段に活用する受身の助動詞が見える。それらが殘つて居るのでもあろう。

○類聚名義抄に「損田、ソコナハレルタ」とあるも、寫し誤りであろう。

鎌倉時代

千五百番歌合、三、二百十二番　右は、かきくもるといへる五文字ぞ、ことはなれてをかれる（敬讓）やうにみえ侍れど。

古今著聞集、十六、二五　今度參れと仰られる（敬讓）ぞ。

江戸時代

昨日わ今日の物語　一つはこげたをしうくにてくうとおほせられる（敬讓）

大久保彦左衛門物語　悪しく召つかはれる(敬譲)は、御主の御不足にてこそあれ。

醒睡笑、一　此をもき物をもちては、なにとしてありかれる(可能)や。同、二、時にあたりの人の心をやぶらんは、興さめて見へぬべし、祇公のあいさつついたされる(敬譲)かな。

諸國盆踊唱歌、志摩、つとめしようとも、子守りはいやよ、お主にしかられ、子にやせがまれて、あひになき名を、立てられる(受身)　同、長門、こいとゆたとて、ゆかれる(可能)みちか、みちは四十より、夜はいちや。

雑兵物語、上、持筒、鐵炮を預つた所で、腰に引はさまれる(可能)か、おれがかつひだ鐵炮は、腰には中々はさまれない。同、下、又馬取彦八、味方勝に乗て追ちらす時は、必ず馬に乗りなされる(敬譲)事、成りがたひものだ。

○文語の受身、可能、敬譲の助動詞の未來形、推量形の「撃たれむ」助けられむ」が「れう」られう」と變わり、又「れよう」られよう」と變わたことわ、前の動詞の未來推量(一一八)の處で說いて置いたので、解すがよい。

今「撃たれよう」助けられよう」と云うわ、東國一圓から、西わ、畿内、丹波、丹後、和歌

山縣、香川縣あたりまで、大抵同じで、尚、愛媛縣、備後、出雲、佐賀縣、宮崎縣にも、そう云う處がある。又、愛知縣、岐阜縣、富山縣、佐渡から西わ、四國、山口縣までわ、「擊たりょう」助けらりょう」をませて、(京都わ「れよう」られよう、大阪わ、それに「りょう」らりょう」をませる、)中國、四國わ、殊に「りょう」らりょう」で、九州の筑前、豊前、大分縣にも、そう云う處があるが、其外の九州わ、「擊たりゅう」助けらりゅう」と云う、今わ「れよう」られよう」に一定した。

武藏の川越でわ「りょう」らりょう」と云う。

越後に、「擊たろう」助けらろう」と云う所があり、三重縣、丹波に、「擊たれよ」助けられよ」(命令と同じである、音節で言ひ分ける、)と云う處があり、山形縣の西田川郡でわ、「擊たえれ」助けらえれ」(命令と同じである)と云う。(擊たれえず擊たれべい」と云う事わ、動詞の未來推量(一一八)の末に說いて置いた、)

○「れむ」られむ」が、「れう」られう」となつたものわ、(「ふ」とあるも、「う」である、)

鎌倉時代

平家物語、九、盛としさいごの事　源氏、又、もりとしにたのまれふ(受身)とも、よも思ひ給はじ。

受身の助動詞　れう　られう

室町時代

幸若、富樫、杖打ちに打ち覆せられうず。(受身)人々に讀まれうず。(受身)　同、烏帽子折　烏帽子、云々、如何樣なるを召されう(敬讓)ぞ。

史記抄、二、九　微婉ハ、マゲテ人ニ面白ガラレウ(受身)トスルゾ。　同、五、一二　ヤスク攻ヤブラレウ(受身)ゾ。　同、六、一〇　金ハ火ニトラカサレウ。(受身)　同、二三　奇特ナル人ヂヤホドニ、天子ニモナラレウ(可能)ズ。　同、六六　誅セラレウ(受身)デアッタガ、公主ニヨッテ赦サレ、云々、　同、十三七　天下ノ者ニ笑ワレウ(受身)ゾ。

孟子抄、一、一九　文王ノ德ガ、禽獸ニマデ及デ、囿ノ中デ、人ニトラレウ(受身)念ガナイホドニ、人ニヲヂイデナツイタゾ。　同、一、二〇　民ガ、我モ共ニ亡トモ、桀ヲ亡シタイト思フヤウニ惡ンデハ、何ガタマラレウ(可能)ゾ。　同、二、三　宣王ノ樂ヲセラレウ(敬讓)ズルニ、近比目出ト云テ、悦デ聞、云々、　同、三、三三　村里ノ友ニ、ヨク子ヲトゞメタト、譽メラレウ(受身)爲デモナイ。

狂言記、墨塗、　肝をつぶされう。(敬讓)　同、二千石、　餘人にも仰付けられう。

(敬譲)につこと笑うて斬られう。(受身)　同、舟ふな、浦で網を引かせられう(敬譲)と、又山で狩をなされう(敬譲)とも、思召すまゝの所でござる。同、拔殻、人に打殺されう(受身)よりは、云々、身を投げて死んでのけう。

江戸時代

昨日は今日の物語　けふは、御しんぷさまのめい日にて候程に、定めて御参なされう(敬譲)と存じ、

小栗の判官二、我、よこ山のむこに、きらはりやう(受身)にてなし。

諸國盆踊唱歌、紀伊、人にいはりよ(受身)と、云さかりよ(受身)と、わしが身にさへ、くもりがなか。

西翁十百韻、大阪にて、若衆の喧嘩、あへずにいられう(可能)か、

雜兵物語、上、鐵炮足輕小頭、とくと、たましひをひつちめて、あだ玉をはじき捨てないやうに、はなしめされふ。(敬譲)

○受身の命令に、「撃たれろ」助けられろ」と「ろ」を用いるわ、駿河、山梨縣、長野縣、越後から東わ、大抵同じで、尚、三河、香川縣の大川郡、筑後、肥前、熊本縣、宮崎縣にも、そう云う所がある。又、遠江、長野縣の西南部、富山縣、佐渡から西わ、九州まで、

「撃たれよ」撃たれい、」助けられよ」助けられい」をまぜて、(京都大阪わ「い」え」である、)殊に、中國、四國にわ「い」を用いるが多い。(多くわ「い」を「え」と云う、)今わ「れろ」られろ、「れよ」られよ」の二つに一定した。

秋田縣でわ「よ」と「ろ」とをまぜて云い、千葉縣、群馬縣に「よ」と云う所がある。三河、富山縣に「撃たりよ」助けらりよ」と云う所があり、福井縣、丹波、丹後、宮崎縣に「撃たれ」助けられ」とばかり云う所があり、山形縣の飽海郡、筑前の福岡、佐賀縣に「撃たれヽ」助けられヽ」と云い、筑前、熊本縣、大分縣、宮崎縣に「撃たりい」助けらりい」と云う所があり、山形縣の西田川郡でわ「撃たえれ」助けらえれ」と云う。

○「れよ」られよ」が「れい」られい」となつたのわ、

室町時代

孟子抄、一、一八　孟子ニ、庭ヲ見ラレイ(敬讓)ト云テ、ツレダチテ云レタゾ。

同、一、三一　此政道ヲ行ハレイ(敬讓)カシト、頭ヲウチナゲテ居ル處ニ、仁政ヲ行ハヾ、民ガ皆歸セウゾ。

同、二、二五　重寶ノ器者共ヲ返サレイ(敬讓)サウシテ、民ノ何レナリ共、望マフ王ヲ定ラレイ。(敬讓)

狂言記、柿山伏、　宿へ連れて行て、看病をせう程に、これへ負はれい。(受身)

同、宗論、　平に、先へ行て下されい。(敬譲)つゝと通らせられい。(敬譲)

伊曾保物語、　たとひ、御折檻あるとも、今暫く待たせられい。(敬譲)

江戸時代

昨日は今日の物語　そなたをしきを一まいくだされい(敬譲)とて、しほを三升ばかりさし出す。」我等に御用があらば、仰られい。(敬譲)

東海道名所記、赤坂、　宿毎に、遊女あり、立並びて旅人を留む、とまらせられいく。(敬譲)

雑兵物語、上、鐵炮足輕小頭、　珠數目の結目を、ゑりの眞中へ當るやうに、くりこしめされい。(敬譲)同、下、草履取、　玉藥を、一放し分下されい。(敬譲)

かたこと、　こなたへ來ませ、こちおはせよ、こちへこよ、などいふやうの時に、こちへきやれ、又きられよ(敬譲)などゝいへるは、甚つたなきことゝ葉かといへり。

○サ行變格活用の動詞の、受身、可能、敬譲の助動詞に續くのに、文語と口語との違いわ、次のようである。

受身の助動詞　せられる　しられる　さるゝ　される

せられ	せらる	せらるゝ	せらるれ	文語
せられ	せられる	せられる	せられゝ	口語
しられ	しられる	しられる	しられゝ	

右の「せられる」「しられる」(一八六)の約まるものわ、

され	さるゝ	さるゝ	さるれ
され	される	される	されゝ

口語

「異見をされる」手柄をされる」賛成がされない」など、云う時わ、一つの成語の動詞のようになる。

「せられる」せられゝ」と云う所わ、武藏の一部、群馬縣の一部、神奈川縣の一部にもあつて、靜岡二縣、愛知縣、岐阜縣、越後、富山縣から西わ、中國、四國まで及んで居る。

「しられる」しられゝ」と云う所わ、東京、茨城縣、福島縣宮城縣、新潟縣、富山縣、越前、滋賀縣、尾張、山城、丹波、丹後、奈良縣、攝津、河内、和歌山縣、兵庫縣、美作、備後、鳥取縣、出雲、宮崎縣、の延岡にある。(京都わ「しられる、」大阪わ「せられる、」)

「される」されゝ」と云う所は、靜岡縣、山梨縣、長野縣、越後から東わ、專らそれで、尙

西わ、畿内、中國、四國まで及んで居る。（京都でわ「しられる」、大阪でわ「せられる」の外わ用いない、）尚、九州の小倉、福岡、唐津もそうである。

「さるゝ」「さるれ」と云う所わ、九州の大半である。

全國諸處に、右の四通りの內の、其一つをつかつて居る所もあり、二つをまぜてつかつて居る所もあり、非常に込入つて居る。因て、今わ「せられる」「しられる」「さるゝ」「される」の三つに決めた。

稀に、富山縣、宮崎縣に「せらるゝ」と云う所がある。

愛知縣に「せれる」「しれる」と云う所があり、又、和歌山縣に「しゃれる」、又「しゃるゝ」と云い、山梨縣に「される」「されろば」と云う所があり、山形縣の西田川郡でわ「さえる」「さえれば」「さえれ」（命令）「さえれ」（未來）などゝ云う。

○右の未來命令の言い方の、諸方の違いわ、大抵、前の受身の「られる」の未來命令と同じである。

未來に「噂さりょう」と云う所が武藏の川越にあり、「噂せられよう」と云う所が、武藏の北多摩郡にあり、「噂せらりょう」と云う所が、群馬縣の利根郡、新田

郡にある。

命令に「噂されよ」と云う所が、群馬縣、千葉縣、秋田縣にある。

○室町時代

義經記、義經平家の討手に上り給ふ事、數通の起請文をかきしんじられ（敬譲）けれども、尚御承引なかりければ、云々、

狂言記、聟貰、わらわがつれあひ、云々、醉狂（ゑひぐるひ）をしられて、（敬譲）迷惑いたします。同、子盜人、これは、普請しられた（敬譲）と見えて、結構になつた。

江戸時代

ト養狂歌集下、いなびしけるを、むりにしよもうしられて、（受身）云々、

鹿の巻筆、一、ばんどう屋才介、さて〳〵、お手前の大切にしらるる（敬譲）ものを、おれがきるものか。同、四、表具屋の掛物、さりとては、じよさいじよさい、能く判じられた。（敬譲）

○室町時代

狂言記、墨塗、是はいかな事、まだ誠にされぬ。（受身）

江戸時代

太田和泉守覺書、あらけなき御せいばいをされ(敬譲)たきよし、じやういのおもむき、申上げられ候へば、云々、

萬葉集、二十に「我妻は、いたく戀らし、飲む水に、影さへ見えて、世に和須良禮ず。」などの「忘られず」(可能の打消)わ、四段活用であるから、論わないけれども、古今集、秋、上に「やどりせし、人のかたみか、ふぢばかま、わすられ(可能)がたき、香ににほひつゝ。」玉葉集、春、下に「櫻散り、春の暮れゆく、物思ひに、わすられ(受身)ぬべき、山吹の花。」新千載集、戀、五に「我ばかり、物はなげかじ、憂き人に、わすらるゝ(受身)身も、わすれましかば。」などの「わすられ」は「わすれられ」の約まつたものであろう、そうすれば「せられ」の「され」となるも、同じ姿である。

可能の助動詞

可能の助動詞の活用形の、文語との違い「せられる」しられる」の「される」となる事、全國での言い方の違い、昔からの遷りかわりなど、前の受身の助動詞と同じで、受身の處に說いてある。但し、受身の「られる」、使役の「させる」、希望の「たい」

が附かず、命令の形を作らない。

○動詞と可能の助動詞と結びついて、それが約まつて「用を勤められる」が「用がつとまる」となり、「直段を負けられる」が「直段がまかる」などとなつて、變じて五段活用の一つの自動詞となるものがある。

○可能の「書かれる」勝たれる」などが「書ける」勝てる」(一八五)となるわ、五段活用の動詞に限る。そうして、下一段活用となつて、可能の意味の一つの成語動詞のようになつて、他動詞も、自動詞のようになる。其活用わ、次の表のようである。

五段活用の動詞でも、自動詞の「減る」足る」などを、可能に「減られる」足られる」とつかわれないから、「減れる」足れる」も勿論ない。

	第一活用	第二活用	第三活用	第四活用	第五活用
言	いえ	いえ	いえる	いえれ	いえよう
書	かけ	かけ	かける	かけれ	かけよう
研	とげ	とげ	とげる	とげれ	とげよう
押	おせ	おせ	おせる	おせれ	おせよう

勝	かて	かて	かてる	かてれ	かてよう
死	しね	しね	しねる	しねれ	しねよう
飛	とべ	とべ	とべる	とべれ	とべよう
讀	よめ	よめ	よめる	よめれ	よめよう
取	とれ	とれ	とれる	とれヽ	とれよう

第一活用に附く助動詞わ、打消の「ぬ」ない」まい」で、受身の助動詞の「られる」、使役の助動詞の「させる」がつかず、第二活用に、希望の助動詞の「たい」がつかず、そうして命令に用いぬ。

○「言われる」の「言わ」わ、ヲ行の活用であるが、「いえる」となると、ア行の活用となる。

○一字の漢語を、サ行五段に活用させて、それを可能にして、「解される」譯される」とするを約めて、「解せる」譯せる」(一八六)とするも、「書ける」勝てる」と同じである。尚、前の動詞のサ行變格活用の條の、一字の漢語を、サ行變格に活用させる所(九六)の第四類を見よ。但し、此可能を、打消に「解せぬ」譯せぬ」(常の打消わ、「解さぬ」譯さぬ、)と云うのが、常のサ行變格活用の「屈せぬ」託せぬ」など、紛れや

すい。

○下一段活用の動詞の「立てる」立てぬ《他動》「切れる」切れぬ《自動》など丶、こ丶の可能の「立てる」立てぬ《自動》「切れる」切れぬ《他動》など丶紛れ易く、其外「かえる」《得飼》「かえる」《變》「つめる」《得摘》「つめる」《抓》「とげる」《得研》「とげる」《遂》又、文語の「畫に書ける姿空を飛べる鳥」手に取れる物」なども紛れやすい。

○「勝ておうせる」讀めやすい」など云うわ、連用形である。又「お勝てなさる」など丶云うこともある。

○可能の「書かれる」押される」を「書ける」押せる」と口語に云うわ、全國、大抵同じである。但し九州の筑前、豐前、大分縣、宮崎縣、鹿兒島縣に「書け」書くる」書くれば」押せ」押する」押すれば」と云う所がある。

關西にわ、稀に「書かれる」押される」書かるゝ」押さるゝ」とばかり用いて「書ける」押せる」と云わぬと云う所があり、又、外の動詞にわ、此活用をつかうけれども「死ねる」ばかりわつかわぬと云う所もある。

○未來にわ、東國一圓から、西わ、丹波、兵庫縣、香川縣、德島縣まで、大抵「書けよう」押せよう」と云い、九州の佐賀縣、宮崎縣にも、そう云う所がある。そうして、丹

後、但馬、岡山縣、愛媛縣、高知縣から西は、大抵「書きょう」押しょう」で、九州にわ「書きゅう」押しゅう」と云う所がある。

○室町時代

史記抄、四、三五　此マデ、韻ガ三句ニフメタゾ、點首改化、此カラ韻ヲ三句ニフムデ見レバ、ヒヤウシガ不合ゾ。

孟子抄、十一、五　爰カラヨメ候、又、異於ノ二字ガヨメヌ、アヤマルゾ。

理慶尼の記、御身にすてられ、又世にながらゑむとはおもへず、同じ道にと思ふなり。

狂言記、宗論、此廣い海道を、人にかぶりつく樣にせねば、あるけぬか。同、粟田口、書いた物、云々、私にも讀めませぬ、眞で書いてあるに因て讀めぬ。

江戸時代

醒睡笑、五、ひやしるわんで、三盃のめふと申した。

古今夷曲集、序、むかし〳〵、いふにいへぬ物の中より、云々、同、九、述懷、世にくへぬ、氣は鈍栗の、くり〳〵と、くりめき渡る、このみなりけり。

諸國盆踊唱歌、肥前、　させばおさへる、おさへば、のめず、のめば其身の、あだとなる。

西鶴一代男、二、　此中の御仕方、總じて、よめぬ事のみ、はじめより、わかるゝまでとの御つたへ、成程、けふ切にあきました。

近代艷隱者、一、淺草の風人、　是れにぞ、其名はしれぬらん。

武道傳來記、一、內儀の利發は替つた姿、　若、行く方しれずば、土を覆して僉議を遂ぐべし。

藩翰譜、淺野氏、　朝鮮の軍、今のやうならんには、いつ事定るべしとも思へず。

萬葉集、八に「春の野に、あさる雉の、妻戀に、己があたりを、人に令知つゝ。」源氏物語、榊に「ものごしばかりのたいめんはと、人しれず待ちきこえ給ひけり。」後拾遺集、雜、三に「さつきやみ、こゝゐの森の、ほとゝぎす、人しれずのみ、鳴き居たるかな。」などの「しれ」わ「知られ」の約まつたもので、受身でわあるけれども、こゝの可能の「取られ」が「とれ」となると同じ趣がある、後撰集、雜、二に「萬代と、ちぎりし事の、いたづらに、人わらへにも、なりぬべきかな。」源

氏物語、若菜、上に「世の人わらへならんことを、したには思ひつゞけ給へど、」などの「人わらへ」も、「人笑はれ」(受身)の約まつたのである。

○動作が自然に起つて止められぬような意味に、「人の事が思いやられる」行末が案じられる」きつと出來ること、思われる」(一七四)など云うのわ、可能の意味から移つたものであらう、活用も大抵同じで命令にも用いられぬからである。

使役の助動詞

使役の助動詞の文語の活用わ、次のようである。

讀ま	せ	せ	す	する	すれ	せむ
立て	させ	させ	さす	さする	さすれ	させむ

口語の活用わ、全國で、非常にまち〳〵になつて居るが、大抵、次の四通りに分れる。

甲 讀ま(せ)(ぬ) 立て(させ)(られる) (せ)(ます) せる せれ(ば)

使役の助動詞　せる　させる

乙

讀ま	せ	ぬ	て	せる	すれ	
立て	させ	られる	ます	させる	さすれ	ば

丙

讀ま	せ	ぬ	て	する	すれ	
立て	させ	られる	ます	さする	さすれ	ば

丁

讀ま	さ	れぬる	し	て ます	す	すとしたら
立て	さ	れぬる	さし	て ます	さす	さすとさしたら

甲の活用わ、關東、奥羽、越後、長野縣、山梨縣で用いられ、(打消わ、大抵「せない」させない」である、)尚、西わ、畿内、中國、四國にも及び、九州の福岡、小倉、唐津、延岡にも同じ處がある。又、靜岡縣、愛知縣、岐阜縣、富山縣から西わ、乙、丙、丁の活用が、甚しく混雜して、九州わ、大抵丙の活用である。今は、甲の活用に一定させた。

武藏の入間郡の飯能、群馬縣の新田郡、山田郡に、丙の活用を用いて居る所がある。

關東でも、丁の五段活用のように、「知らさ‖ない」何も食わさ‖ぬ」物も言わさ‖ず」息もつかさ‖ず」聞かしてやつた」見合はし‖たらよかろう」立てさし‖ます」讀ま

しさへすればよい」勝たしたい」など丶云うことがあるが、すべて「せ」と云うがよい。

○使役の助動詞を、名詞に用いるわ、「人騒がせ」「人泣かせ」「人困らせ」「知らせ」「思わせぶり」「厭らせ」「嬉しがらせ」などである。「お持たせ」の菓子」など云うわ、供の者に持たせて來たと云う意味か、古い敬語の「持たせ給ひ」の名殘か。「かわせ」(爲替)などわ、生れつきの下一段活用の動詞の、名詞となつたのであらうか。

使役の助動詞の「せ」と、受身の助動詞の「られる」と結付いたのを約めて、(爲ら)れる」の「される」と約まる例のように、「飛ばされる」飲まされる」食わされる」以上、可能の意味にも、「聞かされる」待たされる」立たされる」など丶云うこともあるが、正しく「せられる」と云うがよい。

古く、源氏物語の若紫に、「やがて、御おくりつかうまつらんと申給へば、さしもおぼさねど、ひかされてまかで給ふ。」後拾遺集、戀、一に、「さりともと、思ふ心に、ひかされて、今まで世にも、ふる吾身かな。」など丶ある「ひかされて」わ、「引かせられて」の約まつたのである、しかし、此言葉の外にわ見當らぬ。

○使役の助動詞わ、稀に、受身の助動詞に附いて、「擊たれさせる」など丶云うこ

とがある。

○使役の助動詞の未來わ、靜岡縣、山梨縣、長野縣、越後から東でわ、大抵「讀ませよう」立てさせよう」と言い、尙、愛知縣、岐阜縣、滋賀縣、福井縣、山城、奈良縣、大阪府、和歌山縣、備後の沼隈郡、出雲の簸川郡、香川縣愛媛縣の西條、佐賀縣の唐津宮崎縣の延岡等の諸處にも、そう云う所がある。そうして、愛知縣、岐阜縣、富山縣、佐渡から西わ、畿內、中國、四國まで、大抵わ「讀ましょう」立てさしょう」で、其內、畿內邊にわ、五段活用のように「讀まそう」立てさそう」と云う所が多い、(京都大阪も、そうである。)九州でわ、筑前、佐賀縣、大分縣、宮崎縣に「讀ましょう」立てさしょう」と云う所もあるが、其外わ、大抵「讀ましゅう」立てさしゅう」である。今わ「せよう」させよう」に決めた。

武藏の南葛飾郡、荏原郡、入間郡の川越に「しょう」さしょう」と云う所がある。三重縣でわ「せよ」させよ」(命令と同じである。)と云い、河內に「しょ」さしょ」と云い、福井縣に「そ」さそ」と云い、越後に「せろう」と云う所がある。(「讀ませえず」讀ませべい」と云う事わ、動詞の未來推量(一一八)の末に說いて置いた。)

○使役の命令にわ、駿河、山梨縣、長野縣、越後から東わ、大抵「讀ませろ」立てさせ

ろ」と云い、尙、三河、富山縣、香川縣の大川郡、筑前、肥前、熊本縣、宮崎縣にも、そう云う所がある。そうして、遠江、長野縣の西南部、佐渡、富山縣から西わ、九州まで、「讀ませよ」立てさせよ」と、「讀ませい」立てさせい」とをまぜてつかつて居る、(京都大阪わ「せい」させい」である、)「い」を「え」と云う所が多い。

武藏、群馬縣、秋田縣、松前に「せよ」させよ」と云う所がある。

「せ」させ」とばかり云う所が、富山縣、福井縣、滋賀縣、三重縣、丹波、奈良縣、河內、和歌山縣の新宮、愛媛縣にあり、「しょ」と云う所が、尾張、富山縣、宮崎縣にあり、「しょう」と云う所が、三河、富山縣にあり、山口縣に「せいよ」と云い、尾張に「せんか」と云う所があり、越後、福岡市、熊本縣に「せれ」させれ」と云い、筑前、豐前、大分縣、宮崎縣に「しい」さしい」と云い、尙、宮崎縣に「し」さし」と云う所がある。

○サ行變格活用の「せ」又わ「し」に、使役の「させる」を附けたものを約めて「させる」させれ」と云うわ、東國一圓で、尙、西わ九州まで及んで居る。そうして、畿內から西にわ、又「さす」さする」がまざつて居て、其活用のまち〳〵である事わ、前に云つた使役の助動詞の「させる」と同じである。

群馬縣の山田郡、山形縣の南置賜郡に「さする」さすれ」と云う所があり、宮城

縣、宮崎縣の延岡でわ、「しさせる」しさせれ」と云い、大分縣に「しさする」と云う所があり、又、茨城縣、福岡縣にわ、「しらせる」しらせれ」と云う所もある。

○「する」さする」の「せる」させる」となつたわ、

鎌倉時代

金玉歌合、伏見院、　ぬるゝかと、たちやすらへば、松かげや、風のきかせる、雨にぞありける。

室町時代

狂言記、ひめ糊、　大骨を折らせ、大汗を流させる前代未聞の曲者。

江戸時代

おきく物語、　そのところへ、つれゆき候はゞ、また〳〵金をとらせる間、つれゆきくれよ。

正章千句、四、郭公、　磐石の、雨をふらせる、道すがら、雲をおこすか、龍のいきほひ。

○「せむ」させむ」の「せう」させう」となつたわ、

室町時代

幸若、烏帽子折、數多の寶を添へて得させうぞ」烏帽子、云々、何とがな折らせうぞ」錢を取らせうぞ。

史記抄、六、八六　酒ヲ飲マセウト云ラレタレドモ、同、七、一〇　法ヲ犯シテハ、カナウマイヨト、思ワセウタメナリ。同、八、一一　カウ云フ意ハ、我ヲ貴クナサセウトテゾ。同、十、六七　六國ヲ秦ニ勝セウトスルモノヲバ、云々、同、十、六八　此衡人ハ、ナントシテモ、諸侯ノ地ヲ秦ニ取ヲセウトスルゾ。同、十一、五四　ハラヲタテサセウトテゾ。

孟子抄、三、二四　此三人ノ言タ事ヲ信ゼサセウ用ゾ。同、四、一六　タレニ殺サセウト問タレバ、云々、

狂言記、釣狐、殺生の道を思ひ止まらせうと存ずる事でござる。」狐の執心深い謂はれを語つて聞かせう」。同、薩摩守、薩摩守と云かけて、たいのりと答へさせう」爲ぢや。同、どぶかつちり、下稽古をして取らせう」ぞ。同、二人袴、聟入を致させう」と存ずる。同、鞍馬參、太刀など持ちました、云々、某も追付け持たせう」ぞ。

江戸時代

使役の助動詞　せう　させう

昨日は今日の物語　御くすり、云々、又あはせて參らせうと‖て、くすりばこをとり出す。

醒睡笑、二、　始より、食は、ほしい程と定めたは、腹一ぱいに、くはせう‖とはいはなんだ。

小栗の判官車の段、てるてのみちゆき、　ひけよ〳〵、此車、おんどを取てひかせう‖ぞ。

後撰夷曲集、二、待郭公、　時鳥、なくとてたれか、がごうぜに、かませう‖と云、者もあらじを。

諸國盆踊唱歌、隱岐、　いなしょ‖〳〵と、おもふたうちに、太郎が生れて、いなされぬ。

松の葉、一、本手、ふしやうぐみ、　はしにわがみをなげかけて、わたらせう‖よの、とろ〳〵　〳〵と、やれわたらせう‖。

○「せよ」させよ」の「せい」させい」となつたわ。

狂言記、釣狐、　是は變化のものなり、禱らせい‖とありければ、　同、靱猿、　早う舞はせい‖。

○「せ さ せ」せ さ す」を「さ せ」さ す」と約めたわ、

平安朝時代

寶物集、下、　佛をむかへ奉りて、說法をさせまいらすべきよし、仰有ければ、

室町時代

義經記、ときは、みやこおちの事、　扨こそ、ときはは、三人の子供をば、所々にて成人させ給ひけり。」今若、云々、觀音寺にのぼせ、がくもんさせて、云々、同、土佐房、義經の討手に上る事、　堀川殿をば、在京の者共にしゆごさせて、判官の侍、一人も殘らずおひかけいる」。喜三太に、なわどりさせて、六條河原に引出し、云々、

曾我物語、よりとも、いとうのたちにましまず事、　鎬（かぢ）のとをなりをさせざるが、むねんなり。同、虎、曾我へきたりし事、　箱根へのようい させ候て、あかつき出候べし。

幸若、烏帽子折、　御放生會と申事を執行せ給ふべし、扨、夫れは如何樣なる者にさすべきぞ。同、文覺、　流罪させられ候はば、いしかりなん。

史記抄、七、四五　大事モナイ、我モ知テサセタ。同、十、四六　敎テコソ勞ヲ

サスレドモ、ナントモ不思ゾ。同、十、七三　張儀ヲ激怒サセタ。同、十一四〇　結計ヲ三年マデサセヌゾ。同、十一、四一　其ヲ本ニシテサセタリナンドモセヌホドニ、同、十一、四六　コチヘキタレト云テ、警動サスルゾ。

孟子抄、二、二〇　幼カラ、學問稽古サスルハ、道ヲモ行イ、將年ニシテ君ニ仕ヘ、云云、同、五、一八　天下ヲ困窮サセタ道デアラウ。同、六、一三　百姓ヲヤリテ、葛ノ耕作ヲサセラレタゾ。

狂言記、吃、身共が出ては、聊爾にはさせぬ。」云分けをさせたいものぢや。

同、宗論　春薗に芋といふ物を植るわ、云云、まんまと成長させすまし、云云、同、右近左近、此間、左近奴が、牛を放いておこいて、(放しておこして)某が田を、大目程撫喰ひにさせたに因て、

伊曾保物語、彼の二人を裸にし、忽ち打擲させられた。

江戸時代

太田和泉守覺書、御くげしゆと、御じやうさまたち、ひきあはせ、うきよぐるひをさせ申、ちやうおんにほこり、云云、

醒睡笑、二、　治部卿とて、弟子をもちしが、ある年、名代と號し嶺入させたり。

同、八、　惣領の子、才智あれば、笛の稽古させたり。

そゞろ物語、歌舞妓をどりの事、同じ姿に裝束させて、同、よし原のはし

珍名の事、百日思案といふ二字を、學文させられたるに、

西翁十百韻、西國にて、させまいと、かきやぶるなる、際目論。

日本永代藏、六、見立てゝ養子が利發、舟つきの自由させる行水舟をこしらへ、

雜兵物語、上、馬取、陣中に、小唄、淨瑠璃、はや物語を御禁制だも、高聲させまいと云ことだ。

○「せさせむ」の「させう」となつたわ、

室町時代

史記抄、十、四〇　吳王ニユダンサセウトテ、同、十一、五八　サラバ、梁王ヲ烹タリ、醢ニサセウゾ。同、十二、三　漢ニ歸タヲ、露見サセウトテゾ。同、十二、八　太刀刀ノハモヲレタリナンドサセウトスルゾ。同、十五、四九　普請ヲサセウズ人ガナカッタゾ。

孟子抄、二、五　サラバ、コチカラ、民ヲヤリテサセウト云テ、民ヲヤリタレバ、云々、同、八、一一　人ヲ歸服サセウトスルハ、覇王ノ道ゾ。

狂言記、武惡、此上は、武惡を成敗せうともさせうず、又せずともさせうが、ていとおしやるまいか。

江戸時代

好色五人女、一、命のうちの七百兩の金、生きておもひをさしやうより、云々、

○「せさせよ」の「させよ」させい」となつたわ、

江戸時代

東海道名所記、初、いとおしき子に、旅をさせよといふ事あり。

後撰夷曲集、九、黒木賣、黒木うる、やせ女子の、牛にだに、させい〳〵と、云はをかしも。

○一字の漢字音に、「させ」させむ」を付けたものにわ、「させ」させむ」の約まつたものか、又わ、字音を、サ行四段に活用させて、其第一活用の「さ」に、「せ」せむ」を付けたのか、分らぬものがある。（前の動詞のサ行變格活用の一字の漢語（九六）

の第三類の處を見合せよ。）

室町時代

曾我物語、小次郎かたらひ得ざる事、母、のたまひけるは、此事を、小次郎、大きにおどろき、せいさせんとてきかせたるぞ。

史記抄、十、三五　公主ヲ吳起ニ尙サセテ、ムコニトラウトヲセラレタ。同、十、七五　燕王ニ、子之ヲ信ザセウトテゾ。同、十一、一七　韓魏ニ、秦ヲ賀サセタゾ。同、十一、二〇　孟嘗君ヲ、相位ニ復サセタモノゾ。同、十四、三九　朝鮮ヲ伐ッ兵ヲ發サセタゾ。

孟子抄、三、二　老者ニ對サセントテ、讓テイハズ。

○使役の助動詞を、サ行四段活用のように用いたもの、

鎌倉時代

砂石集、四、京中ノ道俗男女、聞ヲヨブニ隨テ、結緣セントテ、ココラアツマリヒサメキテヲガマントイヘバ、イデ、ヲガマシケリ。

室町時代

孟子抄、七、八　國ノハシヲモ、人ニ取ラシテ、アブナイゾ。

使役の助動詞　させよ　させい　させう

狂言記、釣狐、夫ならば、說いて聞かさう程に、よう御聞きやれ。同、おばが酒、酒、云々、彼れが厭といふ程呑まさうか、呑ますまいか、呑ませませう、汝呑まさぬに於ては、云々、」酒、云々、こんどから、のましをろかはあ、のましませう。同、拔殼、酒、云々、飮ましてやりませう。」門の番なりとも、さして下されませう。同、生捕鈴木、一門に旗を立てさし申、うつてむかひござらうずるものか。同、相合袴、どうぞ、先きで間に合はしませう。

江戸時代

醒睡笑、五、自今以後、物のまねをさすべからず。

西鶴五百韻、おり湯しかけて、くます若水。

好色五人女、二、こけらは胸の燒付け、さら世帶、何卒して、其男に、せんをもらはさんと、云々、(「せん」は、女の名、)

懷硯、三、水浴せば涙川、此分別あらば、私に知らす筈、

日本永代藏、三、高野山借錢塚の施主、弟を別家に仕分けて、分散にこれを遁れさして、京の者は、伏見に名代を替へて、云々、同、五、天狗は家名の風車、ざら〳〵と立ち行けば、何といふて聞かす間もなし。

「爲」の活用の「し」に「させ」を續けたものわ、史記抄、七、四八に「此四人ガ、各其王ヲ諫メテ、反シサセヌ。」など、見え「爲」を「さ」として「させ」に續けたもの、わ、狂言記、吃に「屋根のもりまでも、わらはにさせまする。」屋根のもりまでも、内儀にさするとと云ふ。」四段活用の動詞の第一活用に「させ」を附けたものわ、謠曲、山姥に「山姥の歌の一節をうたひて、きかさせ給へ。」狂言記、どぶかつちりに「一節語つて聞かさせられうならば、ありがたうござる。」などである。

希望の助動詞

希望の助動詞の、文語口語の活用わ、次のようである。

たく	たし	たき	たけれ	文語
たく	たい	たい	たけれ	口語

全國の口語わ、すべて、右のように用いて居る。

○萬葉集、六「おほならば、かもかもせむを、かしこみと、振痛袖を、忍びてあるかも。」月詣集、六「きゝたしや、宿をたどりて、なくなみだ、わすれ水とや、流れ

ゆくらん。」義經記、關東よりくわんじゆばうめさるゝ事、「かぢはらがために、しゆつけしたくもなし。」同、なをえ津にておひさがされし事、「請用(しやうよう)はえたけれども、我等が不淨の身にては、なにをいのりても、其しるしや有べき。」曾我物語、五郎、御前へ召出され聞召とはるゝ事、「かやうの者をこそ、一人なりとも召つかひたけれ。

○語根の「た」を「遊ひたや」見たや」逢いたさ」起きたさ」行きたげ」言いたげ」行きたそうに」食いたそうに」「六一六」を見合わせよ」書きたがる」來たがる」などゝ用いることがある。

江戸時代

醒睡笑、三、酒のにほひをきゝ、飲みたさやるせなし。同、五、色もなき、此一枝を、送るなり、人の心の、花を見たさに。同、七、いかにも廣き處にすみたや〳〵と、明けても暮れても案じけるが、云々、

諸國盆踊唱歌、伊賀、まつになりたや、ありまの松に、ふじにまかれて、ねとござる。同、紀伊、つきになりたや、さまがすむ、ねやのふしどを、照したや。

○「讀みたくなる」「起きたく思う」「見たくない」など用いるのわ、連用形である。助詞の「わ」も」を入れて、「讀みたくわなる」「起きたくも思う」「見たくもない」など、も用いる。(二一三二)

「たく」の下に「思つて」などを略して、「御目にかゝりたく參上いたしました。」學者にしたくて、敎育した。」などゝも云う。

これを「かゝりたくッて」「したくッて」などとも云うが、用いぬがよい。

「たく」を「とう」として、「讀みとう思います」「起きとうございます」「見とうぞんじます」などゝ云うわ、東京でわ、丁寧に物を言う時に限る。(二一三三)

關西でわ、「たく」を、すべての場合に、「とう」と云う。

鎌倉時代

平家物語、三、あしずりの事、此舟に、うちのせ奉て、のぼりたうは候へども

沙石集、一、面ハムカヘタウモナキナリ。

室町時代

史記抄、二、一〇　魏ノ文公ノ、古樂ヲキキタウモナカッタ、ト同事ゾ。同、六、三八　西ノハテマデ、イキタウモナカリテゾ、同、九、八　家ヲ季歷ニ繼

ガセタウ大王ノ思ワレタゾ。同、九、五二　物ノ見タウモナイ腹ノ立タル事ナリ。

孟子抄、一、一三　我國ノ利潤ガ有テ、上下富貴スルヤウニシタウ候、ト云ゾ。

同、四、一四　親ノ裘ヲ厚クシタウ、孝子ノ心ニ思ヘ共、

狂言記、吃、言譯がいたしたうござる。同、靭猿、承りたうござる。同、宗論、其樣な情の強い珠數は、戴きたうもおりない。同、萩大名、珍らしい處へ、御供申したうござるか、何所許がようござらうぞ。同、相合袴、聟殿の立姿が見たうござる。

江戸時代の醒睡笑、一に、「けしからず、饂飩をすく者あり、さすが、買うてくひともなし。」諸國盆踊唱歌、隱岐に、「われは奥山の、さゝ小ざゝ、ふぢにまかれて、ねとござる。」などゝあり、「死にともない見ともない」などゝも云い、東京で「恥がましい」といふ意味に、「見つともない」と云うのも、これから轉じたのである。

○「たかろう」わ、（二三四）

鎌倉時代

明恵上人の歌、　山寺は、法師くさくて、居たからず、心清くば、糞ふくにだも。

室町時代

幸若、文覚、　見たく候とも、見たからずとも、なか〳〵申すばかりなし。

史記抄、六、一四　今日ハ、皆、イカホドモ、思ノマヽニ、皇帝ヲ見タカラウホド觀ヨト、許サレテ見ン。

○終止形の「たい」わ、（「ひ」とあるも「い」である、）

室町時代

孟子抄、一、一三　利ハ、國ヲトマシ、軍兵ヲツヨクシタイト云レタゾ。同、十二、七　大方ノ大筋ヲ、ソト聞タイ。

狂言記、伯母酒、　酒、云々、今朝から、たべたい〳〵と存ずる所へ、つゞけて飲うだに因て、云々、同、釣狐、　其狐を釣る物を、ちと見たいの。

詠歌之大概、　かけておもひわたるを、人にしらせたひと也。

江戸時代

昨日は今日の物語、　せめて、天下を三日しりたい。

醒睡笑、五、　上々の酒、云々、いかにも、口へ入れば、そのまゝ咽喉へ、ざうさも

なくはしりこむ、あまりに殘り多く、鶴首のやうに、つくりてもちたい‖。

諸國盆踊唱歌、豊後、ごせをねがふは、わが身ぢやないぞ、さまをうかめて、ともしたい‖。

雜兵物語、上、持槍擔、敵を一疋、めつけたい‖と思ふ所に、云々、

○連體形の「たい」わ、(「ゐ」とあるも「い」である、)

室町時代

幸若、つるぎさんたん、愚老もわかきときならば、ともにおとこになりたひ‖ぞ。

史記抄、十六、七　此樣ニ、シルシタヰ‖事ガアルモノヂャゾ。

狂言記、靱猿、手際のほどを見せたい‖ものじや。」ちと頼みたい‖事がある。

同、宗論、愚僧は、其方に、ちと意見をしたい‖事がある。同、伯母酒、酒、云々、少し緩りとして、たべたい‖ものぢや。

江戸時代

醒睡笑、五、此五體をつくる神にても佛にてもあれ、あつらへたい‖事がある。

○終止形を、文語のまゝに、「たし」と云うことがある。「讀んでも見たし‖書いて

も見たし」出ても行きたし止まつても居たし」文わやりたし書く手わ持たぬ」河豚わ食いたし命わ惜しゝ」

○第三活用形の條件をあらわすのを、第一活用形に「ば」をつけて「行きたくば行け」逢いたくば呼びにやろう」など、云うこともある。「行きたければ」逢いたければ」と云うと同じである。

第三活用形で「聞きたければこそ頼むのである」見たければこそ來たのである」など、云う時わ「たいから」たいに因て」の意味となる。

推量の助動詞

推量の助動詞の「らしい」わ「何も無いらしい」機嫌がよいらしい」病氣わ輕いらしい」など、形容詞にも附くことがある。

○「字も書くらしく畫も書くらしい」などわ中止形で、(二三六「善く讀むらしく思われる」何も無いらしく見える」などわ連用形である。(二三二)

「讀むらしくて」讀むらしくば」讀むらしければ」など、わ用いられぬ。

「らしく」を「待つて居るらしう」見えます」讀むらしう」思われます」など、云うわ、

丁寧な物言いの時に限る。(二三三)

西國でわ、すべての場合に、「らしう」と云う。

「讀むらしかつた」とわ云うが、「讀むらしかろう」讀むらしかつたら」とは言わぬ。(二三五)

○推量の助動詞の「らし」わ、平城朝以前にわ、日本書紀の推古紀に、「宜しかも、蘇我の子等を、大君の、仕はす羅志枳。」萬葉集、一に、「虛蟬も妻を、爭ふ良思吉。」同、六に、「宜しこそ、見る人毎に、語りつぎ、偲び家良思吉」。(「けるらしき」の約)同、十に、「春野の菟芽子、摘みて煮良思も。」など、見えるから、「らし」らしき」と云う活用のあつたものゝようであるが、平安朝の頃には、古今集、六に、「雪消の水ぞ、今まさるらし。」後拾遺集、三に、「聞きつるや、初音なるらし。」古今集、十七に、「ぬきみだる、人こそあるらし、白玉の、間なくも散るか、袖の狹きに。」延喜十三年の菅家萬葉集(新撰萬葉集)に、「年月の、ゆきふりゆけば、草も木も、老いこそすらし、白きを見れば。」など、「ぞ」や「の結び「こそ」の結び、共に「らし」であつて「らしく」らしき」らしけれ」など云う活用わなく、唯「らし」とばかりの語である。今の口語に、

らしく　らしい(終止形)　らしい(連體形)　らしけれ

と云うわ、後に出來た語と見える。そうして、此活用わ「男らしい」天氣らしい」など丶、名詞に附く接尾辭の活用であつて、こゝに云う助動詞の「らしい」わ「らしけれ」と用いられぬ。すべて其活用のちがいわ、末の接尾辭の「六二五」を見よ。

打消の助動詞

口語の打消の助動詞の「ず」「ぬ」「ね」わ、文語と同じで、專ら西國で用いられる。(東國でも「なく」ない」なけれ」にまぜてつかう。)但し、終止形の「ず」の處に「ぬ」を用い、「ぬ」を「ん」とも云うのが違う。

	ず	ぬ	ね
文語	ず	ぬ(ん)	ね
口語	ず	ぬ(ん)	ね

此助動詞わ「擊たれぬ」「起きられぬ」「書かせぬ」「受けさせぬ」など丶、受身、使役の助動詞にも附く。

○「ず」わ「私に限らず、誰でもよろしうございます。」「斷りもせず、行つてしまつた。」「思わず知らず、こうなつた。」のように、副詞句に用いられることがある。

「絶えず送つて來る」「取りあへず返事をして置く」「相變らず御機嫌よくて」

などわ、成語の副詞と見るがよかろうか。

「ある」と云う動詞にわ、「あらぬ」とも「あらず」とも用いず、「無い」と言い變える。（「そうあらねばならぬ」そうなくてわならぬ）、但し、「く」と「あ」とをつゞめて、「遠からず來るであろう」惡しからず思召せ」けしからぬ事だ」少からぬ手數である」などは用いる。「無理からぬ申分（もうしぶん）」など云うわ、それから移つたもので、「無理ならぬ」の誤である。

文語に、「ず」に「ある」をつけたのを約めて、「ざる」とすることがある。口語に、「いらざる口出しするな」なと云うわ、その名殘である。高知縣、島根縣、鹿兒島前、宮崎縣などの口語に、過去の意味に、「讀まざつた」言わざつた」など、云うも、それである。

○「ず」に種々の助詞を附けて、「人を連れずに出かける」何も言わずに居る」立つて居ずとあるけ」こちらにかまわずと行きなさい」行かずとよかろう」言わずとも知れたことだ」飲まず食わずで働く」など、用いる事がある。「及ばずながら骨折りましよう」などわ、成語の副詞と見る。

サ行變格活用にわ、その「せ」に附けて、「せず」と云わねばならぬのを、「何もし

ずに居る」書けもしず」讀めもしない」など丶云うものもあるが、用いぬがよい。

○「言わず語らず」飲まず食わず」食うや食わず」見ず知らず」蝿も取らず蜂も取らず」などわ、終止形に用いるので、文語の姿の殘つて居るのである。

「食わず」ぎらい」問わず」がたり」などわ「落ち葉」讀み物」の例で、名詞にして名詞と組立てたのである。

○「ず」に「ば」を附けて、條件をあらわすこともある。「間に合わずば」よろしい」出來ず」ば」仕方がない」行かずば」なるまい」知らず」ば」言つて聞かせよう」三度に一度わ追わずば」なるまい」(閑吟集「みめもよひか、かたちもよいか、人だにふらざ」なをよからう、」是らも、文語の姿の殘つて居るのであるが、「合わねば」行かねば」知らねば」など丶同じ意味である。

○東國で、通例「ぬ」の終止形を用いるのわ、「何も見えませぬ」何もなさらぬ」で居らつしやる」行こうかしらぬ」それわけしからぬ」油斷がならぬ」文はやりたし書く手わ持たぬ」などである。

「成る」に「ぬ」を附けて、「言うことわならぬ」さような事わ相ならぬ」「ならない」とわ

云わぬ)などゝ言う時わ、禁止の意味となる。

○東國で、通例「ぬ」を連體形に用いるのわ、「知らぬ顔」「知らぬ振」「分らぬ話だ」「聞かぬ積りにする」「きかぬ氣の男である」「一方ならぬ世話になつた」「知らぬが佛」「言かぬ種わ殖えぬ」「讀まぬ同志、書かぬ同志」などである。

此終止連體の「ぬ」を「ん」とも云うが、口語文に「書物を讀まん」ことを希望いたします」これを寫さん」と試みた」などゝ書く者もある。是れわ、文語の未來の「讀まむ」「寫さむ」をまぜてつかうので「讀まぬ」「寫さぬ」と間違いやすい。「其事情を知らむ」(「ぬ」の誤)ので大に間違つて居ります」無理に言詰め押付けぬ」(「む」の誤、押付けよう)としたところで相手わ聞かず」などわ、間違いである。

曾我物語、ゆ井のはまへ引出されし事に「さぞふびんならんと、とぶらはん」者はなかりけり。」なども「ぬ」であるが「む」と紛れやすい。

○「知らねば」こそ、言つて聞かせるのである、」など云うわ、「知らぬから」知らぬに因て」の意味である。

「無ければ」ならぬ」を「なければ」ならぬ」「なければ」ならぬ」などゝ云う人があるが、甚しい間違いであると云うことわ、前の形容詞の(一六五)に云つてあ

る。

「讀まねばならぬ」聞かねばならぬ」を、西國でわ、「讀まにやならん」聞かなならん、」又わ、「讀まんならん」聞かんならん」と云い、又「爲ねばならぬ」を、「せんばならん」などゝも云うが、用いぬがよい。

○本書の(二五三)に、「ぬ」を過去の意味に云う時わ、「讀まなんだ」聞かなんだ」「來なんだ」となるとある。是れわ、西國でばかり用いられる。此過去を、推量の意味に云う時わ、「讀まなんだろう」聞かなんだろう」來なんだら」などとなる、「聞かなんで」なととも稀に云う、しかし、是れも、東國でわ用いぬ、但し、「見たり見なんだり」聞いたり聞かなんだり」などゝわ稀に云う。

此「なんだ」わ、「ず」ぬ」ねの系統のもので、東國の打消の「なく」ない」なけれ」の系統のものでわなかろうが、どういう語原であろうか。「聞かぬあつた」が約まつて、「聞かなつた」となり、又「聞かなんだ」と、末を變じたものでもあろうか。四國邊で「言わずあつた」を「いわざつた」と云うと同例で、「あり」の「り」が「つ」とも「ん」ともなるわ、「しりはらひ」(後拂)もりがり」(後驅)の「しつぱらひ」とも「しんがり」ともなるようなものであろう。

室町時代

史記抄、四、三　鄭公ト云ハナンダルモノゾ。（「ル」が附いて居る。）同、六、七三　廼封呂種爲沛侯高祖ノ初メナンダ沛ニ封ジタヨ、是カラ呂氏ヲ侯トシ始メタゾ。同、十九、三九　昌邑王ハ、幼サニ、マダ此時ハ封ゼラレナンダ孟子抄、一、一三　孟子、云々、諸侯ノ國へ行レナンダ人ゾ。同、三、二〇　物ヲエイワナンダ。同、五、五　コノヤウナ事ハセナンダゾ。

狂言記、墨塗、便りをいたしませなんだ。同、素襖落、最前から氣がつかなんだ。同、相合袴、聟入をいたさうと思ふばかりで、上へも下へも寄りませなんでござる。（「で」が附いて居る。）同、抜殻、清水に鬼のある事は、存ぜなんでござる。同、鞍馬參、夜前、宿坊へ寄らなんだに依て、直に下向せう。

伊曾保物語、喜び斜ならなんだ。」疾より外に吐き出さなんだ。」

されども一圓同心せなんだ。

江戸時代

昨日は今日の物語、十石とる人にさへ、やらぬものをとて、中々、きゝもい

れなんだ。」中々申共、きかせまいとて、とんじやくせなんだ。

醒睡笑、一、　人に難義をかくるはや、といへども、人はきかなんだげな。同、

二　何とて久しく見えなんだぞ。

日本永代藏、三、高野山借錢塚の施主、されど、年久しく內藏に隱れ、世間見なんだ銀が、人手にまはりて、云々、

○文語に「見ずして」受けずして」讀まずして」、口語に「受けぬで」、又わ「讀まないで」の意味を、西國で「見いで」受けいで」讀まいで」と云うが、用いぬがよい。是れわ「ぬ」の「い」と變わつたものか、又わ「文語」に「見ずて」受けずて」讀まずて」を約めて「見で」受けで」讀まで」とも云うのを延べたもので、西國で「葉」を「はあ」と云い「蚊」を「かあ」と云い「火」を「ひい」「目」を「めえ」「酢」を「すう」と云うと同じ例であろうか、「嵯す」を「しいす」と云い「木の國」を「紀伊の國」と云い、新撰字鏡の四一に「鈎、知伊」同、四六に「杼、比伊」類聚名義抄に「茅、チイ」輯、ヤア」本草和名、下、廿七に「尨蹄子、世衣」承曆年中抄の最勝王經音註に「蚊、加阿」などゝ見える。

平安朝時代

梁塵秘抄、二、神社哥、木嶋、　このみこは、やうかるみこよ、かたびらに、しりを

かゝいで、ゆゝしうつきうたる、これをみたまへ。

鎌倉時代

平家物語、九、坂おとしの事、牡鹿二つ、いとゞめて、牝鹿をば、射いでぞをとしける。

室町時代

幸若、富樫、首を遙の下に懸けたるは、扨、ものをば知らいで懸けぬ。同、和田酒盛、祐成なればこそ、多いかたきのその中にて、臆せいで取つて呑うであれ。

史記抄、五、一八　イトマゴヒヲモマウサイデ、マカリカヘラレ、同、六、一三　貰ハ、錢ヲモヤライデ先ヅ借テ飲ムコトヲ云タゾ。同、十、一五　晏子ガ、石父ヲナダメタリナンドモセイデ、ナントモ云ワイデ、閨中へ入タホドニ、同、十、二三　刖(あしきら)レウヲカヘリミイデ、母ノ病ヲ問ワウトテ、

史記抄、九、五〇　王ノ我ヲイカントモエセイ事ヲ云タテヽ、末ニ是無奈我何トシタゾ。（「えせぬ事の意か、研究すべきである。」）

孟子抄、一、ナゼニ、妓トハカヽイデ、趙氏ト云ゾ。同、一、一九　文王ノ徳ガ

禽獣マデ及デ、圍ノ中デ、人ニトラレウ念ガナイホドニ、人ニヲヂイデ、ナツイタゾ。同、一、二三　桑、云々、公田ニハウヘイデ、私田ニウエル也。同、二、一七　人ヲ擧用トテハ、ヨク、、試ミイデハ大事ゾ。

閑吟集、をともせいで、およれ〳〵、からすは月に鳴くぞ。

狂言記、宗論、待たいで叶はぬ連でござるに因て、來いで何とせう。」同、釣狐、此中は、久しく逢はいで、懐かしさに參つた。同、相合袴、盃、云々、まづまゐらいで、左兵衛殿に進ぜる。同、伯母酒、物を仰られいでは、迷惑でござる。同、八句連歌、算用が出來ても、出來いでも、是非とも連れて行かねばならぬ。

詠歌之大概、又やみん、かたのゝみのゝ、櫻がり、又やみんの五字、大事也、又やミイデカアラン也。

伊曾保物語、物言ふことも叶はいで、顔打ちしかめ」、人並に、何ぞ持ちまらせいで「まゐらせいで」の略は、というた。

江戸時代

醒睡笑、四、汁も菜も見もせいで、御奔走と申されけり。同、五、物もいはず打消の助動詞　見いで　受けいで

ひで、ものならふ人、

犬子集、十一、戀、稀にあふ夜をば、まん丸ねもせいで。

小栗判官、二、只今の玉づさを、ものをしつてやぶらせ給ふか、又は、しらひで、御やぶりあつてましますか。

淋敷座之慰、琴の歌、千鳥の曲、しらま弓のまゆみの、そるべきはそらいで、八十のおきなの、戀に腰をそらいた。

○打消の助動詞の「なく」ない」なけれ」わ、專ら東國に用いられる。

「ない」の、カ行變格活用に附く「こない」を「きない」と云ひ、サ行變格活用に附く「しない」を「せない」と云う處もあるけれども、用いぬがよい。

○敬讓の助動詞の「ます」わ「ませぬ」と云つて「ませない」とわ云わぬ。動詞の「ある」わ「あらない」と云わず「無い」と云いかえる。

○受身、可能、使役の助動詞にも「讀まれない」書けない」起きられない」讀ませない」受けさせない」など〳〵續く。

○「ない」の語根の「な」に、接尾辭の「そう」(六一六)を附けて「出來なそうだ」つまらなそうに」勝てなそうです」など〳〵も用いる。(一五一)(六一六)を見合せよ。「智慧

が足りな過ぎる」などゝも云う。

○「書かなくなる」見えなくなつた」出來なくする」足りなくない」などわ連用形である。(二三二)又「わ」も」を加えて、書かなくわなる」足りなくもない」などゝも用いる。此「なく」わ、中止形とわならぬ。

「足りなくない」長くない」靜でない」などの「ない」も、打消の意味でわあるが、これわ「無い」と云う形容詞である、間違えてわならぬ。

○「書かなくて」來なくて」わ、「書かなくあつて」來なくあつて」を略したものであろう。

これを「書かなくッて」來なくッて」などゝも云うが、下品に聞えるから、用いぬがよい。

○「書かなかつた」讀まなかつた」(二三四)を「書かんかつた」讀まんかつた」とも云うが、是れも用いぬがよい。

○終止形の意味に、「むだに待つのも、つまらなし」田舍に居るのも、つまらなしと上京して、」などゝ云うのわ、間違である。此助動詞わ、文語の生れでないから、初から「なし」の終止形わ、ないのである。

○條件をあらわす意味の「書かなければ」來なければ」を「書かなくば、それでよろしい。」來なくば、呼びにやれ。」など、云うこともある。

「書かなければ」受けなければ」用心しなければ」などを「書かんければ」受けんければ」用心せんければ」とも云うが、用いぬがよい。

「讀まなければこそ、氣がつかぬのである。」來なければこそ、呼びにやつたのである。」など云う時わ、「讀まないから」來ないに因て」の意味となる。

○打消の「ず」ぬ」ね、「なく」ない」なけれ」わ、靜岡縣、山梨縣、長野縣、越後を境として、それから東わ、「なく」ない」なけれ」で、「ず」ぬ」ね」をませ、それから西わ、九州まで、專ら「ず」ぬ」ね」を用いる。けれども、岐阜縣の安八郡、養老郡、岡山縣の英田郡、廣島縣の沼隈郡、比婆郡、島根縣の大原郡、簸川郡、宮崎縣の宮崎郡に、「なく」ない」なけれ」を用いる處がある。因て、二つながら、通用させる事とした。

○打消の助動詞の「なく」ない」なけれ」わ、古くわ、物に見えないで、凡そ三百年前ぐらいの書物から、あらわれて居る。何時頃から起つた語だか分らぬ。其語原に就いてわ、

萬葉集十四の東歌に、

武藏野の小岫が雉立ち別れ往にし宵より夫に安波奈布(逢はず)よ。

會津嶺の國をさ遠み安波奈波婆(逢はざらば)偲びにせむと紐結ばさね。

きはつくの岡の莖韮我れ摘めば籠にも民多奈布(滿たず)夫と摘さね。

眞憐み寢れば言に出佐禰奈敞波(さ寢ねば)心の緒ろに乘りてかなしも。

韓衣裾の打交へ阿波奈敞婆(合はねば)寢敢へぬ故に言痛かりつも。

晝解けば等家奈敞(解けぬ)紐の我が夫に相依るとかも夜解けやする。

栲衾白山風の宿奈敞抒母(寢ねども)子ろが襲着の有ろこそ善きも。

對馬の嶺は下雲安良南敷(有らず)上の嶺に棚びく雲を見つゝ思ばも。

眞少薦の布のみ近くて安波奈敞婆(逢はねば)奥津眞鴨の長息ぞ我がする

水久君野に鴨の匐ふ如兒ろが上に言おろはへて未だ宿奈布(寢ず)も。

とやの野に兎狙はり乎さ〳〵も禰奈敞(寢ぬ)兒ゆゑに母に嘖ばえ。

同二十の防人の歌に、

月日やは過はゆけども母父が玉の姿は忘れ西奈布(爲ず)も。

などゝ見えて「逢はなはゞ」(將然形)「逢はなふ」滿たなふ有らなふ寢なふ」爲なふ」(終止形)「解けなへ紐寢なへ兒」(連體形)「合はなへば」逢はなへば」寢なへば」寢なへ

ども(已然形)など丶、活用する打消もあり、又わ、古く「思はぬ」知らぬ」見ぬ」を、延言に「思はなく」知らなく」見なく」など丶云うことがある。是らから遷つたものかとも、思われるけれども、東國の詞わ、中世の書にわ見えぬから、分らぬが、そうでわないようで、是れわ、形容詞の「無し」を、上二段活用の動詞にわ「落ちなし」下二段活用にわ「覺えなし」と、其連用形に附け、四段活用にも「疑ひなし」と、其連用形に附けて用いるのを、「ず」ぬ」ね」わ、將然形に「疑わず」と附けるのから紛れて、「ない」をも「わ」に附けて「疑わない」となつたものかと思われる。此助動詞の書に見えるわ、江戸時代からである。

○古今和歌六帖、一に「春雨の、ふるにおもひの、きえなくて、いとゞおもひの、めをもやすらん。」とあり、又「句だに、あかなきものを、梅が枝の、末つむ花の、色に咲くべく。」といふ能因法師の歌があるといふ事であるが、何かの誤字であろうか。史記抄、十六、一八に「不賢ト云ワウコトデハナケレドモ、云々、ツント、一身ノ氣節バカリデ、聲ヲ天下ニ施シテ、賢ナリト不言ト、云ワナイゾ、是コソ、第一ノ難コトヨ、」などとあるわ、「云フヲ無イゾ」であろう。又、狂言記、伯母が酒に、「お見やる通り、わらはも異なる事もおりないよ。」このやうな滿足

な事はおりない。」などは「お入り無い」か「居り無い」であろうか、此言葉わ、狂言記に多く見える。

江戸時代

おあん物語、首もこはいものではあらない、その首どもの血くさき中に寝た事もおじやつた。（「あらない」わ珍らしい。）

諸國盆踊唱歌、越前、しんき〳〵が、三つ四つござる、かゝるしんきに、かゝらぬしんき、ひとつ枕に、寝ないしんき。

淋敷座之慰、吉原太夫浮世たゝき、八わうじ山の炭焼だか、色はくろいが、偽りやござらない。

西翁十百韻、西國にて、くれないか、是非〳〵花を、所望だぞ。

醒睡笑一に「屋根の上に、鳶の二つありしを、目付にしたりしが、それもいないて見えぬ。」とあるわ「て」を清音によんで「往なして」でもあらうか。又同しに「見たところ、うまさうなりや、此茶のこ、名はから糸と、いふてくれなお。」とあるわ「紅」に「與れない」を言掛けたものか、京都言葉であるから、どうも不審である。

打消の助動詞　なく　ない　なけれ

雜兵物語、上、鐵炮足輕、緒が短くて、掛けられない所で、云々　同、上、鎗擔小頭　目釘に心をつけて、ぬけないやうにしめされい。同、上、挾箱持、敵にあはなひで、死なゝひ時は、御歸陣の時、云々、同、下、荷宰料、敵地だ、又は、味方地だとて、油斷はせないもんた。

其外、近松門左衞門の淨瑠璃作物の中に、「致さない」來申さない」せない」など多い。

○「まい」わ、受身、可能、使役の助動詞にも、「取られまい」起きられまい」讀ませまい」受けさせまい」など、、其第一活用の將然形に附き、敬讓の助動詞の「ます」にわ、「ますまい」と、其第三活用の終止形に附く。

○カ行變格活用の「こまい」を「くまい」又わ「くるまい」きまい」などゝも云い、サ行變格活用の「しまい」を「すまい」又わ「するまい」せまい」しょまい」などゝも云つて、全國、各地の混用わ、實に甚しく、區別することが出來ぬ、すべて用いぬがよい。

○名詞につゝけるのわ、讀むまいものでもない」名を汚すまい爲に」驚くことか驚くまいことか」何もあるまい程に」などの外わ、多く用いられぬ。

○名詞につゞける連體形にわ、文語のように、「身分ある人にわ、あるまじき振舞である。」など、「まじき」を用いる事があつて「ある筈でない」の意味につかい、又「妄に論ずまじき事だ、」「すまじきものわ宮仕へ、」など、云つて「しない方がよい」の意味につかう。此時わ、古格に從て、サ行變格活用の終止形の「す」に附くのである。

○「まい」の、文語と口語との遷りかわりわ、次のようである。

まじく	まじ	まじき	まじけれ	文語
まじく	まじい	まじい	まじけれ	中世の口語
まい		まい		今世の口語

中世の口語に、「まじ」の「まじい」となつたのわ、「惜し」の「をしい」となる例である。今世の口語に、「まじ」が「まい」となつたのわ、「じ」の母韻の「い」となつたのであるが、連體形の「まじき」の、「まい」となつたのわ、異例である。そうして、今わ、全國の口語に、「まい」一つを、終止形にも連體形にも用いて、其外の活用わない。是れわ、終止形の「まい」が、連體形を兼ねるようになつたものでわあるまいか。外の動詞助動詞の連體形が、終止形を兼ねるようになつたのと、反對である。然

るに、義經記の土佐房義經の討手に上る事に、こよひをば、すぐすまじ物をと思ひける」など丶、「まじ」をそのまゝ、連體形に用いてあるのもある。是れは、古今集の十八に、「幾世しもあらじ我身を、」新古今十八に、「長くとまでは惜しまれじ身を、」玉葉集、十八に、「歎くとも言ふともかひはあらじ世を、」など丶あると同じ例であろうか。そうすれば、連體形に用いた「まじ」が、「まい」となつたものとも見られる。

○文語の「まじ」わ、古くわ、すべて、動詞助動詞の終止形に附く格であつたのが、(ラ行變格活用ばかりわ、連體形の「ある」に附く、)後にわ、四段活用の外わ、將然形にも附くようになつたのが、變わつて居る。

右の動詞助動詞えの附き方の違い、又、中世の口語に、終止形の「まじ」が「まじい」となり、今世の口語に、終止形連體形が、共に「まい」となつたのを次に示す。此中で見分けて、其遷りかわりを知るがよい。

鎌倉時代

宇治拾遺物語、一、鬼にこぶ取らるゝ事、ものうらやみは、せまじきことなりとか。

後鳥羽院御百首、みまじきと思へども、さすがにまたみらるゝ也。

平家物語、二、西光切られの事、それをば、君も、しろしめされまじう。同、五、伊豆院宣の事、福原の新都へのぼらうに、三日にすぎまじ、同、七、實盛さいごの事、和殿をさぐるにあらず、存ずるむねがあれば、名のる事はあるまじい(連體)ぞ、同、九、一二のかけの事、一引もひくまじい(連體)ものをと、ひりことばし居たる。

室町時代

義經記、土佐房、義經の討手に上る事、こよひをばすぐすまじ(連體)物を、と思ひける、」させるよせ合のたてつきいくさはすまじひ(終止)ねらひよりて、夜うちにせん。

平家物語、劍卷、鬚切膝丸とて、はじめのまゝならば、劍の用も失せまじきを、云々、

幸若、和田酒盛、和田が居うずる座敷に祐成がゐまじい(連體)かと、同、百合若、男子女子に限るまじい(終止)御主の命に替らんこと、云云、同、笈さがし、これより越中へ御下向は、なか〳〵叶ひ候まじい(終止)それを

打消の助動詞　まい　まじい

如何にと申すに、云々、

史記抄、五、一五　合戰ヲシテキリヤウコトハ、我ハ、公ノヤウニハエセマイゾ。同、十、三七　父ノタスカルマイ事ヲ知タレドモ、云々、同、十、六六　秦カラハ、エ守ルマイゾ、サルホドニ、秦ハエセメマイゾ。同、十一、四　二人ハ、武遂ヲカヘサセマイト云爭ゾ。同、十一、二四　秦ガ、コチヘ、エスマヌト知タラバ、チソトバカリノ地ヲアタヘマイヨ。

史記抄、十四、七〇　諫タレドモ、フットキカマイニキワマツタホドニ、

孟子抄、一、五　道ヲ行テ名ヲアグル事ハ、ナルマイト云事ヲシラレタゾ。同、三、一三　ナラウカ成マイカ、セウ歟セマイ歟、同、十二、一〇　不肖ノ君ニ仕ヘマイト云ハ、伯夷ゾ。

孟子抄、八、一七　死ヌルマイ處デ死ヌレバ惡ゾ。

狂言記、墨塗、初より、お目にかゝりますまい物を、同、七騎落、某は、船より以て全くおりまじき、(下略の語)所詮、たゞ命二つ持ちたる人をば、船よりおろし候へ。」某は、船よりおり候ふまい、と申ければ、」父の命に背くものならば、人手にはかけまじき(下略の語)とて、同、地藏舞、そりや、こ

ちらが出たわ、出はすまい。同、萩大名、先の亭主が知る人でないによつて得行かれまい。

詠歌之大概　臥猪ナドハ、マコトニ、歌ナドニハ、云ツヾケラレマジキ物ニテ、云云、

伊曾保物語、如何にも似合ふまじい(終止)と見ゆれば、ぬる湯をば飲むとも、咽へ指をさへ入れずば、苦しかるまじい(終止)と思うて、

江戸時代

昨日は今日の物語、中々、申共、きかせられまいとて、とんじやくせなんだ。」

なにとぞして、いなせまいとおもへども、

徒然草抄、上、五ッ緒の事、云云、大臣ナドノ外ハ、用ラレマジキヤウニアリト、

千代もとぐさ、欲に心を汚されまじき爲に、一物をも身に貯へず。

太閤記、或問、三、米穀も、下直に成、よろづたやすくなりなば、たまりは致すまいといはれし時、

醒睡笑、一、われは、一口さへあけまいとおもふたもの、同、一、鈍副子、をの

打消の助動詞　まい　まじい

れは、日本に、またふたりともあるまいうつけやとあれば、同、二、中々、忘れはしまい、といひしに、同、二、愛宕精進をいたす、下されまじき、（下略の語）と申上る。同、七、情（じやう）のこはさは、どちもまけまい。

東海道名所記、京の島原、樂阿彌にも、金銀をおほくもたせたらば、いやでもあるまい。

古今夷曲集、九、雜、下、いかにねて、起る朝の、へんがへぞ、昨日はこふと、今日はこまひと。

後撰夷曲集、九、草も木も、すきと裾野を、やき筆に、駿河もふじは、えにせられまじ。

諸國盆踊唱歌、河內、あわのなるとに、身はしづむとも、きみのことなら、そむくまい。同、和泉、おちよ〳〵と、おとそとしやる、さるの木のぼり、おちやせまい。同、美作、またとゆくまい、湯原のゆへは、三坂三里が、ういほどに。

西翁十百韻、岩城にて、此里のみの、月ではあるまい。同、西國にて、させまいと、かきやぶるなる、際目論。

雑兵物語、上、馬取、陣中に、小唄、浄瑠璃、はや物語を御禁制だも、高聲させまいと云ことだ。

松の葉、一、本手、うきよぐみ、ふみもやるまい、びんぎもせまい、返事さへせぬ、うさ、つらさ。

過去の助動詞

過去の助動詞が、五段活用の動詞の「書き」勝ち」取り」言い」死に」飛び」讀み」に附く時わ「書いた」勝つた」取つたろう」言つた」死んだ」飛んだ」讀んだろう」などゝなるといふ事は、本書(一〇三)に説いてある。

○「た」たろう」だ」だろう」わ、全國の口語、すべて同じである。

○「た」たろう」わ、受身、可能、使役の助動詞にも「撃たれた」受けられたろう」書かせた」起きさせたろう」などゝ附く。

○過去の時に過去であつた意味に、「書いてあつた」死んであつた」など云うのを約めて、「先月催促された時に、疾うに書いたつた」去年尋ねた時に、もう死んだつた」などゝ云うこともあるが、用いぬがよい。

史記抄、十、五〇に「業已トハ、ハヤカウシタッタホドニ、ト云事ゾ、」又犬子集、春、上、元日に「あつたつた、ひとりたつたる、ことし哉、」など丶あるのも、是れであろうか。但し、後のわ「あ丶立つた」でもあろうか。

○過去の動作を思い出した意味に「先月書いたつけ」去年讀んだつけ」など丶云うこともある。これわ、終止形ばかりで、活用わない、「たつけ」わ、文語の「たり」き、」又わ「たりけり」の約轉したものであろうか。しかし、意味が少し違つて居る。

○連體形でも「たいした人」「実つた山」とんだ間違」「西洋人見たような顔」など丶用いるのにわ、過去の意味わない。(本書の形容詞の(一六八)(二五四)(二五五)にも説いてある。)

○「おつと待つた」「そこ退いた」など丶、命令に用いることもある。(一三〇)の末を見合わせよ。

○過去の助動詞の、文語と口語との變わりめわ、次のようである。

たら	たり	たる	たれ	(たら、む)	文語
たら	たり	た	た	(たれ) たら	口語

口語の「たり」わ「見たり聞たりする」(中止、連用)などの「たり」で「たら」と共に、助詞(四七一)(四七七)に入れた、其處を見よ。

「た」(終止)「た」(連體)わ「たり」「たる」の「り」「る」の失せたのである。「さしたる事もない」など云うわ、文語の殘りである。

「妻たり母たる人が」「何時たりとも」「何んたる事だ」など云うわ「とあり」とある」の約まつた文語の殘りで、これとわ違う。

「たれ」わ「相談したれば得心した」「五六町走つたれば疲れた」などの「たれ」であるけれども、今わ多くわ用いないで「たら」と云い變えて「たれば」の意味につかつて居て「たら」わ、將然形にも已然形にも用いられて居る。見たればこそ證據として言うのである」など云うこともあるが、今わあまり用いられぬで「見たから」と言變える。

「て」「つ」「つる」「つれ」と活用する文語の完了の助動詞の「つ」「つる」「つれ」わ、今わ亡びて、「て」ばかり殘つて居るから、

て　たり　た　た　たら　たろう

活用するものと、初わ案を立てたが、特別委員會で「て」に過去の意味のある

ことわ少ないと云つて、「て」わ、助詞(四八三)とすることにせられた。

○「たろう」と變わつた例を次に示す。此中で、終止形、連體形、推量形を見分けよ。

平安朝時代の今昔物語、二十八、上、尾張守口五節所語に「尾張ノ國ハ、前司ニ被亡サレテ、无下ニ弊ト聞食スニ、此任二年ニ成ヌルニ、吉ク福シタナレト、被仰ケレバ、云々、」南殿ノ方ヨリ、歌ヒ喤テ來ル音ス、ソヽ來ニタナリト集テ、云々、」などあるわ、「したるなれ」來にたるなり」が、一度、「したんなれ」來にたんなり」と變わつて、(外の書に「行きたんめり」など、見えるも、それである。)又、その「ん」の失せたのである。藤原爲忠朝臣集の歸雁に、「時きぬと、ふる里さして、かへる雁、こぞきたみちへ、またむかふなり、」とある「きた」わ「來た」と「北」とを言いかけたのであらう。(犬子集、上古俳諧、前中納言定家、「大ひげの、お車そひて、きた南、」なども、これであろうか。)

鎌倉時代

平家物語、二阿古屋の松の事、日本は、昔、三十三ヶ國にてありしを、中比、六十六ヶ國にはわけられたなり。同、九、三草合戰の事、母方の祖父にあ

づけて、弓矢とりには仕立たなり。同、九、坂おとしの事、舟一そうに、よろふたる者共が、四五百人千人ばかり、こみのつたらうに、なじかはよかるべき。

平家物語(寛永三年板)八、猫間、猫殿(猫間中納言光隆)ノ、食時ニ、マレバレワイタ(稀々オハシタルニ、物ヨソヘトゾ云ケル。

源平盛衰記三十三、光隆卿向木曾許、木曾、意得ズトテ、ナマリ音ニテ、何、猫ノキタ、猫トハ何ゾ、鼠トル猫カ。

南北朝時代

太平記、十五、主上自山門還幸、二筋の、中の白みを、ぬりかくしにた〳〵(似た、新田)しげな、笠符哉。(前の「一六七」の所にも擧げて說いてある。)

室町時代

幸若、和田酒盛、和田の右座に、たゝみ一帖あいた。」爰に、下女が一人、ゆきあふた、やあ、此やかたのうちに、何事があると、とふた。」あさいな、云云、前にゐいと引た、うしろへゐいとのひた、草ずりきれて、のきけれど、たちどころをさらずして、ふんじかつてたつた。同、烏帽子折、左へ折つた烏

帽子なり」さいた刀は、皆、黄金造なり、同、笈さがし　六艇舟の船頭と、見ない(なし)た事は、空事か。

史記抄、六、一二　イカサマ、ヲレハ、サワ不聴ザッタゾ。同、六、一六　禮錢、云云、少ナウモテキタラウ者ヲバ、云云、同、六、二七　キャツモ、ナントシタヤラウ。同、六、七三　漢ト戰タナラバ、云云　同、七、一九　兄ノ劉章ニヲトリタ事ヨ。同、十、七二　喟然ハ、ナゲイタナリ。同、十七、二五　離卦爲龜、云云、得我者ハト云ハ、龜ニ我ゾ得タラウ者ハ、匹夫モ爲人君ベキゾ。

孟子抄、一、一　孟子ノ、手ヅカラ作シタ程ニ、孟子ト云ゾ。旗ヲ立テ、見事ニ有タガ、皆、チリ〳〵ニ成タゾ。同、一、二　笑ワレタ人ガアッタゾ。同、一、二七　高祖モ、ナカレタゾ、ヲシマレタゾ。同、四、二二　市利ヲ見テ、ソレハ高ク賣タ買タト云テ、

閑吟集、花ゆへに、〳〵に、あらわれたよ、なふ、あらうのはなや、うのはなや。」

一夜なれたが、名殘をしさに、いで〳〵見れば、」しやつとしたこそ、人はよけれ。今ゆた髪が、はらりととけた、いか樣心毛(もとゞり)たそ〳〵ととけた。

山崎宗鑑辭世、(天文中)　宗鑑は、いづくへいたと、問ふならば、用が出來たで、

あの世へといへ。

狂言記、靭猿、何ぞ出たならば、何とした事ぢや、似合ひました御用ならば、生きた猿でござる、用意した、心得た、同、釣狐、次の矢を、上總介がひやうと射た、彼の狐を、終に射止めた、同、宗論　今一人の者は、何方へ行た事か知らぬ、定て宿をとつた物であらう。

詠歌之大概、前ニ云タコトヲ、肝要の事なれば、二度づゝいへり、鶯モ、春ニはやく出テ、餘寒逢タゾ。

伊曾保物語、其身は、風呂に入られた、柿を預かつた者共、云云、

江戸時代

徒然草抄、上、遊仙窟ニハ、天事ト書テ、オホヤケゴトヽヨマセタゾ。同、下、笛ノ曲ニ、想夫憐アリ、名ガイヤナ、アハレムナドヽ云テ、ヨウモナイト云タヲ、ソレガ語ガアヤマツテ、想夫憐ト云タ事ヂヤト云タゾ。

醒睡笑、一、鼻が、家の内へ飛入たるを見たは、とあれば、云云、同、五、月も見ず、いもが子どもの、ねいりたを、おこしにきたは、いかゞあるべき。

戯言養氣集、お天神ぢやとて、うしろを、ほと〳〵と打たれば、八幡なしぞ、

しやだんが破るゝと云た。

犬子集、二、春、下、木だちには、過ぎたぞ花の、大つばき、」十町も、つゞけたらふの、うば櫻、同、三、夏、おく山に、とんせいしたか、ほととぎす。

油糟、秋　來る秋と、いへど目に見た、人もなし。同、雜、ほつこりと、洗ふたやうな、月の顏、」しんだかと、おもへば死なぬ、酒の醉、」極樂に生れたやうな、醉の中、

吾吟我集、二、つぼめるや、帽子きせたる、鹿子ゆり、ひらいた花は、いふにおよばず。同、三、古筆の、化してなりたか、きり〳〵す、硯させてふ、箱のなければ。

正章千句、五、岩組は、屏風をたてたごとくにて、同、七、蝴蝶は春の、雪にようだ。

小栗判官、てるてふみの段、二、板ふみならして、おどした身のけもよだつばかりなり」さんをみだしたごとくなり。

古今夷曲集、三、月見よと、いもが子供の、ねいりたを、起しにきたは、何かくるしき。

ト養狂歌集、下、芝のみたといふ所にてよみける、見たゝよ〳〵、あらみたゝよ、見たゝさぎ烏、おもしろひその、おもくろいその。

西鶴五百韻、何鞠、約束の、繩動せば、こゝろへた、同、葛何、のつてまゐつた、織姫の牛。

日本永代藏、二、天狗は家名の風車、やれ〳〵、よい事を思出してゐたゝから、忘れたゝは。

敬讓の助動詞

敬讓の助動詞を、細かに分ければ、次のように、五つ通りになる。

一動作を敬つて云うもの　　れる、られる、なさる、あそばす

一仕向けられる動作を敬つて云うもの　　くださる

一動作を丁寧に云うもの　　いたす、つかまつる

一仕向ける動作を丁寧に云うもの　　もうす

一あらゆる動作を丁寧に云うもの　　ます

「れる」「られる」より「なさる」わ、一段と敬つて云い、「なさる」より「あそばす」わ、又一段

と敬つて云うので、「いたす」より「つかまつる」わ、更に丁寧なことは、敬譲の動詞の元の意味の通りである。

○(二六六)の「れる」「られる」わ、其活用も、動詞に附く工合も、前の受身の助動詞の「れる」「られる」と同じである。但し、命令に「禮を受けられよ」「早く來られよ」などとわ云はれるが、「受けられろ」「來られろ」とわ云われない。(三〇二)

「れる」「られる」わ、文語にもあつて、文語の「る」「らる」が變わつたのである。その昔からの遷りかわりの事わ、受身の助動詞の處に記して置いた。

稀に「仰出されがある」など、名詞の形に用いることがある。

「せられる」「しられる」が約まつて「される」となるわ、受身の助動詞の處で說いたと同しである。(一八六)(二六七)

○(二六六)使役の助動詞にも附いて「歸らせられる」「起きさせられる」「受けさせられる」「せさせられる」など云つて、使役の意味わなくて、唯一段と敬つて云うにつかうこともあつて、是れも、文語から移つたものであるが、今わ多くは用いない。又、それを約めて、少し敬う心わ薄くなつて、「歸らつしやる」「起きさつしやる」「受けさつしやる」「勉強しさつしやる」「勉強さつしやる」「變わつて五段活

用となる、次のも同じである、）などゝ云ふこともあるが、是れも、今わ多く用いない。此類で「ならせられる」あらせられる」を「年わ十五にならつしやる」そんな事わあらつしやりますまい」などゝ云うのわ、今でも用いられるようであるが、是れも、多くわ「おなりなさる」おありなさるまい」と云う。但し「いらせられる」が「いらつしやる」となり、使役の助動詞わ加わらぬが「おうせられる」が「おつしやる」となつたのわ、前の敬譲の動詞の處で云つた。

室町時代

狂言記、烏帽子折、御禮にあがらつしやれませいで叶はぬ事でござりまするに、あがらつしやれたらば、ようござりませう。」樊斗目を召さつしやれたがようござりませう。」殿の待ちかねさつしやれう。同、ひめ糊、四疊半敷へ取籠らしやれて、讀ませらるゝ物の本、云云、同、吟聟、物に心得さつしやれた程でござりまする。」先づ待たつしやれませい。同、披殻、何事もないか抔、問はしやる時には、何と申しませうぞ。同、聟貰通さつしやれい。同、宗論、道連にならしやるまいか。同、萩大名、いづれもの、御腰掛けられては、あの萩の花につけて、短冊をつけさつしや

る。（何れも、下二段活用であるが、四段活用も、まじつて居る。）

狂言記、吟聟に「あゝ騒がしやんな、辭宜でござる。」なう、居さしますか。」宗論に「どれへ行かしましたぞ。」先へ行かしませ。」などわ、又、崩れたり約まつたりしたのであろう。

江戸時代

好色五人女、三、小判しらぬ休み茶屋、　すゑ〳〵　は、何にならうとも、かまはしやるな。

○敬譲の助動詞の「なさる」あそばす」くださる」いたす」つかまつる」もうす」の活用形も、用法も、敬譲の動詞のそれ〳〵と同じである。

○敬譲の動詞の「なさる」あそばす」わ、「する」と云う動作を敬つて云うので、「お歸りなさる」およみあそばす」と云うのわ、「お歸りをなさる」お讀みをあそばす」と云う心であるを、「を」を省いて直に附けると、唯「歸る」讀む」を敬つて云う意になるから、「なさる」あそばす」わ、助動詞のようになるのである。次の「くださる」いたす」つかまつる」もうす」なども、同じ意味である。

後撰集、雜、一に「ならの葉の、はもりの神の、ましけるを、しらでぞをりし、たゝ

りなさるな」などわ「たゝりをなさるな」の意であろう。

「お」を冠らせないで「早く起きなさる」禮を受けなさる」特みにしなさるな」など云う時わ、敬う心わ薄くなる。又「あそばす」の上にわ、きつと「お」を冠らせる。「なさる」わ、受身の助動詞にも「お降られなさる」などゝ附き、可能の助動詞にも相手の動作についてわ「お勝たれなさる」などゝ附く。

雜兵物語、上、挾箱持に「此度の御陣の御供に、お挾箱を御ゆるされなさつて（受身）葛籠こりを預り申て脊負た。同、下、馬取、又、に「するは人にだまされなさるゝを（受身）おしりやらない。」

「なさる」の命令形わ「お歸りなされ」お起きなされ」お見なさい」おしなさい」などで、その「お」を省いて「歸りなさい」起きなさい」見なさい」しなさい」「れ」を「い」とも云うことわ、前の敬譲の動詞の「一四三」で説いて置いた。」とも云い、又末の「さい」を省いて「お歸りな」お起きな」などゝも云い、又その「な」を省いて「お歸り」お起き」とばかりも云う。これらわ、段々に敬う心が薄くなる。又「お」を省いて「讀みな」起きな」とも云う、こう云えば、敬う心わ、全くなくなる。（三〇三）

○（一三一×一六七×三〇五×五五四）にも「な」がある。

江戸時代の後撰夷曲集、一、霞に「面白や、あの山見さい、此山も、いたいきつれて、たつ霞かな。」同、三、八月十五夜に「公家も、武家も、今夜の月は、町人も、あれ出て見さい。これ出て見さい。」卜養狂歌集、上に「さけのみて、舞ふつうたひつ、ほめはやせ、かゝみといふを、見さいなの月。」西翁十百韻、岩城にて「きて見さい、何なけれ共、茶の庵、」などわ、「なさい」の「な」を省いて云つたのであろう。

「お」を冠らせた動詞に「なさる」あそばす」の附かぬものもある。「お來なさる」お行きなさる」お來あそばす」お行きあそばす」とわ云わず、「來なさる」行きなさる」とわ云う、「おいでなさる」おいであそばす」と云う。「お食いなさる」お食いあそばす」お見なさる」お見あそばす」とわ云わず、「食いなさる」見なさる」とわ云う、「おたべなさる」おあがりあそばす」御覽なさる」御覽あそばす」などゝ云う。又「おしあそばす」とわ云わず、唯「なさる」あそばす」とばかり云うが、是れわ助動詞でわなく、獨立の敬譲動詞で用いるのである。

室町時代

狂言記、萩大名、あれへ御出でなされたならば、御褒めなされませ。同、抜殻、何とぞ、命をお助けなされて下され。同、吟聟、舅、内にあります

る、御這入りなされ。

江戸時代

雑兵物語、下、玉箱持、跡の侍衆が、こらへかねて、追込みなさつたれば、云云、同、下、夫丸、こなたなども、具足を着なされ、大小をつゝぱつて指しなされ。同、下、草履取、此鐵炮、云云、旦那は、用にたゝなひ時は、鑓ととつかへ被成て、おれに預けなさつた。同、下、馬取、又、山伏祈禱坊主を頼んで、祈念をしなさるよりは、云云。

名詞漢語に附く時わ、助動詞と云われぬようであるが、暫く助動詞として置く。次の「くださる」いたす」つかまつる」もうす」も同じである。

室代時代

狂言記、吟聲、此様子をば、目利なされませい。」ふやらの、ふやらの、ふんと、御意なされまする。同、萩大名、厚く折檻なされまする。同、福渡、もはや、夜も明けますに、下向なされませう。

江戸時代

雑兵物語、下、馬取、又、おれは、來年から、やた馬を數寄なされぬ所へ、奉公し

べいと思ふ。

○「お待ちくださる」お見舞いくださる」わ、「待ちを與へる」見舞いをくれる」の義のようだけれども、唯「待つ」見舞う」と云ふ動作を仕向けられるのを、敬つて云う意味となる。漢語に附いて、「御覽下さる」御承知下さる」と云うのも、「見る」承知する」の敬語である。

使役の助動詞にも附いて、「お書かせくださる」お待たせくださる」おさせくださる」お建てさせくださる」などゝも云う。

「くださる」わ、上の動詞又わ助動詞との間に、「て」を加えて、「待つてくださる」受けてくださる」書かせてくださる」させてくださる」などゝも云つて、意味は同じである。此場合にわ、敬譲の動詞で、且、上に「お」を冠らせぬ。(「お見くださる」「お爲くださる」とは云わぬが、「見てくださる」してくださる」とわ云う。)

狂言記、吟賀、「昔も當時もわるうござらう、只、中昔を教へて下されい。」同、宗論、「一夜の宿を貸してくだされい。」同、抜殻　門の番なりと、さして下されませう。」

○「いたす」つかまつる」もうす」を自分の動作に就いて用いるのに、上に「お」を冠

らせるわ、異な事のようでわあるが、唯、丁寧に云わうが爲に冠らせるのである。そうして、「お」を冠らせないこともある。「賣り買いいたす」拜借いたします」取引きつかまつる」承知つかまつる」拜見つかまつりました。」

吾妻鏡、治承四年十一月十四日に、「諸人亂入清淨地、致狼藉。」同、五年三月十三日に、「於事成蔑如、不致合力。」などゝあるわ、まだ、全く助動詞となつてわ居らぬ。狂言記、聟貰に、「醉狂をしられて、迷惑いたします。」同、宗論に、「甲斐の身延に參詣いたし、只今下向道でござる。」待合せ、同道いたさう。」御供いたしませう。」などわ、助動詞である。

○「もうす」わ、仕向ける動作を丁寧に云うので、「お」を冠らせぬこともある。「お助けもうす」お待ちもうす」教えもうす」受取りもうす」又使役の助動詞にも附けて、「お讀ませもうす」お止めさせもうす」書かせもうす」教えさせもうす」などゝ云う。

受身の助動詞にも附けて、「お聞かれもうす」尋ねられもうす」教えられもうす」お見られもうす」などゝも云うが、此場合にわ仕向ける動作でわなくて、自分が受ける動作を丁寧に云う心である。又可能の助動詞に附いて、「勝

たれもうす」眠れもうす」など丶云うも、唯、丁寧に云うばかりである。但し、以上わ、今わ多く用いない。

「申す」わ、古くから、敬譲の助動詞につかわれて居る。萬葉集、五、「都まで、送り摩遠志て」同、五、「諸の大御神たち、船の舳に、導き麻遠志」、佛足石歌、「後の佛に、譲りまつらむ、捧げ麻宇佐牟。」

平安朝時代

源氏物語、手習、聞えはじめ申しなり。

枕草子、四、妹のあり所、云云、更にえ隠し申まじき、そことやきかせ奉るべき。

今昔物語、廿八、越前守爲盛付六衛府官人語、心カラ物ヲ惜ムデ、其達ニ貴申シテ恥ヲ見トハ、何デカ可レ思キ」。人ヲ可レ恨申キ事ニモ非ス。

鎌倉時代

保元物語、三、義朝えうせうの弟ちうせらるゝ事、死出の山、三途の河、誰か介錯申すべき。

吾妻鏡、治承四年八月廿五日、永實聞二此事一、告申武衛與兄行實之間、云云、

同、建久二年十二月廿九日、法住寺殿修理、被レ盡美事、所レ賀レ申也、云云、令レ成二大功等一給之條、人莫レ不二感申一。

室町時代

公事根源、内侍所御供、彼の新造の御鏡をば、皇居に置き申さる、垂仁天皇の御宇には、漸く、神威を恐れさせ給ひて、別所に安置申さる。

史記抄、十二、三　ワルイナラバ、斬ラレマウサウゾ。同、十二、三七　證據ニ立チ申サフト云テ、云云、

閑吟集、いとおしがられて、あとにねうより、にくまれ申て、おそくねう。

狂言記、宗論、都まで同道申さう。同、七騎落、父御、下りさせ給ふならば、某、船よりも下り申さん、と申しければ、某は、君を御代に出だし申すぞ。

「もうす」わ「ます」の延びたものだろうと云ふ説もあるが、極めて古くからつかつても居るし、「もうさ」ともなるから、「ます」とわちがう。

○「やる」「くれる」と云う意味の敬譲動詞に「たてまつる」と云うのがあつて、それを助動詞として「待受けたてまつる」仰に從いたてまつる」讀ませ奉る」遂げさせ奉る」「お」を冠らせぬ）などゝ、仕向ける動作を最上に丁寧に云うこと

があるが、今わ多く用いない。

○敬譲動詞の「あげる」を「待ちあげる」申しあげる」察しあげる」存じあげて居ります」お見あげもうしました」勝たせあげる」待たせあげる」など丶、助動詞に用いて、仕向ける動作を丁寧に云うこともあるが、あらゆる動詞にわ附かぬ。但し、間に「て」を加えて、「待つてあげる」教えてあげる」待たせて上げる」教えさせて上げる」「お」を冠らせぬ)など丶わ、廣く云う。此場合にわ、助動詞とわならぬで、敬譲動詞の意味である。

○動詞と敬譲動詞の「いたゞく」との間に「て」を加えて、「待つていたゞく」教えていたゞく」待たせて頂く」教えさせて頂く」「お」を冠らせぬ)など丶、自分の爲にしてもらう心を、丁寧に云うことがある。

○純粋の敬譲の助動詞わ、「ます」古くわ獨立の動詞であるけれども)と、前の「れる」られる」とである。

「二八八」の「學校え參りますのだ」内におきますらしい」などわ、話す人や、相手の人の場合に因て、つかうのである。

「ます」わ、あらゆる場合に、動作を丁寧に云うに用い、敬語の動詞、助動詞にも重

ねて、一段と丁寧に云うに用いる。

(一)歸ります　讀みます　起きます　晴れます

(二)擊たれます　褒められます(受身の助動詞に)

(三)讀まれます　起きられます(可能の助動詞に)

(四)書かせます　受けさせます(使役の助動詞に)

(五)召しあがります　おつしやります(敬つて云う敬讓動詞に)

(六)戴きます　申しあげます(丁寧に云う敬讓動詞に)

(七)馬車で歸られます　禮を受けられます

(八)お歸りなさります　お受けなさります　(敬つて云う敬讓の助動詞に)

(九)お起きあそばします　お褒めあそばします

(十)お待ちくださります　お尋ねくださります

(十一)お伺いいたします　お待受いたします

(十二)お請けつかまつります　お取りなしつかまつります　(丁寧に云う敬讓の助動詞に)

(十三)お敎えもうします　お助けもうします

命令形わ、第一活用の「ませ」であるが、右の(五)(八)(九)(十)の場合の外わ用いない。

「ございます」を、命令に、「ございませ」とも言はぬ。又、御笑談おつしやいまし」などゝ、命令の形で、差止める意味に用いる事がある。

「御飯をめしあがりまし」お羽織を召しまし」などゝ云う人もあるが、「ませ」と云うがよい。（三〇一）

「ます」わ元と、四段活用の「有り」在り」居る」と云う意味の獨立の敬語動詞で、萬葉集、三に、「大君は、神にし座者、古今集、哀傷に、「君まさで、煙絶えにし、鹽竈の、」などゝ、ある。それを「在り」の意味なしに、動詞に添えて、「座します」出でます」などゝ、敬語の助動詞としても用いられたのに、後に、下二段のような活用がまざつて、一つの變格活用となつて、純粋の助動詞となつたのである。

まさ	まし	ます	ます	ませ	（まさむ）	ませ（命令）	文語
ませ	まし	ます ますする	ます ますする	ませ ますれ	ませう	ませ まし（命令）	口語

「ませ」わ、打消、又わ未來に、「ませぬ」ませう」（ましょう）とばかり云つて、「ませない」ませよう」とわ言わず、又「られる」させる」も附かぬ。「まし」わ「て」たら」に續くばかりで、中止形にも連用形にもつかわぬ。「ます」を「まする」とも云い、（一段丁寧に云う意味となる）「ますれば」を「ませば」と云うこともあるが、今わ多く用いない。

打消に「ませぬ」未來に「ましょう」とばかり言うのわ、東國の口語の姿でなくて、西國の姿であるのが常に異なつて居る。是れわ、丁寧な物言いにわ、古く上方言葉を遣つて居た名殘であろう。

室町時代

狂言記、釣狐、いざ、内へはいらしやれませい。「狐を釣りまするが、をぢの御坊の御意見に任せて、ふつ〳〵ととまりませう。」勿體ない事、かまいて思ひとまらしませ。」はてさて、狐と申す物は、執心深いものでござりまする。」狐どのが、食ひにかゝられまする所を、此罠でひつしめて、同、宗論、只今、これへ、我等の如きの者は參りませぬか。見ますれば、御出家同志の事でござるに因て、云云、同、萩大名、かねて、私が、知る人に成て置きましてござる。」あれへ御出でなされたならば、御褒めなされませ。同、相合袴、お這入りなされませい、と云へ。同、聟貰、醉狂ひをしられて、迷惑いたします。」恥知らずが來ました。同、烏帽子折、御前を去りはしませぬ。同、入間川、これは、入間川と申します。」此川は、これより上を渡ります。

江戸時代

敬讓の助動詞　ます

古今夷曲集、七、馬士戀、心には、おもひますれど、馬士の身で、君をちよとは、得まをさず候。同、九、勝尾寺に、義空とて、狂歌の上手あり、彼には及ばじと、人のいひければ、我歌に、などてあなたが、かちを寺、のどぎくぎくう、させてみせます。同、九、自らが、え持ちませねば、たべたいと、存ずるをりに、おきもいりかや。(煎梹榔を贈られたに返歌、)

日本永代藏、五、世渡りには淀鯉のはたらき、算用しませうといへば、十八匁二分の書出し、

西鶴置土産、四、戀風は米のあがり局にさがりあり、こなたにも、銀戸棚が入りませうが、木を吟味して一つ拵へて、云云、

古今夷曲集、八、物名「春の禮に、ござりやすとも、待程に、まつの内さへ、打過て候。」(保友と云う人名を讀み込んだのである、)淋敷座之慰、吉原太夫くどき、木やり、「吉野樣と申す、皆樣、御ぞんじで御ざりまんしよ、」(ませう)同、夜郎くどき、木やり、「ことしや、初めて、さかい町へ參りまんして、」(まして)

○「です」と云う敬讓の助動詞があり、又「ございます」の上に、「で」を連ねて、同じように用いるのもあるが、それらわ、次の指定の助動詞の處で云う。

指定の助動詞

「だ」「です」の、名詞漢語などに附く時わ、助動詞とわ言われぬようであるが、獨立で用いられぬ語であるから、助動詞として置く。

「だ」わ、「お讀みだ」「お出でだ」など丶、動詞を名詞にしたものに附き、「評判わあんなだ」「出來わこんなだ」など丶、形容詞に附き、「すこしだ」「いやだ」「そうだ」「こうだ」「神哥わたちまちだ」「其説わまつたくだ」「よろしくだ」など丶、副詞にも附き、「困るのわ雨と風とだ」「日の昇るわ東からだ」「時刻わ晩までだ」「褒められるのわ勉強するからだ」「高さわ三尺ぐらいだ」「數わこれだけだ」「風が吹きそうだ」など丶、助詞、接尾辭にも附く。(「です」「でしょう」も同じである。)

○「だつた」わ、過去になつたのに言い、「だつたろう」わ、過去を推量するに言う。

この「た」「たろう」わ、過去の助動詞の附いたもので、其意味も、活用も、過去の助動詞の「た」「たろう」と同じである。

○「三〇九」の「のだ」の「だつた」わ、「書かせる」(使役)「行かない」(打消)「見ぬ」「見ない」(打消)「來るらしい」(推量)にも附く。

○「だ」「だつた」が、用言に附く場合に、間に這入る「の」わ、名詞の代りに用いられる助詞の「の」(四五六)である、(此「の」を、音便に「ん」と云うこともあるが、用いぬがよい。)「だ」わ、元來、體言に附くものであるから、用言にわ、名詞の代りの「の」が這入つて附くのであろう。「だろう」が、「の」がなくて用言に附くのわ、(三一五)「の」を音便に「ん」と云つたのが、省かれたのであろうか。(「です」「でしょう」も同じである。)

「君のだ」「私のだつた」などわ、「の物」「の事」などの略だから違う。(五四九)

○「だ」わ、「噂をすれば影がさすだ」「見るだの聞くだの」「長いだの短いだの」のように、一語一句を名詞と見て云うにわ、用言にも「の」なしで附くことがある。是れわ、「さす」「見る」「長い」などの間に、「事」「物」を略して言うのであろう。

○「だつた」わ、「雨だつたり風だつたら」などゝもなる。助詞の「四七五」「四八〇」を見よ。

○又過去の事を思い出した意味で、「來たのわ三人だつけ」きのうわ賑やかだつけ」「先月行くのだつけ」などゝ云ふことがある。是れわ、終止形ばかりで、活用わない。

雑兵物語、上、挾箱持に、「五貫目斗の玉だつけが、鼻先へ當て、あともつかないで、飛びかへつた程だ、」同、下、並中間に、「どこの人數だかしらないが、七八十挺

立の關船だつけが其船へ、小ばやがくつ付てせゝるを防ぐを見れば、云云」
など丶見える。

○「だ」だつた」を、「獨りだものを出ることわ出來ない」あの人が嫌いだものですから」行かないのだつたものを見るはずがない」不思議だこと」寒そうだこと」などゝ云うわ、名詞に續く連體形であるが、用いることわ少ない。又「便利だそうだ」などゝ、助詞(四四二)にも續く。

○疑う語に附いて、「どうだ」なんだ」だれだ」などゝ云う時わ、問いかける意となり、「さあ書くのだ」これから讀むのだ」などゝ云えば、命令する意にもなる。

○「何のことだ」を、「何のこつた」など云うわ、上の「と」を促音にして、「だ」を清音に云うのであるが、用いぬがよい。

○指定の「だ」だろう」を、過去の「だ」だろう」と、間違えてわならぬ。過去にわ「讀んだ」飛んだろう」で、指定にわ「讀むだの書くだの」讀むだろう」飛ぶだろう」である。

○「だ」だつた」の活用を、初わ、次のように立案したが、後に、「だ」だろう」だつた」だつたろう」ばかりにせられた。(「たら」わ、助詞の「四七四」に入れ「で」わ助詞の「三七〇」に入れてある、其處を見よ、)

で　だ　[なら]　だろう
で　だつた　だつたら　だつたろう

初の三段目の活用わ、「だら」と言いそうなものを、そうわ言わぬ。それを形作らせようと思えば、「なら」をはめると出來る。「今日わ天氣で休日だ」などの「で」わ慥に此語の連用形と思われる。「三七〇」を見よ。

○「だ」「だつた」と同じ意味で次の助動詞が、關西でわつかわれて居る。

じや　じやろう
じやつた　じやつたら　じやつたろう

前の「だ」「だつた」で云つた事わ、すべて、此「じや」「じやつた」に當てはまる。

「知れたことじや」を「知れたこつちや」などゝ云うわ、上の「と」の音を促音に云うのに連れて云うのであるが、用いぬがよい。

「じや」「じやつた」を「もの」「はど」に連ねて、(古くわ「母じや人」「兄じや人」などゝも、)連體形に用いることもある。

「じやろう」「じやつたろう」の「う」を略しても云うけれども、活用形を揃わせる爲に「う」を云うがよい。又「じやつたろう」を「じやつたじやろう」「じやつたや

ろう」なども云うが、用いぬがよい。

○「だ」だつた」じや」じやつた」わ、共に「である」であつた」の約まつたものである。（名古屋邊で「そうであ」こうであ」と云うのわ「あ」の姿の殘つて居るのである。）「である」の約まつたものだから「ぢや」の假名遣であるが、新に定めた假名遣に因て「じや」とした。次に引く古書の例に「じや」と書いてあるのもある。

○「だ」だつた」を用いるのわ、遠江、信濃、越後から東で、それから西も、愛知縣、岐阜縣、富山縣でも用い、尚、其西にも、處々に用いる所がある。殊に、鳥取縣島根縣に多く、熊本縣でも用いる。

「じや」じやつた」わ、愛知縣、岐阜縣、富山縣から、西わ九州まで、大抵用いられて居る。

畿内、丹波、播磨、和歌山縣、滋賀縣、三重縣、福井縣、石川縣、富山縣に、指定の意味で「や」やろう」やつたろう」やつたやろう」と云う所があるが採らぬ。

○「や」やろう」も、隨分古くから見える。

室町時代

幸若、入鹿、見目よき娘を尋ね出し、わが嬶（かか）やと號し、いつきかしづき給

ひけり。

史記抄、二、一四四　秦ノ輕クセンヤラウ、重クセンヤラウハ、定マルマイゾ。同、六、四二　ナントシタ心デアルヤラウゾ。同、七、五　青領トハ、イヅコノコトヤラウゾ。同、八、三五　元興元年乙丑ノ年ハ、朔旦冬至デモナカッタヤラウゾ。同、十一、五　タテサマニ、死ナウズヤラウ、ヨコサマニ、死ナウズヤラウ。

孟子抄、十一、一四　此性ガ、イッ我内ニ入ヤラウ、出ルヤラウ、出入ヲ不知物ゾ。

狂言記、素襖落、　太儀ながら、伯父や人の方へ、使にいてくれ。

江戸時代

昨日は今日の物語、　せいぐはん寺へ參り、おまへなるがくを見て、扨々、見事のしゆせきや、信長、事の外、御きげんにて、一段尤の御へんたうやとおぼしめしければ、云云、

醒睡笑、二、　さても、世はひろし、きどくなる事やと感ずる。同、七、　總じて、理のすまぬ文章や、氏神の社頭に、風流をかけ、雨を乞ふに、云々、いつ

もふるが奇特やなど沙汰しあへり。

○關東、奥羽に、指定の推量に「だんべい」だんべ」なと云う所もあるが、共に採らぬ。「べい」の事わ、前の動詞の未來推量形(一一八)の末で説いた。

○「ぢや」じや」の物に見えて居るのわ、

室町時代

史記抄、七、一〇　楚元王交ハ、高祖ノ弟ヂヤホドニ、文帝ノタメニハ、ヲヂデ季父ナリ。同、十、四八　父母死デ三年ノ喪ハ、通義ヂヤゾ。同、十、四九　魯ハ、我ガ父母ノ國ヂヤガ、云云、同、十四、八　逗撓トハ、ナンヂヤ、カヂヤト云テ、戰モセイデ、ヌケアルイタナリゾ。

孟子抄、一、五　慕ト云字ヲ以テ、孔孟ノ道ノ一ヂヤ、ト云事ヲ可心得也。同、一、二八　此三人ハ、スグレタ賢人ヂヤガ、穆公ハ隨分ノ人ヂヤガ、ワケモナイ事ヲ云タ事ゾ。

閑吟集、たゞ人には(モトノマヽ)、ましもの物ぢや、なれての後に、はなるゝ〳〵〳〵が、大事ぢやる物。(ぢやるわ珍らしい)まつと、ふけども、うらみつゝふけども、へんない物は尺八ぢや。

狂言記、釣狐、急ぐ程に、はやこれぢや。」これも、そなたのためぢやぞや。

同、宗論、夫は誠か、誠ぢや、眞實か、眞實ぢや、一定ぢや。」其法然とやらが生臭い珠數は、いやぢや。」何ぢや、今のが法文ぢや。同、靱猿、さて〳〵、利根な事ぢやなあ。同、三人袴、ぢやに因て、住居も大きな。

伊曾保物語、大きな荷、云々、是れは、當時おもくともやがて、輕うなるものぢや。

江戸時代

昨日は今日の物語、松だけなども、むざとたぶるは、いらざる事じや、二三十年おいたらば、大木にならふものを、と申された」。さやうなる事をするものか、ごんごだうだん、くせ事じや

徒然草抄、下　語ガアヤマツテ、想夫憐ト云々事ヂヤ。

醒睡笑、一、されば〳〵よ、此娘は、そのまゝ母の顔ぢや。同、二、やれ、おれぢや、やれ、見忘れたか。同、四、それやうに、あいだてなさうに、物はいはぬものぢや。

戯言養氣集、お天神ぢやとて、うしろをほと〳〵打たれば、云云、

新發意太鼓、(中村座狂言)、何と聞ふと儘じや。

東海道名所記、神原、別れの明神、云云、よめ人のかど出には、いやな社じや。

同、江尻、近き頃の遊君の出來物じや、一夜のはたごせんが、金子一分じや。

後撰夷曲集、九、蛇が住は、こゝじや、かしこじや、あの池じや、淵じや山田じや、嘘じや實じや。(出雲のやまたのをろちの住所に云う)

諸國盆踊唱歌、河内、いとまちやといふて、さしぐしくれた、心とけとの、ときぐしを。同、越後、わしがおもふと、戸板にまめぢや、なまじいはぬが、ましぢやもの。

淋敷座之慰、忍びくどき、木やり、かぶろでゝ見よ、殿ではないか、とのじや御ざりませぬ、けたをはしる鼠じや。同、しな物の歌、夕べの〳〵しな者は、今宵はどこのおとまりじや。

西翁十百韻、俳諧、つれなきも尤、賤の身じや程に。

鹿の巻筆、一、ばんどう屋才介、そなたの不性から起つたぢや。」おれが大目に見てゐれば、目の無いものぢやと思ふか。

指定の助動詞　じや

松の葉、一、本手、こし組、　こしにさげたるきんちやくは、これもうき人のぬ

ひぢやほどに。

○「だ」わ、東國の口語であるが、古くからつかつて居たか分らぬ。書物に見えるわ、江戸時代からで、それも初わ誠に少ない。

西翁十百韻、西國にて、くれないか、是非是非花を、所望だぞ。

雜兵物語、上、足輕小頭、なまくらものでは切ぬものだ。同、上、槍擔小頭、各の腹中にあるべい事だとおもひ申せ。」勝負のはじまるは、御侍衆の鎗からだぞ。同、上、持弓、今一張と一腰は、はりかへの御弓御替矢だ程に、後生大事と引擔でいべいぞ。同、上、挾箱持、其家中では、喧嘩口論が禁制だ。

○「です」わ、指定の意を、少し丁寧に云うに用いる。此活用も、初わ、次のように立案して見た。（「でして」わ「五二九」にある。）

で	です	ですなら	でしょう
でで	でした	でしたら	でしたろう
でして			

前の「だ」「だつた」の處で、いろ〳〵云つた事わ、すべて、此「です」「でした」にも當ては

まる。

○「です」でした」わ、今わ、東京を初として、全國の交通の盛んな土地には、大抵行われて居る。

關西でわ、推量に「ですやろう」でしたやろう」と云ひ、又別に、京都、丹波、滋賀縣あたりで「どす」どすやろう」どした」どしたやろう」と云ひ、大阪、攝津、兵庫縣、奈良縣、山城の南部で「だす」だすやろう」だした」だしたやろう」なども云うけれども、共に採らぬ。

京都の「どす」わ、文語の「にておはします」が約まつて「でおます」となり、又「でおす」どす」と約まつたもので、大阪邊の「だす」わ、それから又移つたものであろう。

○「でありまする」わ「です」よりわ丁寧な言いようであるが、演說などの外にわ用いられぬ。「でございます」わ「でありまする」よりわ、又、丁寧に云う場合に用いるのである。（三二二）

「でありまする」と云ふ語わ、江戸でわ言わなかつた。必ず「でございます」、婦人わ「でござんす」などゝ云つて居た。「でありまする」わ、明治の初に、諸國の田舍

侍が江戸え來て、作つた語である。但し、江戸の時でも「わ」も」を加えて「そうでわありますが」そうでもありませぬ」などゝわ用いて居た。

○「です」わ「でござります」が、いろ〳〵に遷りかわつて、段々と約まつて出來た語で、そのうつりかわりのまち〳〵なことわ、次のようである。

但し「で」と合わせれば、指定の助動詞のようになるが「で」を除けば、獨立の「ある」と云ふ意味の敬譲動詞であるのが、此中に多い。

でござりますでござりますでございます　でござりやす
でござあす土佐　でござあんす越中婦負郡　でございす信濃松代
でござんす　でござえす　でござせす
でござす　でござわす　でがあす
でござあんす羽前西村山郡　でござわんす　でがいます安藝安佐郡
でございす青森　でげいす　でござつす
でござんす　でござす　でがんす
でがす　でげす　であんす常陸、羽前西村山郡、出雲簸川郡
でやんす羽前西村山郡　であす陸中　ぢやんす日向宮崎アヤ郡穗村

ぢやす 備前岡山　　だつす 羽前西村山郡　　でんす

です

段々、末の方になると、打消を形作らせられぬ。「です」と云つても、「でせぬ」と云われぬ。又「ですれば」ともつかわれぬ。

江戸、新吉原、遊女詞、おざりいす　ざいます　ざます　ざんす

東京で「そうなりまして す」(「待ちまして した」十二時頃でございまして し‖よう)仙臺で「そうすか」(左様でござりし‖てござりす)など云うわ、「す」の一音になつたのである。

「です」わ、「であります」の約まつたものであると云う説もあるが、そうでわない。前に擧げたいろ〳〵な語に、「ご」が「げ」あ「や」の音が伴つて居るので、「ござります」の姿が認められて、それの遷りかわつたのであることが分る。

右の「でござります」から「です」までわ、今でも、地方に因り、身分、仲間に因つて、いろ〳〵につかいわけられて居るが、「でございます」と「です」との外わ用いぬがよい。

「です」わ、隨分古くから、つかつて來た語のようであるが、江戸でわ、元と、藝人

言葉で、輕薄な口調の「でげす」など丶同じもので、明治以前わ咄家、太鼓持、女藝者、新吉原の茶屋女などに限つて、用いられて居たもので、その女が、素人になつても、「です言葉」が出て咎められて困つたもので、町人でも、身分のある者わ、男女共に、用いなかつた。それが、今のように、遍く行われるようになつたのわ、明治の初に、田舍の武士が、江戸へ出て、柳橋新橋あたりの女藝者などの言葉で聞いて、江戸の普通の言葉と思つて、眞似始めたからの事であろう。それであるから、餘り馨ばしくない語でわあるが、今でわ、身分のある人々まで用いられて、もはや止められぬ程の言葉となつた。

○「です」と云う言葉わ、京都の御所でもつかわれて居つたと聞く。關西の「です」と、關東の「です」とわ、其起りの、系統が違つて居るように思われるが、其事わ前に說いて置いた。今、東西の「です」の、物に見えて居るのを、ひとまとめにして、次に擧げる。江戸のわ、慶安寬文頃の男達、元祿頃の芝居の荒事狂言などから起つたものであろう。

室町時代

狂言記、萩大名、遠國に隱れもない大名です。同柿山伏、羽黑山より出

でたる駈出しの山伏です。」空飛ぶ鳥をも、眼の前へ祈落すが、山伏の行力です。同、二千石。京内参りをすれば、主に暇を乞はぬ法ですか。

江戸時代

寛永元年、江戸、中村座、狂言、猿若、今は、今日の猿若です。

寶暦元年、大阪、豊竹越前少椽作、一谷嫩軍記、熊谷陣屋、みかげの里に、かくれもない、びやくがうの彌陀六といふ男でゐす。

寶暦三年、江戸、中村座、男伊達初買曾我、さうです〳〵、きついひいきですか、お前もひいきか。

江戸、明和版、鹿の子餅、そこでわれらは、何も持たぬです。(浪人の言葉)

江戸、天明元年版、洒落本、眞女意題、ひまでえすか、」これや、かな山の霜ふりつむぎです(醫者の言葉)

江戸、文化版、式亭三馬作、諢話浮世風呂、前編、上、其膈噎翻胃に似て非なる者を、鵜飼の症といふ、是すなはち、物を食らつて、すぐ吐くものです。(醫者の言葉)

○助動詞にわ、右の外に、「遣るべき物は遣れ。」こうあるべき筈である。」議員とも

あるべきものが、然るべき人に頼め。」よく一致を圖るべきだ。恩に報いるべきである。」起きるべき時にわ、起きろ。」見るべき物でない。」受けるべきものわ、受けるがよい。」今頃わ、來るべき時である。」擊たれるべき」、讀ませるべき」、などゝ用いる「べき」と云う當然の意味を云うものがある。活用もなく、連體形ばかりて、且、固苦しい物言いにばかり用いられて、用いられる場合も狹い。

此「べき」わ、動詞、又は、受身、可能、使役の助動詞の終止形にも附け、又五段活用の動詞の外わ、「起きべき」見べき」受けべき」擊たれべき」讀ませべき」などゝ、其連用形にも附ける。唯サ行變格活用の「する」にばかりわ「そうすべき筈である」、嚴しく論ずべきものでわない。」などゝ、其古格の終止形の「す」に附く。

此助動詞わ、文語にもあつて、其活用わ次のようである。

	べく	べし	べき	べけれ	文語
	べく	べい（べき）			口語

終止形の「べい」、連體形の「べい」の事わ、前の「一一八」の動詞の未來形推量形の末に說いて置いた。

「べく」わ「成るべく早く來い。」然るべく頼む。」など云うのであるが、是れらわ「成

るべく」然るべく」と云う成語の副詞と見るがよかろう。

○「べし」わ、上一段活用動詞の「見る」似る」などにわ、古い時でも、萬葉集、七に、「ひぐらしの、鳴きぬる時は、女郎花、咲きたる野邊を、行きつゝ見倍之」古今集、離別に、「朝なけに、みべき人とし、頼まねば」後撰集、春、上に、「來てみべき、人もあらじな」土佐日記に、「我に似べきは、誰ならなくに」古今和歌六帖、六に、「松柏の、常葉にべき、心かは」など、稀に、「見似」の連用形に附けたのも見受けるが、(是れわ、「あるべいかな」あるらし」なるらし」けるらし」などの「あべい」あらし」ならし」けらし」となる例であらうか。)すべての場合には、「行くべし」起くべき」見るべく」似るべし」受くべし」來べき」爲べく」擊たるべし」讀ますべき」など、動詞、助動詞の終止形に附けるのを、文語の通則としてある。然るに、それが變つて、連用形にも連體形にも附くようになつたのわ、平安朝時代の末の悦目抄に、「歌は、人によりて、云々、此三所に、緣の字にても詞にてもすへべし」など、見受ける。

鎌倉時代

平家物語、十、これもりの出家、千年のよはひをふるべきか。同、十一、那須與一、とう〳〵鎌倉へかへられべし。

源平盛衰記、四十二、與一射的、是ヲバ射ベキカ、射マジキカ。」終ニイベキニ
ゾ定ニケル。

定家假名遣、すてべからず、

室町時代

義經記、よしつね、よし野山を落給ふ事、義經も、きかへべきよろひもなし
とて、めしぞかへられける。同、忠信最後の事、是は、それに似べくもな
し。同、關東よりくわんじゆばうをめさるゝ事、南都にてこそ、かばね
をすてべけれども、それも、そうとの身として、をんびんならねば、云々」、是
へ參り候を聞ては、たづねべき人にて候が、云々、

今川大雙紙、(群書類從、四百十二)御日にかけべし、

大上臈御名の事、(同上、四百十四)わきめは、ほしきは、八つ九つからあげべ
きなり。」はしたもの、げすの事、源氏のもくろくのうちつけべし。」すゆ
るべし」

狂言記、生捕鈴木、朝の露と消えべく、命をながらへて、云々、

副詞

【三三〇】一つの動詞を、二つ以上の副詞で修飾することがある。

かねてたび〳〵見た。きつと早く廣まる。近々少々出來る筈。

毎日二度來る。家を高くあかるく手廣に作る。

【三三一】一つの形容詞を、二つ以上の副詞で修飾することがある。

まだなか〳〵寒い。まず大抵よろしい。

【三三二】一つの副詞を、二つ以上の副詞で修飾することがある。

もつとずつと早くしろ。

○語を隔てゝ、動詞、形容詞、副詞を修飾することがある。

かね〳〵其事を聞いて居る。暫く時節の到來するを待つ。

よほど出來がよい。非常に其人を善く云う。

【三三三】句や文を修飾するもの、

決して疑うな。實にそうなれば何より嬉しい。

いつそ、やめることゝしよう。どうか、勝つ工風わあるまいか。

【三三四】體言を修飾するもの、

はるか、上の方に見える。ちと、右え片寄れ。もつと澤山の人、一番上等の品、一度に五人を限る。

○外の語の意味を受けて、下の動詞、助動詞を修飾するものがある。

それならばそうしよう。それわこうなる、右が左になる。これであろうか、それわそうだ。約束わこうだ、半分金を拂うのだ。

○名詞、數詞、漢語を副詞とするもの、

昔あつた。今日來る。明日行こう。一月過ぎる。幸い出會つた。ひとり行く。盃を、三つ重ねる。世の中、よろづよし。千萬かたじけない。極よろしい。格別尊い。大抵出來た。一切知らぬ。

名詞漢語の下に、「に」又わ「と」を添えて、副詞とするもの、

常に思う。誠に嬉しい。別に考える。急に行く。實にうつくしい。專一に思う。不意と消える。樂々となる。斷然と行う。

形容詞を副詞とするもの、

善く改まる、早く走る、嬉しく思う、ひどく強い、

動詞、又は動詞を繰返し、又わ、其下に「に」又わ「て」を添えて、副詞とするもの、

詰り分らぬ、餘り多い、みだりに作る、頻りに呼ぶ、

ますます榮える、見す見す取られる、重ね重ねありがたい、染み染み話す、

代り代りに出る、離れ離れになる、

すべてやめる、さだめて喜ぼう、決して出來ない、

句を副詞とするもの、

やゝともすれば逆らう、顔に似合わずやさしい、

物が見えぬほど暗くなつた、路をあるきながら考える、

○副詞、又わ、其語根を、名詞のように用いることがある。

暫くの間、聊かの事、僅かの人、話わ慥かである。

接續詞

【三三五】句、又は、文を繋ぐもの、

讀み通し、さて、寫し取る、山を越え、また水を渡る、わたしも行こう、たゞし、時刻がおくれよう。大勢、客が來られた、もつとも、上客わ華族であつた。

○種々な語句を接續詞とするもの、

歌をよみ、そのうへ、詩をも作る、學問もあり、そうして、智慧もある。その事わ聞いた、しかるに、知らせがない。わたしわ出かける、ついてわ、あとの事を頼む。脊わ低い、しかしながら、力わ強い。舟を漕ぎ出した、そうすると、風が吹いて來た。何も恐れる事わない、とわ云うものゝ、用心しろ。雨が降つて來た、それのみならず、日も暮れた。

語句を略して接續詞に用いるもの、

人が集まつた、(そう)して、演説が始まつた。品が出來あがつた、(それ)で、人に見せた。空が晴れる、(そう)すると、風が吹く。しくじつたろう、(それ)だから、よせと言つたのに、

雨が晴れた、(晴れた)が、まだ雲わ收まらぬ。智慧わある、(そう)だけれども、學

問わない。　たいそう力がある、(それ)でも、角力取にわ勝たれまい。　敵軍を破る、(それ)のみならず、其大將まで生捕つた。　春になつた、しかし、(ながら)まだ氣候わ寒い。

助詞

第一類の助詞

第一

助詞の順わ、すべて、頭の音の五十音順で列ねた。

解釋の意味の、本書と稍違つて居る所もあるのわ、參考の爲に、舊案を記したのである。尙、本書に擧げなかつた助詞も擧げた、助詞の意味の、更に委しい區別も記して置く。

【三四八】　か　問をあらわすもの、

音のするのわ雨か。　今來たのわ誰か。

おまえも行くか。　どこに居るか。　それでよいと思うか。

路わ遠いか。　それに違いないか。

手紙が書かれるか。書物を讀んだか。もつと見たいか。取つたか、取らぬか。

見てか、見ないでか。行くのわ、どこまでか。聞いたわ、おまえばかりか。

必要からか、不必要からか。

○相手の心持を問う意味で、願の意味となるもの、

明日わ話にこないか。教えてくれぬか。

「すこしか、たんとか。」昨日も來たのに、またか。」靜かか、賑やかか。」など、副詞又わ副詞の語根にも附く。

【三四九】 か 反語となるもの、文語の「か」かも」かは」である。

それくらいで追付く話か。おまえ一人で出來る事か。羨ましがるまい事か。

すこしの金で、何が出來るか。なんで承知しようか。

嬉しいでわないか。おまえも見たでわないか。

そんな事があるものですか。

百圓どころか、千圓もかゝる。算術ばかりか代數まで終えた。

【三五〇】 か　疑をあらわすもの、推量の意、不定の意にも云う。

誰か居るだろう。幾年か歴た。どこかにあろう。何かの話、誰かに聞こう。紙か筆をくれよう。

降るか晴れるか、定まらぬ。行こうか歸ろうか。出來ようかも知れぬ。

讀みか書きかする。

遠いか、近いか、見えない。長いか、短いか、知らぬ。

打たれるか、突かれるか、分らぬ。打たれか突かれかする。

讀ませるか、書かせるか、してみよう。讀ませか書かせかする。

取つたか、取らぬか、知らぬ。これだか、それだか、覺えて居ない。なんだか不思議だ。

誰のかあろう。どこからか來よう。どこでか逢つた。よいとか、わるいとか、きめよう。どちらえか向け。そればかりかと思う。これくらいかと考える。いつまでか分らぬ。

「どうかこうかならう。」「幾つかある。」「赤くか黒くか、染めよう。」など、副詞にも附く。

○「何だかかだか、など云う「か」わ、不定の代名詞(五四)の處に説いて置いた。

【三五三】 が 主語を示すもの、

人が居る。 大工が家を建てる。

雨が降る夜、 日が長い時、

路が遠い。 荷が重い。 遠くが見える。

煙の立つが見える。 負けるが勝ちだ。

長いがよい。 嬉しいが先に立つ。

讀ませるがよい。 言わぬが花だ。

國と國とが爭う。 これからが面白い。 子供までが勇む。 是ればかりが

恃である。 どこかが似て居る。 誰やらが言つた。

「今しばらくが大事だ」など、副詞にも附くことがある。

○叱る語に添えて意を強く云うもの、

あの小僧めが、 このたわけめが。

狂言記、長光 あのすつぱめが、あの横着者めが。

○名詞と名詞とを繋ぐもの、「五四七」の「の」の意味である。但し用いられること

が狹い。

己が物、我が子、誰が仕業か。

淺間が嶽、佐渡が島、

萬が一、十がひとつ、それが爲に出來た。十圓が直打わある。

年が年中、明日が日に來るかも知れぬ。

動詞と名詞とを繋いで、「云うが程の事わない」などゝも用いる。

室町時代

狂言記伊勢物語、今が今まで、隙入多くして、同、長光、是れは、私の太刀でござるものを、かやつがのぢやと申すに因て、

江戸時代

日本永代藏、四、伊勢えびの高買、酢を買ひに來る人あり、云々、下男、目を覺し、何程がのと云ふ、むづかしながら、一文がのと云ふ。

舊案にわ「三五三」「四三〇」「五一五」の「が」を、一處にして、意味のちがいを書きわけて置いたが、上に附く語の種類に因て、離れ〳〵にせられた、外の助詞の、二處三處に別れて居るのも、その通りである。

【三五四】 **から** 起點を示すもの、

神戸から上海へ行く。馬からおりる。楠から樟腦を採る。風の吹くのは北からだ。

行くから歸るまで、連立つた。生れるから成人するまで、世話をした。

高いから落ちて來る。

聞かれるから、返答するまでの時間、始まらないから待つて居る。

出立したから、到着するまで、十日かゝつた。

來てから始まつた。九州ばかりから產する。誰やらから貰つた。

取つたとか、取らぬとか、から起つたあらそい、

「六時からが始まりだ。」見るからが、薄氣味のわるい奴だ。」見るからに、しくじりそうに思つた。」九時からにする。」京都からの便り、」南からも來る。」北からも來ぬ。」朝からである。」などゝ、上に附けて名詞のようにもあつかわれる。

「少しから、たんとになつた。」早くから來て、待つて居た。」などゝ副詞にも附く。

萬葉集、十七、之乎(能登の地名)路可良直越え來れば、

土佐日記、明けぬから、舟を引きつゝのぼれども、

月詣集、十二　春風は、さらに吹くとも、あすからは、寄る年波は、立ちもかへらじ。

史記抄、十七、太史公曰カラシテ、豈不信哉ト云マデ、

○「見れば」見ると」思えば」など云う語に連ねて、物事を比べる意味を示すものがある。

昨日から見れば、今日わ暖い。東京から見ると、京都わ静だ。それから思えば、この方が樂である。

○「四三五」にも「から」がある。

○「六歳より教育する。」午前八時より、午後四時まで、」疾うより、存じて居ります。」など云う「より」もあるが、口語にわ、多く「から」の方を用いる。

【三五五】きり　ぎり　「切り」（限り）と云う語を、下に「で」などを略して、其持前の意味で、助詞として用いるのであろう、副詞句を形作らせるもののようである。

それぎり見えない。口で言うぎり、何もしない。年始に來るぎり、めつたに來ない。

これわ、「手本通り書く。」「花が、二三分通り咲いた。」「書く通り習う。」「見た通り話す。」「來年頃來よう。」「夜の明けるころ起きる。」「早いころ逢つた。」「明日あたり出來よう。」「來年あたり始まろう。」「主人はじめ家族も喜ぶ。」「役員はじめ會員も揃つた。」などゝ、同じ用法であつて、漢語で「出來次第」「持つて來よう」「毎年四月時分咲く」なども同じである。

次の助詞の「三五六」の「くらい、」「三六六」の「だけ」「三八七」の「なり、」「三九五」の「ばかり、」「三九七」の「ほか、」「三九八」の「ほど、」「五三四」の「とも」なども、同じ用法である。

【三五六】 くらい ぐらい 「位」の意味で、其位置程度を云うのであろう「位に」の「に」を省いて、用法の變わつたものと思われる。用法わ「三五五」に云つておいた副詞句を形作らせるもののようである。

馬ぐらい走る。　汽車ぐらい早い。

溢れるくらい盛る。　痛むくらい擊つ。

痛いくらい感ずる。　憎らしいくらい旨くやる。

針で突いたくらい、穴があいた。　讀まれぬくらい、字が細かい。

あの人とぐらい取組まれよう。　品川えぐらい行かれる。　十里までぐら

いあるかれよう。三つずつぐらいくれられる。

「百圓ぐらいが相當である。」「十歳ぐらいの子供、三等ぐらいを望む。」「十里ぐらいわあるかれる。」「教授ぐらいにわ進まれよう。」「三日ぐらいで出來る。」などわ、名詞のようである。

「すこしぐらい、取つてもよかろう。」「ちよつとぐらい、休んでもよい。」「只ぐらい、直がやすい。」など、副詞にも附く。

【三五八】 こそ　物事を取立てゝ云う意味のもの、主語の位置を指す意のものもあるが、副詞句を形作らせる接尾辭のようなものにもなる。

今日こそ吉日である。これこそほんものだ。

教えるこそ、一番早路である。仲のよいこそ幸だ。

責められるこそ、身の爲である。讀ませこそするが、書かせわせぬ。知らなかつたこそ、仕合であつた。

止めようとこそ思つた。おまえにこそやろう。茶をこそ飲んだが、菓子わ食わぬ。仕舞までこそ見ぬが、大抵わ分つた。命あつてこそ物種だ。

太神宮えこそ參ろう。それを思えばこそ、骨折つて居るのだ。長ければ

こそ切るのである。

「黒くこそならぬが、鼠色にわなつた。」はきとこそせぬが、見えぬことわない。」

懇にこそするが、心わ許されぬ。」さてこそ、旨く出來た。」ようこそ、お出でになりました。」またこそ、お目にかゝろう。」などわ、副詞に附くのである。

○反語の意となるもの、

押しても引いても、動かばこそ。見えも飾りも、あらばこそ。

文語にわ、上に「こそ」のある時わ、下を「我れこそ行け。」花こそ落つれ。」人にこそ任すれ。」衣をこそ着れ。」路こそ無けれ。」人こそ見えね。」などゝ結ぶ用法があるが、口語にわ殆ど亡びて居る。(鳥取縣などにわ、殘つてゐる。)但し「茶をこそ飲め、酒わ飲まぬ。」など稀に云うわ、文語の殘つて居るのである。

【三五九】 さ　輕く言いはなす意味を云う。感動詞のようである。

知れた事さ。　それわ、その筈さ。

友達の所えまいりますのさ。　どこえ行く、花見にさ。　なんでもよいわさ。

さればさ。

「そうさ、」「こうさ、」など、副詞にも附く。

○「六一四」の接尾辭にも「さ」がある。

【三六〇】 さえ　文語の「さへ」の轉で「だに」すら」の意である、或る物事を擧げて、その外を推量させるもの、主語を擧げるものもあるが、副詞句を形作らせる接尾辭のようにもなる。

水さえ、喉に通らぬ。　犬さえ食わぬ。

讀むさえむづかしい。　見るさえ許さぬ。

見られるさえつらい。

見てさえ驚く。　剛力でさえ持たれぬ。　子供にさえ出來る。　小學をさえ卒業しない。

狂言記、附子、　附子、云々、あの方から吹く風に當てさへ、そのまゝ滅却すると仰せられた。あの附子を食ふさへあるに、何と御秘藏の掛物が破らるるものぢや。

【三六二】「まで」の意味のもの、是れわ、文語の「さへ」の、添い加わる意の、殘つて居るのであろう。

おまえさえ、そういうのだものを、　言わないのさえ、言つたと云う。

【三六四】「だけ」の意味のもの、多くわ下を「れば」なら」で承ける。

筆さえあれば、物わ書かれる。　湯さえあれば、茶わいらぬ。

讀みさえすれば分る。　行かれさえすればよろしい。

寒いさえこらえれば住われる。　暖くさえなれば出かける。

「靜にさえすれば落著く。」にこ〳〵とさえして居れば、機嫌がよい。」など丶、副詞にも附く。

【三六五】　しか　「しか」語原わ分らぬ「し」わ、「身にしあれば」など丶「それ」と指す「し」であろうと云う。わ「三九七」の「ほか」と同じ意味で、東京限りの方言かと思つて、舊案にわ擧げなかつたが、特別委員會で、立てることゝなつたのである。「しか」を「しきや」とも云うが、用いぬがよい。

【三六七】　だけ　物事を限つて云うもの「丈五尺」などの「たけ」であろう、主語を限つて云うものもあるが、又副詞句を形作らせる接尾辭のようにもなる。

用法の意わ「三五五」に云つてある。

これだけ餘す。　これだけほかない。

色の白いだけ見える。　長いだけ切る。

讀ませ書かせだけする。餘つただけ捨てる。

家族にだけ話す。小學をだけ卒業した。友達とだけ相談する。

これだけが殘つた。」云うだけが野暮だ。」これだけの事だ。」仲間だけに見せる。」

二人分だけを取る。」餘つたのわこれだけだ。」など云うわ、名詞のようである。

【三六八】程合を示すもの、

自身があがるだけ、名が重くなる。勉強するだけ、學問がすゝむ。抑えれば抑えるだけ、はねあがる。

野が廣いだけ、眺めがよい。脊が高いだけ、立派に見える。近ければ近いだけ、聲がよく聞える。

褒められるだけ、氣が勇む。何もしないだけ、過ちもない。習つただけ、出來がよい。

醒睡笑、五、てゝらは、膝だけあるきるものなり。

【三六九】**だけに** 程合の相當する意味を云うもの、「ほどあつて」など云うと同じである、「に」わ、副詞を形作らせる助詞である、この「に」を省いて云うこともある。

身分が尊いだけに、身持もよい。學問を勵んだだけに、成績もよかつた。

【三七〇】 で　此「で」わ、「だ」の中止形であろうとわ、前の指定の助動詞の「だ」の所で云つておいた。「で」わ、鎌倉時代から見え、「だ」わ、遙に後に見えるから、いかゝでわあるが、今の口語にわ、「だ」の活用としてよかろうとも思う。

花である。　綺麗である。

これだけである。　二つずつでよい。

「行くでない」「讀むであろう」などわ、動詞に附き、「長いであろう」わ、形容詞に附き、「讀ませるであろう」「行かぬでよい」「逃がさないでおけ」「聞いたであろう」わ、助動詞に附き、「雨が降りそうである」わ、接尾辭に附く。

○「で」の下に、「あるけれども、」又わ、「あつても」を略して云うことがある。

女で議論をする。　顔わ人で心は鬼だ。

鎌倉時代

平家物語、一、妓王の事、　おなじあそび女とならば、たれもみな、あのやうでこそありたけれ。　同、二、西光がきられの事、　此後は、世が世でも候まじ。

同、二、小松敎訓事、　一向、其義では候はず。　同、五、くわんじん帳、　文覺は、

ふてき第一の荒ひじりではあり、同、十一、とをやの事、舟いくさをいつてうれんし候べき、たとへば魚の木にのぼりたるでこそ候はんずらめ。同、十二、六代事、最後の御供で候へば、くるしうも候はず。

法華經品釋、藥草喩品（東大寺藏、寛元四年七月）　此條、目出事デハ候ヘドモ、

室町時代

幸若、入鹿、氷手の内にかゝやくやうな鎌であり。同、富樫、武藏坊が有樣、人間の業ではなかりけり。同、信田、これこそ、古への千手の姫で候なれ。

史記抄、八、三五　元鼎元年乙丑ノ年ハ、朔旦冬至デモナカツタヤラウゾ。

同、十四、七四　人ノ買ヲキシタリナンドセヌト云心デアツ、ベイゾ。

孟子抄一、五　禮デナケレバセヌゾ。同、三、三六　仁デモナイ、不仁デモナイ。

狂言記、釣狐、まづ、御息災で、めでたうこそござれ。狐などいふものは、執心深い物で、そのまゝ、仇（あだ）んをなすものでおぢやる。同、萩大名、先の亭主が知る人でないによつて、え行かれまい。同、二千石、只今の謠は、私の

存じて、唄はせたではおりない。

伊曾保物語、いかに、畜生な、道でない、いたづらもの、

江戸時代

醒睡笑、二、小豆のとうふか、いや、いつもの大豆ので候。貴所の酒でも、我酒でもなふて、大酒がしてあそびたい。同、七、今ばかりではなし、むかしよりある事なり。

太閤記、五、内々、其望ではあり、我さきに進みしに因て、

犬子集、二、春、下、梨花、櫻かよ、それではなしの、花ざかり。

油糟、夏、祇園會の、舟は神功皇后で、女も具足きるとこそきけ。同、雜、住よしの神は、お神でおはします。

新增犬筑波集、雜、いかさまに、地藏ぼさつで、おはします。

正章千句、七、秋螢、ながれ羽も、金ではあらじ、金衣鳥

東海道名所記、西坂、(日坂)旅の殿さ、御草臥であるべいに、同、京、島原、樂阿彌にも、金銀おほくもたせたらば、いやでもあるまい。

西翁十百韻、岩城にて、此里のみの、月ではあるまい。

○「で」に、いろ〳〵の意味わあるが、すべて、文語の「にて」の約まつたものである。伴蒿蹊の寛政十年作の閑田耕筆の四に、「平家物語の、景清は十六でをぢを討、といへるごときでの字、にてに代るなり、にてをでといふは、にての約、ねなり、ねの濁音でなり、」とあるが、いかゞと思われる。「死にて」が、音便に「死んで」となると同じ例であろう。

○「四八三」「五二〇」にも「で」がある。

【三七一】副詞、又わ、副詞の語根に附くのわ、すべて「三七〇」の「で」である。

専らである。屹度である。少しで、物足りない。なせでございますか。いやでわあるまい。そうでもありますまい。静かでよい。穏かでない。

【三七二】「で」に、「も」を重ねて云うものわ、次のように、迷いやすい。

飲まぬでも食わぬでもよろしい。

右わ、前に云つた「で」に、「も」が添わつたものであるが、又「四二一」の大概を指すものとも解せられ、又「飲まずともよろしい」食わずともよろしい」(四四八)の意味とも解せられる、前後の文の意味で、考えわける外仕方がない、これわ、多くわ「でも」を重ねて云う時に起る。

【三七六】 と 並べる意味を示す。

教師と生徒と出會う。兄と弟と話す。

行くと歸ると、一つになつた。言うと爲るとが、同じでない。

出來たと出來ぬとを分ける。見てと見ないとでわ、話がちがう。

「男の子と女の子とが遊ぶ。」「月と花との眺め。」「内と外とにある。」「筆と紙とを持つ。」「京都と大坂とえ行く。」「朝と晩とわいそがしい。」などゝ、上に附けて、名詞のようにあつかわれる。

「三人と一人と爭つた。」などの「と」わ、「五三三」のものである。

此「と」わ、「京都と大坂と神戸とえ行く。」と云うように、二箇所でも三箇所でも「と」を入れるのを正則とするけれども、京都、大坂、神戸、と云うような、一語ずつの時わ、迷う事がないから、下の「と」を省いてもよい、しかし、「月曜日と大祭日の翌日わ休む。」と云うように、一方が二三語の時わ、「月曜日と大祭日との翌日わ休む。」とか「月曜日と大祭日の翌日とわ休む。」とかしなければ、心が分らぬから、「と」を、一々入れねばならぬ。「鈴木と井上の父を招く。」なども「鈴木と井上の父と」とか、「鈴木と井上との父」とか、區別すべきである。又「高橋と佐

藤を訪う。」などわ、「高橋と佐藤とを訪う。」のか、「高橋と共に佐藤を訪う。」のか紛れやすい、前後の意味で考えるがよい。

【三七七】 と 指し定める意味のもの、

行くときめる。讀めと言われる。

責められると覺悟する。來ぬと見える。これだと云う。

書物をと望む。右えと走る。五時からと定める。六時までとする。こればかりと思う。行つてと頼む。これわと驚く。行くなどと云う。そこかこゝかとさがす。さればと云つて、

「專らとする」少しと見る」僅かと思われる」など、副詞、又わ、副詞の語根にも附き、「やあと呼びかけた」さあと催促する」いざと云つてすぐに出る」など、感動詞にも附く。

問いかけるにわ「今、すぐに行くと」なに、苦しいと」などと、下略して云い、又、上略して「とわ言いながら、そうも出來ぬ。」とやこうと云う。」ともかくも、そうしよう。」などとも云う。

○稀に「ありとあらゆる物」など云うわ、同じ動詞を重ねて言つて、意味を強

くする間に入れるもので、新勅撰集の四に、「萩の葉に、吹きと吹きぬる、秋風の、」讃岐集に、「春の內は、來と來む人を、花にまかせて」など云う文語の名殘である。

○「で」の意味のもの、

我と我が身を恨む。　規則とある上わ守ろう。　僧侶とあるものが、不埒至極だ。

○轉化の意を示すもの、

水が湯となる。　木が石と化する。　黄が赤と變わる。　敵を身方とする。

○「のように」の意味のもの、

雨霰と降る。　烟と消える。　山と積上げる。　玉と碎ける。

○種々の語に附けて、副詞を形作らせるもの、

うかノ\と進む。　こま〴〵と書く。　樂々となる。　不意と消える。

【三七八】　とても　とて　「とても」わ、「と云つても」とあつても」としても」の略で、「とて」わ、そのまた略である、假に設けて云ふ意味を示す。

誰とて、勝つことは出來まい。

一寸出るとても、人力車に乗る。事柄がどうあろうとてかまわぬ。

苦しいとて、我慢をしろ。敵が強いとて、恐れわせぬ。

褒められるとて、圖に乗つてわならぬ。見させるとて、只わ見せぬ。善く出來たとて、自慢をするな。そう云つたとて、ほんとうとわ思われぬ。讀んだとて、分るまい。行きたいとて、行かれるものか。構わぬとても、程のあるものだ。子供だとて、聞きわけるだろう。

そう云つたからとて、信用わ出來ぬ。遊へばとて、程がある。さればとて、捨てゝもおけぬ。

雜兵物語、下、又、馬取彦八、指物は、目に立つとても、云ひつらひ、名も無いものは、わるいものだぞ。

○「飲めとて茶を出す。」聞いたとて話す。」などわ、「と」と「て」との間に「云う」を略し、たので違う。

○「とても出來ない」などわ、副詞となつたのである。

【三七九】 たつて | たつても 「たつて」わ、「と云つても」を約めて略したのである、東京方言かと思つて、舊案にわ載せなかつたのである。

行くたつて、此姿でわ行かれない。遊ぶたつて、程のあるものだ。

○「たつて」「たつても」が「四六九」にあり、「だつて」が「五一九」にある、紛れやすい。

【三八〇】「として」の「して」だけのものわ「五一六」に説いてある。

○「四四四」「四四九」「五三三」にも「と」がある。

【三八一】どころ　どこ　事情を比べて、下に強める意味を云う。「所」の意から變わつて、程合を云うものか。「か」の「で」に連ねて用いられる。その「か」わ反語である。「どこ」わ「どころ」の略である。

小學どころか、中學まで終えた。

見舞うどころか、手紙もやらぬ。安心するどこでわない。

見させるどころか、聞かせもせぬ。聞いたどこか、教えられた。知らぬどころか、親類である。

「ちよつとどころの手間でわない。」「慥かどころか、極不安心だ。」など、副詞、又わ、副詞の語根にも附く。

【三八三】など　大概をさしていふ意味のもの。

來るなどと返答した。やめようなどとわ云うまい。參りましょうなど

と言います。

宜しいなどと指圖する。

擊たれるなどと云うことがあるか。實說だなどと話す。

以上「と」を省いても云う、上に附いて名詞となるようである。

聞きなどして書く。敎えなどして育てる。

呼ばれなどする。やめさせなどして、

西えなど向いて、叩いてなど見る。水でなど煮る。見たり聞いたりなどして、

「暖になどなつたら參ろう。」「赤くなど塗る。」など、副詞にも附く。

「など」を「なんど」又わ「なぞ」「なんぞ」とも云う「なんか」とも云うが用いぬがよい。

【三八五】類のあるを云う意味のもの、複數を形作らせるもののようになり、又副詞句を形作らせるもののようにもなる。

銀行などの役人、親兄弟などに話す。子供などゝ遊ぶ。

寢るなどの場合でない。行くなど、來るなどさま〴〵だ。

太いなど、細いなど、いろいろである。

調べたなど、調べぬなど、まだきまらぬ。

幸若、烏帽子折、盃なんど、をば、何として賜らうぞ。

史記抄、三、三三　涯分扶持ヲクワヨウナンドト云フ。

【三八六】**なら**　事を假に定めて云う意味を示す、下に「ば」を添えて云うが、正則であるけれども、今わ全國ともに、多くわ省いて云う。

英書ならば讀めるが、獨逸書でわ讀めぬ。雨天ならやめよう。それならば參りましょう。

見るなら見せよう。聞くならば話そう。

眠いなら寢ろ。遠いなら車で行け。

こられるなら來い。書かせるなら書かせろ。讀んだなら分ろう。出來ないならやめよう。言わぬなら、聞こうと云うまい。

おまえとなら行こう。三つずつなら、二つ餘る。

「いやならよせ。靜かなら寢つかれよう」。など、副詞、又わ、副詞の語根にも附く。さようなら、(別れる時の言葉)

○「なら」の下の「ば」を略することも、隨分古くからである。

室町時代

狂言記、末廣がり、人も傘(かさ)をさすなら、我も傘をさゝうよ。

江戸時代

油糟、戀、お爲なら、井どへ成共、落いらん。

後撰夷曲集、一、さほひめの、もし傾城を、めさるなら、與太郎月や、知音ならまし。同、五、歌の文字、切付るなら、やはらがん、神の鳥居の、石のかたくと。

諸國盆踊唱歌、河内、あわのなるとに、身はしづむとも、きみのことなら、そむくまい。同、尾張、をなごずきなら、八丈へゆきやれ、八丈むかしは、をなごじま。同、下總、どばし板なら、よかろもの、どんとふんでは、めをさます。同、伊豫、やみのまる木ばし、さまとならわたろ、おちてながれて、さきのよともに。

淋敷座の慰、のほゝんぶし、てきと見るなら、びやくらい切るき、てきじやない物、君じや物。

○「なら」わ、稀に、打消の助動詞の「ず」「ぬ」ない」に連つて指し定める意味を打消に

云う、文語の名殘である。

一度ならず、二度も三度も、一方ならぬ御厄介になりました。外ならぬあなたの事、一方ならない世話を受けた。

○「退引ならぬ場合」などわ、「退引が成らぬ」の意味で、是れとわ違う、「それのみならず」などわ、成語の接續詞と見る。

○「なら」わ、指定の助動詞で、其活用わ、次のようである。

	なら	なり	なり	なる	なれ	文語
	なら	なり	な	な	なれ	口語

口語の「なら」わ、其將然形で、二段目の「なり」わ、其中止形である、(三八七)四段目の「な」わ、前の形容詞の「一六七」の「おだやかな」靜かな」立派な」綺麗な」などの「な」で、文語の連體形の「なる」の「る」の無くなつたので、(其所を見合わせよ、)已然形の「なれ」わ、口語にわ、「左樣なれば、頂戴いたします。」などゝ、用いぬこともないが、今わ、大抵「なら」と言い變えて居る。又「好きなればこそ、上手になつた。」靜かなればこそ、こんな山に住んで居るのである。」などゝも云うが、是れわ、意味が違つて居て、今わ、多く、「であるから」だから」と云う。

文語の終止形の「なり」わ、口語でわ、次の「なり」とも(三九〇)の「なり」であるが、獨立にわ、勘定書に、「金千圓也」など、稀に用いる外わ用いられぬ、但し、次に擧げる例わ、終止形の「なり」の「り」が無くなつたものかとも思われ、連體形の「る」がなくなつて、下略したものかとも思われるが、又感動の意味のものとも思われるが、これども、このような語わ、西國でわ、今も用いて居るが、東國でわ用いない。それで、終に、離れ〳〵のものとした、

室町時代

狂言記、宗論、いかさま、どこやらで聞いたやうな。それが強情な。夜の目も寢ぬさうな。これは耳よりな。同、素襖落、參宮めさるげな。同、二人袴、ぢやに因て、住居も大きな。同、末廣がり、田舍とちがふて、家立も格別な。同、伊勢物語、男に向て、うろたへたとは、推參な。

江戸時代

昨日は今日の物語、只今、申さうといふ、それはあまりにきふな、といへば、東海道名所記、赤坂、座しきも奇麗な、相宿もござらぬ。

次のようにわ、東京でも用いるが、上の感動詞に響いて、感動の意味が深い、助

詞の「五五四」に入つて居る。

あゝ、窮屈な。えゝ面倒な。やれ〳〵、氣の毒な。

○「な」にわ、差止める意の「書くな」起きるな」〈一三一〉形容詞の「靜かな」立派な」〈一六七〉敬讓の助動詞の命令の「お歸りな」讀みな」〈三〇三〉助詞の「澤山あるな」〈五五四〉もある。

【三八八】 なり 「そのまゝに」の意を示す、「形」の義であろう、又わ「爲人」などの「なり」であろうか。用法の意わ「三五五」に說いてある。

これなり持つて行け。梅の實を靑いなり食う。寢たなり話す。

「それなりにしておけ。」曲りなりに治まつた。」立つたなりの姿、」坐つたなりを寫す。」行つたなりになつてしまつた。」着たなりとなる。」寢たなりで居る。」などわ、名詞のようになる、又「言いなり次第になる。」など、用いる。

【三八九】 なり の「でも」の意味のもの、語原わ「三八六」を見よ。

湯なり粥なり啜つて居る。一度なり見た上わ、

讀ませるなり、書かせるなり、してみよう。見たなり、聞いたなり、はつきりと言え。

墨でなり塗ろう。

「どうなりこうなり出來る。」「少しなり、たんとなり、あり次第にする。」など、副詞にも附く。

「思想なり感情なりの有無に因て、」「歷史なり地理なりの講義を聽け。」「湯なり茶なりが供えてある。」「灰汁なり曹達なりを入れて、」「大阪なり神戸なりへ送ろう。」「紙なり風呂敷なりで包め。」など、名詞のようにも用いられる。

【三九〇】 なりとも　なりと　擇ぶに任せる意を示す、語原わ「三八六」を見よ。（畿内邊でわ「り」を省いて「なと」と云う。）

何なりと取れ。是れなりとも持つて行け。

長いなりと、短いなりと、えりどれ。

呼ぶなりと、呼ばぬなりと、きめろ。見たなりと、聞いたなりと、話せ。

茶をなりと飲め。汽船になりとも、汽車になりとも、積んで送れ。見てなりと、聞いてなりと、しておけ。朝鮮えなりと、滿洲えなりと、賣り込め。見るだけなりと、見て下され。

「ちよつとなりと來い。」「少しなりと取れ。」「早くなりと、遲くなりと、出て來い。」な

ど丶、副詞にも附く。

狂言記、鞍馬參、弓なりと、鎗なりと、鐵炮なりと、持て。同、瓜盜人、免すとなりと、免すまいとなりとも、有無を仰せられて下されませい。

○「なり」にわ、又、文語の指定の助動詞の「なり」の中止形のものを用いて、次のようにいうことがある、語原わ「三八六」を見よ。此「なり」わ、今わ、多く「だし」又わ「し」と云いかえる。

時わ夜なり、雨わ降る。相手わ女なり、張合わなし、家わ煉瓦造なり、座敷わ廣し、よい建築である。學問が好きなり、酒が嫌いなり、身持に申分がない。

本も讀むなり、字も書くなり、感心だ。

脊わ高いなり、力わ強いなり、えらい男である。

出勤わ午前七時からなり、退出わ午後六時までなり、なか〳〵いそがしい。

對えわ是れだけなり、外にわ何もなし。割當わ三つずつなり、人數わ餘る。

平家物語、二、信連合戰、敵は無案内なり、信連は案内者なり、あそこの馬道に追懸けては、はたときり、ここの詰りに追詰めては、ちやうと切る。

「數わ少しなり、人數わ多し、」性質わ穩かなり、智識わ廣し、」工合わよさそうなり、これときめよう。」などゝ、副詞、又わ、副詞の語根、接尾辭にも附く。

【三九二】 **に** 事情、の落ち付く所を示すもの、

花に匂がある。 子が父に似る。 心に思う。 遊びにはまる。 敵に勝つ。 病にかゝる。 夜露にあたる。 闇にまぎれる。 師匠に優る。 仕事に掛る。 問うに落ちず、語るに落ちる。 言うに任せる。 長いに限る。 說の委しいに據る。 見たについて知つた。 好きだに因て買う。 おまえとわたしとに限る。 何やかやにかまはぬ。

○「四五一」「五三五」にも「に」がある。

【三九三】 **にして** 「して」の意味わ「五一六」に云う。

【三九四】 **の** 物事を並べて、「又わ」「或わ」とか」の意味のもの、

春わ花だの、秋わ月だの、と言つて、もてはやす。 氣に入るの、いらぬの、よいの、わるいの、何の、かの、と云うことわ許さぬ。 痛いの、痛くないの、と言つて、話に、わならぬ。

「どうの、こうの、と云つてわならぬ。」など〳〵、副詞にも附く。

萬葉集、十、貧窮問答歌に「風まじり、雨降る夜乃、雨まじり、雪降る夜は、爲べもなく、寒くしあれば、」などあるわ、此意味か。

室町時代

狂言記、宗論、法華經の、一部の、八巻の、と云ふ長い經を讀まうより、云々、

同、萩大名、臑はぎの延びての、かゝうでの、と仰せらるゝ。同、抜殻、あれを忘れたの、これを忘れたの、と仰られまする。同、鞍馬參、御茶の、御酒の、とあつて、御馳走になる迷惑さ。

江戸時代

醒睡笑、六、それ、歌には、云々、言葉のえんは、云々、らんの、けりの、かなの、とそれぞれにをく習ひあり。同、八、明暮、謠の、小鼓の、太鼓の、とて出入のたゆることなし。

西翁十百韻、大坂にて、灸の針の、と、よはさうな顔。

好色五人女、一、狀箱は宿に置て來た男、ふる雨を日和にしたいの、生れつきたる鼻を高ふしてほしひの、とさま〴〵のおもひ事、同、三、枕の夢、

是ぞとこがれて、なんのかのなしに、縁組を取いそぐぞおかしけれ。

西鶴置土産、五、都もさびし朝腹の献立、彼の法師、養食好み、酢の鹽のと、舌うちして、云々、

○「四五六」「五四七」「五五六」にも「の」がある。

【三九五】 ばかり　限る意味のもの「計（ばかり）」の義であろう、主語を限るものもあるが、副詞句を形作らせる接尾辭のようにもなる、用法の意わ、「三五五」に云つておいた。

自分ばかり、殘される。　妻子ばかり連れる。

恵まれるばかり、報いることがない。　讀ませるばかり、書かせわせぬ。

人をばかり、頼みとする。　見てばかり居る。　行こうとばかり、思つて居る。」

「これればかりが入用だ。」「人ばかりにたよる。」「頼まぬばかりの事だ。」「行先ばかりを考えて居る。」「今日ばかりわ許す。」「これればかりも殘そう。」「それればかりかと思う。」「唯泣くばかりだ。」「美しいばかりで、趣がない。」などゝ云うのわ、名詞のようである。

○同じ意味の「のみ」と云う助詞があつて、「その事のみ氣にかゝる。」「出るのみ

で、はいる事がない。」強いもののみ生殘る。」坐つてのみ居る。」あるとのみ思つた。」仕事にのみかゝつて居る。」などゝも云うけれども、多くわ用いられぬ。

○「それのみならず」わ、接續詞と見る。

【三九六】 程合頃合を云うもの。

五人ばかり居る。 三時間ばかり過ぎた。 三つばかりある。

許可されるばかりになつて居る。 今來たばかりだ。

「幾らばかりかゝつた。」少しばかり取る。」ちつとばかりある。」など、副詞にも附き、「五圓ばかりが利益だ。」一年ばかりになつた。」百圓ばかりを遣いなくした。」三町ばかりもあろう。」などわ、名詞のようである。

文語に云う「宵打過ぎて、子の時ばかりに、」八月十五日ばかりの月に、」などゝ、同じである。

○「ばかり」を「ばつかり」、又わ「ばかし」「ばつかし」とも云うが、用いぬがよい。

【三九七】 ほか 「それを外にしてわ」の意味、下を打消の語で受ける「外に」の「に」を省いて、用法の變わつたものと思われる。「五人ほか來ぬ」わ、「五人の外に誰も來ぬ」、「水をほか飲まぬ」わ、「水を外にして何も飲まぬ」の意であろう、副詞句を形

作らせる接尾辭のようである、用法の意わ「三五五」に説いてある「ほか」を「ほきや」とも云うが、用いぬがよい「三六五」の「しか」を見合せよ。

五人ほか來ぬ。私ほか知らぬ。

やめるほか仕方がない。ことわるほかありませぬ。

長いほかつかわれぬ。近いほか見えぬ。

取られるほかない。あやまらせるほか工夫わあるまい。見せないほか仕樣がない。

水をほか飲まぬ。南えほか向かぬ。東からほか來ぬ。これぐらいほか出來ぬ。筆でほか書かれぬ。

「少しほかない。」「遲くほか行かれぬ。」「僅かほか殘つて居ない。」など、副詞、又わ、副詞の語根にも附く。

「眞物とよりほか思われぬ。」などわ「より」(四一八)のところに説いてある。

○「それ外の事わ出來ぬ。」「これほかわない。」などわ、全くの名詞である。

【三九八】 **ほど** 程合分量を云うもの「程に」の「に」を略して、用法が變わつたのであろう、用法の意わ「三五五」に説いてある。

山ほど高く、海ほど深い。百ほど數える。十人ほど居る。
間に合ふほど備える。覺えるほど敎える。
憎いほど旨くやる。恥かしいほど見られる。
取られるほど取る。言わせるほど責めた。物が見えぬほど暗くなつた。
人が驚いたほどよく出來た。
「どれほどがおまえの分か。」「十年ほどの間。」「これほどとわ思わなかつた。」「何ほどもない。」「どれほどか殘ろう。」などわ、名詞のようである。
○「手の屆くほどになつた。」云うがほどの事わない。」などわ、全くの名詞である。

【三九九】比例する意味程合に合う意味のもの、
思うほど迷う。年寄るほど達者になる。名が高くなるほど、身を愼まねばならぬ。
交りが久しいほど親しくなる。長ければ長いほど重寶である。
褒められるほど恥かしくなる。習わせるほど上達する。
「からだが丈夫なほど、勉強が出來る。」などゝ、形容詞にも附く。

○「頃に」「時分に」の意味のもの、

今朝ほど参りました。後ほど逢いましょう。今ほど来られた。

【四〇一】まで　至り及ぶ意味を示すもの、

東京から箱館まで行く。後の事まで考える。つまでかゝるか。

降るから晴れるまで待つ。焦るまで炙る。

ねむいまで起きて居る。餘義ないまで辛抱する。

呼ばれるまで控えて居る。卒業したまで知つて居る。

禮をまで言わせた。こゝえまで来る。誰やらまで話した。あるかないかまで穿鑿する。よいとまで考えた。

「三人までが限りだ。」「九時までの規則である。」「これまでにする。」「暮れぬまでに行く。」「十日までを限る。」「明日までときめる。」「兵卒までえ下さる。」などわ、上に附けて、名詞のようにあつかわれる。

「遅くまで待つ。」「遠くまで見える。」などわ、副詞に附いたものだ。

【四〇二】限る意味を云うもの、名詞のようである。

出來ぬ時わ、それまでだ。わるいと云えば、やめるまでの事です。出來ぬ

までも、やつて見る。

狂言記、萩大名、その様なむづかしい所ならば、行くまいまでよ。同、見物左衞門、礫、云々、そちが投つたらば、此方からも參らせうまでよ。

【四〇三】程度の意味のもの、

懇意な人まで來なくなる。年寄まで騒ぎ出す。大人が走れば、小供まで走る。國學漢學わ、勿論の事、洋學まで學んだ。雨天で、風まで吹いて來た。他人まで怨む。實が三つまで、成つた。

雲と見るまで、花が咲いた。見るまでもない。風が膚寒いまでになつた。死ぬまでの事わあるまい。

【四〇四】までも「もわ」四〇八の「も」であろう。

【四〇五】も 本文にわ、取りすべて云う意味のもの、(四〇六)並べて云う意味のもの、(四〇七)和げ又わ強めて云う意味のもの、(四〇八)假りに設けていふ意味のもの、(四一一)の四項にわけてある、其外にも、次のような意味のものがある。

○「さえ」までの意味のもの、

草木も眠る真夜中の頃、さすがの豪傑も破られない。山中でわ、海の魚わ、見ることも出來ぬ。

聞くも恐ろしい。見るもいやだ。

飛ぶ鳥をも落す勢、手に取るをも待たない。一言云つてもおこられる。

思い出しても涙の種だ。

○「と」の意味のもの、

無いも同じだ。貰つたも同樣です。見たも同然である

【四〇九】同じ動詞の間に用いて、意味を強くするもの、

飲みも飲んだし、食いも食つた。

凄いも凄い。遠いも遠い。

書かせも書かせた。見たも見た。

【四一一】假に設けて云う意味のもの、「三七八」の「とても」とて、又わ、「四四七」の「とも」と同じである。

金剛石も、磨かずば、玉の光わ、添わるまい。一日も勤まらぬ。

いくら稼ぐも追付くまい

行かずもよかろう。

讀まぬでも分ろう。行つても行かないでもよい。聞いても忘れよう。

死んでも申譯が立たぬ。痛くも我慢をせよ。

「遲くも間に合おう。」「短くもよろしい。」「少くも百圓わかゝる。」など、副詞にも附く。

○「四四七」の「とも」を見合せよ。

狂言記、釣狐、何と言はれても、狐を釣りやむることはなるまい。同、二人大名、どうあつても、御供いたしませう。同、仁王、かやうに、態々參つても、自然、御留守なれば、いかゞでござる、あはれ、御宿にござつて下されかし。

雜兵物語下、矢箱持、首を取つても、手柄とはいはれまい。同下、玉箱持、捨てべいと思ふても、預かりものだ。

○裏返る、又、裏返す意味のもの、(「であるけれども」あるけれども)

生立のよい者も、困ると、心がさもしくなる。女も、いざとなれば強くなる。

鎌倉時代

平家物語、一、妓王の事、年おひ、よはひおとろへたる母、しらがをつけても、なにゝかはせん。」この世は、かりのやどりなれば、はぢても〳〵、なにならず。

江戸時代

醒睡笑、六、夏の夜は、宵ながら明けやすき月の、ふけても、いまだもどられねば、云々、

雑兵物語、下、玉箱持、又、馬、云々、喰ものがわるくつても、筋をきられないが、畜生の身でも、嘸よかんべい。

【四一二】 **や** 並べる意を云う、多くわ「で」に伴う、その時わ、名詞のようにあつかわれる、この「で」わ、第三類の「で」(一)(五二一)(二)(五二二)(三)(五二三)である。

士官や兵卒や楽隊が列をして行く。

聞き合わせるや調べるやでいそがしい。見や聞きやして書く。

嬉しいやつらいやで、日をすごす。

呼ばれるや聞かれるやで、暇をつぶす。讀ませるや書かせるやで急ぐ。

見たや見ないやで爭う。

「何やかやが溜まつて居る。」それやこれやに對して、」などゝ、名詞のようにあつかわれる。

「ちつとやそつとの事でわない。」遠くや近くに居る親類、」など丶、副詞にも附く。

○「四二七」にも「や」がある。

平安朝時代

蜻蛉日記、上ノ下、　柚や梨やなどを、なつかしげに持たりて、食ひなどする。

梁塵祕抄二、雜、　むまのこや、うしのこに、くゐさせてん。

室町時代

義經記、よしつね、辨慶、君臣けいやくの事、　女やあまわらべども、あはてふためき、

曾我物語、小次郎かたらひ得ざる事、　五つやみつになりしを、さうのびざにすへて、　同、十番ぎりの事、　こゝやかしこに、むらだつて、よするものこそなかりけれ。　同、虎、出であひよびいれし事、　なき人の母や姉を見るよりも、

史記抄、七、五三　車馬ヤ女ヤナンドアルト云モ、此心ゾ。同、十、六九　柘木ヤ竹デ作タ弓ゾ。

孟子抄、七、二八　樂ハ樂也、タノシムノ笛ヤナドヲ吹ク事デハ無イゾ。同、八、四　土芥ノ土ヤアクタノ如ク思テ、

狂言記、惡坊、其傘の十本や廿本は、切折て御目にかけう。」衣やら、ぢよろや傘があるとは、何とも合點のゆかぬ事ぢや。

江戸時代

昨日は今日の物語、くすりやゆが、口へ入ほどならば、」もちやまんぢうに、さねがあらばよからう。

諸國盆踊唱歌、大和、わかいせなごの、ぐわんかけるのは、神や佛も、をかしかろ。

【四一四】やら　不定に並べる意味のもの「四一五」の「やら」から意味の變わつたものであろう。

笛やら太鼓やら喇叭やらで、賑やかだ。何やらかやらで、いそがしい。

出るやら這入るやら混雜する。

痛いやら痒いやらで、こらえられぬ。長いやら短いやら、いろ〳〵ある。食わせるやら着せるやら、随分世話な事だ。聞くやら聞かぬやら、心々だ。神戸えやら長崎えやら、旅する度に、「朝鮮やら満洲やらが饑饉の時、陸軍やら海軍やらに、御用があつて、」嬉しいやら悲しいやらを取りまぜて話す。「箱館やら小樽やらえも、送らねばならぬ。」女やら子供やらは、嬉しそうだ。」などわ、名詞のようになる。

「赤くやら青くやら、さま〴〵に塗る。」などわ、副詞に附く。

【四一五】疑を示すもの、推量する意、不定に云う意もある、文語の「にやあらむ」の「やらむ」と約まつたもの、「む」の無くなつたのである。

誰やら分らぬ。何が何やら、目當がつかぬ。何やら見える。行くやら止まるやら知れぬ。どうなるやら分らぬ。出來ようやら出來まいやら、推量わできぬ。

多いやら少ないやら、見込が立たぬ。

降られるやら、測りがたい。役に立つやら立たぬやら、考えものだ。見たやら見ないやら、私は知らぬ。どうしたやら、便りがない。花だやら雲だ

やら、見分けられぬ。

郵便の届かぬのやら、返辭が來ぬ。誰にやらくれた。何とやら云つた。支那えやら行つた。見てやら見ないでやら、知らぬ。電車でやら行つた。」「誰やらが云つた。」誰やらにくれた。」「十圓やらになつた。」歷史やらを學んで、」誰やらと話した。」京都やらえ行きました。」誰やらから聞いた。」どこやらで見た。」などわ、名詞のようなあつかいである。

「少しやら澤山やら、尋ねて見よう。」どうやら、雨が降りそうだ。」どうやらこうやら、出來よう。」慥かやらあぶないやら、きめられぬ。」など、副詞、又わ、副詞の語根にも附く。

室町時代

狂言記、宗論、「又どれへやら行くわ。」あるやらないやら、何を其方が知つて、」いかさま、どこやらで聞いたやうな。」其法然とやらが言つた事、」其連が、一日二日で參らうやら、二十日三十日、手間が取れうも知れぬ。同、伯母酒、こなたへ參つたとやら申まする。同、萩大名、まだ、後に、何やらあつたやうな。同、釣狐、何とやら、ふしぎな事もござつた。

江戸時代

古今夷曲集、一、見るに日は、西へねぢれど、藤の花、じきになるやら、ひだるさもなし。

日本永代藏、三、紙子身袋の破れ時、え方が東やら、南に梅が咲くやら、暦さへもたずして、

雜兵物語、下、草履取、はなばかりかいて、上髭が、付かないで、女のくびやら、男の首やらしれない。

【四一七】より　比べて云う意味のもの、

鴉より黑い。それより、これがよい。

行くより、歸る方が早い。わたしに聞こうより、あの人に聞くがよい。

嬉しいより、悲しい事が多い。長いより、短いのがよい。

待たれるより、待つ身がつらい。書かせるより、讀ませる方にする。言わぬよりました。思つたより多くある。

米ばかりより、麥をまぜるがよい。三圓ぐらいより上のことわない。

「それよりか、これがよい。」などゝもつかわれる、「よりか」の「か」わ、區別するの意

のもので、反語の「か」(三四九)から變つたのであらう、「わ」の意に聞える「四一九」を見合わせよ。

それよりかこれがよい。書くよりか讀むが早い。山よりか高い。

○「から」の意味の「より」わ、「から」の所(三五四)に云つて置いた。

【四一八】限る意味のもの、「ほか」「ほかに」に伴う、下を打消の語で承ける。

一人の子よりほか持たない女。學問より外に、好きわない。

ほんものとよりほか思われぬ。

○「三九七」を見合わせよ。

【四一九】わ　文語の「は」である、區別する意味を云うもの、

夏わ暑くて、冬わ寒い。大わ、小をかねる。人わ萬物の靈である。

見るわよい。手を附けるわわるい。聞きわする。手を附けわせぬ。

輕いわ羽で、重いわ石だ。早いわ飛行機である。

擊たれるわ苦しい。擊たれわした。心配させるわわるい。心配させわせぬ。行かぬわよくない。聞いたわ間違であつた。行きたいわやまやまだ。

人にわ劣らぬ。外えわやらぬ。ほんものとわ見えない。雪よりわ白い。門からわ出さぬ。明日までわ待つ。見てわおく。讀んでわ見ぬ。力でばかりわ仕遂げられぬ。それだけわある。これでわない。幾年かわ過ぎた。

「慥かにわ言われぬ。」「稀にわある。」「まずわよろしい。」「凡そわその通り。」「ちよつとわとまる。」「たゞわ濟まさぬ。」「さてわさようか。」「善くわ分らぬ。」「遅くわあるまい。」嬉しくわ思う。」「聊かわ心得て居る。」などゝ、副詞、又わ、副詞の語根にも附く。

「山又わ川、」「但しわこれか、」などわ、接續詞に附くのである。

○同じ語の間に加えて、慥にそうであると云う意味を云うもの、

草わ草だが、何草だろう。綺麗わ綺麗だが、趣がない。

讀むにわ讀んだ。食いわ食つた。來わ來たが、すぐに歸つた。聞きわ聞くものゝ、取次ぐことわ出來ぬ。

遠いわ遠いが、行かねばなるまい。

聞かれわ聞かれた。讀ませわ讀ませた。見たわ見た。

○「でわ」の意味のもの、

東海道わ、静岡の町で、東京わ、神田の大工町、
狂言記、宗論、こなたは、都わどこにござるぞ。
○「を」の下に用いると「ば」となる。
茶をば飲む、酒をば飲まぬ。車夫をば使にやる。
○「ば」わ「五〇二」にもある。
「を」を略すると、また「わ」となる。
茶わ飲む、酒わ飲まぬ。我慢わして居る。出來たわくれる。短いわ捨てる。これだけわ殘す。
○わ「四六七」にもある。

第二

【四二一】でも　文語の「にても」の轉である、(「三七〇」の「で」の所で云つておいた、大概を指す意味のもの「で」わ「五二三」の「で」で「も」わ「四〇六」か「四〇八」の「も」であろう。
百圓でも千圓でも出す。何でも出來る。人でも來るとわるい。どれでもよい。

聞きでもすればよいに。

教えられでもしたら覺えよう。讀ませでもすれば分ろう。

何とでもしろ。どこえでも行け。これぱかりでもよい。それくらいでも間に合おう。遊んでも居ろ。東京でも賣弘めよう。

「時が早くてもあつたら行こう。」心安くてもなつたら話そう。」全くでもない。」たまさかにでも逢いたい。」ちよつとでもとまれ。」少しでもあればよい。」などわ、副詞に附く。

室町時代

狂言記、佛師、佛師なら、佛師でよさゝうなものを、眞佛師と仰せらるゝには、仔細でもござるか。同、こんくわい、はて、御茶でもまゐらせいで。

同、二千石、御手討にでも會ひませうかと存じて、身の毛をつめて居りました。

伊曾保物語、何(なん)でもあれ、存せぬことはない。

江戸時代

雜兵物語、上、弓足輕小頭、刀でも脇差でも、勝手次第にひん抜て、同、上、鐵

炮足輕小頭、　死人の血でも、又は、どろのすんだ上水でも、すゝつて居なされ。

【四二二】ながら「そのまゝ」の意味のもの、

蔭ながら喜んで居る。心ながらの苦勞、

生きながら、神に祭られる。生れながら、國王である。居ながら、敵を待つ。

ちいさいながら、能く働く。

【四二三】二つの動作を、同時に行う意味を云うもの、

見ながら寫す。あるきながら眺める。遊びながらのかせぎ。涙を流しながら話す。

教えられながら考える。

○「であるけれども」の意味のもの、

大儀ながら行つてくれ。

知りながら改めぬ。思いながら、不沙汰した。とわ言いながら、決められぬ。

呼ばれながら、返辭をせぬ。何も言はぬながら、心にわ承知して居る。

「いや〳〵ながら引受ける。」確かながら差出します。」聊かながら返禮する。」など丶副詞、又わ、副詞の語根にも附く。

「恐れながら」憚りながら」及ばずながら」などわ、副詞と見、「さりながら」しかしながら」などわ、接續詞と見る。

○「散歩がてら買物をする。」御禮かたゞ〳〵參上いたします」など云う助詞もある。

○「見つゝ寫す。」あるきつゝ眺める。」など丶も云うわ、文語であろう、口語の「つつ」わ、「知りつゝ改めぬ」四八二)など丶、この條の「ながら」の意味に用いる。

第三

【四二七】 や やい 呼びかけるもの、

太郎や、梅子や。 みんなで行こうや。 もうよそうや。

「それ見や。」そんなことわやめろや。」やれ嬉しや。」こゝにわ無いや。」なんにも知らないや。」誰ぞ居るかやい。」よしてくれやあ。」みんな來いやあ。」次郎やあい。」など云う「やい」やいあ」やあい」もある。

狂言記、相合袴、 やい、冠者、行て呼びましてこいや。 同、口眞似、 太郎冠者

居るかやい。「四一二」にも「や」がある。

第二類の助詞

第一

【四三一】が　くいちがう意のもの「四三七」の「けれども」に似て居る。「樺太わ寒くわあるが、しかし産物わ多い。」など、書く人があるが、重複である。

空わ晴れるが、風は止まぬ。工夫わするが、どうも出來ぬ。

風わ寒いが、天氣わよい。出るわ早いが、這入るわ遲い。遊ぶもよいが、氣を付けねばならぬぞ。

教えられるが忘れる。頻といそがせるが、はかどらぬ。字わ讀めるが書けぬ。考えたが、案じがつかぬ。無いと云つたが、やつぱりある。行きたいが、やめよう。これわ花だが、匂がない。

鎌倉時代

宇治拾遺物語、五、一二、その時は、わびしう堪へがたく覺え候ひしが、おくれまゐらせて後は、など、さおぼえ候ひけむ、悔しう候ふなりといふ。

室町時代

史記抄、六、四七、　高帝卽位處ナンド、シサウナガ、サモナイゾ。

狂言記、萩大名、　夫は行きたいものぢやが、先の亭主が知る人でないによつて、得行かれまい。　同、烏帽子折、　出たまでは、七五三飾門松がなかつたが、今は七五三飾で、頼うだ御宿を忘れた。

【四三二】　前の事を言い終えて、後の事に續けるもの、

世わ夢のようだと云うが、嘘でわない。　序に云つて置くが、明日わ早く起きろ。　何とか名をつけようと思うが、よい名わないか。

毎日教えられるが、段々上手になる。　本を讀ませるが、よく覺えねばならぬぞ。　昨日見たが、面白かつた。　御安着になつたそうですが、御喜び申します。　實の事だが、それわ出來ない。

狂言記、萩大名、　下京邊に、よい庭を持たれた御方のござるが、これに、只今、宮城野の萩が盛でござる。」歌、云々、こなたへ教へませうが、何とでござる。

同、柿山伏、　某、樹木をあまた持てござるが、當年は、柿が大なりいたいてござる。　同、神鳴、　藥代をやりたいが、此砌ぢやに因て、何もないが、何とせうぞ。

【四三三】假に設て云う意味のもの「三七八」の「とて」「四四八」の「とも」に似て居る。

死のうが、かまわぬ。あろうがなかろうが、貧着せぬ。うめこうがもがこうが、所詮かなわぬ。

【四三四】念を推して云う意味のもの、

無い筈わないが。今歸つた、早かろうがの。勝てそうなものだがなあ。

狂言記、抜殻、酒、云々、もひとつ喫ませう、過ぎすげうがな。同、柿山伏、あいつが困る事が、ありさうなものぢやが。同、宗論、さうは云うまいがの。

○「三五三」「五一四」にも「が」がある。

【四三五】から「に因て」故に」の意味で、副詞を形作らせる接尾辭のようである。

そうであるからして、話されない。實説であろうから話す。

少しでもよいから、送つてくれ。

責められるから言う。讀ませるから分る。尋ねたから逢われた。それだから、行けと云うに。

○「それだから」を略して「だから」と接續詞に用いられる。

萬葉集、十八、　明日よりは、つぎてきこえむ、時鳥、一夜の可良に、戀ひわたるかも。

古今集、八、離別、　惜むから、戀しきものを、白雲の、立ちなむ後は、何ごゝちせむ。

【四三六】「わ」又わ「にわ」に連ねて「上わ」の意味となるもの、

わたしが行くからわ、只わ濟ませない。　あれがそう云うからにわ、承知しまい。

聞かれるからにわ、返答しよう。　言わぬからにわ、仔細があろう。　見たからにわ、のがされない。

○「三五四」にも「から」がある。

【四三七】　けれども　反對になり、裏返る意味を云う。「四九〇」の「ても」でも」と同じ意味である、文語の形容詞の活用の「長けれども」苦しけれども」などの「長いけれども」苦しいけれども」などゝなつたものが移つて、動詞にも附くようになつたものであろう、略して「けれど」と云うこともある、又「けども」けど」などゝ

も云うが、これわ用いぬがよい。

讀むけれども書かぬ。それでもよかろうけれども、先、やめるがよい。

太いけれども、折れやすい。いそがしいけれど、手傳つてやる。

擊たれるけれども、逃げない。見させるけれど、手に取ることわ許さぬ。

しないけれども、したと言われる。聞いたけれども、話さぬ。讀んだけれども、忘れた。雨天だけれども、出かける。

○「けれども」わ、獨立に用いれば、接續詞ともなる。

【四三八】 し 並べて指して、下に云いつゞける意味を云うもの、「爲る」の中止形の「し」で、文語の「讀みもし書きもする」などから移つて、「讀みもするし書きもする」と用いるようになつたものでもあろうか。

花わ咲くし、鳥は囀るし、面白い春になつた。雨も降ろうし、風も吹こうし、海上わ難儀であろう。

朝わ早いし、夜は遲いし、暇がない。

倒されるし、踏まれるし、つらい目に逢つた。角力でも勝つたし、劍術でも勝つた。酒も飲まぬし、煙草も吸わぬ。電信わ不通だし、郵便わ後れるし、

仕様がない。

○「ものを」又わ「のに」の意味に用いるもの、

法律家の討論でわあるまいし、そんなに理窟を云うにも及ぶまい。おまえの働きばかりでわないし、獨りで自慢わ出來まい。

狂言記、宗論、はて、來いで何とせう、連ぢやものを、編みつれた身でわあるまいし、また、どれへやら行くわ。

【四三九】 せ 念を推して云う意味のもの、「ぞえ」の約まつたものであろう。

花が咲くせ。あすわ來ようせ。

仕事わ苦しいせ。朝わ早いせ。

叱られるせ。これから行きますせ。人わ來ないせ。ありませぬせ。もう出來たせ。出來まいせ。困つたものだせ。何もないらしいせ。

【四四〇】 ぞ 念を推して云い聞かせる意味のもの、

今日行くぞ。後に來るぞ。どこかにあろうぞ。

あすの朝、起きるわ早いぞ。路わ遠いぞ。

人に恨まれるぞ。恥をかゝせるぞ。儘に見たぞ。何もせぬぞ。言うこ

とを聞かないぞ‖　瑕をつけまいぞ‖　空わ晴れるらしいぞ‖　行くのわ、今日だぞ‖

古今集、十二、逢ふを限りと、思ふばかりぞ‖

狂言記、連歌毘沙門、何と思召すぞ‖いかにして、獨で取られはいたされまいぞ‖

諸國盆踊唱歌、讃岐、なせにそなたに、ながないぞ‖

○疑う語に伴つて、反語の意味を含むもの、

どうして出來ようぞ‖　誰とて、そんな事を云ふものがあろうぞ‖

【四四一】 指し定める意味を云うもの、或る代名詞に附く。

何ぞ‖あるか。　誰ぞ‖頼もう。　どこぞ‖痛むか、　どれぞ‖取れ。　是れぞと云う程の事もない。　何ぞと云うと持出す。

「どうぞ‖、こうぞ‖、せねばならぬ。」ついぞ‖見た事わない。」など、副詞にも附く。

文語にわ、「その「かゝり」むすび」の法則があるが、口語にわ、動詞、形容詞、助動詞、共に、終止形と連體形と同じであるから、區別わ立たぬ。

何ぞ‖の種になろう。」どこぞ‖にあろう。」これぞ‖と思いつくこともない。」など、

「の」に」とでも承ける。

【四四二】 そう 推量する意味を云う「狀（さま）」が「さう」となつて、又變わつたものであろう、「そう」わ、接尾辭（六一六）にもある、この用法の轉じたものであろう、こゝの助詞の「そう」との區別わ、次のようである。

助詞 「そう」 行くそうだ。 早いそうだ。 出來ぬそうだ。

動詞、形容詞、助動詞のあるものゝ連體形に附き、「他の上に就いて、そのように見える」と云う意で、下に「だ」で」です」を履む、名詞の姿であるが、獨立に用いられないから、助詞とする。

接尾辭 「そう」 行きそうだ。 早そうだ。 不思議そうな顏、

動詞、助動詞の連用形、形容詞の語根、漢語、名詞等に附き、「自分の推量で、そのように思われる」と云う意味で、下に「だ」で」です」に「な」なら」などを履み、上の語と熟して、名詞のようになる、尙「六一六」を見よ。

聽くそうだ。 話すそうだ。

痛いそうで泣く。 嬉しいそうで笑う。

聞かれるそうだ。 讀ませるそうだ。 勝てるそうだ。 勝てないそうだ。

出來ぬそうだ。聞いたそうだ。讀んだそうです。見たいそうです。人だそうだ。女だそうだ。

室町時代

狂言記、末廣がり、末廣がりはござらぬか、爰にはないさうな。同、苞山伏、こなたも、こゝに休ましやつてござつたさうなり、身共も、こゝにふせつてござる。同、伯母が酒、あゝ、少し醉うたさうな。

江戸時代

古今夷曲集、九、宗貳といふもの、淺香といふ遊女に思ひ入て、云々、足抜が、ならぬさうにぞ、見えらるゝ、淺香の沼に、はまりたまひて。

此「な」なり」に」わ、今の東京口語には用いない。

【四四三】 て 獨り自分で合點して居る意味である。「と云ふ」を「てふ」と云う、その「て」の殘つたものであろう。

花が咲くて。何も出來まいて。その事だて。それわ格別だて。

○「四八二」にも「て」がある。

【四四五】 と 條件を云うもの。「五〇三」の「ば」の意味と似て居る。

打つと響く。落すとこわれよう。逃げると逐う。見るといけませぬ。
餘り長いと切られる。めずらしいともてはやされる。
押されると倒れる。讀ませると分る。早く行かぬと、間に合わぬ。明日わ休みだとよい。

「打てば」長ければ」押され丶ば」の意である。

【四四六】事の一處に落合うもの、

聞くと、そのま丶立上り、寄るとさわると噂する。行くと始つた。
擊たれると、すぐ倒れた。讀ませると、分つたと云つた。
狂言記、吃の「私の留守になると、酒ばかり飲うで」などの「と」わ、是れであろうか、「なる時わ」の意味か。

○「三七五」「五三三」にも「と」がある。

【四四八】【四四九】

とも
と

假に設けて云う意味のもの、
何をしようとも、勝手次第だ。雨が降ろうとも、行くときめる。
擊たれようと斬られようと、かまわぬ。行かずとよかろう。言わずとも、知れたことだ。見ずともよろしい。

一日なりと勤めた上わ、何なりとも取れ。

金わなくとも、智慧さえあればよい。少くとも、百圓わかゝる。遅くとも、間に合おう。短くともよろしい。(この「とも」わ「ても」ともなる。(四九〇)

行かずともの事だ。

○「五三四」にも「とも」がある。「四一一」の「も」(假に設けて云うもの)をも見合わせよ。尙「四四四」「五三三」にも「と」がある。

○「行くとも、歸るとも、きめるがよい。」など云うわ「行くときめる」「歸るときめる」の間に、並べて云う意の「も」(四〇七)を加えてつないだもので、これとわ違う。

【四五〇】 **とも** 自ら信ずる意、疑おうようのない意、勿論の意のもの、

あるか、あるとも、屹度ある。

嬉しいか、嬉しいとも。

讀まれるか、讀まれるとも。よろしうございますとも。見たとも、〳〵。

○「五三四」にも「とも」がある。

狂言記、末廣がり、此御禮は、重ねて都へ上つて、御尋ね申して、きつと申し

ませう、御尋ねに預ろうとも。同、宗論、都まで、とくと御供致さう、何がさて、とくと御供いたさうとも、扨こなたは、云々、春園に、芋といふものをうゆるか、をゝ、なか〳〵、植るとも。をゝ、いかにも、あるとも。同、附子、今日は、頼うだ人の御留守ぢやに因て、ゆるりと居て話さうよ、何がさて、ゆるりと居て話さうとも。

【四五三】 に 同じ動詞の間において、意味を強めるもの。

待ちに待つた。思いに思つて、

文語の「聞きに聞き、語りに語る。」「ねさりにのみねさる。」など〻同じである。

【四五四】 同じ動詞の間において、下に、可能打消の意味をあらわす語をおいたもの、

越すに越されぬ。

【四五五】 動作の目的を指すもの。

花見に行く。物を買いに出かける。知らせに来た。

【四五六】 の 「もの」こと、又わ「ところ」方（ほう）の意味で、名詞のように用いるもの、

行くのを嫌う。そうするのもよろしい。

長いのわ不用である。嚴しいのに困る。慥かなのにきめる。
責められるのがつらい。精出さぬのわわるい。昔からあつたのにする。
○女子の言葉に「何をするの。なぜ早くこないの。どうなさつたの。」など、云う「の」わ、問いかける意味であるが、是れわ、下に「か」ですか」などを略して云うのである。
醒睡笑、八、喝食あり、東堂に膳をすゆる時、和尚、あつぱれ、月輪かな、喝食、はしくないの、とて膳をとりぬ。
○「三九四」「五四七」「五五六」にも「の」がある。

【四五七】 のに 此「の」わ「四五六」の「もの」こと」ところ」などの意味で、名詞のように用いられる「の」であらう上の事情にかゝわらぬ意味わ「に」にある「の」なしに、「に」とばかりでも用いる。
行けと云うのに、なぜ行かない。日わ暮れかゝるのに、路わ遠い。あつたと思うにない。折もあらうに、此混雑の中で、
まだ早いのに、もう歸るか。いそげばよいに、ぐず〳〵して居る。
讀ませるのに讀まない。風も吹かぬのに、花が散る。夜が明けたのに、ま

だ起きない。待つて居たに來ない。

○「三九一」「四五一」「五三五」にも「に」がある。

【四五八】 ものか　もんか　「か」わ「三四九」の反語の「か」で、文語の「ものかは」の略で「もん」わ「もの」の轉である。

源氏物語、横笛、かゝる夜の月に、心やすく夢みる人は、あるものか。

【四六二】 ものゝ　事の裏返る意を云うもの「四三七」の「けれども」と同じである、多くわ、上に「わ」を伴う。

雪わ降るものゝ、さほど寒くわない。勉強わするものゝ、學力わ進まぬ。

出來わよいものゝ、直段わ高い。美しいわ美しいものゝ、趣わない。

褒められわしたものゝ、安心わ出來ぬ。忘れわせぬものゝ、うと〳〵しくなる。

古今集、十四、戀四、空蟬の、世の人ごとの、しげゝれば、忘れぬものゝ、かれぬべらなり。

伊勢物語　君來むと、いひしよごとに、過ぎぬれば、頼まぬものゝ、戀ひつゝぞふる。

【四六三】 ものを　事の裏返る意味を云う。

こちらでわ深切でするものを、ありがたいとも思わぬ。尋ねて來たものを、逢つてもくれぬ。行くはずであつたものを、行かなかつた。

【四六四】 ことを　意味わ「ものを」とおなじてある。

せずともよいことを、餘計な事をした。

【四六五】 よう　樣の字の音である。

【四六七】 わ　わい　念を推して餘情を云うもの、

銀行が年々殖えるわ。會社も出來るわ。腹が減るわ、寒くなるわ。取られるわ、行かせるわ、見込わ立たないわ。十分に來出たわ。みんな濟んだわ。

遊へばとて、程があるわな。なんでもよいわさ。などと、「わ」の下に「な」(五五四)「さ」(三五九)などを伴うこともある。

旨く云うわい。やかましいわい。いまいましいわい。憎い奴だわい。

又「ここだわえ」と云うように「わえ」と云うこともある。

日本書紀、仁賢紀、弱草吾夫伺怜。

【四五八】……【四六七】第二類の助詞　ものか　もんか　ものを　ことを　よう　わ　わい

平安朝時代

伊勢物語、さるさがなき夷心を見ては、いかゞはせむは。

源氏物語、夕顔、夜中も過ぎにけむかし、風あら〳〵しう吹きたるは。

拾遺集、六、君が住む宿の梢を、ゆく〳〵と隠るゝまでに顧みしはや。

室町時代

狂言記、聟貰、父様、何しに往にませうぞ、おう、したらゐいわ。同、宗論、身にも笠にもつくやうにいやがるわ。「またどれへやら行くわ。」春園に芋を植るわ。同、見物左衛門、刀、云々、持たねばさしませぬは。同、抜殻、行きまするわいの。

江戸時代

醒睡笑、二、われは、日本一の事をたくみだいたわ、といふ。

日本永代藏、二、天狗は家名の水車、よい事を思ひ出してゐたから、忘れたは。

○「四一九」にも「わ」がある。

【四六九】 たつて　たつても　「たつて」「たつても」わ「三七九」にもあり「だつて」が「五一九」にもあつて、紛れやすい。

【四七二】 たら　だら　動作が過去であるのを、假に定めて云うもの、下に「ば」を添えて云うが正則であるが、今わ、全國ともに、多くわ省いて云う。

書いたらば讀もう。　擊つたら響こう。

遊んだらば歸れ。　讀んだら分ろう。

聞かれたら言おう。　逢わせたら話そう。

【四七三】 既に定まつた意味に云うもの。

昨日尋ねたら居なかつた。　相談したら得心した。　讀んだら分つた。

○「たら」の「だら」ともなる事わ「一〇三」に云つてある。

【四七五】 指定の助動詞の「だ」の下でわ「だつたら」となる、「であつたら」の約まるのである。

今年わ、豊年だつたら、祝いをしよう。　生れるが子が、男だつたら、大喜びであろう。

○前の指定の助動詞の「だ」の所を見よ。

【四六九】…【四七五】第二類の助詞　たつて　たつても　たら　だら

○「たらわ」文語の「たらたり」「たり」「たる」「たれ」と活用する過去の助動詞の將然形である、此語の事わ、前の過去の助動詞の「た」の所に、委しく説いて置いた。

○「たら」「だら」の下に「ば」を略する事も、隨分古くから見える。

室町時代

閑吟集、いとおしいといふたらかなはふす事か、明日、又、讃岐へくだる人哉。

狂言記、聟貰、何しに往にませうぞ、おう、したらゑいわ。

江戸時代

醒睡笑、七、造作もなく、家の端にひとりねする處を、つけたらよからう。

古今夷曲集、八、さいまつと、いひてくれける、雪の魚、くひたら味の、きえぎえとせん。(歳末に鱈を贈られた返し)

後撰夷曲集、九、たてかねし、竈を見たら、地獄なる、鬼の目にもや、泪ながさん。

諸國盆踊唱歌、大和、梅と櫻と、よしのへいたら、梅はすいとて、もどされた。

同、河内、こなたおもふたら、これほどやせた、ふたへまはりが、みへまは

る。

卜養狂歌集、下、つばき〳〵、さかづきなりに、ひらいたら、さけをすいせん、
梅のはなのみ。

懐硯三、水浴せば涙川、あの男に逢つたら、女房を持せて置くさへ腹立つ、
餘り見苦しき有様、云々、

雑兵物語、上、鐵炮足輕小頭、唐辛を、云々、手にもぬつたらば、よかんべいが、
とつばづして、目なんどいぢつたら、目玉ががひにうづくべいぞ。

【四七七】 たり だり 動作を並べて云う、文語の過去の助動詞の「たり」の中止形、連用形、終止形である、けれども、用法が少し變つて居るから、助詞とした、其語原の事わ、前の助動詞の「た」の所で説いておいた、「たり」の「だり」ともなることわ、一〇三に云つてある。

中止形のように用いるものわ、

書いたり讀んだり、いそがしい。飛んだり跳ねたり、騒いで居る。

一つあつたり、又、二つも三つもあることがある。

撃たれたり、蹴られたり、えらい目に逢つた。讀ませたり書かせたり、頻と

教える。

長かつたり短かかつたり、不揃である。見たり見なかつたり、きまりがない。

連用形のように用いるものわ。

立つたり坐わつたりする。見たり聞いたりいたして居ります。書物を讀んだりして居る。雨が降つたりして物が乾かぬ。

終止形のように用いるものわ、

似たり寄つたりである。踏んだり蹴たり、とわ此事だ。讀んだり書いたりなどして居る。役目わあがつたりさ。聞いたり聞かなかつたり、これわしたり、おつときたり、

命令の意味に用いるものわ、

さあ起きたり〳〵。おつと待つたり。しつかり讀んだり。

熟語に用いるものわ、

したり顔、得たりかしこし、

鎌倉時代

平家物語、十一、能登嚴最後の事、人々、よろひのうへに、おもき物を、おふたりいだひたりしていればこそしづめ、此人おや子は、さもし給はず。

室町時代

幸若、富樫、戸樫が若黨百人ばかり、ならび居て、蟇目くつたり、矢はいだり、碁將棋雙六に心入れたる所もあり。

史記抄、六、一五　相經ト云ハ、人ヲ相シタリナンドスル經ゾ。同、十、七一　日本ニ兵庫御所ト云タリ、富士下向ノ時ハ、東海道ニ、國々ニ、御所ヲ立タリ、伊勢海道ニ、宿所ヲ御所ト云樣ニ、巡狩ノタメト云テ、秦帝ノ宮ヲ作リヲクゾ。同十一、四一　其ヲ本ニシテ、サセタリナンドモセヌホドニ、同、六、二ヨイ者ノ、殺サレタリナンドシタルアトヲ、封ジタリ、修シタリナンドスルゾ。同、十三、五八　車ニモノリ、馬ニモノツタリカチヨリ行タリ、ナンドシテ、

狂言記、鬼の槌、御姿が見えたり、見えなんだり致すが、何とも合點のまゐらぬ事でござる。

江戸時代

西翁十百韻、戀、俳諧、起たり寐たり、空ながめたり。

【四八〇】 だつたり わ、「であつたり」の約まつたのである。

晴れだつたり、降りだつたり、不定の天氣だ。

色が赤だつたり、白だつたり、目にちらつく。

【四八二】 つゝ 「四二四」の「ながら」(であるけれども)の意味のもので、文語の「見つゝ、寫す」など、二つの動作を同時に行うを云う「つゝ」から移つて、意味が變わつたものであろう。

小言を聞きつゝ、氣をつけぬ。 見張をしつゝ、盜まれた。

【四八三】 て で これわ、前の過去の助動詞の「た」の活用で、その中止形、連用形であろう、けれども、過去の意味がなくて用いられるのが多いと云うことで、助詞とせられたと云う事わ、其所で說いておいた、けれども、「た」の活用に立てゝ、過去の意のないのを、附屬とした方がよい、とも思われるが、先わ、助詞としておく。

「て」の「で」ともなることわ「一〇三」に云つてある。

【四八四】 同じ時の事柄を、續けて云うときに、その間におくもの、これは、連用

形のように用いるものに多い。

連用形のように用いるものわ、

立てゝある。似て居る。殘つて居る。泣いて來る。讀んでしまう。飛んで行く。

逐われて逃げる。讀ませて聞く。行かなくてならない。見たくて行く。あるいてわ行かぬ。讀んでも居ない。字に書いてばかりある。寐てほか居ない。

太くて短かい。痛くて痒い。おかしくて、こらえられぬ。

細くてわ、役にたゝぬ。日が長くてこそ、仕事がはかどるのである。

○形容詞の第一活用に附いて「太くて痛くて」など云うわ「くあつて」を略したものであろうと云うことわ「一五五」で云つておいた。

【四八五】ちがつた事柄を、たゞ續けて云うときに、その間におくもの、これわ、中止形のように用いるものに多い。

中止形のように用いるものわ、

川を隔てて、花を見る。喉を抑えて、背を打つ。馬に乗つて、運動する。

【四八七】 これわ、慥に、動作有樣の、別々なもの丶間に這入つて居て、過去の意を含んで居る。

中止形のように用いるものわ、

墨を摺つて、字を書く。 書物を讀んで、道理を知る。 朝に起きて、顏を洗つて、飯を食う。

夜の明けるのが早くて、日の暮れるのが遲い。

連用形のように用いるものわ、

聞いて知る。 書いて置く。 噛んで食う。 持つて來て見せろ。

「歸つての後、行つてと頼む。」「見てから始める。」「死んでまで恥となる。」「見てもよい。」「讀んでも見ぬ。」「明けてさえ見ぬ。」「見てでなければきめられぬ。」「書いてなどして、」「見てやら見ないでやら分らぬ。」「見てか見ないでか。」など丶も用いる。

【四八九】 「ながら」「のに」の意味で、上下の句をつなぐもの、

知つて居てしない。 見て見ぬ振をする。 年が若くて、これほどの仕事をする。

○「四四三」に「てが」あり、「三七〇」「五二〇」にも「で」がある。

【四九〇】この「ても」でも」わ、「四八九」の「ながら」のに」の意の「て」に、「四一一」の假りに設けて云う意味の「も」がついたのである。

無いと云つても、少しわある。研いでも切れぬ。讀んでも覺えない。讀ませても分らぬ。見ないでも、見たと認める。國わ大きくても、產物わ少ない。いくら長くても、そのまゝつかう。

第三

【四九八】ところが　くひちがう意味の句を結びつけるもの。

人が來た所が、一人か二人だ。金を溜めた所が、死ぬ時わ置いて行くのだ望んだ所が、及びもない。

【五〇〇】上下の句を結びつけるもの、

見廻した所が、人わ居なかつた。考えて居た所が、寢られなかつた。

第四

【五〇三】ば　上の動作事情の、下の事の起りとなるを、假に定めて云うもの、

死ねば恨みわなかろう。食へば味が分る。言えばわるかろう。時過きれば、間に合わぬ。蹴れば倒れる。勉強すれば、學問が進もう。

長ければ切ろう。無ければそれでよい。
譽められゝば嬉しく思う。讀ませれば分ろう。行かねばならぬ。來なければ呼びにやれ。見たければ見ろ。晴れたらば出かけよう。遊んだらば稼げ。

右の五段活用の動詞、形容詞、幷に助動詞の「ぬ」「ない」「たい」などわ、稀に、次のようにも用いられる。

死なばもろともに、毒食わば皿まで、言わば狂氣の沙汰だ。地球の形わ、申さば橙のようで、殺さば殺せ。立寄らば大木の蔭、見えも飾もあらばこそ。

長くば切ろう。無くばそれでよろしい。
行かずばなるまい。來なくば呼びにやれ。見たくば見ろ。

是れわ、文語の姿の殘つて居るので、文語では、これが假定の意味で、「五〇八」のわ既定の意味であるが、口語では、兩方ともに、假定に用いるのである。

【五〇四】

讀めば讀むほど面白い。

【五〇五】これわ、假定にも既定にも解せられる、「五〇八」をみよ。

親があれば子がある。先生が居れば座がしずまる。

嬉しければ笑い、悲しければ泣く。

【五〇六】事の、一處に落合ふ意を云うもの「四四六」の「と」と同じである。

夜が明ければ客が來るし、日が暮れゝば取調物となる。寄ればさわれば噂する。

【五〇七】「も」に伴つて、動作事情を並べて云うもの、

飯も食えば、茶も飲む。英語も出來れば、獨逸語も出來る。

聲もよければ、節もうまい。丈も長ければ、幅も廣い。

金も得られゝば、名譽も得られる。本も讀ませれば、字も書かせる。見もせねば、聞きもせぬ。煙草も吸わなければ、酒も飲まない。場處も見たければ、演說も聞きたい。

【五〇八】既に定まつた條件を云うときに用いるもの、

思えば〳〵悔やしい。一人がよいと云えば、一人がわるいと云う。よく考えれば、そうでもない。見れば、まだ、年の若い人だ。

「昨日尋ねたらば居なかつた。」「讀んだらば分つた。」（四七三）なども、文語の假定のものを、口語に、既定に用いるのである。

【五〇九】「に因て」又わ「から」の意のもの、

みんなでした事であれば、一人の手柄でわない。

長ければこそ、切るのである。

來なければこそ、呼ぶのです。見たれば、話されるのだ。

けれども、是等わ、今わ、多く用いないて、「あるから長いから」「來ないから」「見たから」などゝ云う。

以上の事わ、前の動詞、形容詞、助動詞の活用の、それ〴〵の條々にも、委しく說いておいた。

○「四一九」の「わ」の、「ば」となることもある。

第三類の助詞

【五一二】 え 方角を示すもの、文語の「へ」の、母韻ばかりとなつたので、次の二項のも、これが移つたのである。

長崎へ送る。　北へ向う　前へ進む。　遠くへ遣る。　近くへ引越す。
前ばかりへ出す。　京都だけへ送る。　どこかへやろう。
南へわ向かぬ。　西へも行く。　うしろへばかりそりかえる。　前へほか進まぬ。　どちらへか向けよう。
「東への路」「名古屋へと出立する」など云うわ、語を略したのである。

【五一三】　場所を示すもの、文語の「に」(五三七)の場合で、次項のものも同じである。

舟へ乗る。　山へのぼる。　机へ載せる。　疊の上へすえる。　遠くへ置く。
近くへ住わせる。
上と下とへすえる。　棚ばかりへ載せる。　椽だけへあがらせる。　どこかへ置こう。
膳へわ供えぬ。　上座へもすえぬ。　椽へほかあげない。　どこへか置く。
二階へぐらいわあがられよう。
文語にわ、方角わ「へ」で、場所わ「に」(方角にも)と定まつて居る、しかし、場所に「へ」を用いるようになつたのも、隨分古くから見える。

平安朝時代

寶物集、中、一日一夜なりとも、惡道へ‖おとし給ふ事なかれ。

室町時代

幸若、未來記、大慢心を起す故、佛には成らずして、天狗道へ‖落つるなり、たとへ、慢心多くして、この道へ‖落つるとも、情をいかで知らざるべき。同、烏帽子折、きやつばらは、椽の下へ‖隱れうず。

史記抄、十、七九　木へ‖上テ、ヲリウカ、上ラウカ、ト二端ノ心ノアルモノヂヤゾ。

【五一四】「五三九」の相手を示すもの、事情の落ちつく所を示すもの、「に」の意味のもの、

財産を、子え‖譲る。疑いを、學者え‖たずねる。月謝を、先生え‖あげる。仕事を、來年え‖まわす。金を、來月え‖繰越す。

友達だけえ‖相談する。誰やらえ‖やつた。兄と弟とえ‖くれる。どこかえ‖附く。

兵卒え‖まで下さる。友達え‖だけ相談する。誰え‖やら遣つた。

○感動の意の助詞の「え」(五六一)感動詞の「え」(五七六)もある。

【五一五】が　「三五三」の主語を示す「が」と同じであるが、承ける語の意味で、少し違うのである。「五四九」の「を」のように思われる。

字が書けぬ。酒が飲めない。學問が好きです。行末が案じられる。

○「三五三」「四三〇」にも「が」がある。

【五一六】して　由來を示すもの、

心が變わつたかして、出て來ない。省いたからして、見えない。それからして、こうなつた。

「三九三」の「にして」も同じ意味である。

「五二二」の「で」に似たもの、

獨りしてする。兄弟して出掛ける。三人ばかりして來る。五人して引張る。

○此の外、「そうして」どうして」暫くして」のように、副詞にもつく。

○「手を出したりして居る。それわよいとして、外の事をしろ。」どうぞして、そうしたい。」などわ、「する」と云う動詞の活用である。

【五一四】……【五一六】第三類の助詞　え　が　して

○「月と、そうして、花、」などわ、接續詞である。

【五一九】 だつて 「だとても」の約略で、下に「も」をつけても云う、これわ、東京方言かと思つて、舊案にわ、擧げて置かなかつた。

雨降りだつても出掛ける。それだつて、おまえ、どうなるものか。

今からだつても、遲くわない。これぱかりだつて、取つて置きなさい。

「少しだつて志だ。」いやだつて、おたべなさい。」僅かだつてよろしい。」など、、副詞、又、副詞の語根にも附く。

「それだつて」を略して「だつて」と、獨立に、接續詞につかうことがある。

「今日わ、休みだつて、來ませぬ。」いやだつて、たべない。」などわ、「だと云つて」の約で、意味が違う、(下に「も」がつかぬ、)是れも、東京方言であろう。

○「三七九」「四六九」の「たつて」と紛れやすい。

【五二一】 で 動作の行はれる場所を示すもの、「に於て」の意である。

座敷で話す。東京で賣捌く。朝鮮で流行する。遠くで見て居る。近くで聞く。

上海だけで賣れる。長崎やらで取引する。どこかで見た。

家の内での事、痩地でわ成長せぬ。大阪でも神戸でも、賣り買いする。關東でばかり行われる。北海道でほか賣れぬ。都でも見かけない。天津でやら北京でやら發行した。魚を捕つたわ、海でか川でか。時にも云う。

朝と晩とで景色が違う。三日か四日で出來る。六時までで仕舞う。

鎌倉時代

平家物語、一、妓王の事、げんざんするうへでは、いかでこゝろをもきかで有べき、まづいまやう一つうたへかし」こんじやうで、物をおもはするだにあるに、後生でさへあくだうへ、おもむかんずる事のかなしさよ。同、四、大庭がはや馬の事、由井こつぼのうらで、せめたゝかふ。同、六、めぐらし文の事、義仲云々、十三で元服したりしにも、同、十、せんじゆ、伊豆のくにのものにて候へば、鎌倉では、たびにて候へども、

室町時代

史記抄、四、九　十人ノ中デ、二人ヅヽ、用ニモ立ツベイ物ヲ擇デ、同、十、三五　此以下一段ハ、楚デノ事ゾ。同、十、三九　コヽデ殺サイデハ、

孟子抄、一、三　五經ノ中デモ、毛詩、尚書ヲ得タゾ。同、一、一七　王者ノ上デハ、仁義ヲ本ニセラレ候へ。同、一、二八　其内デスグレタガ、此三人ゾ。

狂言記、宗論、其方の宗體を、世間で情が強いといふ。」いかさま、どこやらで、聞いたやうな。同、相合袴、それは、どこにござりまするぞ、いや、表にでござる。同、鞍馬參、内で使ふが足らいで、外でまで、不寢の番をせいと云はるゝ。同、舟ふな、浦で網を引かせられうと、又、山で狩をなされうとも、

詠歌之大概、中流デ楫をすつれば、云々、もとの剡溪へカヘル。

伊曾保物語、なまぬるい湯を、云々、主人の前で飲み、

江戸時代

醒睡笑、一、婆婆で見た彌次郎か。

犬子集、十七、山中で落いたかねや、尋ぬらん。」行旅の、道で夢みの、わろくして。

油糟雜、關でむかふる、望月の駒。」後生でも、持病の虫や、おこるらん。

新增犬筑波集、雜、乘つけぬ、馬に神主、のけぞりて、あの宮でだう此みやで

だう。

正章千句、三、他國の空で花をまつ春。

吾吟我集、七、手こうより、目こう成けり、亂れ碁の、おやまりは猶、そばで見へぬる。

【五二二】動作をする方法を示すもの、「を以て」の意、

墨で塗る。木で造る。謀で勝つ。汽車で行く。自轉車で走る。本氣で考える。

右と左とで持つ。木ばかりでこしらえる。ある物だけで、間に合わせる。酒やら肴やらでもてなす。藍か黄かで染める。

自身での挨拶、金銀でまで飾立てる。淺い智慧でわ出來ぬ。女の手でも子供の手でも運ばれる。水でばかりわ凌がれぬ。水でほか融かされぬ。船でやら送つた。藍でなり黄でなり染めよう。

鎌倉時代

平家物語、二、西光がきられの事、義勢ばかりで、このむほん、かなふべしとも見えざりければ、同、四、競の事、鷹の羽で、はひだりけるまと矢一手

ぞ、さしそへたる。競めをいけどりにせよ、のこぎりでくびきらん。同、大庭が早馬の事、畠山、五百よきで、みかたをつかまつる。

古今著聞集、五、かみやがみに、たてぶみで使にかへしたびて、

室町時代

史記抄、六、三一　勇悍バカリデ人ハ服セマイゾ。同、十、六二　五羖羊皮デ購テ、同、十、六九　柘木ヤ竹デ作タ弓ゾ。同十一、三六　ヨキマサカリデキルゾ。

孟子抄、一、二七　田横ハ、項羽方デ、五百人デ、一島ヲコシラヘテ、コモテイテ、（籠リテ居テ）同、一、二八　衛鞅ヲ大將デ、魏ヲ打タゾ。

狂言記、相合袴、連舞でなければなりませぬ。同、釣狐、狐、云々、此罠でひつしめて、同、粟田口、書いた物、云々、眞で書いてあるに依て讀めぬ。同、舟ふな、古歌穿鑿を致いて、ふねと申古歌に、ほふと詰つた、いや、謠でつめうと存ずる。同、伯母が酒、其甘いをすく衆へは、甘いで進じやうず。同、酢薑、皆、墨繪で書いてある。

江戸時代

醒睡笑、五、　ひやしるわんで三盃、のめふと申した。　同、七、　かんきんした手で、とらふかな。

犬子集、二、春、下、　花の香を、はなで尋る、山路かな。」酒よりも、せんじ茶で見よ、姥櫻。　同、十七、　古筆は、越後兎の、毛でゆひて、

油糟、春、　正月の、餅で泣く子を、すかしかね。　同、夏、　竹の筒で天をみるまも、夏の月。　同、雜、　あか土で、ふさぎにけらし、鼠穴。

新增犬筑波集、下、秋、　すゝきの糸で、絹を織まね。　同、冬、　すゝしで庭火、焼うたふなり。　同、雜、　とがり矢で名を、あげ、し振舞。

吾吟我集、四、冬、　大海を、手でせくごとし、ながれ行く、年月なみを、おしむ心は。

諸國盆踊唱歌、駿河、　しつておれども、人にまたとふて、母のさしづで、むかいとれ。

西翁十百韻、西國にて、　手拍子で行く、三熊野の道。

○「五一六」の「して」を見合わせよ、「一人で出掛ける。」獨りでする。」などゝも云う。

【五二三】【五二四】　動作の行われる緣由を云うもの、「に因て」に就て」の意。

人の慈悲でたすかる。他人の事で心配する。その事で、話しに來た。それで分つた。雨天でやめた。無學で出來ぬ。雨と雪とで難儀する。見るや聞くやで學問する。書くやら讀むやらでいそがしい。議論や何かでやかましい。相談してでなければ、結着わつかない。勉強での出來ばえ、人の事でまで心配する。子供の事でばかり苦勞する。

「金がないで困る。」日が長いで、仕事がはかどる。」などわ、形容詞に附き、「知らぬで氣がつかぬ。」時が後れたで、出かけなかつた。」行かないで、容子が知れぬ」などゝ、助動詞にも附くが、「ので」と云うが、正しいのである。

鎌倉時代

平家物語、三、賴豪の事、かやうの御願は、吾山の力てこそ、成就する事では候へ。

室町時代

孟子抄、一、五　木德デ、王ニナツタ程ニ。

山崎宗鑑辭世、(天文中)　宗鑑は、いづくへいたと、問ふならば、用が出來たで、あの世へといへ。

狂言記、烏帽子折、　出たまでは、七五三飾、門松がなかつたが、今は、七五三飾で、頼うだ御宿を忘れた。

江戸時代

醒睡笑、七、　船なしで、わたす瀬あらば、七夕に、かさばや天の、かはらけの駒。

油糟、雜、　乘馬も、よき鐙でや、いさむらん。

正章千句、二、花、　雨と露、ばかりで花が、ひらかふか。

○「三七〇」「四四三」「四八三」「五二〇」にも「で」がある。

【五二七】　指定の意味をあらわす、この「で」わ「三七〇」の「で」と同じもので、その中止形の用法であるが、用法に、區別があると云うので、二つに分けた。

【五二九】　でして　是れわ、「です」の中止形であろうと云うことわ、前の指定の助動詞の「です」の所で云つて置いた。

【五三〇】　ので　のでして　此「の」わ、「四五六」の「もの」「こと」「ところ」の意の「の」である。　舊案にわ、「ので」わ、「のだ」の活用、「のでして」わ、「のでした」の活用で、共に、其中止

形としてあつた。尚、前の指定の助動詞の「だ」です」の所に説いてあるのを見よ。

雨が降るので困る。勉強するので仕事がはかどる。

智慧がないので、何も出來ぬ。日が長いので退屈する。

擊たれるので逃げる。讀ませるので覺える。知らぬので、氣がつかぬ。

時が後れたので、出かけなかつた。

【五三一】次のように、副詞の語根につくこともある。

穩でも安心わ出來ぬ。暖でも風を引く。

○假に定めて云う「讀んでも分るまい。」などわ、「四九〇」に説き、「親類でもなく友達でもない。」などわ「三七〇」の「で」に「も」の付いたものである。

○「四二一」にも「でも」がある。

【五三二】と　相手を指すもの「に對して」と共に」の意。

あなたと話す。仲間と申合わせる。獨見ようより、人と見よう。

親類ぐらいと相談する。家族だけと話合う。

相手との約束、

○「三七六」「四四四」「四四九」にも「と」がある。

【五三四】 **とも** 是れわ「共」の意で「共に」を略したものである、用法の事わ「きり」ぎり」の條(三五五)に云つて置いた「四四七」にも「とも」がある。

○「と共に」の意味の「梨の實を皮ごと食う。」「箱ごと送れ。」「風呂敷ぐるみ置いて行く。」「入れ物ぐるみ進上する。」など云う助詞もある。

【五三七】 **に** 場所を示すもの、

書物を、机の上に置く。 都に住む。 朝鮮に渡る。 山に近い。 海に遠い。
東京と横濱とに居る。 どこかにあろう。

【五三八】 時を示すもの、

午前六時に起きる。 朝に早く立つ。 夜中に、風が吹いた。 一日に、十里行き、十日に、百里行く。 暇に用を足す。 藥を寢しなに飲む。
午後三時からにしよう。 五時までに來よう。

【五三九】 相手を示すもの、

人に、物をくれる。 疑いを、學者に尋ねる。 數學を、生徒に教える。
生徒が、先生に教えられる。 先生が、生徒に讀ませる。

誰やらに話した。誰かに逢おう。

【五四一】「に於て」に取つて」の意味で、外の事との區別を示すもの、

おまえに讀まれるか。出かけるによい日和だ。

【五四二】「に就て」の意味で事の起りを示すもの、

聞かれるに困る。痛いに苦しむ。

【五四三】轉化の意味を示すもの、

水を湯にする。櫻も青葉になる。雪を花に見立てる。

【五四四】「として」の意味のもの、

本尊に釋迦の像をすえる。

【五四五】物を、一つ〳〵に數えるもの「三七六」の「と」のような意味である。

子供に女に年寄が居る。

○「に」わ、本書に委しく分類してあるが、なお、次のようなものがある。

○物に添わる意味のもの、

月に叢雲、花に風雨、梅に鶯、竹に虎、敵が一人に、身方が五人、

「藝が上手だに學問がよいに、辯がさわやかだ。」などゝも用いる。

○「に因て」の爲に」の意味で、事の目當を示すもの、

病に惱む。　人手に死ぬ。

○種々の語に附けて、副詞を形作らせるもの、

殊の外に手間取る。　ありのまゝに言う。　いろ〳〵に思う。　美事に出來る。　無事に暮す。　遠慮なしに言う。　仕方なしにする。　寢ずに居る。

○「三九一」「四五一」にも「に」がある。

【五四八】　の　上の語に附いて、下の語を形容するもの、

櫻の花、　松の枝、　都の人、　田舍の女、　子の心、　武士の情、　劍術の達人、　法律の學、　鹿毛の馬、　弱年の敎師、　淡泊の心、　發明の人　美事の品、　樹木の成長、

行つての後、　以ての外の事、　行けとの命令、　どこかの人、　長の旅我面白の人困らせ」などゝ、形容詞の語根にも附き、「ちよつとの暇」「暫くの間」「多くの人」「聊かの事」など、副詞、又わ、副詞の語根にも附き、「遠慮なしの交」「見ず知らずの人」など、句にも附く。

○持主を示すもの、

君の御世、父の財産、人のもの、

○唯、名詞と名詞とを繋ぐもの、

世の中、山の下、大塔の宮、平の清盛、書物の三冊目、

○「で出來て居る」の意味のもの、

金の時計、木綿の着物、

○「の作つた」の意味のもの、

貫之の歌、正宗の刀、馬琴の八犬傳、

○「と云う」の意味のもの、

富士の山、壹岐の島、守屋の大臣、春日の局、

○「にある」の意味のもの、

京都の東山、武藏の隅田川、故郷の父、松の雪、

○「に於て」の意味のもの、

宇治川の先陣、奉天の戰、

○「である」の意味のもの、

忠臣の正成、貞女の袈裟、無實の罪、高慢の鼻、

○「のような」の意味のもの、

露の命、夢の世の中、花の都、昔の心持、

【五四九】下の名詞を略して、名詞のように用いるもの、

あなたの筆も、私のも、こゝにあります。此品わ、人のである。誰のが、一番よいか。私のから出します。自分のだけ取る。

平安朝時代

土佐日記、今のあるじも、さきのも、手取りかはして、

源氏物語、葵、唐のも、やまとのも、書きけがし、(紙のことを云う)

鎌倉時代

宇治拾遺物語、二、一一　左京のさくわんの主の也、といひつれば、

室町時代

狂言記、宗論、今のが法文ぢや、其方が耳には入らぬか。

江戸時代

醒睡笑、四、かたあし、人のよりもながいといふた。

【五五〇】主語を指して、連體形の語に續くもの、

風の吹く日、日の暮れる頃、雨の降らぬ時、色の白い人、路の嶮しい坂、

○「三九四」「四五六」「五五六」にも「の」がある。

【五五一】 を 他動の動作のかゝるものを示すもの、

花を採る。枝を折る。紙を裂く。矢を射る。

月と花とを眺める。五人までを限りとする。故郷ばかりを思つて居る。

「人の行くをとめる。」客の來るを待つ。」寒いを恐れる。」ねむいをこらえる。」打たれるを防ぐ。」讀ませるを聞く。」讀んだを忘れた。」勉強の出來ぬを苦にする。」など、用言にも附く、「のを」を略するのであろうか。

○自動にかゝつて、「から」の意味のもの、

家を出る。境を離れる。國を去る。位を退く。

○自動の動作の行われる場所、又は動作の事情の及ぶところを示すもの、

國を巡る。路をあるく。門を過ぎる。空を飛ぶ。天を仰ぐ。右を向く。

崖をつたつて行く。

山と川とを越える。

「雲を霞と逃げる。」など云うこともある。

第四類の助詞

第一

【五五四】 な　なあ　念を推す餘情を云うもの、

もう花が咲くな。　軍隊が行軍するな。　兵卒がたいそう來るなあ。

天氣が怪しいな。　これわひどいな。　うれしいな。　面白しいなあ。

客が歡迎されるな。　ちつとも見えないなあ。　もう行つたな。　善く出來たな。　行きたいなあ。　行くまいなあ。　敵わ一人だな。

風が吹くからなあ。　行つてしまつたかなあ。

「はてな」など、感動詞にも附き、「ほんとうになあ」など、副詞にも附く。

狂言記、花子、　寺々の鐘つく奴は憎いな。　同、萩大名、　是は聞き及うだよりは、打開いた景のよい庭ぢやなあ。

○物言いかける意を含むもの、

おまえわ、毎日行くな。　いつしよに見ようなあ。　何か下さいな。

だいぶ早いな。　評判がよいな。
たいそう褒められるな。　こまりますなあ。　何もござりませぬなあ。　妙ですなあ。　行かないな。　行くまいな。　何とかおつしやいな。　行つたろうな。　行くだろうな。
支度わよいかな。　そうですからなあ。
「待ちなな。」などわ、命令の「待ちなさい」の略に附くので、「こゝにあるわな」などと「わ」(四六七)にもつく。
狂言記、釣り女、　いかう早う來たな。　同、抜殻、　いかう醉うたかな。
○「一三一」「一六七」「三〇三」にも「な」がある。「五八二」の感動詞の「なあ」わ、こゝの「な」「なあ」と同じものであるけれども、言葉の上につかうのを感動詞とし、下につかうのを助詞として、唯用法で分けたので、次の「ね」ねえ」も同じことである。

【五五五】　ね　ねえ　念を推して、物言いかける意のもの。

花が咲くね。　よく出來るねえ。
うつくしいね。　おもしろいねえ。

呼ばれるね。書かせるね。じきに出來たね。出來ないねえ。行くまいね。行きたいねえ。これだね。

「そうしてね、きのうわね、あの人がね、すぐに行つたらね、譯が分かつたのさ。」はあ、そうかね。」おかしい事ねえ。」少しね、困まつたよ。」など、すべての場合に附く、全く、間投詞(感動詞)である。感動詞の(五八三)の「ね」ねえ」を合せ見よ、用法に因て區別したと云うことわ、「五五四」に云つて置いた。

【五五六】の　のう　是れわ、人に物言いかける餘情を云うものである。

旨く出來るの。よく讀むのう。物覺えがよいの。

頻りと褒められるの。恐しい顏だのう。

中がよいことだの。よい元氣だのう。まだ見まいのう。よかつたのう。

よく出來たのう。

わたしが行くからの。そうしてのう、けさの、行つたらの、人が來て居ての、逢わなかつた。

室町時代

謠曲、卒都婆小町、小町がもとへ通はうよ、のう。

狂言記、釣狐、其狐を釣る物を、ちと見たいの。同、どぶかつちり、おのれは憎い奴の。

○「三九四」「四五六」「五四七」にも「の」がある。

【五五七】まゝ　文語の「まに〳〵」が「まゝに」となり、又「まゝ」となつたものであろう。

出すまゝ受取る。出て行つたまゝ歸らぬ。そのまゝ用いる。

「我がまゝがつのる。」「したいまゝにさせておく。」「どうなろうとまゝよ。」などわ、名詞のようになる。

【五五九】よ　念を推して云い聞かせる意の「ぞ」「四四〇」の輕いものである。

澤山あるよ。花も散ろうよ。待てよ。くれろよ。お讀みよ。下さいよ。これがよいよ。それわひどいよ。

行けば逢われるよ。花わ散つたよ。行きたいよ。知らないよ。ありますよ。ありませぬよ。ありましょうよ。ごらんなさいよ。これだよ。

婦女子の言葉に「ごらんなさいよう。」「下さいよう。」「おやめよう。」など云うわ、強いる意がある。

「こう云うものよ」「知れた事よ」「その通りよ」「など、名詞にも附き、「上に「だ」を略したのであろう」「そうよ」「こうよ」「など、副詞にも附き、「字を書くのよ」「など、助詞にも附く。

室町時代

孟子抄、一、三〇　他國モ道ガナイヨ」、政道ガ惡イゾ。同、一、三一　五六月ノ間、旱魃甚キ時ニ、必苗ガ枯ルゝヨ」。同、七、一〇　人ト云ハ身ゾ、身ノ本ハ何ゾ、一心ヂヤヨ」、心王ヲ指ゾ。同、七、一三　人ゴトニ、敵ヲモタウトハセヌヨ」。同、七、二三　昔ノ道ハ、今ハ入ラヌ、ト心得タヨ」。

狂言記、伯母が酒、お見やる通り、妾も異なる事もおりないよ」。同、見物左衞門、礫、云々、そちが投つたらば、此方からも參らせうまでよ」。同、連歌毘沙門、其連歌を、今一度聞きたいよ」。同、柿山伏、腰のぬけたを連れていて、養生せう子細がないよ」。同附子、ゆるりと居て話さうよ」。

江戸時代

醒睡笑、一、きやつを馬の丞とつけたれば、いさみて、はや、いなゝいたよ」。同、七、かつゑ死なうかと思ひ、ふびんさに泣いたよ」。

○上一段、下一段、サ行變格活用の動詞、受身、使役、敬譲の助動詞等の命令形を形作らせる「よ」もある。

第二

【五六一】 え　念を推す意のもの、多くわ問いかけるに云う。

是れわ、なんですえ。　それわ、なんだえ。　直段わ、いくらだえ。

御丈夫かえ。　來られますかえ。　そうかえ。　行くのかえ。　行つたとえ。

これだとえ。

此の「だえ」かえ」を「だい」かい」と云うこともある。

「どこえ行くえ」、「だまつて居ろえ」、などゝ、動詞に附き、「そんな事を云うなえ」などゝ用いる事もある。

「鈴木さんえ」、「梅子さんえ」、などゝ呼びかけるにも用いる。

西鶴置土産、四、江戸の小主人と京の唐土と、我等が男は、上方にて、無事かへ。

○「五一一」にも「え」がある。

感動詞

【五七〇】感動詞わ、語、句、文の上につかうがあり、中につかい、又下につかうものがある、下につかうものわ、別けて、助詞の中え入れた、理にわ合わぬようだけれども、先わ、こうした。

感動詞わ、文の骨組の中に這入らぬものであるから、外の品詞とわ、大きに趣がちがう、おもな感動詞を、意味に因て、次のようにも分けられる。

【五七二】……【六〇一】泛く感動するに發する聲、

「あゝ」

あゝおかしい。あゝうれしい。あゝでかした。あゝ落ちそうだ。あゝくたびれた。あゝもうかなわぬ。

「え」「えい」「えゝ」

えくれてやれ。えいいま〳〵しい。えゝ口惜しい。

「えゝ」

えゝそれからして、えゝ何とか言つた。

「もう」

もう困つてしまいました。それわもうえらいものさ。いやもうひどい目にあつた。いやもう驚きました。

○「もうすこし」もう一つ」もう濟みました」など云う副詞とわちがう。

「はや」

なんだかはやわかりませぬ。どうもはや困りました。なんともはや申上げようがござりませぬ。

○驚いた時、氣の引き立つた時に發する聲、

「あ」

あしまつた。あ忘れた。あそうだつた。

「あつぱれ」

あつぱれでかした。あつぱれ美事だ。

「あら」多くわ女に用いられる。

あらおめずらしい。あらひどい。

「あれ」

あれまた來た。あれどうしよう。

「いや」「いやあ」

いやそれで思い出した。いや久しぶりで。いや皆さんおいで、いやとんだことになりました。いやもうえらい目にあいました。いやあすばらしい。いやあ感心な事だ。いやあ奇妙〳〵。

○副詞の「否(いや)」とわちがう。

「いよう」

いようえらいものだ。いようお手柄〳〵。

「え」「えゝ」

えあの人が死んだと。えこれは大變。えゝ大病ですと。

「おう」

おう痛い。おう寒い。おうそうだつた。

「おや」「おや〳〵」多く女に用いられる。

おやおかしい。おやどうしたろう。おやあなたお久しぶりで、おやおや不思議だ。おや〳〵仕方がないねえ。

「さて」「さて〳〵」

さて困りました。さて〳〵感じ入つた。

「はて」

はて善く詠んだ。はて分りました。はて困つたことだ。

「ほい」

ほい落した。ほい忘れた。

「まあ」「まあ〳〵」多く女に用いられる。

まあほんとうにうつくしいこと。まあおきれた。まあおどろきました。

まあ〳〵よくいらつしやいました。

○「まあ(まず)よかろう」まあ〳〵(まず〳〵)お待ちなさい」など云う副詞とわちがう。

「や」「やあ」「いや」いやあ」の約まつたものであろう。

やとんだことをした。やこいつしまつた。やあしくじつた。やあ出て来た。やあ久しくお目にかゝりませぬでした。

狂言記、見物左衛門、やあ身共にあうて、笠を取らせらるゝは、どなたぢや。」

やあ、大勢人の寄つて居るは、何事でござるぞ。」やあ、子供が相撲をとる。

「やれ」「やれ〳〵」

やれよかつた。やれうれしや。やれ東だのやれ西だのと、やれ〳〵くたびれた。やれ〳〵氣の毒な事だ。

狂言記、素襖落、やれ〳〵それは目出たい事ぢや。

醒睡笑、一、やれおれぢや、やれ見忘れたか

日本永代藏、二、天狗は家名の水車、やれ〳〵よい事を思ひ出してゐたから忘れたは。

「よう〳〵」「いよう」の約まつたもの、

よう〳〵うまいものだ。よう〳〵えらいお手柄、

○氣の付く時、氣を付ける時に發する聲、

「あれ」「あれ〳〵」

あれ見な。あれ〳〵ごらんなさい。

「おい」

おい受けた。おい來た。おいこれはとんだ粗匆、

「おつと」

おつとあぶない。おつとちがつた。おつと待つた。

「さあ」「さあ〳〵」

さあ歸ろう。さあ大變だ。さあそれわ、さあ〳〵おあるきなさい。

狂言記、連歌毘沙門、夫れならば參らう、さあ〳〵ござれ〳〵。

「そら」

そら出た。そらこゝにある。

「それ」「それ〳〵」

それ見たがよい。それ久しいあとの事、それくれてやる。それ〳〵おまえも知つて居るとうり、

「ちよいと」

ちよいとあなた、ごらんなさい。ちよいと、こゝにございます。

「どつこい」

どつこいそうわさせぬ。どつこいこつちだ。

「どれ」「どりや」

どれ行こう。どれ讀んでみよう。どりや取掛ろう。

「なんと」

なんとこれは妙だろう。

「ほら」

ほら來た。ほら出た。

○物言いかけて強くたしかめるに發する聲。

「あゝ」

あゝこれ〳〵待ちな。

「あの」

あの昨日便があつたか。

「え」

えあなた、お歸りなさいますか。

「さ」

これが、さ、例の物だよ。あの人が、さ、そう云つたよ。それについて、さ、話がある。これさ、待ちなよ。あれさ、おやめよ。

○助詞の「三五九、接尾辭の「六一四」にも「さ」がある。

「な」「なあ」

なあなた、なあおまえ、そうでわないか。

「ね」「ねえ」

ねあなた、ねえそうでしょう。

○心に受け入れた意を云うに發する聲、

「あゝ」

あゝそうでしたねえ。

「おう」

おうさようく、

狂言記、烏帽子折、おう、これは映え合うてよかろ。

「なるほど」

なるほどそうだ。

「はあ」「はゝあ」

はあそうですか。はあそうかね。はゝあ御尤なお話、

「ふん」「ふゝん」
ふんそうか。ふゝん道理で、
「へえゝ」「へゝえ」
へえゝ至極尤なこと、へゝえ妙ですな。
○承知する意に發する聲、
「は」「はい」「はあ」
三太夫さようか　は、」はいその通りでござります。」これわおまえの物だろうな、はあ、」はあそうです。
「へい」
きつと言付けるぞ。へい、」へいかしこまりました。
「あい」「あゝ」
梅子や見たか。あい、」あいそうだよ。」おまえひとりか。あゝ、」あゝそれでよろしい。
「えゝ」
もう歸るか。えゝ、」えゝきつと行くよ。

「おう」
　たのむぞ。おう、」おう引受けた。
「うん」
　こればかりか。うん、」うんそうだ。
○承知せぬ意にて發する聲、
「いえ」「いゝえ」
　もう濟んだか。いえ、」いえまだ參りませぬ。」くたびれたろう。いゝえ、」
　いゝえ何も存じませぬ。
「いや」「いゝや」
　これであろう。いや、」いやそうでわない。」よわつたか。いゝや、」いゝ
　や嘘だろう。
「なに」「なあに」「なんの」
　閉口したか。なあに、」なに負けるものか。」なんのそのくらいなこと。
○疑い怪しむ意に發する聲、
「はて」

はて無いことわない筈だが。はて怪しい。はてどうしたろう。はて知らぬ事だ。

「ふん」「ふゝん」

ふん怪しい。ふゝん不思議だ。

○押しのける意に發する聲、

「へん」

へんとんだ氣休めだ。へんおまえに出來るものか。

○人を呼びかけるに發する聲、

「おい」「おうい」

おいそこえ行く人、おうい車屋、

「こう」

こう聞きな。こう見てくれ。

「こら」「こら〳〵」

こら待て。こら〳〵何をして居る。

「これ」「これ〳〵」

これやめろ。これ〳〵しつかりしろ。

「もし」「もし〳〵」

もしあなた、もしこちらでございます。もし〳〵待つてください。

狂言記、栗焼、申し、よい事がござりまする。同、連歌毘沙門、あゝ申し申し、なぜにそなたばかり取らせらるゝ。

「やあ」

やあどこへ行く。

「やい」「やい〳〵」

やい待て。やい〳〵何をする。

狂言記、相合袴　やい、冠者、行て呼びましてこいや。同、三人夫、やい〳〵

此土器を下さるゝ、急いで頂戴いたせ。

○呼ぶに答える聲、

「は」「はい」「はあ」「へい」

「あい」「おう」「おい」

○戒めとめる聲、

「しい」「しつ」

○いま〳〵しく思つて舌打する聲、

「ちよつ」

○感動詞わ、同じ聲で、意味と用法とのちがうものが多いから、よく氣を付けるがよい、助詞、其外にも、同じ音のものもあるが、感動詞わ、多くわ、語の上に附くものであるから、迷うことわ少ない。

感動詞を重ねて「あい〳〵」「あらまあ」「あれ〳〵」「いや〳〵」「いやはや」「おい〳〵」「おう〳〵」「おや〳〵」「おやまあ」「こら〳〵」「これ〳〵」「さあ〳〵」「さて〳〵」「なるほどなるほど」「はい〳〵」「はてな」「へい〳〵」「まあ〳〵」「もし〳〵」「やあ〳〵」「やれまあ」「やれ〳〵」など、つかうのわ、意味を強くするのである。

「あれ、お聞きなさい。」「さて、困つたものだ。」「それ、おまえも知つて居る通り、」「ちよいと、御覽なさい。」「なに、負けわしない。」「なんと、是れわ妙だろう。」「なんの、そのくらいなこと、」「などわ、外の語を、感動詞に用いるので、又「おつと來た、」「これわどうも、」など、外の句を、感動詞の意に用いることもある。

詞の組立

この章でわ、接頭辭と接尾辭との事を云う。

【六〇三】意味があつて、獨立せず、外の語の頭に附けて、熟語にするばかりに用いられるものが、接頭辭である、但し、妄にどの語にも附けられぬ、用い馴れがある、先、次に、その重なものを記そう。

○敬つて云い、丁寧に云い、又わ、言葉をうつくしく云うに用いるもの。

【六〇五】「お」(御)

お年、お名前、お蔭、お釋迦さま、お兄さま、お役、お宅、お天氣、お帽子、お菓子、お丈夫、お使、お笑い、お考え、お正月、お江戸、お氣の毒、お美事、お幾つ、お初、お久し振、お近い、お早い、お宜しい、お羨ましい、おめづらしい、お早く、おめでとう、お早々と、お寒かろう、おせわしかろう、おさつぱり、おあいにく、おかたじけ、

○「お」わ、「おほ(大)」の約まつたもので、源氏物語の若紫に、「おとゞ(御殿)の造りさ

ま」同、玉葛に「これはおまへ(御前)にまゐらせ給へ」などゝある。

「おほ」に、次項の「み」がついて「おほみ國」など云い「み」が「ん」となつて「おほん寶」など云い、それを約めて「あのおん方」おん大將」おんの字付き」なども云うが、多くわ用いられぬ。

平家物語、一、二代の后の事、先帝のむかしもや、御戀しうおぼしめされけむ。同、一、殿下の乘りあひ、攝政關白のかゝる御めにあはせ給ふ事は、いまだうけたまはりおよばず。

著聞集、八、此御目出たさをば、いかゞおぼしめす。

狂言記、鬼の槌、いや、又おしをらしい事でござる。同、栗燒、其栗を、云々、銀の鉢かなどに入れて、御座敷へ出させられたならば、云々、一同に御褒めなされ。

醒睡笑、八、こなたのお仕合せは、殘る事なし、何事もおめでたい。

吾吟我集、六、文ならで、逢ていはじや、おゆかしく、おもひまいらせ、そろと計を。

「み」(御)

み位、み代、み國、み輿、み堂、

「おみ」「おみお」前の二つを重ねたもの、

おみ帶、おみ足、おみ輿、おみ堂、おみ酒、おみ袷、おみ闕、

おみ大きい、

おみお膳、おみお盆、おみお汁、おみお腹、

【六〇六】「ご」（御）

ご說、ご用、ご返禮、ご挨拶、ご勉强、ご遠慮、ご丁寧、ご深切、ご丈夫、ご近處、ご當主、ご不用心、ご存じ、ごゆるりと、ごさかんに、

「御意」「御慶」「御寢」などわ、成語と見る。

狂言記、瓜盜人、私は、瓜盜人でばござりませぬ、道に踏迷うて參つてござる、眞平御ゆるされませい。

○「まことの」と云う意を云うもの、

「ま」「まん」「まつ」（眞）

ま顏、ま東、ま晝、ま夜中、

まん中、まん南、まん圓、

まつ白、まつ暗、まつさかさま、まつ正面、まつ最中、

平家物語、四、競の事、日ごろは、しぜんの事も候はゞ、まつさきかけて、いのちを奉らう、とこそ存せしかど、

○「ちいさい」「低い」「弱い」など云う意のもの、

「こ」（小）

こ山、こ松、こ男、こ舟、こ包、こ本、こ道具、こ役人、

こ一里、こ百圓、

こ高い、こ早い、こばしこい、こざかしい、

こ綺麗、こざつぱり、こ躍りする、

○「始めて」の意のもの、

「はつ」（初）

はつ雪、はつ夢、はつ午、はつ物、はつ鰹、はつ日の出、はつ旅、はつ舞臺、

○數を重ねる意、又わ、不定の數を云うもの、

「いく」（幾）

いく度、いく月、いく日、いく人、いく千、いく里、いく久しく、

「生紙」「生絲」「素顔」「素足」「初孫」「初產」「取巻く」「差扣える」「立優る」「打解ける」「相濟む」などもあるが、應用に限りがあるから、成語と見る。

○打消す意のもの、

「ふ」「ぶ」（不）

ふ似合、ふ行屆、ふ孝、ふ法、ふ信心、ふ便利、ふ自由、ふ承知、ふ相應、

ぶ用心、ぶ意氣、ぶ器用、

○「好くない」「わるい」の意のもの、

「ふ」「ぶ」（不）

ふ取締、ふ手際、ふ心得、ふ運、ふ行跡、ふ器量、ふ首尾、

ぶ躾、ぶ男、ぶ作法、ぶ樣、

○「無い」と云う意のもの、

「む」「ぶ」（無）

む學、む藝、む用、む益、む欲、む實、む慈悲、む分別、む差別、む證據、む利息、む手數料、

ぶ禮、ぶ勢、ぶ遠慮、ぶ沙汰、ぶ愛相、

順番を云う「第一」第五」第十、數あるを云う「諸藝」諸國」諸先生」諸役所」數十」數年」數度」數箇條」衆評」衆議」萬事」萬國」「この」その」今の」の意を云う「當家」當地」當人」當年」當六月、「もとの」まことの」の意を云う「本家」本國」本山」本店」本名」本物」などもある。

【六〇七】外の語の下に附けて、熟語とするばかりに用いられるものが、接尾辭である、是れにも、用い馴れがある。

○敬つて云い、丁寧に云い、又わ、言葉をうつくしく云うに用いるもの、熟語となつて名詞となる。

【六一五】「さま」（樣）

太神宮さま、お太陽さま、有栖川さま、阿彌陀さま、佛さま、太閤さま、殿さま、奥さま、お姫さま、お祖父さま、母さま、人さま、今日

さま、あなたさま、どなたさま、いづれもさま、御存さま、
お蔭さま、お世話さま、お氣の毒さま、おあいにくさま、お匆々さま、
御機嫌さま、御馳走さま、いかゞさま、

「さん」（樣）

お祖母さん、お姑さん、叔父さん、兄さん、お嬢さん、お子さん、
齋藤さん、太郎さん、お花さん、あなたさん、おまえさん、

【六一九】「どの」（殿）

大臣どの、近衞どの、知事どの、大尉どの、佐藤太郎どの、

「どん」（殿）

村長どん、番頭どん、小僧どん、清吉どん、お竹どん、

【六一一】「くん」（君）

高橋くん、田中くん、太郎くん、次郎くん、

「せんせい」（先生）

惺窩せんせい、白石せんせい、本居せんせい、敎授せんせい、

右の內で「さま」わ、人、其外、種々の語に用い「さん」以下わ、重に人に用いる「さん」

わ「さま」の崩れたもので、同輩までにも用い、「どの」わ、嚴しく敬つて云うに用い、「どの」以下わ、代名詞に用いない、「どん」わ、「どの」の崩れたもので、同輩に用いて、「さん」よりわ下り、多くわ、雇人どしなど、互に用いる、「くん」わ、學者書生などの間で、男子の同輩に用い、「せんせい」わ、學者師匠を敬つて呼ぶに用いる。

○目上の親族を敬つて呼ぶに、「父うえ」母うえ」叔父うえ」叔母うえ」兄うえ」姉うえ」など云う「うえ」(上)があり、他人の親族を少し敬つて云うに、「親ご」母ご」叔父ご」叔母ご」兄ご」姉ご」嫂ご」弟ご」娘ご」甥ご」姪ご」など云う「ご」(御)があるが、用いる所が狹い、稍下つて、己が叔父、兄を、「叔父き」兄き」と云う「き」(君の略であろう)もあるが、用いる所が、最も狹い、又、稀に、苗氏の下に、「うじ」(氏)と云う語を附けて、同輩に用いることもある。

天子、皇后、皇太后に「陛下」、皇族に「殿下」、高位高官の人に「閣下」と申すもある、是等わ、又代名詞として、稱し上げることがある。

○「さま」わ、方(かた)の意、「こなたざま」横さま」逆(さか)さま」有明(ありあけ)さま」行きちがひさま」東ざま」南ざま」など云う「さま」で、貴人を、直ちに指して云うを憚つて、其居る方で稱したものから、終に尊稱となつたのである。

義經記、八、はうぐはんじがいの事、御館も、かみさまも、しでの山と申路、こえさせ給ひて、」若君さま御たちの御子と生れさせ給ふも、云々、

永享四年九月、足利將軍義敎の、駿河へ下向の時、飛鳥井雅世の、隨身して書いた富士紀行に、公方樣富士御覽、

寶德の頃の中原康富記、禁裏樣、

狂言記、聟貰、父樣、さうおつしやるは、合點でござる。同、花子、花子樣へ、お出でなされてござる。同、鹿狩、何がさて、おまへ樣さへ、もつてならしやれて下さるならば、

太田和泉守覺書、御くげしゆと、御じやうさまたち、ひきあはせ、云々、

「どの」わ「殿」で、貴人の家の稱、是れも、貴人を指して云うを憚つて、其居る所で云つて、尊稱としたもので、源氏物語の頃から、「關白どの」「大納言殿」(夕顏)など丶ある。

「ご」わ「御」の音で、本朝文粹の菅公の詩の注に、「俗謂二貴女一爲レ御、蓋取二夫人女御之義一也」とあり、大和物語に「伊勢の御」、土佐日記に「淡路のご」など丶あるから起つて、男子の「父ご兄ご」にも移つたのであろう、長門本平家物語、十に「是こそ

殿の父御下野殿の御首よ。」狂言記、七騎落に、「父御下りさせ給ふならば、某船よりも下り申さん。」などゝ見える。

○人を罵り呼び、又自分を卑下して云うもの、名詞となる。

「め」(奴)

鈴木め、清助め、小僧め、百姓め、畜生め、よわむしめ、私め、

「め」わ、姓氏錄、大伴宿禰の條に、「大來目部」日本書紀、履仲紀元年に、「阿曇目」などある「べ」「め」で、部の約轉で、等の意から、遂に、罵る意になつたのであろう。

平家物語、二、西光切られの事、憎ひ入道めが、何事をか奏聞すべかんなる。

源平盛衰記、廿九、俱梨伽羅山、其信救メ、イカニモシテ打殺セヨ。

義經記、關東よりくわんじゆばうをめさるゝ事、すぐやかならん小とねりめらに仰付て、

幸若、富樫、武藏め一人、戸樫が館に移りて、城のけごを見損じたらば、云々、

狂言記、花子、太郎冠者、「花子樣へお出でなされてござる」、女房「え腹立や腹立や、おのれまでが、樣と云ふか、めといへいやい〳〵。」(花子は、主人の隱し妻、)同、長光、あの横着者めが、

○人の複數なのを云うもの、名詞となる。

【六〇八】「がた」（方）

大臣がた、お大名がた、御婦人がた、皆さまがた、あの人がた、

【六一七】「たち」（達）

役人たち、親たち、友だち、君たち、おまえさんたち、私たち、おまえたち、

「しゆ」「しう」（衆）

公家しゆ、檀那しゆ、子供しゆ、若いしゆ、女中しゆ、

役人しう、年寄しう、友だちしう、

右の内で「がた」わ、敬い云うに用い、「たち」わ、敬うにも、同輩、自分、又わ、目下にも用い、（萬葉集、十九「此吾子を、唐國へやる、齋へ神多智」）「しゆ」「しう」わ少し敬う心がある。

又、稀に「女ばら」「奴ばら」「百姓ばら」などゝも云う「ばら」（儕）があつて、卑めて云うに用いる、是わ、大和物語に「うかれめばらの申すやう」、源氏物語、夢浮橋に「弟子ばらの中に、驗あるものどもを呼びよせ」、枕草紙、八に「女院、宮ばらの屋、あま

たあるに、同、十一、關白、その御次に、殿ばらおはするかぎり、などゝ、古くは、貴いにも賤しいにも用いてある。

又「學者連」書生連」御婦人連」娘連」など、「れん」と云うのもある。是れわ、通例の複數である。

以上の内に、單數に用いるのもある、「友だち」などわ、多くの場合に、單數に用いる。

○人、又わ、物事の複數なのを云い、又、物事を廣く指して云うもの、名詞となる。

【六二、○】「ども」（共）

家族ども、親類ども、男ども、子ども、小僧ども、自分ども、あの者ども、

土産ども、荷物ども、心配な事ども、

【六二四】「ら」（等）

鈴木、木村、高橋ら、おまえら、あの人ら、よわむしめら、

あすこら、どこら、今日ら、幾ら、

「ども」「ら」にわ、敬う意わない、そうして、單數に云うこともある、殊に「子ども」など

わ、多くわ單數に用いられる。

「ら」わ、物事の數ある限を列ねたのにも、其外にあるを含めたのにも云う。（これを、内等外等（うちとうそとら）と云う。）

○互に仲間である意を云うもの、

「どし」「どうし」（同士）

仲間どし、男どし、女どし、讀まぬどし、書かぬどし、

書生どうし、子供どうし、

○「どし」わ、文語の「どち」の變わつたものである。

○人と云う意のもの、

【六一八】「て」（手）

渡して、引受けて、抑えて、漕ぎて、見て、仕（し）て、射て、

「備え」の意味の「水の手」「先手」「大手」「搦手」などわ、成語と見る。

○助詞の「四四三」「四八三」にも「て」がある。

○順番を云うもの、

「め」（目）

一つめ、二つめ、三度め、五年め、八番め、十枚め、幾つめ、「一番」十番」幾番」二等」五等」幾等」三號」十號」百號」などもある、數詞の「七五」を見合せよ。

程合を云う「細目」長目」利き目」控え目」其處其時を云う「縫い目」繼ぎ目」割れ目」分れ目」などわ、成語と見る。

○有樣を云うもの、

【六一四】「さ」（狀）

深さ、大きさ、かわゆさ、悲しさ、あわれさ、綿密さ、愉快さ、不思議さ、褒められたさ、言わせたさ、

「た」わ、希望の助動詞の「たい」の語根である。

○「三五九」の助詞にも「さ」がある。

○其氣味を云うもの、

【六一二】【六一三】「け」「げ」（氣）

寒け、眠け、怖け、

きたなげ、卑しげ、物欲しげ、
雨げ、雪げ、大人(おとな)げ、迷惑げ、

○性質を云うもの、

【六二二】「み」

赤み、厚み、弱み、深み、旨(うま)み、悽(すご)み、憎(にく)しみ、

○以上、皆、熟語となつて、名詞となる。

右の外に、容子を云う「顔付」手付」事のついでの意を云う「歸りがけ」起きがけ」事の起る時を云う「寝じな」行きしな」(醒睡笑、五「いきしなに、つぼふだ花が、きしなには、ゐじかつたりや、桶とぢの花。」事の成つた初を云う「出來たて」煮たて」ある限りを盡す意を云う「金盡」腕盡」義理盡」などわ、成語と見る。

○そのように思われると云う意のもの、

【六一六】「そう」(狀)

「だ」で」です」に」なら」なり」も」はなどを履む、助詞の「四四一」にも、「そう」がある、其語原、用法、區別などわ、其所に說いてある。

行きそうだ。出來そうである。まゐりそうです。迷いそうもない筈だ

痛そうに思われる。　面白そうに笑う　嬉しそうな顔、何も無さそうだ。好さそうな話、聞かれそうなら返答しろ。勝たれそうわない。讀ませそうだ。旨く出來なそうだ。行きたそうにして居る。食べたそうな容子、「そう」を、形容詞の「無い」好い」の語根の「な」よに附ける時わ、「さ」を加えて「なさそう」よさそう」と云うと云うことわ、「一五一」に云つておいた。「行きたそう」食べたそう」などの「た」わ、希望の助動詞の「たい」の語根である。「物あわれそうに泣いて居る。」などわ、名詞に附き、「澤山そうに云う。」大膽そうな顔、「不思議そうに思つて居る。」大切そうに持つ。」旅行わ難儀そうだ。」などわ、漢語に附き「穩やかそうな世の中、」酒盛が賑やかそうである。」などわ、副詞の語根に附く。

室町時代

幸若、烏帽子折、何よりも、やすさうなる事にて候。同、富樫、葦毛なる駒の蹄、堅さうで、如何に驅足のはやからん。

史記抄七、一九　牛酒ガ足サウモナイゾ。同、九、四三　年代ナンドハ、サノ

ミ、チガイサウハナイ事デアル。

孟子抄一、四　陵遅ハ、ヲカノ次第崩レニシテ、平地ニナリサウナヲ云ゾ、ヲトロフル體ゾ。同、十二、三五　此樣ニ、肩ヲ双ル者モナク、余所カラトラレ(受身)サウモ無レバ、必驕テ亡ルゾ。

狂言記、柿山伏、柿、云々、これは、ちと澁さうな。爲、云々、もはや飛びさうなものぢやが、同、苞山伏、こゝに、涼しさうな所がござる。同、井礎、殊の外、物淋しうなつたが、是れは、野はづれ(名詞)さうな。

江戸時代

清正高麗陣覺書、大名衆え之御對面、延引仕そうに御座候。

太閤記、四、又左衞門も、あらこなし仕そうなる者を、二千五六百撰み、醒睡笑、一、薪をかひ、庭なる棚につませけるが、なにとやらん、くづれそうなり。同、四、途中に、ひとりの姥、やすらひ、物あはれ(名詞)さうになきゐたり。同、六、海老、云々、宮川で見た、色が赤かうて、見事にあつた、海老は、海にある物なり、生得、色はあをくろし、云々、うそ(名詞)さうな。

油糟、雜、くひあひて、術なさう成、みぞいたち。

正章千句、一、涼しさうなる、佐保の河波、同、二、降りさうな雲こそたてれ、露しぐれ。

吾吟我集、二、まだ落さうも、なき小姫瓜。

小栗の判官、一、なさぬ中のざんにより、身の置所なきまゝに、是迄參り候と、げにありそふにぞ申ける。

古今夷曲集、一、膩そうで、奇麗なものは、歌人の、口にかゝれる、山のは霞。梅がえは、そなたのえてむ、樂(越天樂、漢語)そうに、口笛なるか、やよや鶯。まとひつゝ、藤にしたゝか、締られて、難儀(漢語)そうなる、松ふぐりかな。同、二、枯そうな、富士なでしこを、育てんと、水汲かくる、たごのうらが身。同、九、座當めが、むづかしさうに、お茶臼を、引のこくのと、強まはるかな。

後撰夷曲集、九、山城の、木幡の里に、むまさうな、しんこはあれど、かちんをぞかふ。

○一面に塗れた意を云う「血だらけ」泥だらけ」灰だらけ」など云うのがある、用法わ、此「そう」に似て居る、しかし用いる所わ狹い。

○其樣子になる意を云うもの、是から、次々のものわ、熟語となつて、動詞とな

る。

【六二三】「めく」五段活用、

時めく、唐めく、子供めく、商人めく、役人めく、

○是れと同じ意味で、「古びる」田舎びる」大人びる」氣違じみる」隱居じみる」(上一段活用)などもあるが、用いる所が狹い。

○殊更に其樣子をする、又其風を眞似る意を云うもの、

「めかす」五段活用、

才子めかす、學者めかす、通人めかす、教師めかす、役人めかす、

【六二一】「ぶる」五段活用、

學者ぶる、上品ぶる、容體ぶる、勿體ぶる、

○其樣に思うと云う意味のもの、

【六一〇】「がる」五段活用、

痒がる、寒がる、かわゆがる、せつながる、ねむたがる、けむたがる、嬉しがる、ゆかしがる、恥かしがる、欲しがる、聞きたがる、見たがる、

あわれがる、いやがる、窮屈がる、無念がる、殘念がる、億劫がる、○「ねむたがる」けむたがる」わ「ねむたい」けむたい」の語根に附いたもので「聞きたがる」見たがる」わ、希望の助動詞の「たい」の語根に附いたものである。

土佐日記、追風の、吹きぬる時は、行舟の、ほでうちてこそ、嬉しがりけれ。

孟子抄、一、一四　國ヲモッタ者ハ、人ノ國ヲ取タガリ、同、三、三一　稅ヲ取ラネバ、天下ノ農夫ハ嬉シガルゾ。同、六、一三　東國ヲ成敗セラルレバ、西國ノ民ガ美シガルゾ。同、七九　ソレヲイヤガラバ、道ヲバナゼ行ハヌゾ。

閑吟集、いとおしがられて、あとにねうより、にくまれ申て、おそくねう。

狂言記、宗論、身にも笠にもつくやうにいやがるわ。同、柿山伏、柿、云々、鳶烏もつきたがる程に、油斷のならぬ事でござる。同、吟聲、罷出でたるは、舅にかあいがらるゝ花聲でござる。

後撰夷曲集、三、遠目にて、鹿見付しも、逃ぬれば、すつかり人ぞ、無念がりける。

又、其樣になつた心持で居ると云う意味に用いることがある。

【六一〇】【六一一】【六一二】接尾辭　めく　ふる　がる

才子がる、上品がる、通人がる、得意がる、

○出來難い意味を云うもの、

「かねる」下一段活用、

行きかねる、取りかねる、爲かねる、出來かねる、

○推量する意を云うもの、是から次々のものわ、熟語となつて、形容詞となる。

【六二五】「らしい」形容詞第二種活用、

豐年らしい、ほんとうらしい、

穩やからしい、ことさらしい、わざとらしい、

又、其樣子であり、其直打があると云う意味に用いることがある。

女らしい、子供らしい、學者らしい、

「らしい」わ、推量の助動詞にもあつて、それわ、活用が缺けて居ると云うことわ、其所に說いておいた、此接尾辭の「らしい」わ、「らしかろう」「らしければ」「らしくば」「らしくて」などゝ、全く、第二種の形容詞と同じように活用する。

「愛らしい」珍らしい」かわゆらしい」しおらしい」憎らしい」いやらしい」いじらしい」長たらしい」すばらしい」しかつめらしい」などわ、全くの形容詞で、

推量のものでわない。

「らしい」と云う語の、昔からの遷りかわりや例わ、推量の助動詞の「らしい」の處に記しておいた、見合わせるがよい。

史記抄、十、四二　人ノ怨ト云モノ、毒ラシイハ甚シイ事ゾ。同、十、五二　始カラ祿ヲ干メバ、ナニカバカラシイ事ハアラウゾ。

狂言記、花子、言葉、尋常に匂ひなどして、情らしう云てくるゝに因て、云々、

○そうと疑われる意味を云うもの、

【六〇九】「がましい」形容詞第二種活用、

隔てがましい、人がましい、勝手がましい、

嘲弄がましい、無禮がましい、追從がましい、議論がましい、烏滸がましい、

○出來難い意味を云うもの、

「にくい」形容詞第一種活用、

讀みにくい、行きにくい、爲にくい、受けにくい、

○其外に、其樣に見える意味の「古めかしい」「今めかしい」「商人めかしい」など、ま

だあるが、どれも用いる所が狭い。

口語法別記 終

大正六年四月二十五日印刷
大正六年四月二十八日發行
大正六年五月二十五日再版發行
昭和十年九月十五日三版發行
昭和十二年七月一日四版發行

口語法別記

定價金壹圓貳拾錢

文部省著作權所有

著作者 文部省

發行者 東京市京橋區銀座一丁目五番地
右代表者 專務取締役 大日本圖書株式會社 杉山常次郎

印刷所 東京市芝區三田四國町十七番地 明彩堂印刷所

發行所 東京市京橋區銀座一丁目五番地 大日本圖書株式會社
（振替口座東京二一九番・電信略號トシヨ）